

広域営農団地農道伊久間原第Ⅱ期工事に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

伊久間原遺跡

2001. 3

長野県下伊那地方事務所土地改良課
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

広域営農団地農道伊久間原第Ⅱ期工事に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

伊久間原遺跡

2001. 3

長野県下伊那地方事務所土地改良課
長野県下伊那郡喬木村教育委員会



No 1. 伊久間原遠望（大原から）



No 2. 伊久間原（上郷から）





No 4. 古墳時代の土器 香炉形土器



No 5. 古墳時代の土器 85号住セット



No6. E F 3 1

序 文

伊久間原遺跡については、昭和27年（1952年）から、平成7年（1995年）までに数回の発掘が行われ、今回の「営農団地広域農道改良事業」（平成9年～11年）による、試掘・発掘調査の結果を加えると、時代も縄文時代から平安時代と長期に渡り、住居址だけでも447軒が確認されています。

詳しくは、調査報告書に述べられていますが、この伊久間原遺跡は、遺跡の広がり、生活の場として先人達が住んだ時代の長さからいって、県下でも有数の遺跡だと考えても間違はないと言えそうです。

そして、調査結果から特筆されるのは、伊久間原における縄文時代前期の集落構成、縄文時代中期中葉・後葉の住居址群、古墳時代住居址群と掘立柱建物址、更には、平安時代集落など、重複した環状集落の姿や、出土物による先人の生活状況の想像を、より確かに描くことができる成果を上げることができたということです。

さらには、天竜川段丘の自然の立地条件を十二分に生かした先人の生きる知恵、文化と歴史は、現代の私たちに改めて教えてくれたものを、多く残してくれました。

また、今回の調査報告書は、その成果の多さもあって380頁を越える膨大なものとなりました。なかに、伊久間原の立地条件を知る上で大きな鍵となる「伊久間原水利の今昔」について、故田中豊春先生の考察が載っています。伊久間原遺跡に係わる重要な考察として咀嚼が必要と考えます。

2年有余の発掘調査では、調査団長の今村善興先生を中心として、調査員、作業員の皆さんが本当に熱心に調査に携わっていただきました。また、地権者、地元の方々にも快いご協力をいただきました。その総合の成果として今回の調査報告書となったと受け止めております。心よりお礼を申し上げます。

この文化遺産が、村の活性化に活用でき得ればと願いながら、序文とします。

平成13年3月

喬木村教育委員会

教育長 宮 下 周 一

例 言

1. 本報告書は、平成9年から平成11年に喬木村教育委員が実施した農林漁業用揮発油税財源身替農業整備事業に伴う喬木村伊久間原の広域営農団地農道第Ⅱ期工事にかかわる伊久間原遺跡の発掘調査報告書である。
2. この発掘調査は、喬木村教育委員会が委嘱した特設の伊久間原発掘調査団が行っている。
3. 事業予定地は伊久間原遺跡の中心部にかかわる所があるので、平成9年は北側一帯の試掘調査、平成10・11年は南側の既設道路面を含めて全面発掘調査が行われている。
4. 全面発掘の対象となった南側のD1・D2地区の調査は、耕作道確保のために、地域を区分けして、交互に調査する方法が採用されている。
5. 本報告書の作成に当たっては遺構測量はKKジャスティックに委託し、縄文土器・石鍬の実測は長野写真測図に委託している。現地の影観写真・出土土器の写真撮影は唐木孝治氏に委託している。他は今村が補っている。炭化物の年代測定・材質分析・花粉分析は古環境研究所、段丘推積土層の分析については松島信幸氏の調査によっている。
6. 遺構図整理は今村が、土器実測は林・今村が、小形石器・土製品実測は今村が当たっている。土器拓本撮りは主として福田・赤羽が、石器実測は赤羽・市瀬が当たっている。拓本図版の作成は早・前期、縄文時代中期中葉は今村が、縄文時代中期後葉は林が当たっている。
7. 「伊久間原の水利の今昔」は故田中豊春先生の遺稿であり、先生の長男田中節山先生に題字をお願いしている。
8. 遺物・測量原図・調査記録カード・写真関係資料は喬木村教育委員会が、喬木村歴史民俗資料館内伊久間原遺物収納庫に保管している。

目 次

口 絵

- No 1. 伊久間原遠望（大原から）
- No 2. 伊久間原（上郷から）
- No 3. E・F地区遺溝
- No 4. 古墳時代の土器 香炉形土器
- No 5. 古墳時代の土器 85号住セット
- No 6. Eド3 1

序 文 喬木村教育委員会教育長

例 言

I. 調査の経過	1
1. 伊久間原遺跡の発掘調査の経過	1
(2) 伊久間原1号住居址の発掘調査	2
(3) 農道2・3号線開発に伴う発掘調査	2
(4) 13号住居址の発掘調査	3
(5) 畑灌水パイプ敷設工事に伴う立入り調査	3
(6) フルーツパークの発掘調査	4
2. 広域営農団地農道改良に伴う発掘調査	4
(1) 第Ⅰ期工事に伴う発掘調査（下原地籍）	4
(2) 第Ⅱ期工事に伴う発掘調査	4
① 平成9年の試掘調査	5
② 平成10年の発掘調査	5
③ 平成11年の発掘調査	6
(3) 調査団組織	6
II. 伊久間原遺跡周辺の環境	7
1. 自然的環境	7
2. 歴史的環境	8
(1) 喬木村の中・下位段丘上の遺跡	8
(2) 伊久間原の遺跡群	19
① 住居址の広がり	19
② 中世以降の伊久間原	19
伊久間原水利の今昔	21
地形地質から見た伊久間原の自然環境	25
1. 伊那谷を代表する段丘の伊久間原	25
2. 伊久間原の中原で表層地質を調べる	26

3. 伊久間原中原の表層地質と古環境調査との比較	31
4. 境の沢を越えた地点の表層地質	32
5. 伊久間段丘形成と断層との関連	34
6. 地形地質調査の成果	35
7. 伊久間原の形成史	35
8. 今後の調査課題	36
伊久間原遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定	37
1. 試料	37
2. 前処理および測定方法	37
(1) 酸／アルカリ／酸洗浄	37
(2) 石墨調製	37
(3) AMS法	37
3. 測定結果	38
(1) 14C年代測定値	38
(2) δ 13C測定値	38
(3) 補正14C年代値	39
(4) 暦年代	39
(5) 測定No.	39
4. 所見	39
喬木村、伊久間原遺跡における植物珪酸体分析	39
1. はじめに	39
2. 試料	39
3. 分析法	40
4. 分析結果	40
(1) 分類群	40
(2) 植物珪酸体の検出状況	41
5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境	41
伊久間原遺跡出土炭化材の顕微鏡写真	44
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真	45
Ⅲ. 調査の結果	55
1. 調査区と調査方法	55
2. 調査結果の概要	55
3. 検出された遺構・遺物	55
(1) 縄文時代早期の竪穴	55
① C地区土坑10	55
② D1地区竪穴10	59

③ D1地区竪穴7	59
(2) 縄文時代前期の住居址・土坑	59
① 87号住居址	59
② 101号住居址	62
③ 100・102・103・104号住居址	62
④ 114号住居址	65
⑤ 119号住居址	65
⑥ D2地区竪穴・土坑	66
⑦ 縄文時代前期の遺構・遺物の広がり	66
(3) 縄文時代中期中葉の住居址	73
① 35号住居址	73
② 38・39号住居址	74
③ 41号住居址	74
④ 53号住居址	74
⑤ 67号住居址	77
⑥ 69号住居址	77
⑦ 76号住居址	77
⑧ 98・99号住居址	79
⑨ 112号住居址	79
⑩ 118号住居址	79
⑪ 125号住居址	80
⑫ 131号住居址	80
⑬ 縄文時代中期中葉の土坑	80
⑭ 縄文時代中期中葉の住居址の配置	81
(4) 縄文時代中期後葉の住居址	81
① 26号住居址	104
② 34号住居址	104
③ 36・37号住居址	104
④ 38号住居址	104
⑤ 40号住居址	105
⑥ 42・43号住居址	106
⑦ 45号住居址	106
⑧ 46号住居址	107
⑨ 47号住居址	110
⑩ 48号住居址	110
⑪ 49号住居址	110
⑫ 51号住居址	111
⑬ 52号住居址	113

⑭ 50・59号住居址	113
⑮ 54・55・56・57・60号住居址	114
⑯ 61・62号住居址	114
⑰ 63号住居址	115
⑱ 64号住居址	116
⑲ 65・66・70・72・73・74・75号住居址	116
⑳ 77号住居址	117
㉑ 79号住居址	119
㉒ 89号住居址	121
㉓ 97・120号住居址	123
㉔ 縄文時代中期後葉の土坑・竪穴	123
㉕ 縄文時代中期後葉の住居址の広がり	128
(5) 弥生時代後期の住居址・囲溝址	128
① 83号住居址	128
② 96号住居址	195
③ 109号住居址	195
④ 127号住居址	195
⑤ 囲溝址	195
⑥ 弥生時代の住居址の位置・広がり	201
(6) 古墳時代の住居址	201
① 68号住居址	201
② 81号住居址	203
③ 82号住居址	203
④ 84号住居址	205
⑤ 85号住居址	205
⑥ 86号住居址	207
⑦ 88号住居址	207
⑧ 90号住居址	208
⑨ 91号住居址	210
⑩ 92号住居址	210
⑪ 93号住居址	210
⑫ 94号住居址	212
⑬ 95号住居址	212
⑭ 9号住居址	212
⑮ 105号住居址	213
⑯ 106号住居址	213
⑰ 107号住居址	214
⑱ 108号住居址	214

⑲ 1 1 0号住居址	216
⑳ 1 1 1号住居址	218
㉑ 1 1 3号住居址	218
㉒ 1 1 5号住居址	218
㉓ 1 1 6号住居址	218
㉔ 1 1 7号住居址	218
㉕ 1 2 1号住居址	219
㉖ 1 2 2号住居址	221
㉗ 1 2 3号住居址	222
㉘ 1 2 4号住居址	222
㉙ 1 2 6号住居址	223
㉚ 1 2 8号住居址	223
㉛ 1 2 9号住居址	223
㉜ 1 3 0号住居址	223
㉝ 1号住居址	224
㉞ 1 3号住居址	226
(7) 古墳時代の掘立柱建物址	226
① 掘立柱建物址 1	226
② 掘立柱建物址 2	243
③ 掘立柱建物址 3	244
④ 掘立柱建物址 4	244
⑤ 掘立柱建物址 5	244
⑥ 掘立柱建物址 6	244
⑦ 掘立柱建物址 2 0	246
⑧ 掘立柱建物址 7	246
⑨ 掘立柱建物址 1 1	246
⑩ 掘立柱建物址 1 3	248
⑪ 掘立柱建物址 8・9	248
⑫ 掘立柱建物址 1 5	248
⑬ 建物址 1 0・1 4	248
(8) 古墳時代の住居址・掘立柱建物址の広がり	250
① 住居址の広がりと時期	250
(9) 平安時代の遺構	252
① 4 4号住居址	252
② 7 1号住居址	252
③ 平安時代の土坑群	253
(10) 中世・近世以降の遺構	256
① 石積遺構と工房址	256

② 溝址 1	256
③ 溝址 2	256
④ 溝址 3	257
IV. 調査のまとめ	258
1. 伊久間原遺跡の広がり	258
2. 特筆される調査の結果	259
(1) 縄文時代前期の集落構成	259
(2) 縄文時代中期中葉・後葉の住居址群	260
(3) 古墳時代住居址群と掘立柱建物址	260
(4) 平安時代の集落	261
3. 伊久間原遺跡の立地条件	261
4. 伊久間原遺跡の保全 活用計画	262

図版目次

第1図 喬木村下段地域埋蔵文化財包蔵地図	11
第2図 伊久間原地形図・住居址配置図	15
第3図 伊久間遺跡中心部の住居址配置図	17
第5図 B・C地区遺構全体図	51
第6図 D・E・F地区遺構全体図	53
第7図 D・C地区竪穴址・土坑群	56
第8図 C地区土坑10出土土器(1)	57
第9図 D1地区竪穴址10・7・9・15出土土器	58
第10図 87・101住居址	60
第11図 87号住居址出土土器	61
第12図 101号住居址出土土器	63
第13図 100・102・80・85・92号住居址出土土器	64
第14図 114・119号住居址	67
第15図 119号住居址出土土器(1)	68
第16図 119号住居址出土土器(2)	69
第17図 114号住居址出土土器	70
第18図 建物址2・125号住居址周辺出土土器	71
第19図 住居址等出土石匙	72
第20図 35・41・53号住居址	75
第21図 39・59号住居址と周辺の土坑	76
第22図 67・69・75・76号住居址	78
第23図 35号住居址出土土器	82

第24図	38号住居址出土土器(1)	83
第25図	38号住居址出土土器(2)	84
第26図	39号住居址出土土器	85
第27図	41・42・43・45・46・47・48・49号住居址出土土器	86
第28図	50・51・52・55・59号住居址出土土器	87
第29図	53号住居址とその周辺出土土器	88
第30図	67号住居址出土土器	89
第31図	69号住居址出土土器	90
第32図	76号住居址出土土器(1)	91
第33図	76・75号住居址出土土器	92
第34図	75・125号住居址ほか出土土器	93
第35図	98号住居址出土土器	94
第36図	118号住居址出土土器(1)	95
第37図	118号住居址出土土器(2)	96
第38図	120号住居址出土土器	97
第39図	125号住居址出土土器	98
第40図	131号住居址出土土器	99
第41図	B地区土坑37、E地区土坑等出土土器	100
第42図	C地区土坑8出土土器	101
第43図	D1地区土坑1・2出土土器	102
第44図	F地区グリット出土土器	103
第45図	26・34・45号住居址	108
第46図	38・52号住居址	109
第47図	46・48・49号住居址	112
第48図	63・64・77号住居址	118
第49図	79号住居址と周辺の竪穴址群	120
第50図	89号住居址	122
第51図	34号住居址出土土器	129
第52図	38号住居址出土土器(1)	130
第53図	38号住居址出土土器(2)	131
第54図	38号住居址出土土器(3)	132
第55図	38号住居址出土土器(4)	133
第56図	38号住居址出土土器(5)	134
第57図	39・40・41・42・43号住居址出土土器	135
第58図	45号住居址出土土器(1)	136
第59図	45号住居址出土土器(2)	137
第60図	44・46・47・48号住居址出土土器	138
第61図	49号住居址出土土器(1)	139

第62図	49号住居址出土土器(2)	140
第63図	49号住居址出土土器(3)	141
第64図	50号住居址出土土器(1)	142
第65図	50号住居址出土土器(2)	143
第66図	51・52・54・56号住居址出土土器	144
第67図	59・60・61号住居址出土土器	145
第68図	62号住居址出土土器	146
第69図	63号住居址出土土器(1)	147
第70図	63号住居址出土土器(2)	148
第71図	63号住居址出土土器(3)	149
第72図	64号住居址出土土器	150
第73図	66・67・70号住居址出土土器	151
第74図	71・72号住居址出土土器	152
第75図	77号住居址出土土器(1)	153
第76図	77号住居址出土土器(2)	154
第77図	77号住居址出土土器(3)	155
第78図	77号住居址出土土器(4)・F地区後期の土器	156
第79図	79号住居址出土土器(1)	157
第80図	79号住居址出土土器(2)	158
第81図	89号住居址出土土器(1)	159
第82図	89号住居址出土土器(2)	160
第83図	89号住居址出土土器(3)	161
第84図	F地区土抗7出土土器	162
第85図	E地区土抗14・17・20・21・26出土土器	163
第86図	F地区土抗2・3・5・7・8・9出土土器	164
第87図	F地区竖穴10~15出土土器	165
第88図	35~50号住居址出土土偶	166
第89図	49~69号住居址出土土偶	167
第90図	76~89号住居址出土土偶とミニチュア土器	168
第91図	住居址等出土土製品と小形石器	169
第92図	住居址等出土石鏃100点	170
第93図	38号住居址出土石器(1)	171
第94図	38号住居址出土石器(2)	172
第95図	38号住居址出土石器(3)	173
第96図	38号住居址出土石器(4)	174
第97図	45号住居址出土石器(1)	175
第98図	45号住居址出土石器(2)	176
第99図	45号住居址出土石器(3)	177

第100图	49号住居址出土石器(1)	178
第101图	49号住居址出土石器(2)	179
第102图	49号住居址出土石器(3)	180
第103图	49号住居址出土石器(4)	181
第104图	49号住居址出土石器(5)	182
第105图	63号住居址出土石器(1)	183
第106图	63号住居址出土石器(2)	184
第107图	63号住居址出土石器(3)	185
第108图	89号住居址出土石器(1)	186
第109图	89号住居址出土石器(2)	187
第110图	89号住居址出土石器(3)	188
第111图	89号住居址出土石棒·石皿	189
第112图	38·76·79号住居址出土石棒·石皿	190
第113图	D地区土抗6·39·63号住居址出土锤石	191
第114图	83·109号住居址	196
第115图	83·96号住居址出土土器	197
第116图	68·123号住居址	202
第117图	81·82号住居址	204
第118图	85·86号住居址	206
第119图	88·93号住居址	209
第120图	90·92号住居址	211
第121图	107·117号住居址	215
第122图	110·130号住居址	217
第123图	121·122号住居址	220
第124图	1·13号住居址	225
第125图	建物址1·2·3·4·5·6·20·21	245
第126图	建物址7·11·12·13、108·125·127·129号住居址	247
第127图	建物址ピット土層图	249
第128图	68号住居址出土土器(1)	227
第129图	68号住居址出土土器(2)	228
第130图	82·93·95号住居址出土土器、121·124号住居址出土砥石	229
第131图	85号住居址出土土器	230
第132图	86号住居址出土土器(1)	231
第133图	86(2)·88号住居址出土土器·白玉·管玉	232
第134图	90·92号住居址出土土器	233
第135图	105·107·112号住居址出土土器	234
第136图	108号住居址出土土器	235
第137图	129号住居址出土土器、107·108号住居址出土菰手石	236

第138図	110・130号住居址出土土器	237
第139図	130号住居址出土菰手石	238
第140図	117・9号住居址出土土器	239
第141図	121・122号住居址出土土器(1)	240
第142図	122号住居址出土土器(2)	241
第143図	126・123・124号住居址出土土器	242
第144図	44・71号住居址と土坑群	254
第145図	44・71号住居址・土坑群出土土器	255

写真図版目次

写図1	C地区全景	265
写図2	D1・D2地区全景	266
写図3	E・F地区全景	267
写図4	87・101号住居址	268
写図5	119号住居址と掘立柱建物址ピット	269
写図6	118・119号住居址	270
写図7	125号住居址と埋鉢炉	271
写図8	38号住居址	272
写図9	45号住居址	273
写図10	49号住居址	274
写図11	63・64・77号住居址	275
写図12	67号住居址	276
写図13	79号住居址	277
写図14	89号住居址(1)	278
写図15	89号住居址(2)	279
写図16	38・45・79・89号住居址石囲い炉	280
写図17	48・49・77号住居址炉	281
写図18	40・46・52・67号住居址石囲い炉	282
写図19	35・53・69・76・112号住居址石囲い炉	283
写図20	38号住居址埋甕	284
写図21	45号住居址埋甕	285
写図22	49号住居址埋甕	286
写図23	52号住居址埋甕	287
写図24	77号住居址埋甕	288
写図25	89号住居址埋甕	289
写図26	D1地区 竪穴7・10	290
写図27	D2地区土坑1、E地区土坑20	291

写図28	E地区竪穴群	292
写図29	83号住居址	293
写図30	68号住居址	294
写図31	82号住居址	295
写図32	85号住居址	296
写図33	86号住居址	297
写図34	88号住居址	298
写図35	90号住居址	299
写図36	92・107号住居址	300
写図37	108号住居址	301
写図38	110号住居址	302
写図39	117号住居址	303
写図40	121号住居址	304
写図41	122号住居址	305
写図42	123号住居址	306
写図43	130号住居址	307
写図44	1号住居址・13号住居址かまど復元落成	308
写図45	1号住居址の調査	309
写図46	13号住居址のかまど	310
写図47	82・86号住居址かまどの正面	311
写図48	107・123号住居址かまどの正面	312
写図49	108・123号住居址かまどの上面	313
写図50	85・88号住居址かまどの中	314
写図51	86・88号住居址かまどの支脚	315
写図52	88号住居址かまど支脚の高坏形土器	316
写図53	68・121号住居址粘土製のかまど	317
写図54	85・86号住居址かまどの土器出土状況	318
写図55	D1地区堀立柱建物址群	319
写図56	堀立柱建物址1	320
写図57	堀立柱建物址4・2	321
写図58	堀立柱建物址3	322
写図59	堀立柱建物址7	323
写図60	堀立柱建物址のピット(1)	324
写図61	堀立柱建物址のピット(2)	325
写図62	堀立柱建物址のピット(3)	326
写図63	E地区土坑31と灰釉陶器	327
写図64	77号住居址・堀立柱建物址22	328
写図65	堀立柱建物址22とF地区	329

写図66	縄文時代早期土器 (1)	330
写図67	縄文時代早期土器 (2)	331
写図68	縄文時代中期中葉の土器	332
写図69	38号住居址出土深鉢形土器	333
写図70	38号住居址出土把手付深鉢形土器	334
写図71	38号住居址出土鏝付土器	335
写図72	45・89号住居址出土香炉形土器	336
写図73	45号住居址出土香炉形土器	337
写図74	45号住居址出土深鉢形土器	338
写図75	49号住居址出土深鉢形土器	339
写図76	49号住居址出土有孔鏝付土器	340
写図77	50号住居址出土深鉢形土器頸部	341
写図78	50号住居址出土深鉢形土器口縁部	342
写図79	59号住居址出土深鉢形土器	343
写図80	63号住居址出土大型深鉢形土器	344
写図81	77号住居址出土深鉢形土器	345
写図82	77号住居址出土樽形土器	346
写図83	77号住居址出土深鉢形土器	347
写図84	89号住居址出土小形深鉢形土器	348
写図85	98号住居址出土深鉢形土器	349
写図86	83号住居址出土甕形土器	350
写図87	68・122号住居址出土土器	351
写図88	85・86号住居址出土土器	352
写図89	88・90号住居址出土土器	353
写図90	108・121号住居址出土土器	354
写図91	86号住居址出土甌形土器	355
写図92	122号住居址出土甌形土器	356
写図93	85・88・90号住居址出土高坏形土器	357
写図94	117・122号住居址出土高坏・埴形土器	358
写図95	68・122号住居址出土甕・蓋坏	359
写図96	38・49・69号住居址出土土偶	360
写図97	79・89号住居址出土石棒・石皿	361
写図98	水防土堤・伊久間城跡	362
写図99	奴山古墳・赤坂古墳	363
写図100	境の沢の水田	364
写図101	ローム層の土層調査	365
写図102	作業風景 (1)	366
写図103	作業風景 (2)	367

表目次

表 1	伊久間原遺跡発掘調査住居址一覧	1
表 2	喬木村埋蔵文化財包蔵地一覧	12
	喬木村古墳一覧	13
表 3	伊久間原遺跡 時期別住居址一覧	47
表 4	伊久間原遺跡 主な竪穴・土抗一覧	124
表 5	伊久間原遺跡 遺構別出土石器整理表	192
表 6	伊久間原遺跡 実測石鏃一覧	194
表 7	伊久間原遺跡 古墳時代住居址一覧	198
表 8	伊久間原遺跡 建物址一覧	199
表 9	伊久間原遺跡 古墳時代土器数一覧	200

I. 調査の経過

1. 伊久間原遺跡の発掘調査の経過

今回発掘調査が行われた広域営農団地農道は、昭和28年から行われた伊久間原農道2号線の大部分が拡幅改良されるもので、昭和27・28年の発掘調査や立入り調査された場所にかかわるところが多い所でもある。昭和52年以前から計画された畑灌水用パイプ敷設工事に伴う発掘調査や立入り調査、平成7年のフルーツパーク造成工事に先立つ発掘調査等によって、33軒の住居址が発掘調査されている。今回の農林漁業用揮発油税財源身替農業整備事業に伴う広域営農団地農道改良工事にかかわる発掘調査の経過の前に、伊久間原遺跡の諸調査の経過に触れることにする。

表1 伊久間原遺跡発掘調査住居址一覧

住居址NO	所在位置	時期	調査年度	住居址プラン・遺構の状況	出土遺物・備考
1号住居址	堀垣外16896番地	古墳時代後期	昭和27	隅丸方形5.2×4.8m 竈・貯蔵穴・柱穴	甕形土器4・甕1・坏形土器2・高坏形土器・須恵器
2号住居址	孤立 農道3号線	縄文時代中期末	昭和28	道路断面確認で不詳、石囲い炉・埋甕	深鉢形土器(埋甕)住居址の一部が道路上面に残る。
3号住居址	〃	古墳時代後期	〃	農道3号線の南側に大部分残る。	
4号住居址	〃	〃	〃	プラン不詳、竈の痕跡	甕形土器3・碗1・坏形2ほか 基点Aから10mほど西
5号住居址	〃	〃	〃	プラン不詳、竈の痕跡	甕形土器2・鉢形土器1・坏形土器1 基点Aから15mほど西
6号住居址	〃農道1・3号線交差点	〃	〃	プラン不詳	埴形土器1・高坏形1・碗形1
7号住居址	〃〃 東南	〃	〃	石組竈だけ確認	
8号住居址	〃基点A～東北18m	〃	〃	〃	長埴1・坏形土器2
9号住居址	〃〃～東北60m	〃	〃	石芯粘土製竈	大形甕形土器1・坏形土器1
10号住居址	〃〃～東北110m	縄文時代中期	〃	石囲い炉確認	縄文時代中期土器片
11号住居址	〃基点A～西南100m	〃	昭和28	石囲い炉発掘調査	縄文時代中期土器片
12号住居址	〃〃～東北150m	古墳時代後期	〃27	竈の石3個	土師器片多数
13号住居址	堀垣外16895・16936番地	古墳時代後期	昭和29	隅丸方形7.3×8.1m、石芯粘土製竈 柱穴・炭化材多数・置炭化物	甕三組土器2組・甕形土器2・甕形土器・坏形土器・碗形土器等やく45個
14号住居址	調査区I(0区)	縄文時代中期	昭和52	隅丸方形4.3x4.45m 石囲い炉はずれ	深鉢形土器2ほか土器片
15号住居址	〃基点Aの東	〃	〃	隅丸方形4.2×4.4m 石囲い炉はずれ	深鉢形土器3、ミニチュア土器
16号住居址	〃	弥生時代後期	〃	隅丸方形3.9×4.1m 埋甕炉 貯蔵穴	壺形・甕形・高坏形土器
17号住居址	〃	〃	〃	一辺だけ 2.55m	甕形・高坏形土器
18号住居址	〃	〃～古墳時代	〃	隅丸方形4.9×5.1m 埋甕炉	壺形・甕形・高坏形土器
19号住居址	〃	縄文時代早期	〃	円形 5.1m 集石状炉	尖底深鉢、木鳥・茅山式土器
20号住居址	〃	縄文中期中葉	〃	円形 5.7m 石囲い炉	土器片
21号住居址	〃	縄文時代晩期	〃	竪穴なし 焼土だけ	磨消縄文・条痕文 鉢形・注口・碗形
22号住居址	〃	縄文時代早期	〃	隅丸方形4.7×4.5m 焼土	尖底深鉢、入海式土器
23号住居址	調査区II(I区)	縄文中期中葉	〃	円形 4.1m 石囲い炉	深鉢形土器5・粘土紐・隆起線文
24号住居址	〃	縄文中期後葉	〃	円形 6.7m 地床炉	深鉢形土器7以上・釣り手・小形鉢・土偶13・ミニチュア土器等多
25号住居址	〃	〃	〃	円形 5.6 焼土	土器片少量
26号住居址	〃	〃	〃	円形 5.8m 石囲い炉	深鉢形土器4～5
27号住居址	〃	〃	〃	楕円4.3×5.3m 石囲い炉はずれ	台付甕・深鉢・土偶 3
28号住居址	〃	〃 後葉	〃	円形 4.0m 石囲い炉	深鉢形土器片多
29号住居址	〃	〃	〃	円形 5.5m 焼土	土器片
30号住居址	公園広場 1号	古墳時代後期	平成7年	4分の3道路 竈不詳	甕形・高坏形土器片
31号住居址	〃 2号	縄文中期中葉	〃	楕円 3.2～ 炉不詳	縄文・無文土器片
32号住居址	〃 3号	〃	〃	隅丸方形4.3×4.2m 石囲い炉跡	爪形・隆線・竹管・粘土紐
33号住居址	〃 4号	古墳時代後期	〃	隅丸方形4.2×4.3m 石芯粘土製竈	甕形2・坏形10・高坏形・はぞう

住居址NO	所在位置	時 期	調査年度	住居址プラン・遺構の状況	出土遺物・備考
円形周溝墓 1・2	調査区 I	弥生時代後期	昭和57年		
建物址 1・2	公園広場	古墳時代か 中世	平成7年		
34号住居址～ 132号住居址	広域農道用地	縄文時代前期～ 平安時代	平成10・11年	(今回の報告書記載分)	

この表は、昭和27年に行われた1号住居址の発掘調査以来、33軒の住居址を一覧表にしたものである。以前に行われた農道2・3号線の工事にかかわる発掘調査・立入り調査（昭和28～30年）による2～13号住居址までの12軒、昭和52年の畑灌用水パイプ敷設工事にかかわる1・2地区の発掘調査で検出された14～29号までの16軒、平成7年に行われたフルーツパーク造成に先立つ発掘調査で検出された、30～33号住居址の4軒が記載されている。なお、昭和52年に行われた畑灌用水パイプ敷設工事に先立つ立入り調査によって確認された314軒の住居址は含まれていない。また同年行われた下原遺跡の発掘調査で確認された8軒の住居址、平成2年に行われた下原地籍悠生寮建設に伴う発掘調査で検出された18軒の住居址と、平成8年の広域営農団地農道第1期工事に伴う下原地籍で行われた発掘調査で検出された13軒の住居址も含まれていない。

伊久間原遺跡（含ハマイバ地籍）では、昭和27年から平成7にかけて発掘調査された住居址は33軒になるが、報告書によると登録番号が不揃いであるので、今回年度に従って通し番号にして再登録した。したがって、今回の発掘調査では、再調査された9・26号住居址を除いて、34号住居址から132号住居址として扱っている。

（2）伊久間原1号住居址の発掘調査

昭和27年6月、堀垣外地籍16896番地の1（旧地権者松葉乙弥さん）で偶然大形土器片を拾い、地主松葉乙弥さんの了解を得て、文化庁へ発掘届を提出して、同年6月、田中豊春先生と今村で発掘調査をした。この調査には当時明治大学生松島透さん、飯田高校生宮沢恒之・松下芳叙さんや中学生（田中裕昭・林文綱・宮下昌治君）の協力を得て古墳時代の住居址の全容が調査されている。当時は下伊那史の編纂中であつたので、郡誌編纂室の市村威人・宮下操・大沢和夫先生等や国学院大学大場磐雄教授の現地指導を得て、飯田・下伊那地方最初の古墳時代の住居址として、下伊那史第三巻に記載されている。

この住居址は、その後、喬木第一小学校五年生等によって埋没保存され、喬木村史跡として指定され、現在なお現地に保存されてる。

（3）農道2・3号線開発に伴う発掘調査

下段の県道竜東線から伊久間原を通して循環する農道1・2・3号線の開発計画が立てられ、昭和27年春に農道1号線が着工され、農道2号線は同年12月に、農道3号線は昭和28年1月に着工されている。農道3号線は台地の南側三叉路から下原へ下る道路で、人力による掘り割り作業が行われているので、住居址の発見の続いたところである。全容を調査することは困難であつたが、縄文時代・古墳時代の完形土器が多く発見されて、確認された住居址は縄文時代の2号住居址、古墳時代の3・

4・5・6・7号住居址である。同年1月から5月にかけて、農道2号線の側溝工事が始まり、2号線の両側に溝が掘られ、石積み作業が行われている。この掘り下げ作業によって各所から土器が出土している。とくに9号住居址とされたところでは、両側に5個ずつの石が立てられ、天井石も確認された大形の竈が検出されている。作業に当たった木村賢太郎さん等の話によると、竈の中央に大形の土器の完形品が横たわっていたといわれる。本文140図に採録されている土器で、甑形土器の完形品である。この土器の発見は、伊久間区の方々の関心を一層高め、喬木第一小学校へも報告され、毎日、今村の他に当時の5年生山田章博・原昭章・大平恒夫・見田紘一・岩間正晴・東條政幸・宮下忠男君等によって収拾されている。この収拾作業には、作業中発見された土器は、作業員の皆さんが道上に固めて置いて下さる配慮があったわけで、収拾・記録するには非常に役立ったわけで、有り難いことであった。この時確認された住居址は、8・9・10・11・12号住居址である。その後、教育委員会ではその場所に標識を立て、三叉路には説明版まで建てている。

(4) 13号住居址の発掘調査

農道2号線から入道洞へ通ずる道路の工事中に土器が発見されたので、工事組合の許可を得て道路敷きの発掘調査が昭和29年1月に行われている。この発掘調査は先の小学生（当時中学2年生）や飯田高校郷土研究班員の協力を得て行われた。多くの土器が発見されたが、住居址は大きく道路敷地を越えて北側に続いているし、しかも深い住居址なので作業を中断している。昭和30年10月に、地権者桑原清美さんの協力を得て北側分の発掘調査が行われている。この発掘調査は、偶々編纂中の下伊那史第三巻に採録する計画もあって、郡誌編纂主任の市村先生は度々現地指導に来村され、現場で原稿を書かれていた。この発掘調査は喬木第一小学校の職員・小学生・中学生の協力を得て、長大な竈・炭化材の多い住居址の全容を確かめ、40個以上の完形土器を掘り出して終了している。住居址の概要は本文226頁に記載されている。

この長大な竈は、昭和32年になって再び掘り出され、教育委員会の手によって復原整備され、覆屋が造られ、説明看板も建てられて訪れる人々に便宜が与えられている。完成した6月12日には湯沢村長さんはじめ村の方々、郡誌編纂主任の市村先生ほか宮下・大沢・原田先生も訪れて、完成を祝っている。郡誌編纂主任の市村先生は、「立派に復原されてこんな嬉しいことはない。遺跡の復元は郡下としては勿論初めてのこと。ともすると尊い文化財が捨て去られ、破壊される中で、この村では村人が協力して復原されたことは尊いことである」と話されている。この竈は今なお健在ではあるが、見やすい状態に再整備されるとよいと思っている。(写図44)

(5) 畑灌水パイプ敷設工事に伴う立入り調査

昭和52年度に、長野県南信土地改良事務所主管の、畑地帯総合土地改良事業伊久間工区の事業が行われるようになった。伊久間原全域55,7haの畑地帯に灌水パイプ敷設工事が行われるので、それに先だって調査可能地域の発掘調査と、その他の場所の立入り調査が計画された。発掘調査は伊久間原ではⅠ・Ⅱ地区、下原地籍ではⅢ地区で行われている。Ⅰ・Ⅱ地区では縄文時代・弥生時代の住居址16軒・周溝2が検出され、下原Ⅲ地区では縄文時代・弥生時代の住居址9軒が検出されている。

最も大きな成果が上がっているのは、畑灌水パイプ敷設の溝の立入調査である。このパイプは、伊久間原全域（含ハマイバ）・下原地籍で行われている。配管は果樹園は12m、桑園・野菜畑は15m間隔で敷設されるが、掘削の溝幅は耕地配管は30cm・幹線パイプの幅は70cmで、深さは70cmほどの計画であった。幹線パイプ用の溝はともかく、末端配管の幅は30cmしかなく、全域にわたるので並大抵の立入調査ではなかったと思われる。この立入調査は、佐藤甦信さんと数人の作業員によって昭和52年10月から翌年2月まで行われている。この調査で確認された住居址は、伊久間原だけで、縄文時代早期3軒・同時代前期21軒・縄文時代中期104軒・縄文時代後晩期22軒・弥生時代中期24軒・弥生時代後期56軒・古墳時代中期11軒・古墳時代後期68軒・平安時代4軒の合計314軒に及んでいる。この調査結果は地図に分布状況が記録されていて、伊久間原遺跡の遺構分布が一目瞭然に分かる極めて重要な記録となっている。狭くて深い溝であり、対象となる範囲は極めて広大なために記録不備はあったとは思われるが、今回発掘調査してみて役立つことが多かった。改めてこの結果を大切に扱かわなくてはいけないと思っている。

（6）フルーツパークの発掘調査

伊久間原の一面に農林水産省の集落環境整備事業による「伊久間原縄文の丘 フルーツパーク」造成に先立つ発掘調査が平成7年12月に行われている。この調査は、建物が建たる範囲に限って発掘調査が行われているので、公園全域の発掘調査は行われていない。調査の結果は縄文時代中期住居址2軒・古墳時代住居址2軒・掘立柱建物址2棟が検出されている。

2. 広域営農団地農道改良に伴う発掘調査

（1）第Ⅰ期工事に伴う発掘調査（下原地籍）

この事業は、農林漁業用揮発油税財源身替農業整備事業の一環として、長野県地方事務所土地改良課の主管事業として計画された。昭和28年頃に新設された農道2・3号線を拡幅（一部新設）する事業で、平成8年に下原地籍の工事が行われている。これに先立つ発掘調査が、平成8年10月から11月にかけて行われ、縄文時代中期頃の住居址11軒・弥生時代中後期の住居址2軒が検出されている。住居址が多く検出されたところは悠生寮に近い辺りで、そこから登りとなる一帯からは遺構は検出されていない。なお、この地域の発掘調査担当者は佐藤甦信氏である。

（2）第Ⅱ期工事に伴う発掘調査

第Ⅱ期工事の予定地は、下原地籍の農道3号線の北東側から、一部新設部を含めて台地上を北東に縦貫する農道2号線を拡幅改良する事業で、北側農道1号線の交差点までやく900mの範囲である。この台地は伊久間原遺跡の中心部に当たるところで、濃密且つ複合遺跡として知られ、長野県の重要遺跡に登録されているので、県教委・地方事務所土地改良課・喬木村教委とによる保護協議が度々行われている。協議の中心課題は、濃厚な遺跡であるから長期間にわたる調査が必要なこと、高齢によ

8月25日からC地区の検出作業に入り、必要に応じてE・F地区の詳細記録調査が行われている。C地区では古墳時代の住居址が多く集積し、縄文時代前期の住居址群や土坑群が検出されている。C地区で検出された住居址は23軒で、縄文時代前期6軒・同中期3軒・弥生時代3軒・古墳時代11軒であった。

この年の発掘調査で特筆されることは、E・F地区では、縄文時代中期中葉と後葉の住居址が重複しながら、円形状に配列されていることで、昭和52年の立入調査の結果を実証することができたことである。また、平安時代の集落の一面が検出されたことも、伊久間原遺跡にとっては貴重な発見であった。C地区では、縄文時代早期の土坑が検出されたり、縄文時代前期の住居址が複数検出されたこと、古墳時代の住居址が接近しながら多く検出されたことである。

③ 平成11年の発掘調査

この年の中心になるところはD地区で、調査区の範囲は100mほどであるが、耕作進入路の確保のために南北2回に分けて調査が行われている。4月7日からは、C地区の詳細記録調査も残り、B地区の調査、D1地区の下層調査等があり、とくに縄文時代早期の土坑・縄文時代前期の土坑等が集中して、しかも、古墳時代の掘立柱建物址のピット群も重複しているので、1か月ほどかかっている。D地区は長いので、南側から50m単位に3つに分け、D1・2・3地区に分けている。5月10日からD1地区北側から道路アスファルトを40mほど排除して調査にかかる。古墳時代住居址の他に大形の掘立柱建物址が重複し、しかも、縄文時代前期・中期の住居址も重複していた。7月15日からD2・3地区の調査にかかり、10月12日までに全域の調査が終了している。

10月13日には地質研究者松島信幸・寺平宏氏と古環境研究所の松田主任によつてローム層の検証調査が行われている。この調査結果は本報告の項に詳しいが、D1地区の土層を表面から5.2m掘り下げ、12層以上に類別して土壌採取が行われている。

この後、阿智村木戸脇遺跡・児の宮遺跡・中関遺跡の発掘調査で中断することもあったが、平成11年12月から平成13年2月まで整理作業を進めて、平成13年3月報告書発刊に至っている。

(3) 調査団組織

1. 調査事務局

教 育 長 宮下 周一
事 務 局 長 市瀬 武文 (H9～11) 湯沢 俊和 (H12)
社会教育係 吉川 文人 (H9～10) 原 俊道 (H10～12) 牧野 秀樹 (H11、12)

2. 調 査 団

調 査 団 長 今村 善興 (飯田市文化財審議委員)
調 査 員 林 貢 福田 千八 細江 博
調査補助員 市瀬 辰春 赤羽 隆 中山 功治 小林 薫 三石 久雄
協力作業員 伊藤八重子 小林 武司 横前 迪夫 土屋 隆男 塩沢 春子 宮沢 譲
荒井 洋子 城田 悦子 大原 久和 北原 正人 原 薫 山本 孝
池田 利子 滝沢よし子 今村 俱栄 吉田さち子

る前担当者の辞退に伴う交代要員の確保のこと・多忙な村教委事務局の人員確保のことであった。

喬木村収入役・同助役・同村長が相次いで今村宅を訪問され、担当者受託の懇願が続いた。今村は高森町の調査担当で継続調査中のために断り続けたが、以前の調査担当の経過もあって断り切れず、伊久間原遺跡の保護活用のためにお互いに最大努力し合うことを約束し、高森町の業務を軽減して担当者を受託した経過がある。

調査対象地域は900mほどあるが、今迄の調査経過からみると、北は薄く南は濃い傾向があるので、南側やく400mは全面発掘調査、北側については道路拡幅部を対象にして試掘調査を行い、重要遺構が発見された場合は全面発掘調査の約束がなされている。

① 平成9年の試掘調査

北側やく400mほどの範囲を、横線道路で区切られる4区画（1区画やく100m）を南側からG・H・I・Jの調査区に分け、上物処理状況によりG地区からJ地区にかけて、東西両側の拡幅部分の試掘調査と、G地区西側の試掘調査を平成9年10月8日から12月4日まで36日間行っている。この間、G地区を除いては遺物・遺構の発見が少なく、拡張調査をしたところはG地区の西側・I地区の西側・J地区の東側で、遺物を伴う整った土坑群が検出されたところは、G地区の西側、J地区の東側で、G地区では土坑8基以上、中世・近世の溝址が検出され、J地区の東側ではやく20基ほどの土坑群が検出されている。集中するという状況ではないが、北側一帯にも土坑群の存在が推定される状況であった。南側一帯に大きな住居址群があるから、墓域がどこかにあるわけで、北側に墓域があったり、生産地域がどこかにあると思われる。特徴的な遺物は、G地区での箱堀状の溝に伴う中世陶器、土坑かと思われる窪みの中から出土した弥生時代後期の壺・甕形土器片、J地区東側の土坑群から出土した縄文時代中期中葉の土器片、同じく縄文時代後期の土器片等である。古墳時代・平安時代のものも少量出ているが、遺構等の発見はなかった。G・H地区では青磁小片・天目茶碗片、古瀬戸系陶器片が出土している。伊久間城跡に近いところであるから、注意したい遺物と思われる。

南側のG地区の東側は、りんごの木が伐採されておらず、西側に整った土坑群と溝状遺構が検出されているので、次年度の東側の調査如何によっては全面発掘の途を残して試掘調査を終了している。

② 平成10年の発掘調査

この年の発掘調査予定地は、G地区と南側やく400mの範囲で、南西側の農道3号線から南西側をA・B地区、3号線北側の新設道路部分をC地区、C地区に隣接する農道2号線接続部分からフルーツパーク前までをD地区、横道入道洞線から北側の横線までを南側からE・F地区の調査区に分けている。B地区からF地区までは全面発掘調査の予定地であるが、同時に全域道路路面を剥がすことは困難なために、調査順序をG、E・F・C地区として、平成10年4月7日から11月27日までの128日間の発掘調査が行われている。

まず、E・Fの調査は4月7日から東側のトレンチ掘りの調査からはじめ、並行して重機による道路路面の排除と遺構上面の整地作業が行われ、次々と住居址の輪郭が現われ始めている。4月27日からG地区の調査にもかかり、E・F地区の検出調査は8月中旬まで続いている。E・F地区で検出された遺構は住居址46軒（縄文時代43・古墳時代1・平安時代2）土坑・竪穴62基である。

Ⅱ．伊久間原遺跡周辺環境

1．自然的環境

伊久間原遺跡は長野県下伊那郡喬木村伊久間地籍にある。

飯田・下伊那地方は大きな盆地地形で、東側には赤石山脈（南アルプス）が連なり、西側には木曾山脈（中央アルプス）が聳え、その中間を天竜川が南流し、川の両側には幾段もの段丘が発達している。天竜川の左岸を竜東地区と呼ぶが、その東側背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈がある。北の方から大西山（1741m）・鬼面山（1889m）・氏乗山（1818m）・金森山（1702m）等が赤石山脈と並走している。この伊那山脈の東面は急峻な断崖が続くが、西へ下ると広い山地帯が続き、その先端部には大小幾段もの段丘面が発達している。天竜川の西側一竜西地域一の段丘面に比べると、竜東の段丘面は山麓からのびる扇状地面が狭小で、段丘面の幅も全体的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけては段丘の発達が著しく、広くて長い。その中でも北から豊丘村の田村原・林原・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く段丘面は広く、伊那谷中位段丘の中では、典型的な段丘地形が観察される場所である。その中でも伊久間原の段丘は模式的な段丘とされている。それぞれの段丘面には大きな遺跡が発達しているが、後述のように飯田・下伊那地方の代表的な遺跡地帯は田村原・伴野原・伊久間原遺跡である。

遺跡の存在する伊久間原面は、標高487～498mで、南北1250m・東西150～300mほどの広い段丘面が広がり、西側は緩やかな段丘崖となって三角形の下原段丘に続き、北に続く伊久間城跡のある台地は伊久間原面の一部で、幅300mの広い台地となっている。西側段丘崖は、下原面でやく75m・伊久間原面で95mほどの標高差をもって、下段の南北に細長く続く伊久間部落のある低位段丘へ急崖で続いている。さらにこの下段は、4～5mの比高差をもって天竜川氾濫原となり、伊久間原面と天竜川との比高差は100m前後である。北側は標高差70m以上の急峻な侵食崖となり、その崖下を小川川が西流して天竜川に注いでいる。南側は西流する境の沢の深い侵食谷によって切られ、飯田市下久堅の中尾・庚申原・天神原の台地に隣接している。東側は境の沢支流の侵食谷に面する南側と、境の沢の源流低地に面する北側とは様相を異にするが、やく60mの比高差を持つ高位段丘の広い大原台地に続き、さらに高位の伊那谷第1段丘の机山（610m）の残丘に続いている。机山の背後には九十九谷と呼ばれる深い侵食谷の続くところがあり、そこから奥は断層縦谷に形成される富田・氏乗・飯田・市上久堅等の集落から、さらに奥の山地帯へ続いている。

伊久間原の微地形をみると、一見平坦な台地であるが、北側のハマイバ地籍は一段低く小川川の侵食崖に面して、東西に細長く続く台地である。農道1号線・2号線の交差点辺りは標高497m、中央部で494m、南の農道2・3号線の三叉路付近で488mでわずかに北高・南低の台地で、北側では西に傾斜し、中央部では東側に傾斜している。東側に傾斜をする中央辺りには、東側の大原台地の崖錐傾斜面に挟まれた窪地地形が観察され、南に行くほど深さを増し境の沢の支流となっている。土地改良事業によって昔より平坦化されているので、観察しにくいですが、以前には湧水地帯で「あんま井」・「古井」に水を湛え、水田もあった所で、後述の「水利の今昔」に述べられたところである。この低湿地に面する台地の中央部から南側一帯500mほどの範囲に、縄文時代早・前期から古墳時代後期にかけ

た大きな集落が、所を少しづつ替えながら形成される要因の一つと考えられる。また、南側を西流する境の沢川は、大原台地を侵食して伊久間原台地と中尾・天神の台地を分断しているが、これに並行する入道洞からの小河川・伊久間原台地の東側を南流する境の沢の支流周辺には、今なお湧水か所が存在し、湧水利用の水田耕作も行われている。これらのことから、古代の伊久間原は予想以上に豊かな水源があったように思われる。この周辺の原地形の復原調査や水田址の所在確認の科学調査は、台地上の各時代の集落の在り方の解明と共に、伊久間原遺跡の大きな課題の一つと思われる。

入道洞は、以前から湧水地帯として知られているところで、遺物・遺構の発見は伝えられていないが、赤坂地籍に古墳が一基ある。場所としては奇異な所と思えるが、崖下の扇状地に位置していて、この周辺の解明も必要に思われる。

もう一つの古墳立地では、大原段丘の北側突出部に6基の古墳が構築されている。奴山古墳群である。現在は果樹園の中で、僅かな土盛りが残るだけで、見定めにくいだが、昭和27年頃には四つの墳丘が認められ、伊久間原の遺跡地からも遠望することができた。この周辺には古墳時代の集落は認められないので、伊久間原の集落とかかわる古墳の公算が大きい。

西北側の台地端には一段低い下原台地があり、北側にも一段低いハマイバの台地が西北へ突き出る地形で、その中間は伊久間原の台地で、東側へ内湾する地形で、やく比高差90mの急崖で、下段伊久間集落の中心部へ落ち込んでいる。この二地域とも、縄文時代後晩期の住居址が検出されている。下原に面する台地先端部には伊久間城跡があり、そこから北東側には、江戸時代初期以前に構築されたと推定される水防用の土堤が続いている。この土堤は以前には下原の台地端・ハマイバの台地端を取り巻いたといわれる。

2. 歴史的環境

(1) 喬木村の中・下位段丘上の遺跡

喬木村全体で登録されている埋蔵文化財包蔵地は包蔵地・散布地は48か所、古墳53基、城館跡7、その他窯跡等3か所以上の111か所の多きに及ぶ。旧来から発掘調査された遺跡の数も多いが、全地域にわたる詳細分布調査が行われていないので、はっきりしない地域も多いのが現状である。全域にわたって遺跡の概要に触れることは困難な状況であるから、伊久間原遺跡周辺の中位段丘上、下位段丘上の遺跡について触れることにする。

中位段丘上の主な遺跡を挙げると、北から城原(9)・帰牛原(15・16)・上平的場(26)・伊久間原ハマイバ(39)・伊久間原(40)・伊久間下原(41)・伊久間大原遺跡(42)が挙げられる。

城原遺跡は城原城跡を伴う広い台地であるが、以前に瓦土取り中に発見された弥生時代後期の完形土器のほかは不詳な事が多い。大正時代、鳥居龍蔵氏によって発掘調査されたところでもある。墓地公園造成中に発見された、中世期の銅鏡のほか中世遺物が発見されたこともある。

加々須川左岸の帰牛原の台地は、東西方向に長く続く台地で、縄文時代・弥生時代の濃厚遺跡とされている。とくに城本屋遺跡(15)では、昭和51年の畑灌水関連事業に伴う発掘調査により、縄文時代中期・後期の住居址が集中的に検出されている。また、大正時代の収拾資料によると、縄文時代後期の加曾利B式土器が出土している。中原遺跡(16)では、昭和45・52年、平成8・9年の数回にわ

たる発掘調査により、縄文時代中期・弥生時代後期の住居址が多く検出されている。とくに、弥生時代後期の住居址は30軒以上検出され、環状集落の可能性も指摘されている。南西側の南原遺跡も含めて10数基以上の方形周溝墓も検出され、方形周溝墓は、現在のところ伊久間原遺跡では余り検出されていないのに、ここだけ多いことも話題になっている。住居址群と共に弥生時代の大集落の存在が検証されている。反面、小川川を挟んで伊久間原遺跡に対応する位置にありながら、古墳時代の住居址の発見が少ないところである。地形的な条件なのか・他の条件があるのか課題が残される遺跡でもあり、興味深い問題の一つである。

上平の場遺跡では2回にわたる発掘調査が行われ、縄文時代中期、弥生時代後期の住居址が検出されている。松下城跡崖下で中世期の遺物が多く発見されながら、詳細調査が行われないうまま工場が建設されたこともある。松下城跡は構造的にも、規模的にも特徴のある城跡で、崖下の的場の名前と共に、中世遺構の究明を進めて欲しい遺跡の一つでもある。近くに諸原十三塚やさがり窯跡のあった所でもある。

伊久間原遺跡については後述するが、昭和27年の発掘調査以来、数回にわたる発掘調査によって検出された住居址は132軒に及び、縄文時代前期、縄文時代中期・後期、弥生時代中・後期、古墳時代中・後期、平安時代に広がり、それぞれの時期の大きな集落が形成されている。各時期にそれぞれ特徴はあるが、とくに、縄文時代前期初頭の遺物が集中的に出土し、住居址が10軒以上検出される例は郡下にはないし、縄文時代後期・晩期の遺物・遺構の検出が増えていることで、とくに段丘上の縄文時代晩期の遺跡として、西南隣の下久堅天神遺跡と共に注目されている。

喬木村の下位段丘・低位段丘にも多くの遺跡が存在することは間違いのないと思われるが、発掘調査例が少ないので、不詳な事の多い地域でもある。発掘調査によって確かめられた遺跡は、阿島五反田(3)・郭(11)・里原(8)・馬場平(20)遺跡に留まっている。これらも里原遺跡を除けば、下位段丘上の遺跡で、竜東一貫道路周辺は未解明のまま終わっている地域でもある。

阿島五反田遺跡は、以前から「阿島式土器」の標準遺跡として知られている。昭和35年の発掘調査により古墳時代・弥生時代後期・中期の土器出土層序が確認され、下伊那地方弥生時代中期の北原・阿島・寺所式土器の編年資料が得られた遺跡で、表土下2mほどのところで、阿島式壺形土器完形品が出土している。この中の一つが県立歴史館に展示されている。この遺跡についても、天竜川に近い低位段丘面は、包含層が深いためか、遺跡所在の認識がないためか分からないが、全く解明されていない。五反田遺跡の下段だけでなく、北地籍の下段・阿島鍛冶垣外の下段まで、水田址存在の可能性は高いと思われる。五反田遺跡に続く北地籍は、中位・低位段丘面とも不詳な遺跡とされている。

郭遺跡(11)は大正13年に、鳥居龍蔵氏が旧第一小学校校庭を発掘調査して、縄文時代中期の大形な深鉢形土器が発見されている。この土器は歴史民俗資料館に保管されている。その後、大形な埋蔵が出土したり、北保育園造成前の発掘調査で、弥生時代中期寺所式の土器片が集中したり、喬木荘建設に伴う発掘調査で、縄文時代中期・後期の住居址が14軒検出されている。なお、狭い範囲のところではあるが喬木村では主要な遺跡の一つである。この周辺からは縄文時代前期や後期の土器片が集中回収できる所があり、竜東地域唯一の前方後円墳である、郭1号古墳の他に3基の古墳があったと伝えられ、帰牛原へ登る道路工事に円筒埴輪完形品が出土し、郭5号墳とした登録されている。郭遺跡も下位段丘上の遺跡で、この下段の町地籍一帯も町弁天・町古墳が登録されているが、その周辺の一般的な遺物・遺構の所在について、詳しいことは分からない遺跡とされている。

里原（8）地籍の最低位段丘面（農協販売所裏）で、中世期と思われる水田の杭列群が発見されている。この水田跡は大規模なもので、飯田・下伊那地方でも数少ない水田跡として扱われている。この周辺から、小川川尻にかけて、水田址があるように思われる。この低位段丘の上には、里原・鍛冶垣外遺跡がある。古墳のことは分かるが、いつの時期の土器等が出ているのかははっきりしない遺跡でもある。

馬場平の八幡社付近から旧中学校敷地では、縄文時代前期の土器片が集中したり、旧中学校整地等によって弥生時代後期の甕形土器が発掘されている。とくに、縄文時代前期の遺物集中出土は、阿島郭遺跡・伊久間原遺跡とともに喬木村の主要遺跡の一つに数えられている。大志茂の畑では、縄文時代前期の土器の他に、古墳時代・平安時代の遺物が出土しており、小川渡交差点の下方で古墳時代の土器片が出ているので、遺跡の範囲は広がると思われる。

伊久間地籍の下段にも弥生時代・古墳時代の遺跡の存在が予想されるが、現在のところは小川川尻で古墳時代後期の土器片、法蓮寺の南側で平安時代の小皿の完形品が発見されたただけである。湧水も豊かなところで、古くから集落の発達した所で、中世期の記録・伝承の豊かなところであるから、段丘下の扇状地形・伊久間原との位置関係・集落の変遷過程等から、弥生時代・古墳時代・平安時代・中世期の遺跡があってもよいと思っている。段丘崖下では2 m以上の被りがあるので、深いところに埋蔵されていると思われる。

喬木村は竜東地区では最も多く、39基の古墳が登録されている。阿島郭地籍の郭1号古墳は、竜東地域唯一の前方後円墳で、周囲に3基の円墳が構築されていた。埴原へ登る道路沿いに円筒埴輪が発見されて郭5号墳と登録されたり、中原の台地先端や加々須川に面する大久保の台地に古墳が構築されている。中位段丘と低位段丘の台地端や傾斜面に列状に並んだりする例は、町・南・里原にその例がある。町古墳と呼ばれる古墳が警察派出所の下で発見されている。喬木村では天竜川に最も近い古墳である。

小川川に面する段丘崖下に点々と古墳が構築されていたり、両平や、上耕地の段丘崖下の傾斜面から、弥生時代後期の土器が発見されてるのも、喬木村小川地区の特徴の一つである。伊久間では、段丘崖下の傾斜面に3基ある。昭和27年、農道1号線の開鑿工事中に、お宮の上の大カーブ辺りで発見された洞坂古墳、弁天橋の上の斜面にあった井の上・船渡古墳である。伊久間原の台地の先端部の城の上古墳、境の沢右岸の大原段丘下の斜面に赤坂古墳がある。高位段丘先端部に、6基集団であったといわれる奴山古墳群や、大原の台地奥の小川川に面する崖沿いに藤塚がある。これ等は、それぞれの地域の集落のありかたに大きな示唆が与えられている。



正 肆 十

第1図 喬木村下段地域埋藏文化財包蔵地図

表2 喬木村埋蔵文化財包蔵地一覽

NO	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代			古墳時代			奈良	平安時代			中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考	
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須		石	土	須				灰
1	阿島北遺跡	阿島 北						○			○	○			○	○						遺跡の中心地不詳、詳細分布調査必要
2	土井場	〃 〃								○												久保田宅のこと？
3	阿島五反田	〃 〃				○				●	●	○	○		○							昭和35年、阿島式土器・炉址、遺跡範囲不詳。
4	おくまんの	〃 〃			○	○					○											遺跡地不詳、一確認必要
5	城原城跡	〃 城原																		○		相の堀、堀尻
6	花高 遺跡	〃 町				○	○	○			○	○										遺跡地不詳、花立？
7	阿島南	〃 〃 南									○	○										遺跡範囲不詳、分布調査必要
8	里原	〃 〃 里原				○	○	○			○	○								○	○	昭53年水田跡、下段の範囲再調査必要
9	城原	〃 〃 城原				○					○										○	昭50年墓地公園調査
10	篝畑	〃 〃 〃				○																
11	郭	〃 〃 郭				○	●	●	○		●	○	○								●	昭52年調査、平成3年調査、縄文中期住7・同後期住7等
12	知久氏館跡	〃 〃																			●	城坂、池跡、茶室曙月庵
13	西の宮遺跡	〃 〃				○															○	
14	婦牛原	〃 〃 婦牛原				●	○	○			●											昭45年調査、縄文中・方形周溝墓 昭和52年十万山・平成8年運動公園再整理
15	城本屋	〃 〃 附標・城本屋				●	●				●				○	○	○					昭51調査、縄中住45・縄後住4・弥生住2・平安住1、土坑
16	騎馬中原	〃 〃 中原				●	○				○											平9年調査、縄文時代住15・弥生時代後期住・方形周溝墓4 中島式大形壺形土器
17	〃南原	〃 〃 南原						○			○											
18	大久保	〃 〃 大久保				○					○											大形石棒
19	寺の前	〃 〃 寺の前				○																遺物出土地不詳
20	馬場平	〃 〃 小川馬場平				●	○	○			○	●	○								○	旧中学校敷地弥生時代住 詳細調査必要
21	辭畑中	〃 〃 両平									○											狐塚上、弥生時代後期壺形土器
22	田本平	〃 〃 田本平				○					○											遺物出土地不詳
23	上耕地	〃 〃 上耕地				○					○										●	小川の湯北耳栓・平畑弥生壺形土器完形・古銭
24	小川川南	〃 〃 川南				○					○	○									○	医泉寺付近
25	さぎのす畑	〃 〃				○																
26	小川の場跡	〃 〃 上平				●					○										●	縄文中期住・松下城跡下中世陶器
27	〃 上平	〃 〃				○	○				○										○	平成4年調査、縄文中期住8・弥生後期住4・方形周溝墓1 ・中世建物址2・配石遺構1
28	さがり窯跡	〃 〃																			○	● 昭和56年調査、道路沿いに4基の窯が並ぶ。(小川焼)
29	小川上の原	〃 〃 上の原				○	○				○											遺物出土地不詳
30	松下城跡	〃 〃																				主郭・二郭・空堀・土塁・竪堀・竪土塁
31	諸原十三塚	〃 〃																			○	平成4年調査、10基の内4基破壊、5～10号墳丘現存
32	ショウバ塚	〃 〃 桃添				○																遺物出土地不詳
33	茶臼山遺跡	〃 〃				○																
34	梨の木平	〃 〃 大島									○											磨製石鏃出土
35	中 反	〃 〃 氏乗 中反				○																石鏃出土
36	氏乗城跡	〃 〃 城山																			○	主郭・二郭・土塁等
37	小川川尻跡	〃 〃 伊久間川尻				○									○							表採資料、位置不詳
38	寺下	〃 〃 伊久間													○							衣福米裏、平安坏出土(遺跡名仮称)
39	マトバ	〃 〃 マトバ				○					○											
40	伊久間原	〃 〃 伊久間原	○	●	○	●	○	○		○	●	●	○	○	○	○	○				○	昭27・29・52・53、平7・10・11調査、縄文早期住8・同中期70・ 弥生時代後期住5・古墳時代住20・平安時代住2、建物址等
41	伊久間下原	〃 〃		●	○	○	●	○		○											○	昭53、平2・8・11調査、縄文早期住5・同前期住15・同中 期住15・同後期住6・弥生時代後期5ほか

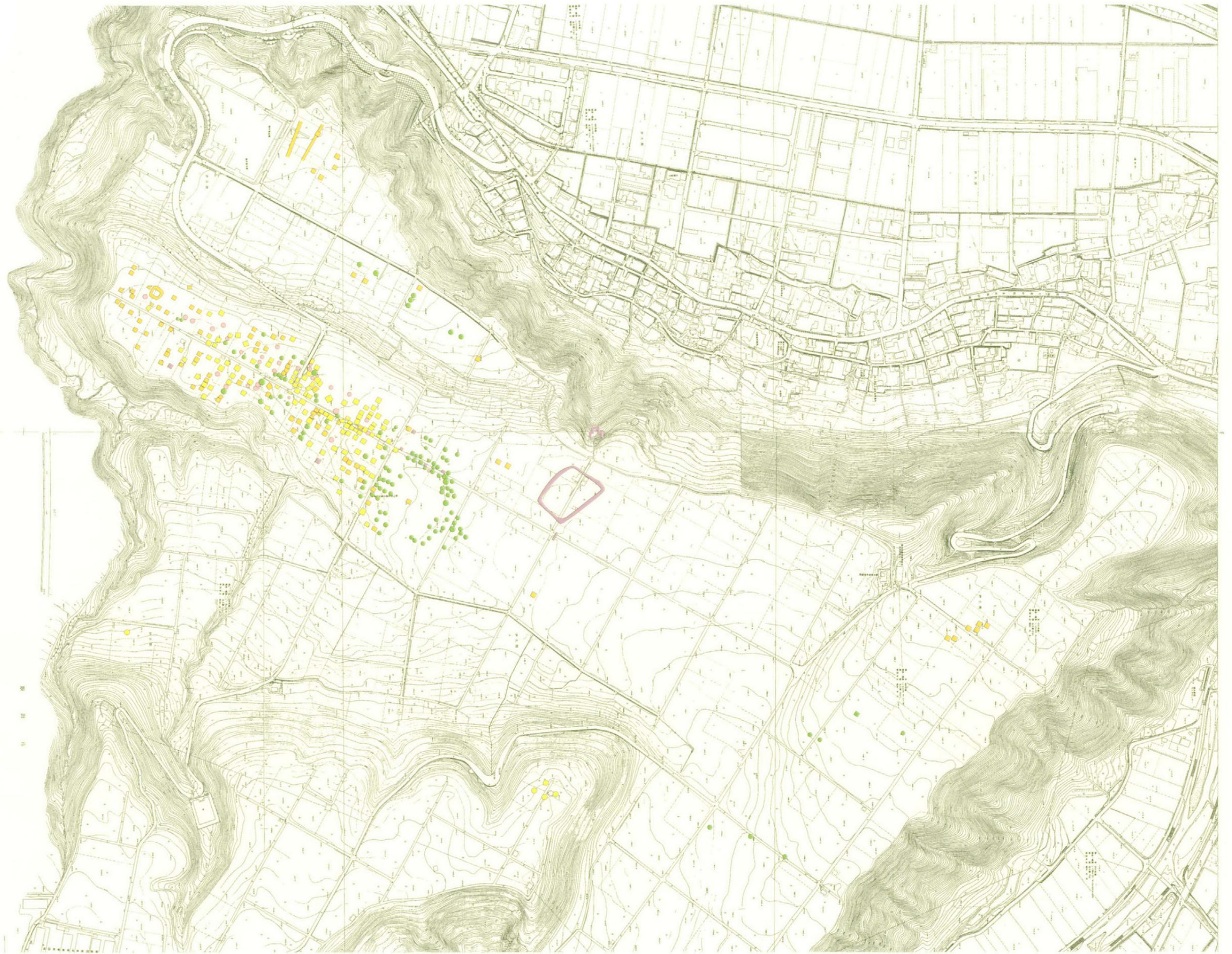
NO	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代			古墳時代		奈良	平安時代			中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考		
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土		須	石	土				須	灰
42	秋風大原 跡	伊久間大原		○	○																	
43	伊久間城跡	伊久間原																				段丘先端、郭・土塁・腰曲輪
44	秋風水防土塁	〃																				近世水防土塁、(一部城跡土塁?)
45	小平 遺跡	富田				○					○	○	○									
46	馬場平	〃				○					○	○										
47	地の神	〃				●					●	○	○			○	○	○	○			昭55年調査、縄文中期住5・弥生後期住9・古墳時代住3・平安時代住2・中世住1、建物址1
48	富田窯跡	〃 ナマス																		●		近世陶器・窯具多量出土、窯位置不詳
49	靴小靴 校庭	〃				○					○	○	○									
50	下塚 遺跡	〃				○	○				○	○										
51	市場	〃				○					○	○										
52	塩田	〃				○					○											
53	日向	〃				○																
54	上富田	〃				○																
55	富田 城跡	〃																		○		主郭以外不詳
56	広町 遺跡	大和地				○																打石器出土
57	元屋敷	〃				○																〃

喬木村古墳一覽

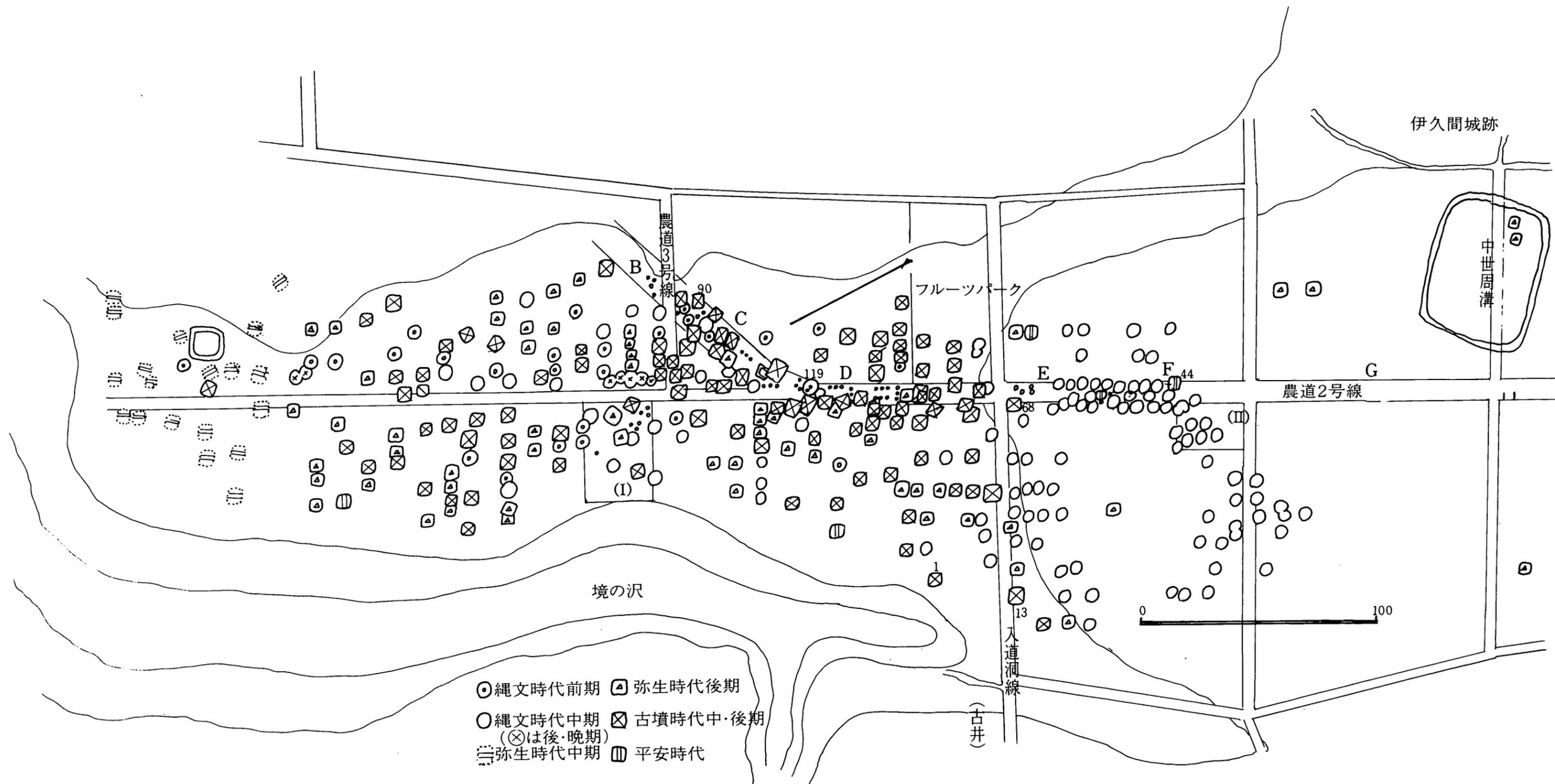
NO	村	番	古墳名	所在地	立地	墳丘現存	石室現存	遺構・遺物	備考
1	102		町古墳	阿島町	低位段丘	円・煙滅	大石発見	須恵器	昭和 年新発見
2	8	3390	町弁天	町花立 1009	断崖下	円・		土師器・須恵器	
3	9	3391	杉立	南杉立 1835	〃	円・○		不詳	石造物あり
4	16	3386	宮沢	北宮沢 3907	〃 中腹	円・○			
5	17	3385	熊野	〃 熊野3921	〃	円・○		直刀1・土師器・須恵器	
6	22	3364	城原1号	城原4241	中位段丘	円・煙滅		直刀・槍先・土師器	
7	21		城原2号	〃 3907	〃	円・○		直刀1・土師器	昭和45年発掘調査
8	23	3368	郭1号	阿島郭 3258	低位段丘	断円・○	横穴石室	出土遺物不詳	竜東地区唯一前方後円墳
9	24	3369	〃 2号	〃 〃 3258	〃	円・煙滅		形象・円筒埴輪、直刀・刀子・金環・鉄鏃・鏡板・絞具・雲珠・杏葉・土師器・須恵器	旧学校校庭西隅
10	30	3370	〃 3号	〃 〃 3601-1	〃	円・○			
11	31	3371	〃 4号	〃 〃 3611	〃	円・煙滅			
12	103		〃 5号	〃 〃	中腹	円・煙滅		朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・須恵器	村道改修中発見
13	35	3387	中原1号	唐原中原3144	中腹	円・煙滅		直刀、須恵器	
14	36	3388	〃 2号	〃 3148	〃	円・○		円筒埴輪・直刀・刀子・須恵器	別名藤塚
15	40	3377	大久保1号	〃 大久保2953	低位段丘	円・煙滅		須恵器	
16	41	3378	〃 2号	〃 〃 2953	〃	円・煙滅			
17	37	3389	狐塚	唐沢 1679-4	〃	円・煙滅			
18	10	3381	里原1号	阿島里原1226	低位段丘	円・	横穴	仿製四神四獣鏡・直刀・砥石・管玉・トンボ玉・須恵器	
19	11	3382	〃 2号	〃 1226	〃	円・○			
20	12	3383	〃 3号	〃 1469-1	〃	円・煙滅		円筒埴輪・直刀	
21	13	3384	〃 4号	〃 1469-1	〃	円・煙滅		形象埴輪・土師器・須恵器	
22	14	3400	山伏塚	馬場平5846	〃	円・煙滅		土師器	

喬木村古墳一覽

NO	村	番	古墳名	所在地	立地	墳丘現存	石室現存	遺構・遺物	備考
23	15	3401	宮の前 //	// 5825-2	//	円	横		
24	50	3402	小仏林 //	両 平5941-2	//	円 ○		剣・刀子・土師器	
25	51	3403	家の上 //	// 6086	//	円・煙滅			
26	52	3404	正覚塚 //	上平 7651	上位段丘	円 ○		土師器	
27	53	3405	塚脇 1号//	川南 7278-2	下位段丘	円 ○		土師器片 石室露出	
28			// 2号//	// 7278	//	円 ○		土師器片	
29	99	3397	七人塚 //	サギノス7374	中位段丘	円			
30	79	3406	藤 塚 //	大原 7584	上位段丘	円 ○			
31	76	3415	奴 山1号//	大原 17302-2	//	円 ○		土師器・須恵器片	
32	//	3416	// 2号//	// 17326	//	円 ○		土師器片	
33	//	3417	// 3号//	// 17326	//	円 ○			
34	//	3418	// 4号//	// 17326	//	円 ○		直刀・鉄鏃	
35	//	3419	// 5号//	// 17326	//	円 ○			
36	//	3420	// 6号//	// 17326	//	円 ○			
37	77	3421	赤 坂 //	伊久間原16988	中位段丘	円 煙滅		管玉	
38	59		洞 坂 //	伊久間	下位段丘	円 煙滅		直刀・碗形・高坏形	昭和28 新発見
39	60	3422	狐 島 //	// 16593	//	円 ○			
40	61	3423	井ノ上 //	// 16473	//	円 ○		甲・鉄鏃・轡・金環・切子玉	
41	62	3413	城の上 //	// 16807	上位段丘	円 ○			
42	67	3424	船渡上 //	// 16144-1	下位段丘	円 煙滅		土師器片	
43	82	3439	丸 山 //	富田 12878	上位段丘	円 煙滅		直刀	
44	83	3430	小平 1号//	// 12949	//	円 ○			
45	84	3431	小 平2号//	富田 12949	上位段丘	円 ○		直刀・轡・土師器	
46	85	3432	// 3号//	// //	//	円 ○		土師器	
47	87	3428	馬 場 //	// 13131	//	円 ○		直刀・土師器・須恵器	
48	89	3426	地の神 //	// 12315	//	円 ○		鉄鏃・土師器・須恵器	
49	94	3436	市 場 //	// 13673	//	円 ○		土師器・須恵器	
50	105		七人塚 //	大和地	//	円			
51	106		山伏塚 //	//	//	円			
52	45		加々須経塚	加々須	山腹	円			



第2図 伊久間原地形図・住居址配置図



第3図 伊久間遺跡中心部の住居址配置図

(2) 伊久間原の遺跡群

大正13年に発刊された「下伊那の先史及原始時代」の図版には、喬木村では城原・城本屋・郭・馬場平・伊久間原・富田丸山遺跡の遺物が20数点掲載されているが、伊久間原遺跡のものは石鏃1点に留まっているのは予想外なことである。戦前から戦後にかけて伊久間原遺物の表面採集に訪れる人は非常に多く、下伊那各地へ遺物が運ばれている。後述の1号住居址発見の動機になったのも表面採集であった。そのころは、伊久間原へ行けば土器や石器は20・30拾うことは容易なことで、1時間に石鏃を100個拾った記録さえ残されている。

① 住居址の広がり

昭和27年の発掘調査によって1号住居址が検出されてから、平成7年の「縄文の丘フルーツパーク」の発掘調査までに、33軒の住居址が検出されていることは経過で触れた通りである。これ等の発掘調査によって、それぞれ大きな成果が上がっていることは言うまでもないが、伊久間原遺跡の遺跡様相を知る重要な資料は、昭和52年に行われた、畑灌水整備事業の基づく伊久間原全域わたる立入り調査の結果である。この記録によると、2図にあるように推定される住居址345軒が、時期別に記録されている。(報告文によると342軒であるが、表でみると345軒である。これを境の沢支流東側(A地域)・奴山下北東部(B地域)・ハマイバ地籍(C地域)・下原(D地域)・伊久間原(E地域)に分けるとAは1軒と古墳、Bは5軒、Cは9軒、Dは16軒、E地域は314軒で、伊久間原が断然多いことが分かる。伊久間原遺跡(E)の時期別住居址数は、縄文時代早期末21軒、同前期2軒、同中期中葉27軒、同中期末葉77軒、同後・晩期22軒、弥生時代中期24軒、同後期68軒、古墳時代中期11軒、同後期68軒、平安時代4軒、中世2軒となる。(早期末と記録されてるものは、今回の調査報告では縄文時代前期に扱っている)数が多いということもさることながら、縄文時代早期の土坑も発見されているので、縄文時代早期から、平安時代・中世に至るまで、途切れることなくこの台地で集落が形成されていたことである。集落形成の場所の概要をみると、台地の中央部から南側にかける台地の南側500mほどの範囲に集中している。この500mほどの範囲を、北から1・2・3・4に4分割すると、縄文時代早期・前期は2・3の150mほどの範囲、縄文時代中期は1・2・3の300m以上の範囲、縄文時代後・晩期は3の範囲、弥生時代中期は最南端の4の範囲、弥生時代後期は2・3の200mほどの範囲に集中するが、中央部から北側にも散在している。古墳時代中期は3の100mほどの範囲、古墳時代後期は2・3の入道洞線周辺から、南側300mほどの範囲、平安時代は1の範囲に集落が構成されている。この傾向は今回の調査結果でも実証されているように思われる。それぞれの時期の集落立地の条件を探る最適の遺跡のように思われる。

② 中世以降の伊久間原

伊久間原遺跡は、今まで平安時代の遺構・遺物は殆どないと思われていたが、昭和52年の立入調査、今回の発掘調査を含めて、平安時代の住居址が5軒検出され、工房址・土坑群も検出されている。中世期を含めて、伊久間原・下段の伊久間地籍の集落変遷にかかわる重要な調査結果になっている。

中世期の遺物は何か所かで確認されているが、比較的多く採集される場所は台地の中央付近である。中央部西側台地端に、広さ50～60mの平場と崖部に帯曲輪状の平坦部がある。林氏が居城したと伝えられる伊久間城跡があり、そこから東南50mほど隔てたところに、60m×50mほどの方形周溝が立入り調査により確認されている。そこから東側で道路を横切るように、中世末の陶器片を伴出する箱堀状の溝址が検出されている。方形周溝と堀状溝址のつながりは不詳であるが、角円・ハマイバ・狐島・経塚原・立林・城ノ上・構ノ内・鳥ノ辻・中ノ堤・孤立・堀垣外・赤坂等の地字と共に解明したい地域の一つでもある。

伊久間城跡の平場から北へ向かって、堤底7～8m・高さ1.5mほどの土堤が350mほど残されている。「伊久間原水防土堤」である。以前には北はハマイバ地籍の大那木から伊久間原・下原の台地端を取り巻くように構築されていたといわれる。構築年代は不詳であるが、延長1737mに及び、城坂頭は二重であったと言われている。一説によると、「長作堤」とも言われ、桐生氏の祖である桐生長作の肝いりで、法運寺や下の集落の安全を守るために構築したと言われている。寛永16年（1639）の小川湯沢家の文書に、「伊久間との川せき、原水除どいの論争」にかかわる願書の写しがあって、伊久間原の水防土堤にかかわるものかとも言われている。残されている土堤は保存状態の好いもので、歴史遺産として保存すると共に、構築の形跡を確かめたい遺構の一つである。

伊久間吉沢家所蔵の慶長14年（1609）の「伊久間郷御検地帳」畑方によると、原分の畑が400筆ほど記録されている。これらが全部伊久間原かどうか不詳であるが、伊久間原は城跡が構築された頃は、居館址が原にあったか、下段にあったか興味深い課題も残されているが、江戸時代初期以前から開発が進んでいたと考えられる。

上段地域の大原地籍は、飯田市下久堅分を含めると広大な台地である。水利には恵まれないところであるために、伊久間原ほどの遺物は採集されないが、飯田市分の広域営農団地農道用地内の発掘調査により、縄文時代早期の住居址・集石炉が検出され、時代は江戸時代後期であるが、富田焼の陶器窯跡が検出されている。喬木村分の台地奥には、藤塚古墳が現存している。位置・形態的に中世期の信仰塚説もある。この大原台地を侵食して流れる境の沢が西流し、その東側には段丘崖下入道洞から湧出する水の流れが現在なお並行して流れている。この入道洞の湧水・段丘崖下の湧水利用の話が残されている。伊久間原遺跡の立地上極めて重要な資料と思われるので、故田中豊春先生の論文を掲載させて頂くことにする。

伊久間原水利の今昔

田中豊春

昭和27年伊久間原堀垣外第1号古代住居址（土師式）が発見された。翌年続いて縄文土師式の第2址以下11個の住居址が発見されたが、住居と水利の關係に就いて、当時の模様と、現在の情況から推定するのも、あながち無意味ではあるまい。

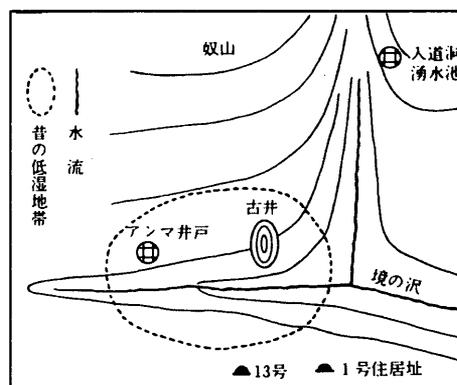
以下その大要を述べることとする。

(1) 古代には奴山付近一帯は大森林で、所々に地下水の湧出が見られたであろう。特に第1址の北東約百米の地点に現存する「あんま井戸」は、今尚少量ながら絶えず湧水があり、更に同地籍の東南方に当たる奴山の中腹（入道洞）からも今日尚湧水地帯が残るのを見ても、往時はこれに優る相当多量の水が出て、此の地に住む人の飲用及び水稻栽培にも利用されたと考えられる。

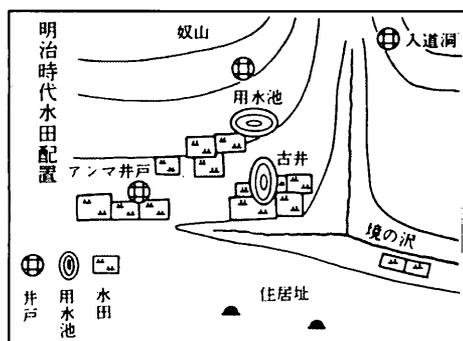
(2) 右住居址の東方数米にある俗称「沢」と呼ばれる谷（境の沢による侵食）には、現在尚小水流が絶えず流れており、点々として小さな水田が数枚散在している。この谷川の水は入道洞から流れ込むものと、「あんま井戸」及び付近からの湧水を集めている。更に茲に考えられることは、この谷の侵蝕が現在ほど先端が北へ伸びて居らず、入道洞から流れ込む線から北は、まだ谷とならず一帯の低湿地であったのではなかろうか。（A図参照）

(3) 古代から明治時代に至る伊久間原の様相は之を克明に知る由もないが、森林の減少に伴って湧水量も減じ、加うるに沢の北端の侵蝕も深くなって、水田も減少の一途を辿ったであろう。

然るに明治の初葉、前記のあんま井戸を中心として館林（立林ともかく）一帯の湧水を利用して、水田経営が試みられた。発起者は横前喜十郎氏で（昭和11年3月没）現主横前茂喜氏の祖父に当たる。更にB図に示す如く約5畝歩の用水池が設けられて水田の灌漑を



A図 伊久間原湧水地域図



B図 伊久間原溜池と水田図

補っていたが、大正の初、遂に旱魃に打ちかつことが出来なくなったので、水田は畑地に還元され、大正中期には用水池も埋められてしまった。

（附昭和27年頃には、古井は2坪ほどの広さがあり、水稻が植えられて、その西側には水田区画の畦畔が数枚残されていた）

一方、沢の水田も昨今は漸次数を減じつつあるが、下流には尚1畝足らずの小さな水田が幾つか残されて名残りをとどめている。

(4) 大原へ引水計画の話

伊久間原古代住居址とは無関係ではあるが、次に述べようとする引水計画は、「伊久間原水利の今昔」余談として附記しておきたい。

前述の如く伊久間原の広大な地籍が、自然湧水だけでは甚だ貧弱であった為、明治初年富田区の桐生半七氏（現主伊那之助氏の祖父）によって喬木村氏乗から伊久間大原まで小川川の水を引いて大原の水田化が計画された。

該計画は氏乗区中辺に小川川の取入口を設けて、大和地を経て富田の間洞（桐生氏上）の山頂を迂回して、大原まで延々たる長水路を開くもので、当時の技術からしても、かなり困難な大事業であった。

桐生氏は殆ど独力を以て之が実施に着手し、富田大原間の水路を開鑿して、トンネルも作りはじめた。（この溝渠の痕跡は最近まで残っていたとのことである）然るに大原へ水が来ると土地が弛んで山崩れの危険があるとの理由で、下の段にある伊久間部落から反対され、小川区からも、小川川の水を上流の氏乗から取られては困ると云って反対されたので、遂にこの雄大な計画はむなしく途中で挫折して成功に至らなかった。桐生氏はこの為に多くの資産を傾け尽くしてしまったと云う。

本事業が成功していたら、今日の伊久間原の耕地の様相は一変していたかも知れない。

(5) 考 察

天竜川による河成段丘は竜東にも竜西も美しい姿を止め、下伊那地方の一大景観をなしているが、中でも喬木村を中心にした竜東の段丘は他に類例のない美観を呈している。伊久間原段丘をはじめ、南原（埴牛原）・城原等の段丘は喬木村の古代文化を語る上に於ても先ず取上げなければならない。この天竜川河成段丘に展開する古代の文化は古くから考古学徒の注目を厚め、研究の対称となっていた。喬木村の文化の黎明はこの美しい段丘によって展開されたと云っても過言ではないと思う。

即ち北より城原・埴牛原・南原・上平・伊久間原などの段丘上の遺跡、段丘崖のもとにある郭・馬場平・上耕地の等は豊富な遺物（石器や土器片）の散列によって、原始時代に於ける一大文化地帯であったと想像される。勿論現在に於てはその研究が微々たるものに過ぎないので、結論的な事を述べる段階ではないから、今迄の調査の結果についての考察をして見よう。

伊久間原遺跡の他は、遺物の表面採集（土地の表面にある石器・土器を拾い集めること）のみに依る調査であるので、通り一ぺんの事しか書けないが、喬木村における古代文化は縄文前期（約5000年前）が最も古く馬場平に分布し、縄文中期（約3000～4000年前）になると分布状態も広くなり、遺物の量も非常に多く見受けられ、郭の小学校附近、馬場平の中学校附近、上平の的場・柳の耕地、伊久間原等である。伊久間原の縄文時代の分布状態については尚疑問が多々あるのであるが、今日迄の調査に依ると、鳥の辻・立林・方眼に至る広範囲に分布しているものと思う。

縄文後期から弥生時代のものについてははっきりしないが、五反田は大沢和夫氏に依って調査研究された阿島式土器の出土地として注目すべき遺跡である。

土師式時代になると村内の各所に古墳が見られる如く古墳と併行する時代であるので、相当の分布状態があったと想像される。この様な微々たる調査の中にも幸い伊久間原に住居址群の発見を見ることが出来たので伊久間原の遺跡の考察をもう少し詳しくやってみよう。

前述の如く伊久間原は縄文時代より土師時代に互る複合遺跡というわけであるが、縄文時代のものは大部分が中期のもので、後期・晩期の遺物は発見するに至っていない。弥生時代の遺物も出土しな

いわけではないが、その分布は非常に少ない。土師時代に至ると又一大文化が展開しているのである。この事実は調査の半ばであるので断定する資料を何ももち合わせないので結論的に申すわけにはいかないが、二つの仮説が考えられる。水田耕作を生業とする弥生の頃になると、生活を営む場所としては不適として他に住居を移したのではないかとと思われる。若し移住したものと思えば一段下の地、即ち現在の伊久間部落、段丘崖もとの沼地でなかろうかと、然し現在に至るも遺物が発見されていないので何とも言われない。

もう一つの説は、文化の伝播が遅れたために縄文時代が比較的長く続き、弥生式文化が入ると間もなく土師の文化が入ってきたため弥生式時代が比較的短くして終わったものではないかと考えられる。然し近くの五反田遺跡には弥生式の前期・中期・後期の遺物が出土している点から推して否定され易い。これらの事柄は今後の伊久間原研究の大きな課題のように思われる。

次に考えて見たいのは、伊久間原に於ける集落の位置とその戸数であるが、先ず位置としては前に述べた如く殆ど全地域に展開しているが、その分布状態から推して堀垣外を中心にした地域ではないかと思われる。堀垣外は伊久間原の中でも肥沃な土地であり、前述の水利から推しても湧水地帯附近に営んだものと思われる。これを時代別に推して見る事にしよう。縄文時代に於ける集落は堀垣外から孤立にかけての段丘の突端に近い附近であり、弥生・土師時代に至ると同じ伊久間原でも堀垣外の境沢川にかけた附近へ居を移したものでなかろうか。特に弥生・土師時代に於ける水田耕作の場所が問題になり易い。入道洞の湧水、古井附近の湧水、あんま井附近の湧水は古代に於いては森林地帯と境の沢の侵蝕の問題を考慮に入れてもやはり生活維持の為の水利としては貧弱の感なきにしもあらずである。水利の面から考えて見ると伊久間原の集落の規模は余り大きくないとも思われるし、あの広大であり、日当たりのよい土地から考えると相当大きな集落としての条件を備えているわけである。また、遺物の分布状態から推して相当大規模な集落が存在したであろう事は想像に難くない。従って水便のやや貧弱さは土地の広大さに押されて住居地として決定され、長い間古代文化が栄えたのであろう。

これに関連して次に考えられる事は生計の問題である。同年代に生活を営んだ戸数は計り難いことであるが、多くても2・30戸ではなかろうか。仮に20戸と考えて見ても、狩りと水田耕作のみでは生計を営むには余程の難点があるに違いない。特に縄文時代に於ける狩りのみの生活では尚更の事である。移住説も考えられないわけではないが、弥生・土師時代には定住と考えられる。従って畑作も相当営んだのではないかと想像されるのである。これらの問題も今後課せられた大きな研究課題と思われる。

以上の考察は微力の致す所と、浅薄な研究の為実証する資料も持ち合わせずして、単なる想像論に過ぎないので、今後の研究で究明致したいと思う。

おわりに

伊久間原遺跡の調査は伊久間原農道工事の依って機会が与えられたものであるが、この調査を進めるにあたって、伊久間区の方々の大きな御援助を戴いた事を感謝致します。大原農道委員長をはじめ農道委員の方々の御理解、農道工事に従事中の区の方々の御協力に依ってこの一冊が出来上がった事を嬉しく思います。

これらの遺跡・遺物は、空白なる古代庶民史の研究のための唯一の資料であり、郡誌・村史編纂のためにも貴重な資料であるわけです。正に埋もれた珍宝というものでしょう。村史編纂の声も昂まりつつある現在、これらの資料が古代史の究明に使われるであろう事を念願すると共に、更に喬木村の黎明を知る上には、今後出土する遺物の重要性を理解され、保存することを切望致します。

(1953、12、25)

この文は、1953年（昭和28年）喬木村公民館・喬木史談会によって発刊された「伊久間原古代住居址」の末尾に所載された田中豊春先生の「伊久間原水利の今昔」の論文であり、編集後記は平沢清人先生の手稿である。

伊久間原の水利の問題は、遺跡の調査が進めば進むほど、遺跡立地の課題を解決するためには根幹となることである。さらに、昭和52年の畑灌水パイプ敷設工事に先立つ立入り調査による時期毎の住居址の分布状況・古くは縄文時代前期初頭、同中期中葉・後葉の住居址、縄文時代後期・晩期の遺物集中、弥生時代中期・後期の住居址の集中、古墳時代中期・後期の集落の存在等々の検証は、他の段丘上では未確認の貴重な調査結果となっている。

平成9・10・11年の発掘調査により、各時代の住居址の集中か所が実証され、縄文時代早期の遺構集中地、縄文時代前期の集落の構成位置が確かめられつつある。縄文時代中期の頃でも、中期中葉の集落の移動があるように思われ、中期後葉では環状的に並ぶ大きな集落が2か所にあることが実証されている。縄文時代後期・晩期の遺構確認はなかったが、昭和52年の調査結果・下原地籍の試掘調査の結果から相当な集落の存在が予想される。弥生時代のことも同様で、今回の調査では4軒の住居址の検出に留まっているが、先の立入り調査では、境の沢寄りの地域と南側一帯に集中地が予想される。古墳時代になると、32軒の住居址が検出され、時期差があると思われるが3時期くらいの重複とすれば、同時期のものは10軒以上あると予想される。道路用地外にも多くの住居址があるから、少なくとも30軒ほどの住居址が、幾つかのグループを構成しながら生活していたように思われる。しかも、集中する地域がフルーツパークから南側、境の沢寄りに集中し、縄文時代・弥生時代の集落構成範囲に比べると、範囲が狭められているように思われる。

こうなると、平安時代の遺構も発見されているので、9000年ほど前の縄文時代早期から1500年ほど前の古墳時代後期までの長い間、この伊久間原の台地が使われ、しかも、台地の中央から南側にかけて所を少しづつ替えながら、重複した集落が存在していることになる。だとすると、境の沢周辺の低湿地帯が大きな鍵を握ることになり、地形条件だけでなく生産地帯と墓域の在り方が大きな課題として浮かび上がることになる。(今村)

地形地質から見た伊久間原の自然環境

1. 伊那谷を代表する段丘の伊久間原

伊久間原は喬木村の南端にある大規模な段丘で、地形の方では“伊久間段丘”とか“伊久間面”と呼ばれている。一般に“竜東段丘”の顔であり、伊那谷の段丘地形の模式地になっている。対岸の飯田市側の高台から展望すると、伊久間原、その上に大原と机山が重なり、板で均したような雛壇が印象的である。

伊久間原は天竜川に面した喬木村伊久間から高さ80mの段丘崖を上り詰めたところに広がっている。伊久間原の北端に481.7mの三角点があり、今回地質調査を実施した中原には488mの標高点がある。これに対して伊久間集落の県道伊那生田飯田線（竜東線）にある水準点は400.8mである。伊久間の岸を洗う天竜川は竜東線より10m弱低いところを流れているから、伊久間原は天竜川の水面から100mの高度差で屹立している。こうした地の利を生かした場所にフルーツパーク公園がある。縄文人が伊久間原の台上に大集落を形成していた要因の一つとして、竜西一円を一望できる立地条件があったと想像できる（図1・2、写1）。



図1 調査地の位置



写1 天竜川阿島橋から見た伊久間原

・送電線鉄塔が2本見えるところが大原、その左側のカマボコ形の丘が机山

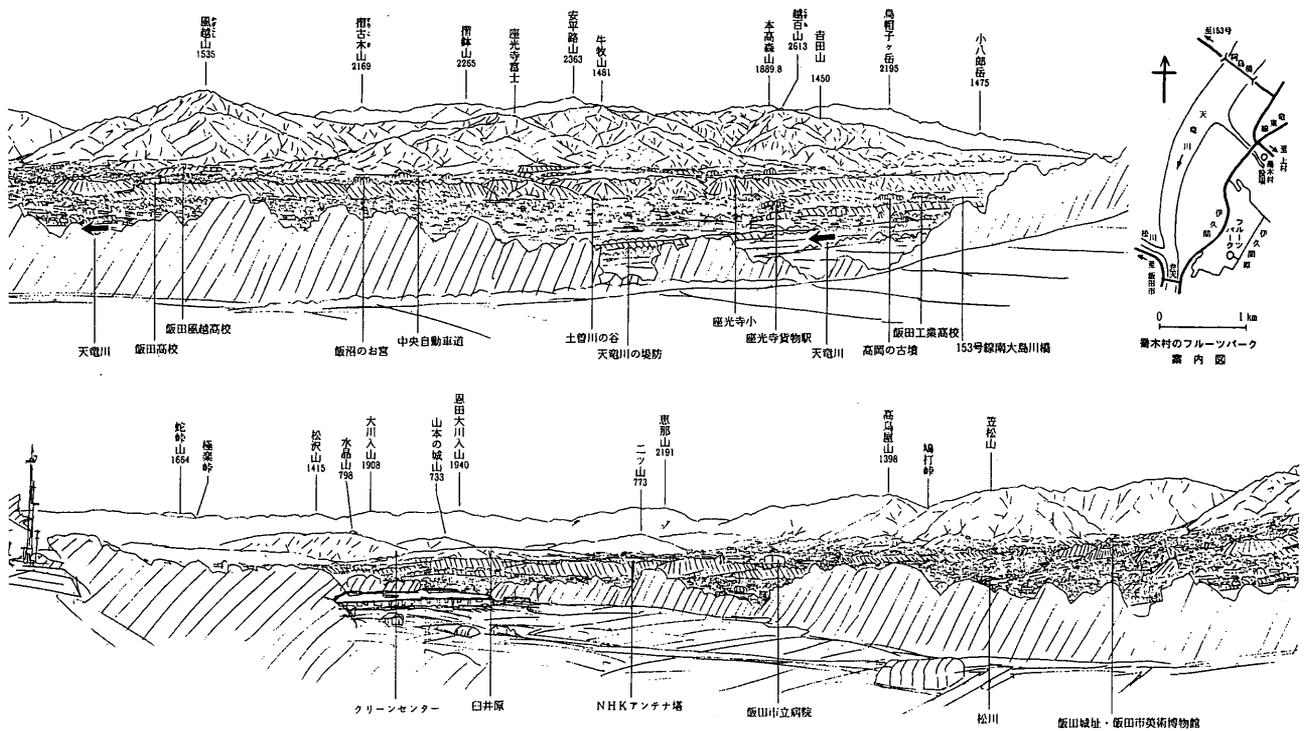


図2 調査地にあるフルーツパーク公園よりの展望 (松島.1996)

2. 伊久間原の中原で表層地質を調べる

フルーツパークに隣接した中原の標高488m地点で表層地質の調査を実施した。調査には深さ5mのトレンチを掘削して壁面に現れた地層の観察からはじめた。トレンチ壁面の写真(図4)と、壁面からの分析試料22個の採取地点を図3に示す。試料採取は20cmごとにおこなった。

壁面に現れた地層を見かけから12層に分割した。地層の色・風化の度合い・テフラの混入状態・粘土・砂・岩片・礫(大きさ礫種)などから分けた。以下は12層の説明である(図3・4、表1・2)。

表1 喬木村伊久間中原トレンチT1 砂粒分析結果

試料 No.	採集地点	産状	結晶 (%)	ガラス (%)	岩片 (%)	岩片 (%)	重鉱物斑晶	その他の鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0~20cm	黒土	40	2	0	58	mt,opx,cpx,ho	fl,qt,bi,ga	bw,br-gl	風化岩片>御岳テフラ>K-Ah,AT
2	20~40cm	黒褐色土	40	2	0	58	mt,opx,cpx,ho	fl,qt,bi	bw	風化岩片>御岳テフラ>AT
3	40~60cm	黄褐色土	70	3	0	27	mt,opx,cpx,ho	fl,qt	bw	風化岩片>御岳テフラ>AT
4	60~80cm	黄褐色土	50	1	0	49	mt,opx,ho	fl,qt	bw	風化岩片>御岳テフラ>AT
5	80~100cm	褐色土(やや砂質)	30	1	0	69	mt,opx,ho	fl,qt,bi	bw	風化岩片>御岳テフラ
6	100~120cm	褐色土(やや砂質)	25	0	0	75	mt,opx,ho	fl,qt,bi		風化岩片>御岳テフラ
7	120~140cm	黄褐色土(やや砂質)	25	0	0	75	mt,opx,ho	fl,qt,bi,ga		風化岩片>御岳テフラ
8	140~160cm	黄褐色土(やや砂質)	25	0	0	75	mt,opx,ho	fl,qt,bi		風化岩片>御岳テフラ
9	160~180cm	黄褐色土、硬質	40	0	0	60	mt,ho,opx	fl,qt,bi		風化岩片>御岳テフラ
10	180~200cm	黄褐色土、硬質	40	0	0	60	mt,ho,opx	fl,qt,bi		風化岩片>御岳テフラ
11	200~220cm	黄褐色土、やや硬質	20	0	0	80	mt,opx,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
12	220~240cm	黄褐色土、やや硬質	30	0	0	70	mt,opx,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
13	240~260cm	黄褐色土	20	1	0	79	mt,ho	fl,qt,bi,ho	pm(fb>spo)	風化岩片>御岳テフラ>御岳第1テフラ
14	260~280cm	黄褐色土	15	0	0	85	mt,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
15	280~300cm	黄褐色土	15	0	0	85	mt,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
16	300~320cm	黄褐色土、砂混じり	10	0	0	90	mt,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
17	320~340cm	黄褐色土、砂混じり	5	0	0	95	mt,ho	fl,qt,bi,ho		風化岩片>御岳テフラ
18	340~360cm	黄褐色土、砂混じり	0	0	0	100		fl,qt,bi,ho,mu		風化岩片
19	360~380cm	灰褐色砂	0	0	0	100		fl,qt,bi,ho		風化岩片
20	380~400cm	灰褐色砂	0	0	0	100		fl,qt,bi,ho		風化岩片
21	400~420cm	灰褐色砂	0	0	0	100		fl,qt,bi,ho		風化岩片
22	420~440cm	黄褐色砂	0	0	0	100		fl,qt,bi,ho		風化岩片

凡例

重鉱物斑晶 opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, mt:磁鉄鉱, ho:角閃石, ol:かんらん石

その他の鉱物・岩片等 bi:黒雲母, fl:長石, qt:石英, ga:ざくろ石, mu:白雲母

火山ガラスの形態他 bw:泡壁型, pm:軽石型(fb:ファイバー型, spo:スポンジ型), br-gl:褐色ガラス

○—遺物遺構包含層— 0~80cm

最上部80cmは多様な考古試料を包含する。これを3層に分ける。最上部の0-20cmが黒土で40%の火山結晶を含み少量の火山ガラスも混入する。鏡下では鬼界アカホヤ火山灰（以下K-Ahと記す）と始良Tn火山灰（以下ATと記す）である。K-Ahの噴出暦年代は約7000千年前である。鏡下では特有な淡褐色を呈するからそれとわかる。しかし、無色のガラスも含まれるためこれの屈折率を測定した（表2）。

表2 喬木村伊久間中原トレンチT1砂粒分析結果

名称	層準	屈折率範囲	屈折率平均	同定
伊久間1	10~20cm	1.4988~1.5004	1.4995	始良Tnテフラ(AT)
伊久間2	40~60cm	1.4988~1.5006	1.4998	始良Tnテフラ(AT)
伊久間3	160~180cm	1.5001~1.5034	1.5014	御岳第1テフラ(On-Pm1)

測定機器 東京都立大学 温度変化型屈折率測定装置
測定者 東京都立大学理学部 田村糸子

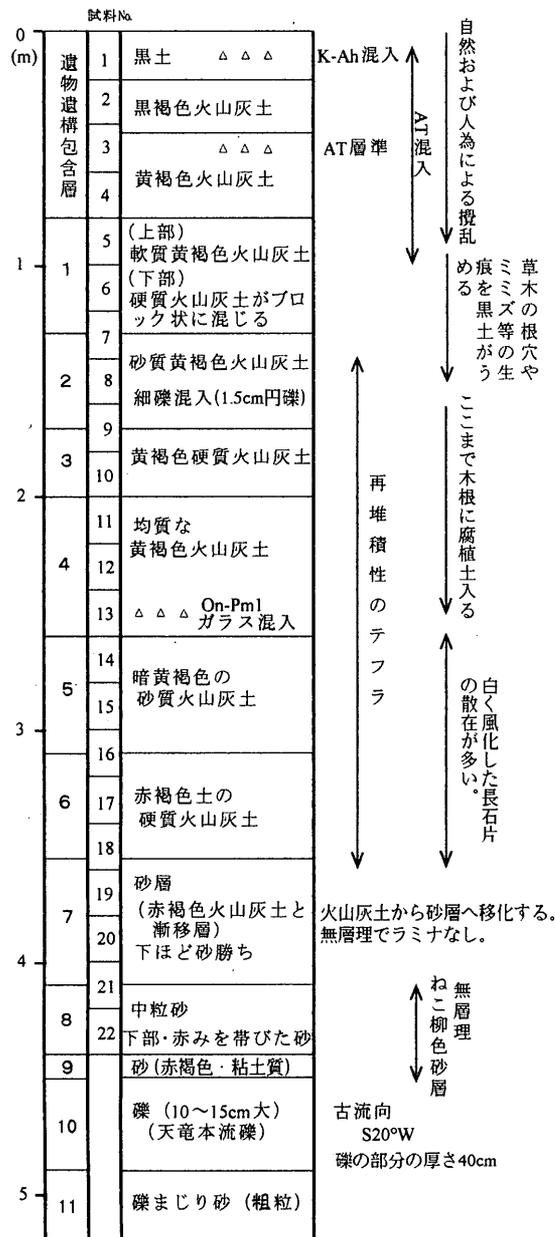


図3 伊久間原 トレンチ柱状図

その結果、AT（噴出年代は2万5千年前）も含まれていることがわかった。大きく年代の違うテフラが含まれることから自然および人為による攪乱層であることがわかる。

20cm~45cmは黒褐色火山灰土である。火山結晶と火山ガラスの割合は0~20cmまでの黒土と同じである。ただし、火山ガラスに淡褐色のK-Ahは含まれていない。だから、K-Ahが混入するのは20cmまでの黒土に限られる。

45cm~80cmは黄褐色火山灰土である。見かけはいわゆる“赤土”である。とくに40cm~60cmでは火山結晶が70%に達する。これらの火山結晶は御嶽山起源の鉱物で斜方輝石・単斜輝石・角閃石・磁鉄鉱である。調査地点において全層の火山結晶も同じく御嶽山起源である。ATは40cm~60cmに多く混じるのでこの層位がATの降下層準に当たる。このATも屈折率を測定して確認した（表2）。同時にAT前後で御嶽山の活発な噴火活動が終息することにもなる。ATは100cmの層位まで認められる。約1mの地層の厚さで攪乱が認められる。ミミズなどによる攪乱もあるだろうが、最終氷期における温度低下での攪乱が大きいと考える。

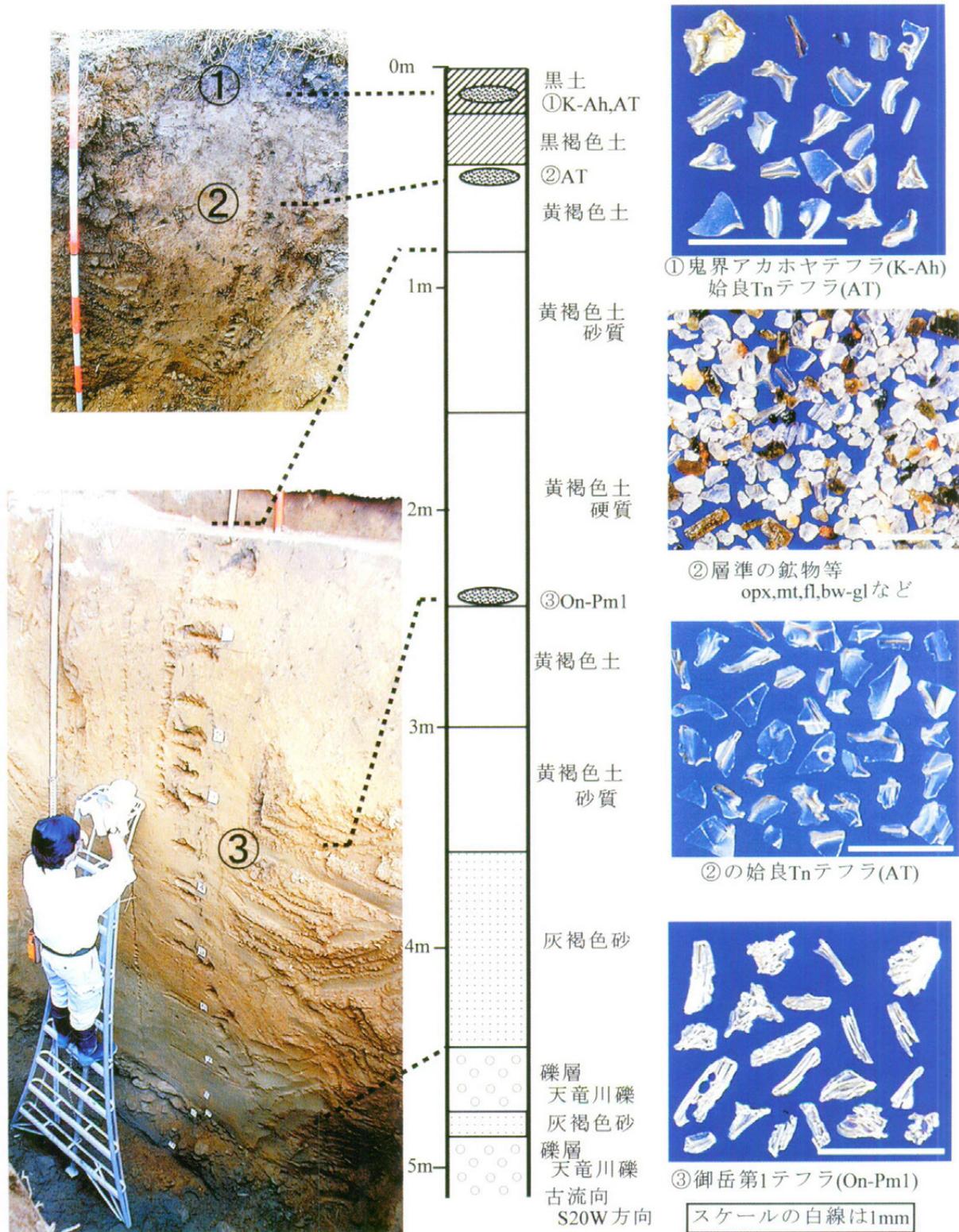


図4 T1トレンチ調査と火山ガラスの顕微鏡写真

○1層－軟質黄褐色火山灰土（上部）同硬質火山灰土混じり（下部）－ 80cm～130cm

本層は見かけは火山灰土であるが表1に見るように風化岩片が75%を占めていて全体に砂質である。風成層であるから風化岩片が多量に混じる堆積環境であったと考える。これは寒冷気候下での風成層であることを示唆している。上部はねじり鎌で削った感触が軟質であり、いわゆるソフトロームに似ている。下部は硬質のテフラがブロック状に混じる。また、1層を含めて150cmまでには草木の根穴やミミズ等の生痕があり、中を黒土が充填している。

○2層－含細礫砂質黄褐色火山灰土－ 130cm～170cm

砂質になり稀に細礫を混入する。2層から下は再堆積性のテフラないし砂質粘土層である。礫は表層の水の流れによるか転落してきたものであろう。

○3層－砂質黄褐色硬質火山灰土－ 170cm～200cm

風化岩片75%を含む砂質の黄褐色土層である。色や感触から火山灰土とした。2層と同じ再堆積の地層である。

○4層－均質な黄褐色火山灰土－ 200cm～260cm

この部分は伊久間面の離水期を決める上で最重要である。試料13から御嶽第1テフラ起源の火山ガラスが検出されている。ガラスの形態は軽石型でその屈折率は1.5014（表2）を示す。ここで御嶽第1テフラを包含する地層が再堆積性であることから、御嶽第1テフラを示す火山ガラスが風送風成によるものかどうかである。現場でスケッチと試料を採取する時点ではこの火山ガラスを識別できなく、鏡下での観察で確認できた。だから基質の風化岩片と同様に再堆積性であろう。しかし、磨耗していないガラスの形態から見て遠くからの移動ではない。たぶん御嶽第1テフラの降下期に488m標高点を含む伊久間原の一部は時々離水していたと考える。

○5層－暗黄褐色の砂質火山灰土－ 260cm～310cm

この部分は風化岩片が85%を占め、見かけは火山灰土でも実態は砂層である。

○6層－赤褐色の硬質火山灰土－ 310cm～355cm

本層は下位の砂層に漸移する部分で見かけが火山灰土に見えるものの実態は砂層である。340cm付近で御嶽山起源の火山岩片の含有はゼロになる。赤褐色を呈するのは風化によるかもしれない。2層から本6層までが再堆積性のテフラ質の地層である。

○7層－砂層（6層と8層の漸移層）－ 355cm～410cm

本層からは砂粒（風化岩片）100%の砂層である。下部ほど砂勝ちになっている。

○8層－中粒砂層－

ねこ柳色が目立つよく淘汰された無層理の砂層で、最下部は赤みを帯びている。下位の礫層の堆積後、当時の河川環境が変化した自然堤防域の環境を示す。この砂層から5層くらいまでは洪水による氾

濫堆積であると考える。

○9層－砂層－440cm～450cm

粗粒砂層になる。

○10層－礫層－540cm～490cm

天竜川の本流によって堆積した礫層で天竜川の上流の外帯・内帯からの礫種からなる。平均の礫径は10－15cm、礫のインプリケーションによる古流向はS20° Wである。これは現在の天竜川の流向とほぼ一致している。

○11層－礫混じり砂層－490cm以上、下限不明

10層に引き続いた礫および砂層で、ここでは粗粒の砂に富む。

礫層より上位の細粒堆積物を火山起源の粒子と風化岩片とに分けた（図5）。これにより上位の地層になるにしたがって火山起源物質の割合が多くなっている。

試料番号	火山結晶(%)	火山ガラス(%)	火山岩片(%)	風化岩片(%)
1	40	2	0	58
2	40	2	0	58
3	70	3	0	27
4	50	1	0	49
5	30	1	0	69
6	25	0	0	75
7	25	0	0	75
8	25	0	0	75
9	40	0	0	60
10	40	0	0	60
11	20	0	0	80
12	30	0	0	70
13	20	1	0	79
14	15	0	0	85
15	15	0	0	85
16	10	0	0	90
17	5	0	0	95
18	0	0	0	100
19	0	0	0	100
20	0	0	0	100
21	0	0	0	100
22	0	0	0	100

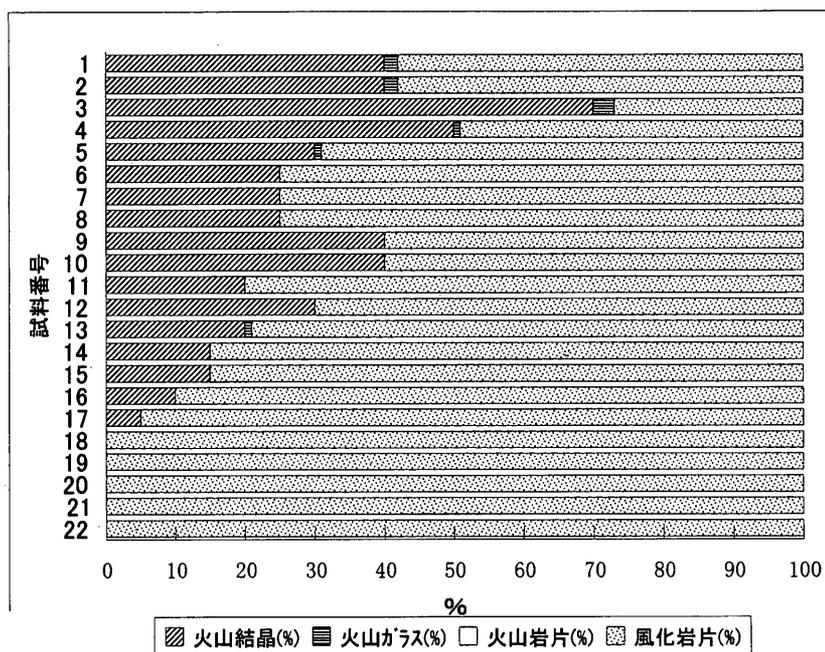


図5 伊久間原T1トレンチの砂粒構成

3. 伊久間原中原の表層地質と古環境調査との比較

488m標高点でのトレンチ調査壁面で（株）古環境研究所によって植物珪酸体（プラント・オパール）による古環境分析がされた（40頁参照）。同上調査結果と地質観察とが調和する点を記す。

- (1) 6層以下ではプラント・オパールの出現が少ない。6層の名称は砂質赤褐色土とすべきである。
- (2) 5層から2層までは温暖気候下の指標が得られたという。これと調和的なのは6層から2層までの黄褐色から赤黄褐色としてある地層の色である。地層の色はトレンチ掘削当初から日数が経過すると赤味を帯びてくる。こうした土の色は土壌の分帯からは赤黄色土にあたる。
- (3) 4層と3層はかなり温暖な気候であったと上記レポートは指摘している。この層準に御嶽第1テフラが入ってくるのは注目してよい。御嶽第1テフラの年代は多くの人が10万年としている。伊那谷では12万年くらいまで下がる可能性もある（松島、1995）。いずれにしても最終間氷期に当たるから温暖な気候である。
- (4) 1層は5層から2層までとおおむね同じ環境であると報告されている。しかし、1層からのプラント・オパールの出現量が減少していること。また、豊丘村源道寺で伊久間原に対比できる段丘の表層直下からは亜高山帯を示す針葉樹の植物遺体が多産している。これは最終氷期に突入すると考えているから、伊久間原でも1層から上は環境の変化があって良いと考える。

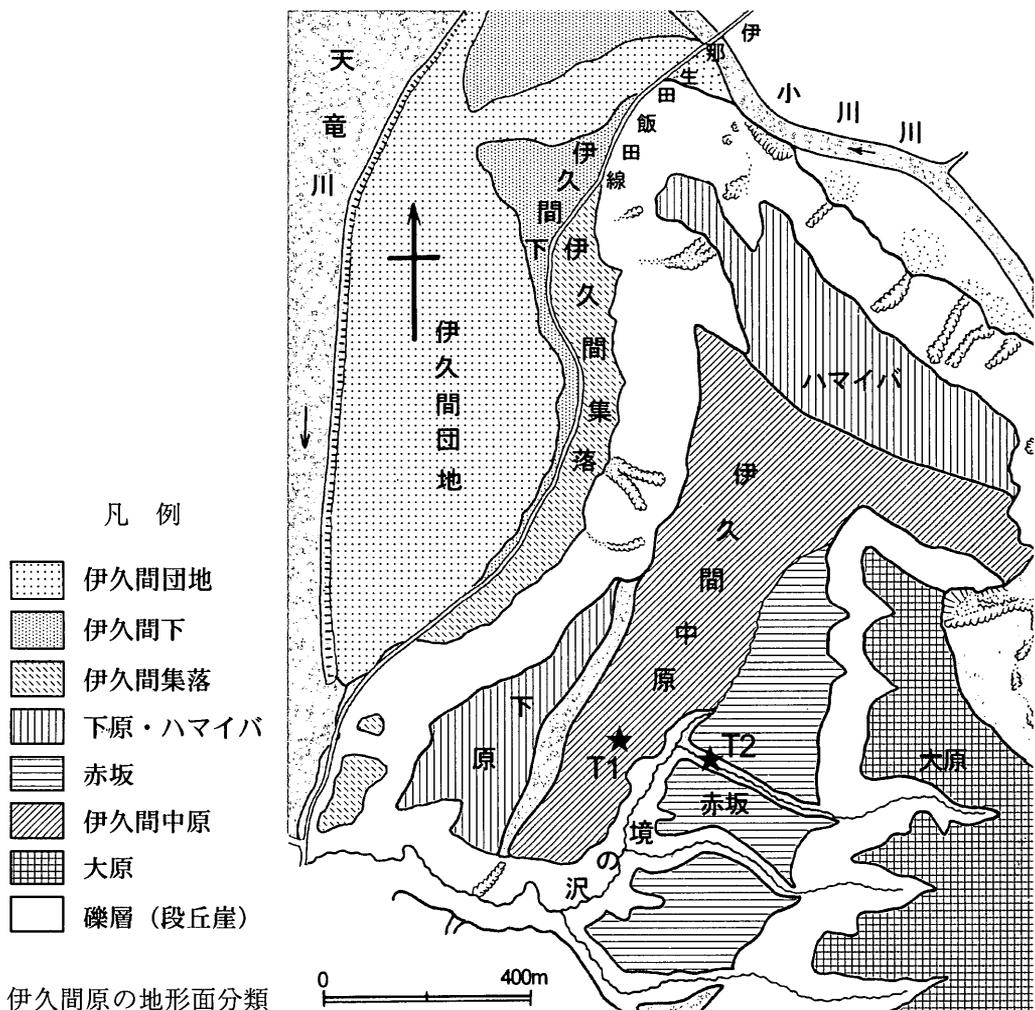


図6 伊久間原の地形面分類

4. 境の沢を越えた地点の表層地質

伊久間原の地形は一続きではない。トレンチ調査をおこなった中原の東側には境の沢の谷がある。境の沢から大原の段丘崖までの間の地形は中原と異なっている。段丘崖下に赤坂古墳があり、さらに、境の沢源流部には水田跡・古井・アンマ井などがあって、付近一帯は湿地帯とされる。空中写真判読をすると境の沢から大原の段丘崖下までの表層は砂っぽい環境で、中原は粘土っぽい環境が読める。地質から見てどんな違いがあるか、水田跡の南側の沢に露出している自然露頭を調査した。なお、境の沢から大原の段丘崖までの間を赤坂面と呼んでおく。

小溪流がリング畑を切り込んでいて高さ6mの崖ができています。その壁面をクリーニングして観察した。以下、9層に分けて特徴を記す。(図7・写2)

○1層－黒褐色土－0～30cm

地表部は黒色腐食質混じりで、すぐ黒っぽい褐色土になる。火山起源の砂粒はなく花崗岩風化岩片を含むのみ。この部分は人工的に攪乱された地層。

○2層－円礫混じり褐色土でAT混入－30cm～60cm

小円礫がわずかに混入する褐色土である。試料2・3から微量のATが検出できた。ATは再堆積性である。

○3層－円礫混じり褐色土－60cm～110cm

2層に続く褐色土であるがATが混じらない。2層・3層共見かけは一連であり、これより下位の地層より褐色の風化度が強い。無層理で不淘汰であり、川による堆積で大原を侵食しながら表層を流れる雨水によって堆積した地層である。円礫は大原の段丘礫層から供給された再堆積性の礫である。

○4層－礫層－110cm～140cm

基質が砂・粘土で礫は成層していなく乱れて入る。円礫から亜円礫で礫種は花崗岩・片麻岩を主とする。礫の配列は不規則で、上位の地層と同様に河川の堆積ではない。4層から風化色が変化して黄褐色となる。

○5層－礫混じり黄褐色粘土層－140cm～160cm

4層との境界は漸移で粗粒砂と粘土が混じる。風化色がやや赤っぽい部分と灰白色の部分がトラ斑状になる。部分的に脱色して生じる現象である。5層から粘土質となり不透水層になっているためである。

○6層－礫層－160cm～180cm

4層と同じ。礫径の最大は5～6cm。基質が粘土質であるから良くしまっている。

○7層－礫混じり灰褐色粘土層－180cm220cm

5層と同じで礫の含有がやや多い。基質も粘土質で不規則なトラ斑を呈する。7層と6層、このセ

ットは一連の土石流堆積物かもしれない。大原の末端が崩壊するごとに崖下に広がった土石流による扇状地砂礫層の可能性はある。

○8層—礫混じり黄褐色土—220cm～250cm

全体に礫混じりで、上部の礫は小さく下部ほど大きくなり、9層の礫層に漸移している。基質は砂と粘土で、粘土質の部分が角礫状に入る。

○9層—礫層—250cm～下限不明

ここから礫層になる。恐らく、大原面の下から境の沢の間を埋めている礫層にあたる。礫種は花崗岩・片麻岩で、5～10cm大、花崗岩の大半は半ぐさり状態に風化している。天竜川による礫ではない。可能性は小川川から供給された礫である。ここに、小川川が流れ込んだとすると、伊久間中原と大原の段丘崖下との間に段丘崖と並行する凹地があったことになる。礫に亜円礫を含むため、遠くから運ばれてきたものではないかも知れない。

写真2に観察した露頭の全景がある。写真の右側に縦の開口割れ目が入っており、その中を充填する黒灰色土を分析した（表3の試料10・11）。試料からは開口割れ目の成因にかかわる手がかりは得られなかった。開口割れ目に向かって木の根が入ったのかも知れない。開口割れ目は大原断層（後述）の影響とも考えられる。

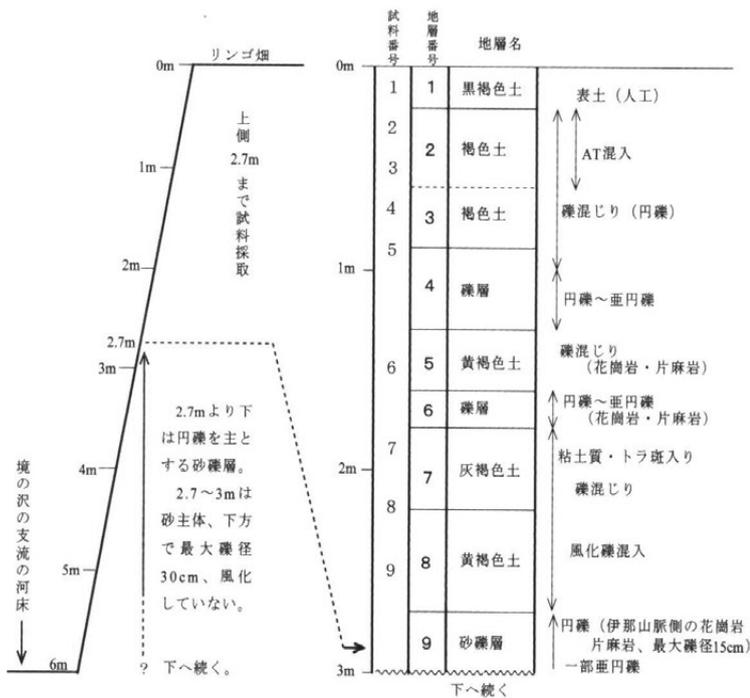
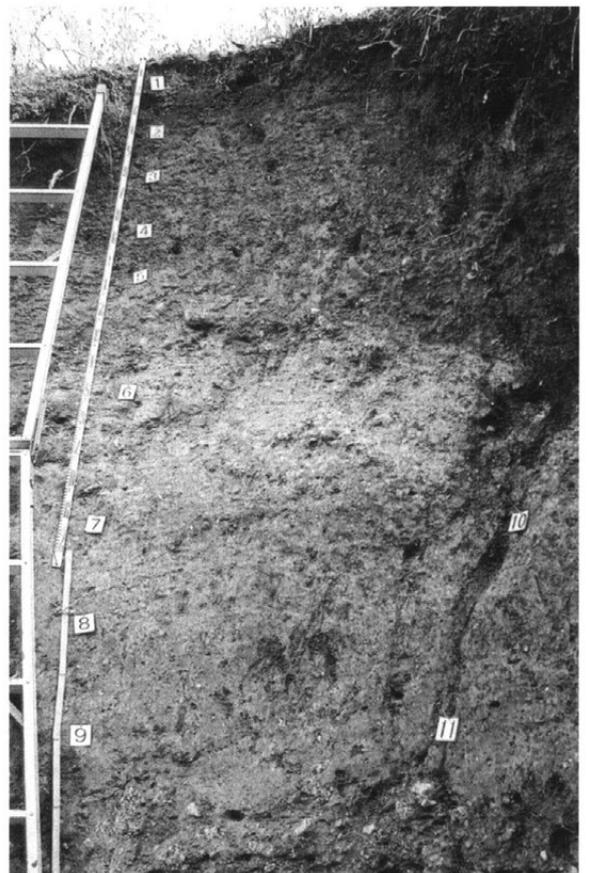


図7 伊久間原赤坂の露頭（T2）柱状図



写2 7図と同じ露頭写真

表3 伊久間原T2 赤坂の露頭砂粒分析結果

試料 No.	産状	火山結晶	火山ガラス	火山岩片	風化岩片	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	黒褐色土	0	0	0	100	fl, qt, bi		花崗岩類風化物
2	褐色土、円礫混入	0	1	0	99	fl, qt, bi	bw	花崗岩類風化物>>AT
3	褐色土、円礫混入	0	1	0	99	fl, qt, bi	bw	花崗岩類風化物>>AT
4	褐色土、円礫混入	0	0	0	100	fl, qt, bi		花崗岩類風化物
5	褐色土、円礫混入	0	0	0	100	fl, qt, bi		花崗岩類風化物
6	ト斑灰褐色粘土	0	0	0	100	fl, qt, bi		花崗岩類風化物
7	ト斑灰褐色粘土	0	0	0	100	fl, qt, bi		花崗岩類風化物
8	ト斑灰褐色粘土	0	0	0	100	bi, fl, qt		花崗岩類風化物
9	ト斑灰褐色粘土	0	0	0	100	bi, fl, qt		花崗岩類風化物
10	黒灰色土	0	0	0	100	bi, fl, qt		花崗岩類風化物
11	黒灰色土	0	0	0	100	bi, fl, qt		花崗岩類風化物

凡例

重鉱物斑晶 opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, mt:磁鉄鉱, ho:角閃石

その他の鉱物・岩片等 bi:黒雲母, fl:長石, qt:石英

火山ガラスの形態他 bw:泡壁型, pm:軽石型, br-gl:褐色ガラス

5. 伊久間段丘形成と断層との関連

境の沢と大原段丘との間にある地形を仮に赤坂面とする。この部分は伊久間面の主体である中原とはでき方が違っている。赤坂面は中原よりずっと後にできた地形である。中原は10万年前ころ離水が開始しているのに、赤坂面は2万5千年前ころまで大原段丘側からの洪水に襲われていた。このことは、境の沢が現在も谷になっていて中原と赤坂とを分けているが、この谷のある低地は大原面ができるに伴って細長く伸びた断層凹地であったと4項で報告した地質調査結果と、以下で紹介する断層露頭の観察から結論した。

伊久間原と大原の境界である段丘崖は断層による変位を伴っていることがずっと以前からわかっていた(松島,1966)。以下この断層説明をする。

下久堅の最北端に位置する北原集落は天竜川の弁天に上の段丘上にある。北原の北側にある谷は伊久間原と大原の南側を侵食しており、源流は二又に分かれて一つは机山の南側に、他方は机山から南に延びた丘陵の621m標高点に達している。三六災害後の調査でわかったが、この谷沿いに“みそべた層”が露出していた。みそべた層は堆積後に西にわずかに傾斜する傾動を受けていて、谷の河床勾配はみそべた層の傾斜に一致し、右岸側に露頭が連続していた。大原の段丘崖を越えた地点で、みそべた層が食い違っていた。大原段丘と調和的に東側上位、東傾斜の逆断層でみそべた層が食い違っていた(図8)。この断層が大原断層である。

大原段丘の段丘崖をつくっているのは大原断層である。断層崖の下側は断層変位によってできた断層凹地帯の細長い低地ができ、ここに水が集まって境の沢ができた。低地は断層運動の継続に伴って、断層崖を侵食する4本の谷より、断層崖からの崩壊土砂によって順次埋まっていった。図9はこの経過を図にした。

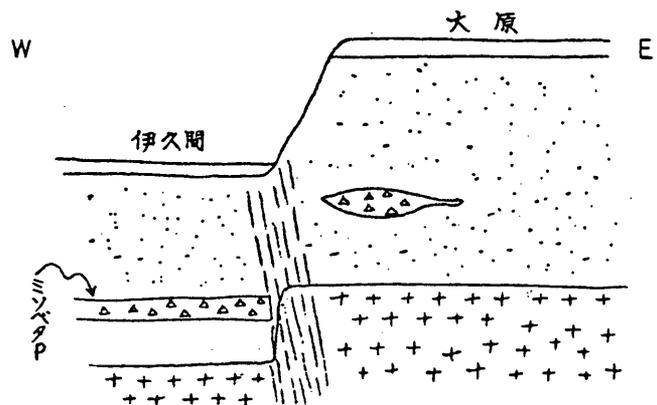
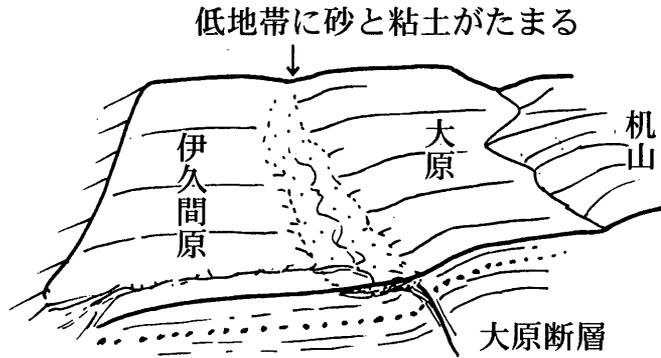
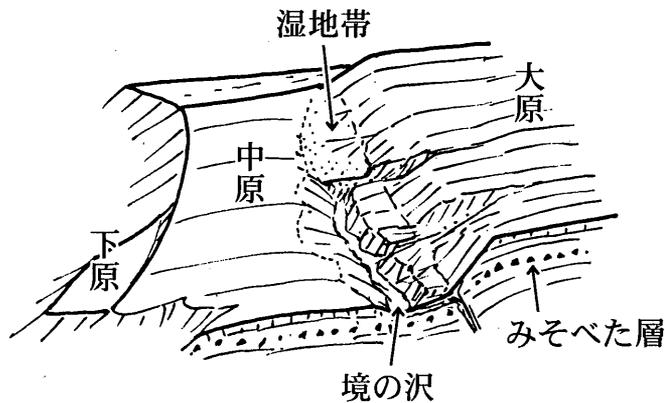


図8 竜東の段丘をつくる断層(伊久間~大原)
(松島,1996)



(1) 初めは断層沿いに低地帯ができる。



(2) 断層の進展と全域の隆起で境の沢が侵食する。

図9 大原断層による大原段丘崖下の低地帯の出現

6. 地形地質調査の成果

- (1) 伊久間原は4個の地形面が複合している。(図6)
- (2) それぞれの地形面の形成過程は異なる。最初は中原、その後に下原とハマイバができ、中原と大原の段丘崖に挟まれている赤坂は3万年前ころまで周りより少し低い地形だった。ここを埋めたのは大原段丘側が侵食されるに伴って搬出された砂礫である。
- (3) 中原は10万年前ころから数万年前ころにかけて離水しており、天竜川本流の礫層の上に3～4mの厚い半風成の火山灰混じり砂・粘土を載せている。その自然条件は縄文人が安定した集落を営むのに適した立地条件だった。

7. 伊久間原の形成史

天竜川の洪水氾濫原は170万年をさかのぼる第四紀の初頭には、机山から喬木の富田の範囲を包括する広がりをもっていた。今とは比較にならない平坦な盆地だった。その盆地を一夜で埋め尽くしてしまったのが大規模火山泥流のみそべた層である。みそべた層の分布は机山と大和知の間にある大平まで達している。みそべた層堆積後、竜東一帯は西に傾く傾動運動に入り、東側ほど隆起が進行して大和知方面から離水がはじまった。

机山や大原が段丘化するの第四紀の中期になってからである。大原がその西縁に断層を伴って隆起を開始してから竜東段丘の本格的な形成がはじまる。

伊久間原は複数の地形面が複合した段丘である。最初にできた部分は中原である。北北東-南南西に延びた平坦なカマボコ状の地形で、わずかに南に傾斜している。古代の集落の中心はこうした立地条件を利用した。中原と大原の間はやや低い低地帯になっており、そこへ集まる内水が湿地を形成していた。

第四紀の後半になると伊久間原は竜西の傾動運動と共に隆起していく。その過程で天竜川が下原側に流れが移動すると中原が段丘化した。引き続き、天竜川に注ぐ小川川も北側を侵食してハマイバ面を流れた。

大原断層は中原の段丘化より前から動いていて、赤坂面は断層凹地として周りより低かった。その堆積した粘土質の地層により排水性の悪い低地帯であった。低地帯の水は中原の南側を回り込んで下流に抜けていた。伊久間原の隆起に伴ってこの排水路が下刻していき、境の沢が掘り込まれた。今は境の沢の源流部のみが湿地帯の環境を維持している。境の沢に水が涸れないのは低地帯を埋めている砂質粘土層による。古代人が飲み水に利用できたのは地下水を涵養できた地質条件があったからで、その背景は大原断層である。

8. 今後の調査課題

今回、埋蔵文化財調査の機会に地形地質調査が実施された。これは画期的である。なぜなら、伊久間段丘は伊那谷はもちろん、日本を代表する河岸段丘としての評価が為されている場所である。しかし、きちんとした地形地質調査ができていないのは残念だった。今回の調査が一石となり、さらに総合的な調査が継続されることを期待したい。段丘上には自然露頭は極めて稀で、調査方法は重機によるトレンチの掘削である。今回は中原の中央での一つのトレンチ調査ができた。今後二ヶ所・三ヶ所と進展できれば幸いである。

文献

松島信幸（1966）伊那谷の段丘一概説一、下伊那地質誌調査資料、2、25p

松島信幸（1972）10万分の1下伊那地質図、下伊那誌編纂会

松島信幸（1995）伊那谷の造地形史、飯田市美術博物館調査報告書、2、145p

松島信幸（1996）喬木村伊久間原のフルーツパークより風越山を正面に見る、伊那谷の自然、67、8-9p

松島信幸・寺平宏（1999）伊那谷の地形面の編年と気候変動および地盤運動との関連、
飯田市美術博物館研究紀要、9、171-198p

伊久間原遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、C-30号住居址（縄文時代中期後葉）、C-24号住居址（弥生時代後期）、C-27号住居址（古墳時代後期）、C-29号住居址（古墳時代後期）の各住居址より出土した炭化材4点である。

2. 前処理および測定方法

（1）酸／アルカリ／酸洗浄

最初に蒸留水中で試料を細かく粉砕する。次にHClにより炭酸塩を除去した後、NaOHにより二次的に混入した有機酸を除去する。更にHClで洗浄し、最後にアルカリによって中和する。

（2）石墨調製

上記の処理の後、試料からCO₂を精製しグラファイト（石墨）を調製する。

（3）AMS法

AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は、試料中の¹⁴Cの個数を直接数える方法であり、次のように行う。前処理を行った試料から炭素を抽出して、グラファイト（石墨）・ターゲットを調製する。ターゲットをイオン源の内部にセットする。一方、純粋なセシウム（Cs）を加熱して蒸発させ、それを約1000℃に加熱したタンゲステン膜を通過させて、表面電離法によりセシウムの陽イオンをつくる。このセシウムの陽イオンを試料ターゲットに当てると炭素原子の負イオンや、炭素と水素が結合した分子の負イオンなどがターゲットから飛び出し、それらは加速器へと導かれる。加速器で加速されエネルギーを与えられた後、質量分析を受け質量数12と14のイオンを選び出し、質量数12のイオンは¹²C³⁺として電流値を測定し、質量数14のイオンは重イオン検出器で¹⁴C³⁺であることを確認して計数される。このようにして試料中の¹⁴C/¹²Cを測定する。

試料および前処理・測定方法をまとめたものを表1に示す。

表1 試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調製	測定法
1	C-30号住居址	炭化材 石墨調製	酸／アルカリ／酸洗浄	AMS法 (加速器質量分析法)
2	C-24号住居址	炭化材 石墨調製	酸／アルカリ／酸洗浄	AMS法 (加速器質量分析法)
3	C-27号住居址	炭化材 石墨調製	酸／アルカリ／酸洗浄	AMS法 (加速器質量分析法)
4	C-29号住居址	炭化材 石墨調製	酸／アルカリ／酸洗浄	AMS法 (加速器質量分析法)

3. 測定結果

放射性炭素年代測定 (AMS) 結果を表2に示す。

表2 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 1	4110±50	-26.2	4090±50	交点 BC 2595 2 σ BC 2870 TO 2795, BC 2770 TO 2480 1 σ BC 2855 TO 2820, BC 2665 TO 2570	123652
No. 2	2030±40	-26.6	2010±40	交点 AD 5 2 σ BC 75 TO AD 85 1 σ BC 40 TO AD 55	123653
No. 3	1715±50	-26.4	1690±50	交点 AD 390 2 σ AD 245 TO 450 1 σ AD 330 TO 420	123654
No. 4	1680±40	-26.8	1650±40	交点 AD 415 2 σ AD 340 TO 530, AD 390 TO 435 1 σ AD 390 TO 435 (2 σ : 95% probability, 1 σ : 68% probability)	123655

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

(5) 測定No.

本試料の測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

4. 所見

- 1) C-30号住居址より出土した炭化材の年代値はB C 2595年であり、縄文時代中期後葉とされる考古学所見と一致する。
- 2) C-24号住居址より出土した炭化材からはA D 5年の年代値が得られた。考古学所見では弥生時代後期とされていたが、試料の炭化材はやや古い時代のもののようである。
- 3) C-27号住居址出土の炭化材の年代値はA D 390年、C-29号住居址の炭化材の年代値はA D 415年であった。考古学的所見ではいずれも古墳時代後期とされており、測定結果もほぼそれに近いものである。

喬木村、伊久間原遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2. 試料

分析試料は、東断面から採取された34点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ススキ属（ススキ）の換算係数は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、シバ属

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1層から7層までの層準について分析を行った。その結果、下位の7層から6層にかけては、ネザサ節型やミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。5層ではネザサ節型が大幅に増加しており、メダケ節型も比較的多く検出された。また、同層ではシバ属やクマザサ属型が出現している。4層ではネザサ節型がさらに増加しており、試料30では密度が10万個/gにも達している。また、同層ではススキ属型やウシクサ族Aが出現している。3層でも同様の結果であるが、2層ではネザサ節型が減少傾向を示している。1層ではほとんどの分類群が減少している。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にネザサ節型が優勢であり、とくに5層から2層にかけてはネザサ節型が圧倒的に卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

7層から6層にかけては、ネザサ節やミヤコザサ節などの竹笹類が生育するイネ科植生であったと考えられるが、河川の影響など何らかの原因でその他の分類群の生育には適さない環境であったと推定される。タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期-間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田, 1996）。ここでは、ネザサ節が優勢であることから、当時は比較的温暖な気候であったと推定される。

5層から2層にかけては、ネザサ節を主体としてメダケ節なども見られるイネ科植生であり、とくに4層から3層にかけては、ネザサ節が繁茂する状況であったと推定される。また、4層より上位の時期にはススキ属やチガヤ属、シバ属、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）なども見られたと考えられる。メダケ節はネザサ節よりも比較的温暖なところに生育していることから、当時はかなり温暖な気候であったと推定される。なお、クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、それ以外の分類群は日当りの悪い林床では生育が困難である。したがって、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、かなり開かれた環境であったと推定される。

1層でもおおむね同様の環境であったと考えられるが、この時期には何らかの原因でネザサ節などの竹笹類が減少したと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の高環境推定-中期更新世以降の氷期-間氷期サイクルの検討-．日本第四紀学会 講演要旨集，26，p.68-69.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-．考古学と自然科学，9，p.15-29.

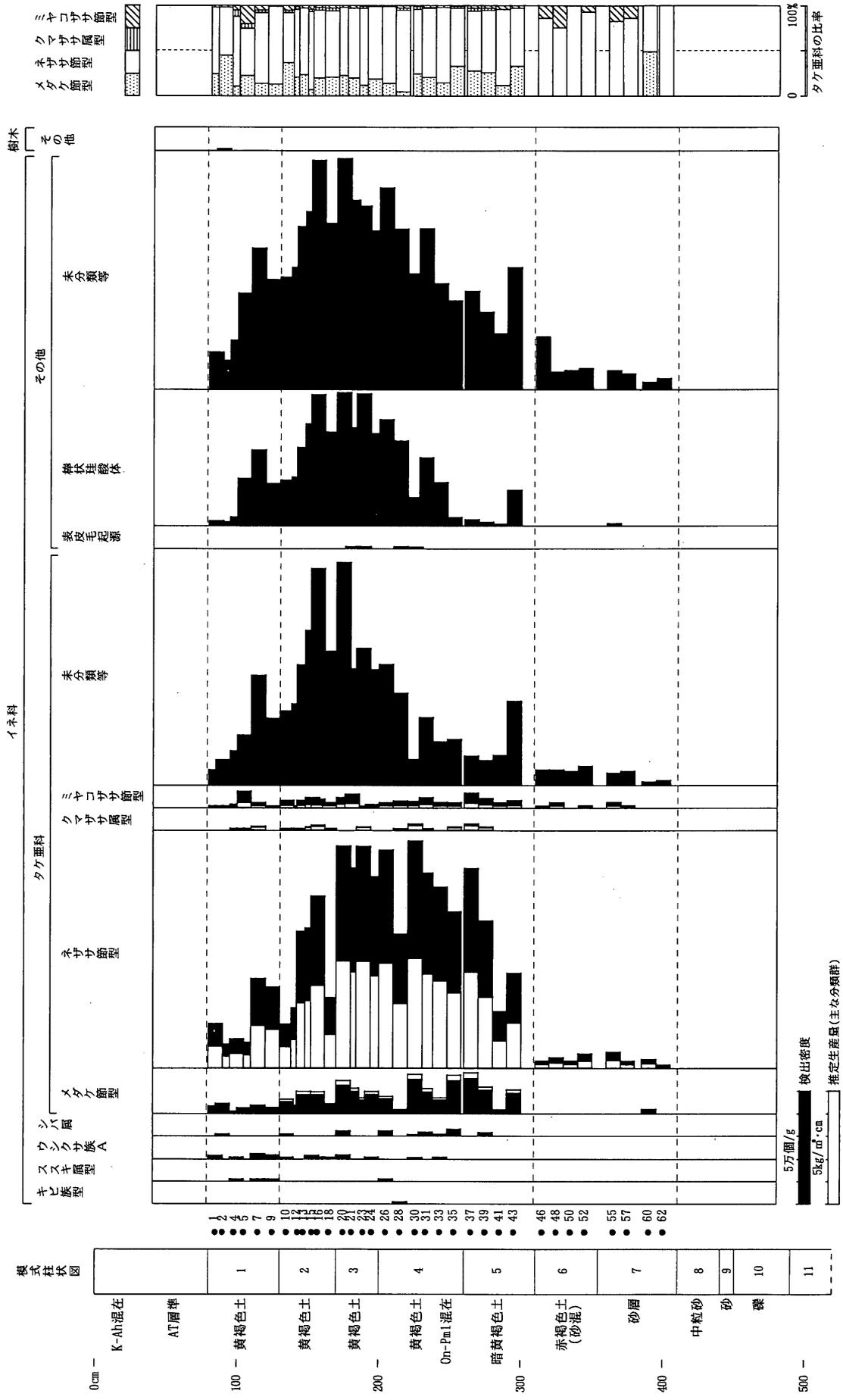
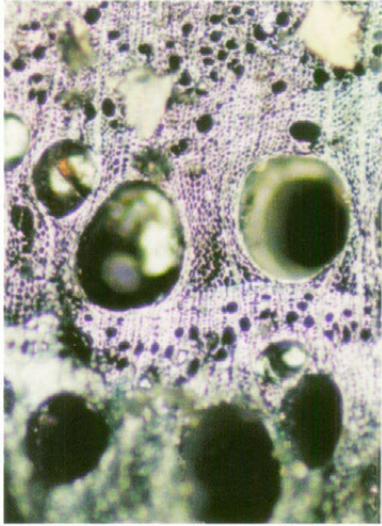
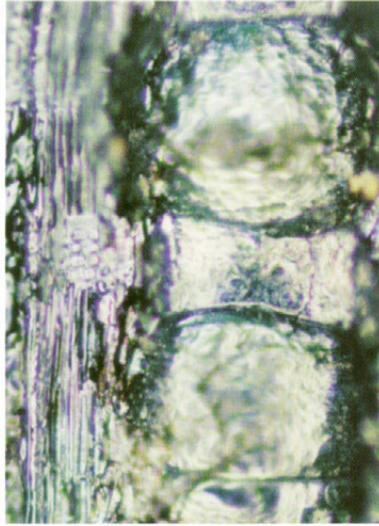


図1 伊久間原遺跡、東断面における植物珪酸体分析結果

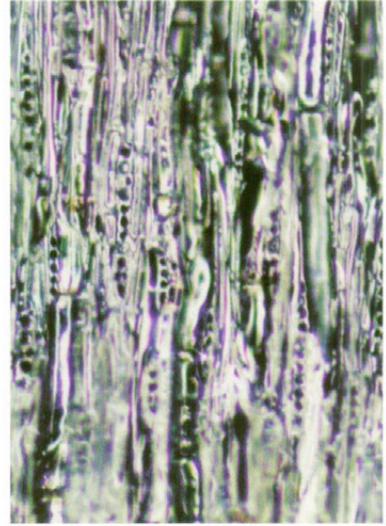
伊久間原遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



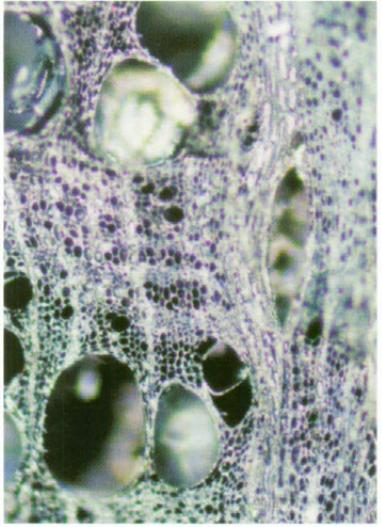
横断面 ————— :0.4mm
1. No. 1 クリ



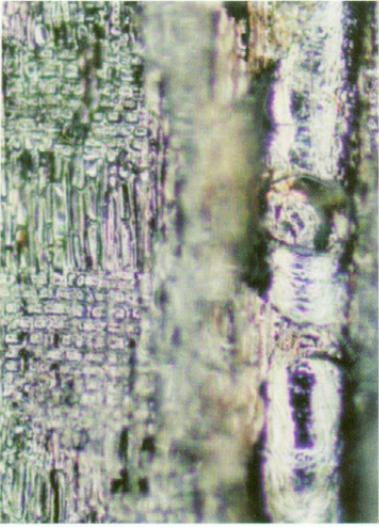
放射断面 ————— :0.2mm



接線断面 ————— :0.2mm



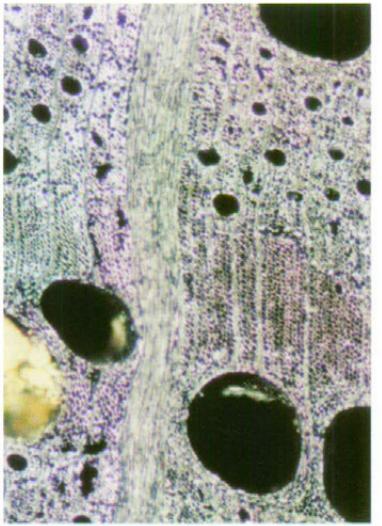
横断面 ————— :0.2mm
2. No. 5 コナラ属コナラ節



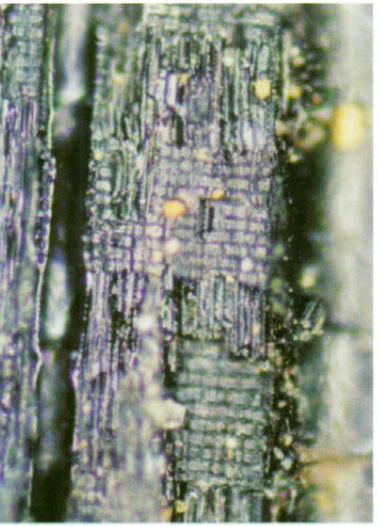
放射断面 ————— :0.2mm



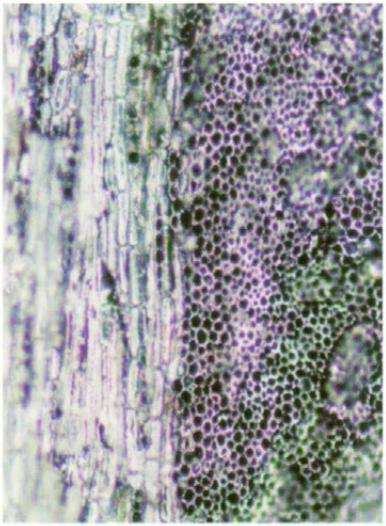
接線断面 ————— :0.2mm



横断面 ————— :0.4mm
3. No. 8 コナラ属クヌギ節

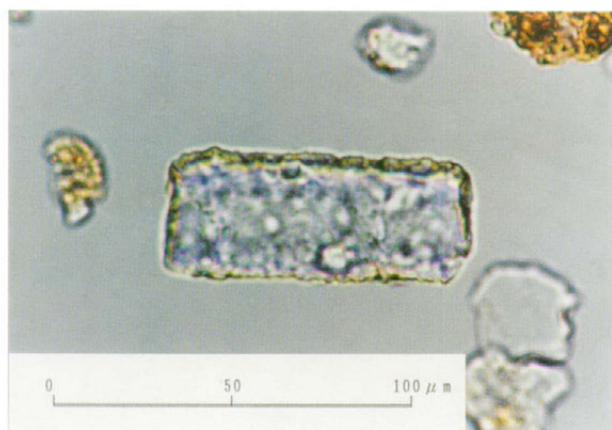


放射断面 ————— :0.2mm

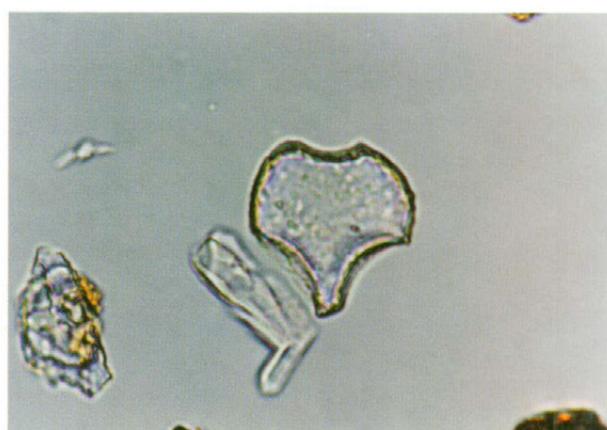


接線断面 ————— :0.2mm

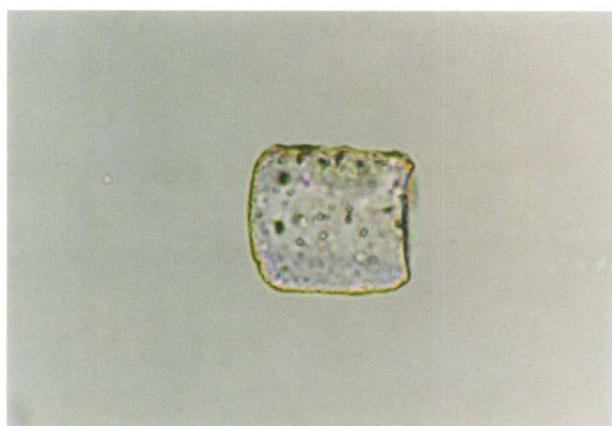
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



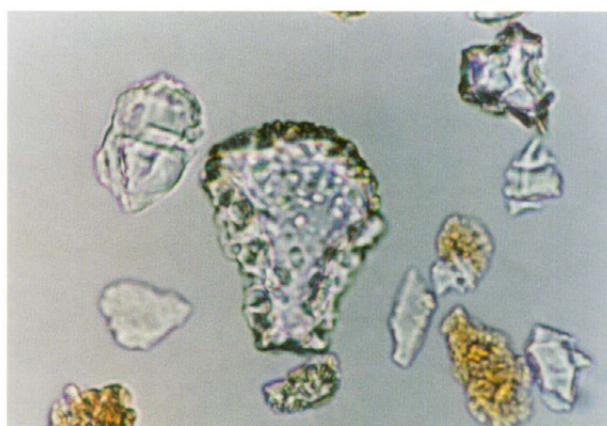
No 1. キビ族型



No 4. シバ属



No 2. ススキ属型



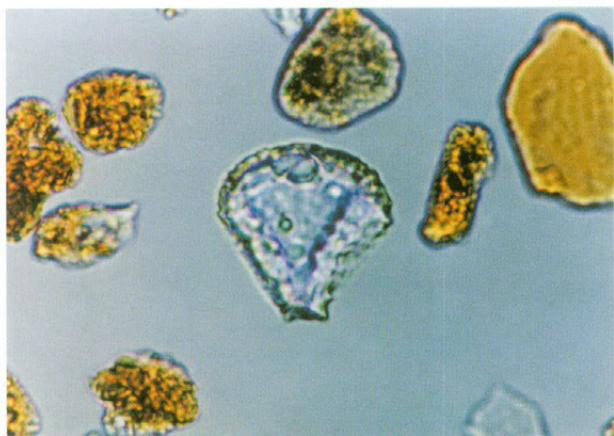
No 5. メダケ節型



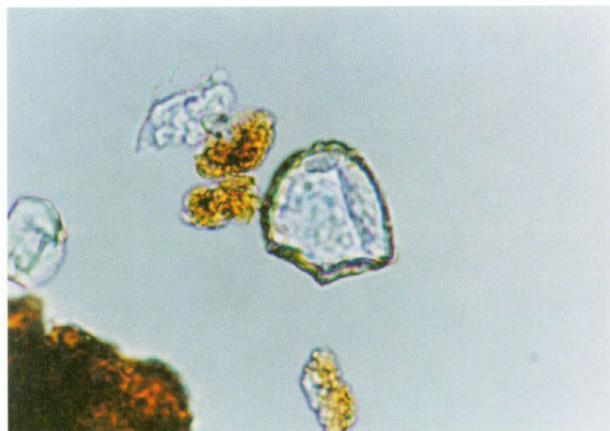
No 3. ウシクサ族A



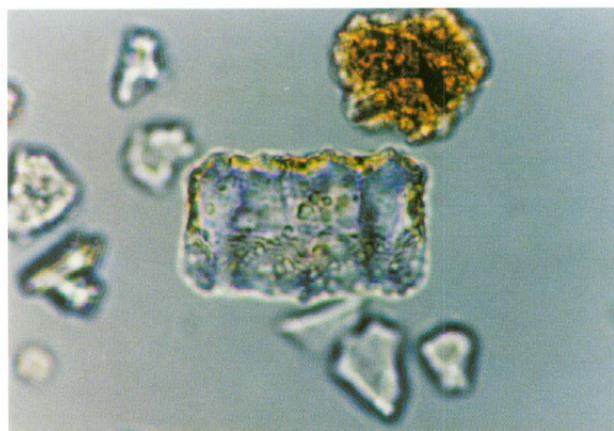
No 6. ネザサ節型



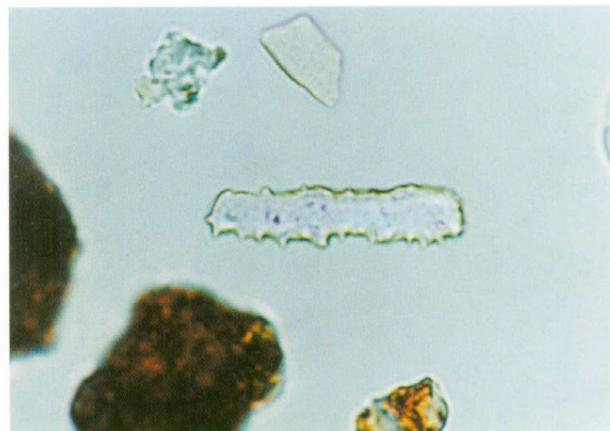
No 7. ネザサ節型



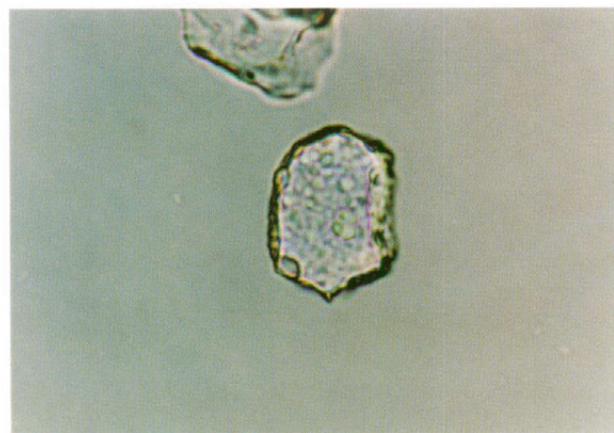
No10. ミヤコザサ節型



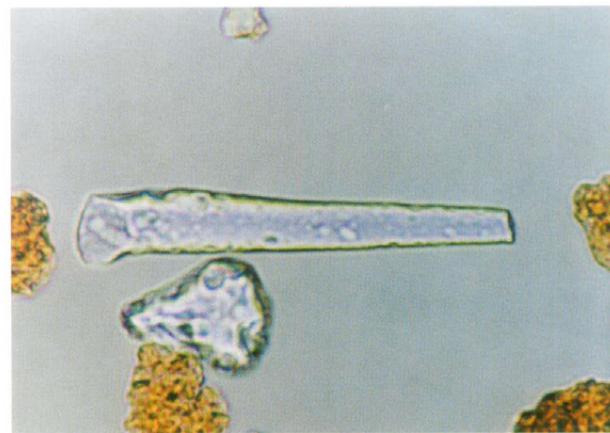
No 8. ネザサ節型



No11. 棒状珪酸体



No 9. クマザサ属型



No12. 棒状珪酸体

表3 伊久間原遺跡 時期別住居址一覽

No.1

NO	住居址NO	位置	形態・フナ	炉・竈	形態・遺構の特徴	重複状況	位置状況ほか	出土土器	出土石器
縄文時代前期									
1	87住	C中央	不整形円形	地床炉	集石の下炉・柱穴4	86・89住、ド4重複		土器片151	石鏃4・石匙1・石器48・黒80
2	100住	// 幟	不詳	不詳	土器片集中	85住、ド1・11重複		土器片36	石鏃1・石匙1・黒11
3	101住	// 西	小形円形	地床炉	深い炉・周溝・柱穴4	88住と接触		土器片186	石鏃6 石器32・黒124
4	102住	// 西北	不詳	不詳	耕作攪乱	86・89住・ド4・6重複		土器片40(含ド4・6)	石器10
5	103住	// 中央	円形状	不詳	3/4用地外 床面一部確認			土器片62	石器4
6	104住	// 西	円形状	不詳	大部分92住に切られ、配石			土器片30(含92住)	中期中葉の土器あり
7	114住	D2 W	円形	焼土	浅い 柱穴2	121・130重複 ド重複		土器片78	石鏃7・石匙1・石器29・黒234
8	119住	D1 Y	隅丸楕円形	地床炉と焼土群	深い掘り方・方形配列ピット列・焼けた床面	120住、建物址1・2・4重複		土器片800余	石鏃10・石匙4・スクレパー4 石器92・黒曜石片324
縄文中期中葉									
9	35住	FP1	円形状	石囲炉	3/4用地外 炉に深鉢形土器3個体	34・45・47住 重複		深鉢形土器3個体 竹管・櫛刃大形土器片多	石器64、石匙1
	(38住)	// G1	隅丸方形	石囲炉	上層から中葉大形土器片出土	51・52住・ド 重複		藤内系深鉢形土器口縁部、中葉土器片62	
10	39住	// K2	不詳	焼土	掘り方不詳・土器片集中	37・40・49住、ド4・6重複		藤内系大形口縁部・土器片61、	錘石21・石器87
11	41住	// W1	楕円形	榎石囲炉	一部用地外・浅い掘り方	ド8重複		藤内系土器片40	石器32
12	53住	// B2	不詳	榎石囲炉	炉の周辺一部残存	62・71・72住、竪穴群と重複		藤内系土器片18(周辺多)、	石器34
13	59住	// M5	不詳	不詳	大部分用地外	48・49・50住重複		土器片	石器46
14	67住	E03	楕円形	石囲炉	炉石一部欠損、主柱穴5	65住・土坑群重複		竹管深鉢形土器2、土偶2	小石棒4・礫1 石器158
15	69住	FB5	楕円状	榎石囲炉	浅い掘り込み	79住・竪穴6重複		条線系土器片64、土偶3・ミニ1	石器34
16	76住	ER4	円形状	榎石囲炉	浅い掘り込み	75・77住、土坑重複		鉢形土器1、竹管土器片113	石皿1・石器46
17	98住	D1 K	不詳	焼土	浅い掘り込み・深鉢形土器3、	竪穴群・竪穴25重複		深鉢形土器3、竹管系土器片	石器12
18	99住	// O	不詳	不詳	竪穴群・建物址重複で不詳	前・中葉土器片多		竹管・貼付け系土器片、	
19	112住	D2 T	不詳	榎石囲炉	浅い掘り込み	110・113・130住と重複		竹管系土器片40	石器8
20	118住	D1 Y	楕円形	焼土	浅い掘り込み、不整ピット6、	建物址4・5・20、土坑重複		貼付け系深鉢形土器半完3	石器19
21	125住	D2 N	円形状	埋壘炉	浅い掘り込み 柱穴3	108・129住、竪穴群重複		条線系深鉢形口縁、土器片40	石匙1、石器14
22	131住	D3 北	円形状	不詳	浅い掘り込み、半分用地外	123住、建物址重複 (藤内系土器南限)		藤内系深鉢形土器半個体4 みみずく把手、竹管土器片	石器13
23	132住	D2 G	不詳	不詳	櫛刃系土器片	石匙1		土器片15	石器10
縄文中期後葉									
24	26住	FU1	円形	石囲炉	昭和52年調査、炉が2基 半分用地外、	新柱穴		土器片	石棒2 石鏃、石器16
25	34住	// R1	円形	石囲炉	半分用地外、貼り床	35・45住重複		深鉢形土器2、円板1	石鏃2 石器96
26	36住	// M1	不詳	不詳	大部分用地外	土坑3・5重複		鉢形土器完1、大形土器片	石匙1 石器43
27	37住	// J1	円形状	不詳	大部分用地外	38・39住、土坑9重複		深鉢形土器半完1、//	石器7
28	38住	// 東	隅丸方形	榎石囲炉	深い掘り方、切り炬燵状炉 集石の下埋め壘、柱穴大4	51・52住、ド8・12等重複 中層から中葉土器多量出土		埋壘1、鏝付土器1、深鉢形土器2 鉢形土器1、器台3、土偶5、ミニ2	石鏃1 石器346
29	40住	// N1	円形状	石囲炉	2/3用地外	35・39住重複		鉢形半完土器1、土器片	石器26
30	42住	// P3	不詳	焼土	円形状小ピット配列	43・45住重複		後期的深鉢形土器3、	石器25
31	43住	// T3	円形状	焼土群	浅い掘り方 床面不詳	42・44・45住、ド1重複		// 半完、前期土器片3、	石器45
32	45住	// Q3	円形	榎石囲炉	切炬燵状炉、埋壘(蓋石) 焼けた床、柱穴大6、周溝	35・42・43・47・48住重複		埋壘1、香炉形2・深鉢形4 土偶5、大土器片	石鏃1 石器152
33	46住	// P5	円形状	石囲炉	浅い掘り方 周辺不詳	45・48・58住重複		深鉢形土器1、大形土器片	石器32・礫・礫1
34	47住	// N3	円形	石囲炉	浅い掘り方 周辺不詳	34・35・45住重複		深鉢形土器半完2、土器片	石器34
35	48住	// N5	円形状	石囲炉	浅い掘り方 周辺不詳	46・49住、ド10重複		深鉢形土器2、大形土器片	砥石1・石器56
36	49住	// M3	円形	石囲炉	炉石外れ、深い掘り方、床硬 穴大6、深い周溝、埋壘(蓋石)	39・40・50住重複	柱	埋壘1、鏝付土器1、 深鉢形土器6、土偶6	石鏃4・石匙1 石器271
37	50住	// K5	円形	石囲炉	3分1用地外、炉石外れ 埋壘、周溝二重			埋壘1、深鉢形土器3、 土偶3	石器142

表3 伊久間原遺跡 時期別住居址一覧

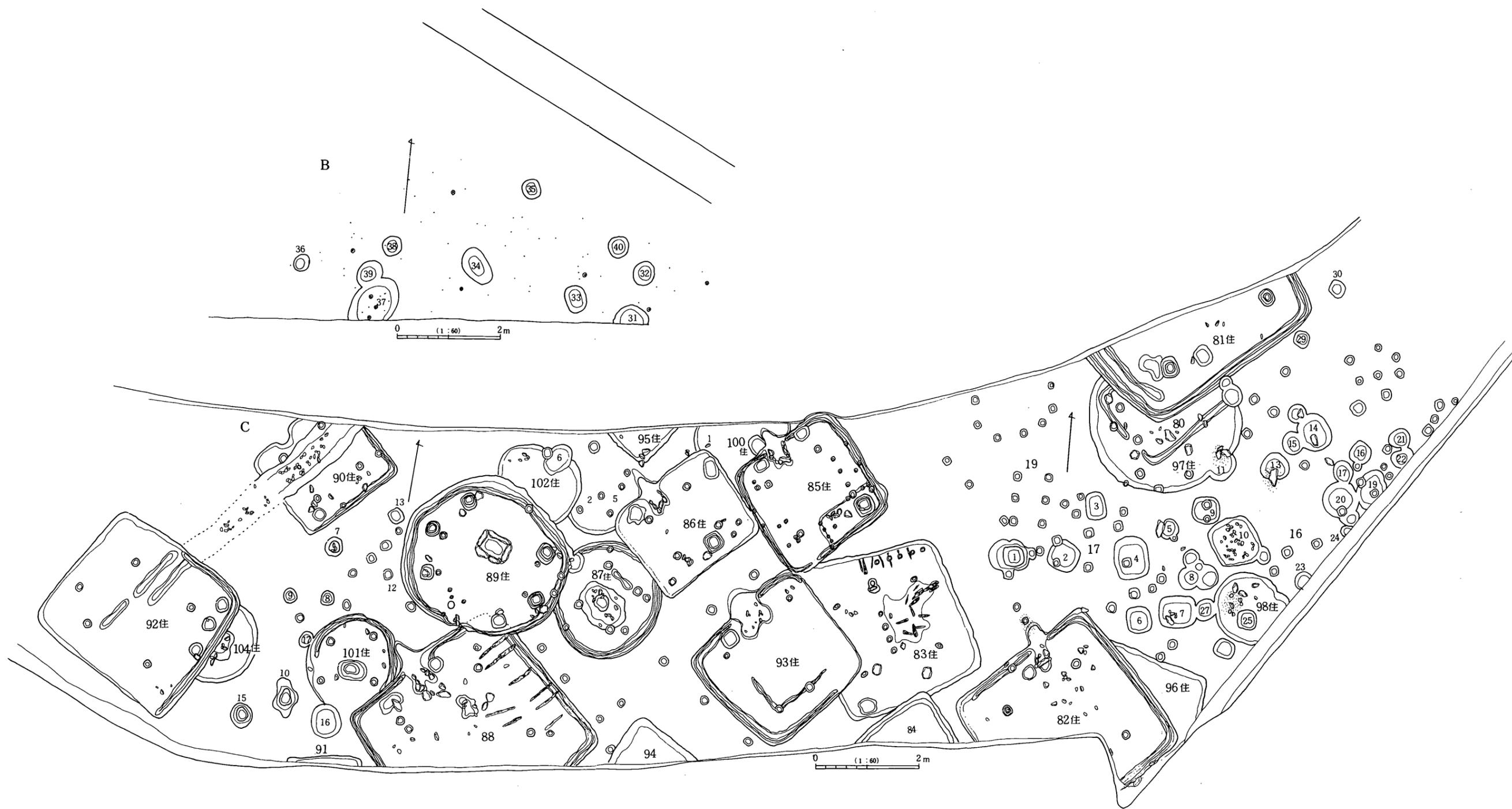
No.2

NO	住居址NO	位置	形態・フジ	炉・竈	形態・遺構の特徴	重複状況	位置状況ほか	出土土器	出土石器
38	51住	FK3	不詳	焼土	浅い掘り方、水道溝で切断	39・49・50住、ド7重複		上層深鉢形土器1、土器片40、石器46	
39	52住	//I4	隅丸方形	石囲炉	浅い掘り方、炉石12個円形、埋甕	38・50・54住、土坑重複		埋甕(半完)深鉢形土器、土器片少	石器39
40	54住	//F3	不詳	不詳	深い掘り込み、周辺不詳	38・ド17、建物址重複		土器片	石器23
41	55住	//F5	不詳	焼土	浅い掘り方 2/3用地外	52・54・夕8・ド24重複		後期的土器片弥生土器片	石器12
42	56住	//F1	円形状	不詳	大部分用地外、深い掘り方	61住、ド8重複		深鉢形土器半完1・土偶1	石器16
43	57住	//D5	楕円状	不詳	" "	ド8重複		後期的土器片 土偶1	石鏃2、石器13
44	58住	//Q5	円形状	不詳	" "	44・46住重複		中葉・後葉土器片	石器15
45	60住	//J1	円形状	不詳	2/3用地外	ド5・9重複		土器片30	石器8
46	61住	//D1	不詳	深い炉	深い地床炉、床面一部	72住・竪穴2・4等重複		深鉢形土器形2・大形土器片	石器27
47	62	//A1	不詳	不詳	焼土・床面不詳	53・61・79住・竪穴群重複		上層土器片多	石器61
48	63住	ET2	楕円形	石囲炉	炉石一部外れ、焼土群、累石 大形柱穴6、	64・75住、大形深めの土坑 重複		深鉢形土器6以上、鉢形1、 土器片多、ミニ1	石棒1・石鏃8 石器206
49	64住	//R2	円形	石囲炉	全面焼土塊、上面石組遺構	63・76住・集石遺構重複		深鉢形土器3、土偶2、	石器105
50	65住	//O1	円形	不詳	大部分用地外	67・土坑等重複		土器片	石器3
51	66住	//M1	円形	不詳	2/3用地外、環状集落南縁	土坑等重複		"	石器31
52	70住	//K1	円形状	不詳	大部分用地外、深い掘り込み	69・79住重複		"	石器27・石鏃1
53	72住	FD2	円形状	不詳	掘り込み浅い、床面一部	61・71住、土坑・竪穴群重複		"	石器90
54	73住	EV1	円形	不詳	3/4用地外	土坑・竪穴重複		"	石器10
55	74住	//V5	円形	不詳	2/3用地外	土坑4重複		"	石器7
56	75住	//T4	楕円形	不詳	半分用地外	63・76住、土坑重複		深鉢形土器形・土器片	石器70・石鏃1
57	77住	//O5	隅丸方形	石囲炉	半分用地外、深い掘り込み 深い周溝、主柱穴大4	76住重複		埋甕2、深鉢形8、浅鉢形2 器台2、土偶1	石匙1 石器86
58	78住	//N5	円形	不詳	大部分用地外	土坑重複		土器片	石器6・礫・礫1
59	79住	//Y3	楕円形	石囲炉	大形切炬燵炉・副炉、柱穴6、 深い周溝	53・69住、竪穴群・土坑重複		埋甕、深鉢形土器4、ミニ2 土偶2	石皿1、石棒2 石匙1、石器126
60	89住	C西	多角円形	石囲炉	大形切炬燵形炉、全面焼土塊 柱穴大6、深い周溝、立ち石棒 入口構造	87・88・102住、土坑12・13等 重複		埋甕(蓋石)有孔鏢付1、 香炉形1、深鉢形土器5 大形土器片、土偶2	大形石棒4、 石皿3、石器132 石鏃3・石匙1
61	97住	//東	円形	焼土	竪穴・土坑か形態不詳	竪穴群・土坑重複		中期中葉・後葉土器片	石器24
62	120住	D1V5	円形	石囲炉	用地外に石囲炉、炉南に深鉢	119住重複		深鉢形土器1、中葉土器混在	石器8・石鏃1
弥生時代									
63	83住	C東	隅丸方形	埋甕炉	深い掘り込み、炭化材多 硬い床、楕円柱穴4、間仕切り	93住重複、84・85住隣接		埋め甕、甕形土器3、器台1	平状台石2、 石器24・石鏃1
64	96住	D1南	方形	不詳	82住に切られごく一部残存	82住重複		壺形口縁、甕形片	石器40
65	109住	D2	隅丸方形	地床炉	深い掘り込み、炉2か所、 硬い床面、楕円柱穴4、間仕切り	建物址13の柱穴重複		甕形土器片、器台1	有肩扇状形1 石器20
66	127住	//	方形状	不詳	108住に切られ西側一部残存	108住、竪穴群重複		甕形土器口縁1・底部1、	石器3
67	80	D1北	囲溝址		南側に溝、北側81住に切られ	81住、縄文竪穴重複		甕形土器片2	石器18、黒65
古墳時代									
68	68住	EE2	隅丸方形	粘土製	一部用地外・道路下、貼り床二重構造 炭化材・焼土、南側上部配石(工房状) 深い貯蔵穴、煙道残存、古墳期集落北限			甕形3、甕形1、小形甕形4、 鉢形2、碗形3、坏形10、器台1 蓋付1 縄文中期中葉土器18	礫器・菰手石 石器28 4
69	81住	D108	隅丸方形	不詳	2/3用地外、一辺8m、大柱穴2、貼り床 周溝2住、大土坑	囲溝址・竪穴重複		土師器・須恵器片多、完形無 土玉1、どんぐり炭化物1 縄文前期・中期中葉土器片多	黒曜石片93 石器43 石鏃1・礫1
70	82住	C南東	隅丸方形	礫粘土製	東半分道路下、竈天井石現存、 深い掘り込み、深い周溝	96住・建物址重複 竈配管溝で切断		甕1、小形甕形1、碗形1、 坏形2、高坏形脚部1、剣形模造品	石器45 石鏃3
71	84住	//南	隅丸方形	不詳	大部分用地外、	83住重複		土師器・須恵器片	石器9
72	85住	//映北	隅丸方形	礫粘土製	焼けた床・柱穴4、深い周溝、 祭壇状テラス・小穴群、高坏形土器群	83・86・93住重複		甕形2、甕形2、小形甕2、碗形1 坏形8、高坏形12、須恵鉢1、管玉1、白玉10	石器21
73	86住	//	隅丸方形	礫粘土製	竈長大煙道、平石配置、柱穴4 貯蔵穴	85・87住、土坑1・2 3・4重複		甕形1、甕形2、小形甕6、碗形1 坏形土器2	白玉1 石器18・礫3

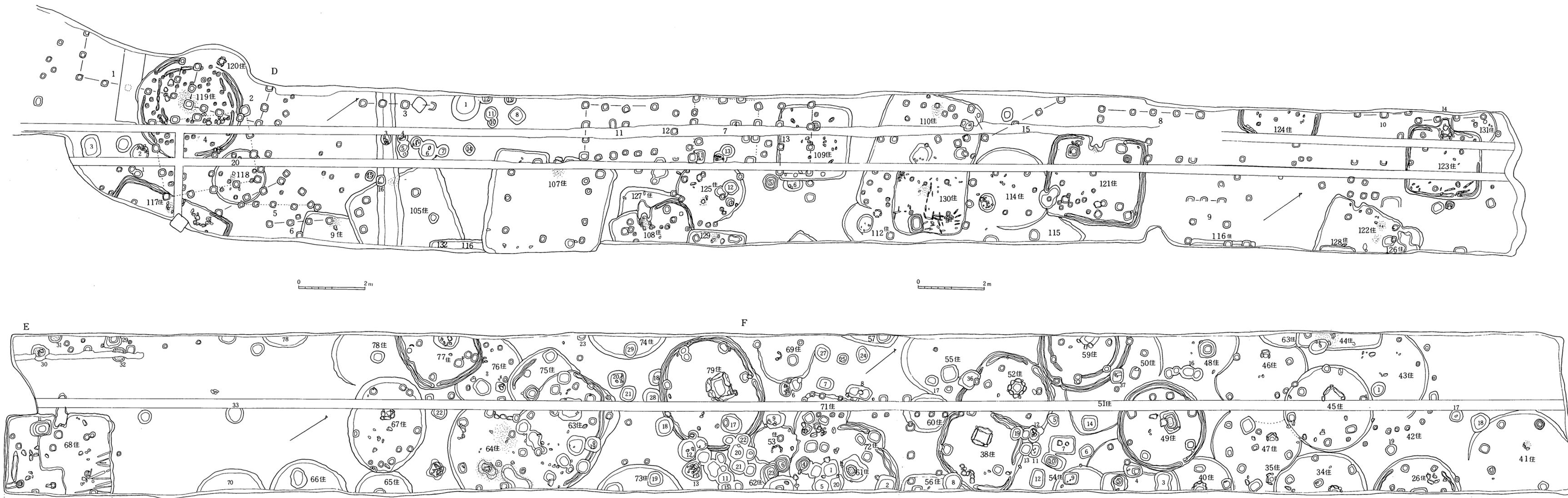
表3 伊久間原遺跡 時期別住居址一覽

No.3

NO	住居址NO	位置	形態・フツ	炉・竈	形態・遺構の特徴	重複状況	位置状況ほか	出土土器	出土石器
74	88住	C 西	隅丸方形	碓粘土製	1/3用地外、深い掘り込み、炭化材並列、深い周溝、竈内高環形土器支脚、周囲ピット列	89・101住重複		甕1、小形甕形2、碗形1、 環形土器7、高環形3、	石匙3・石鏃8 白玉5、石器40
75	90住	// //	隅丸方形	粘土製	近代溝で切断、竈壊れ、小振り竪穴、	溝址重複		甕形1、小形甕形2、環形3、 高環形6、須恵器蓋坏2	石器6
76	91住	// 西南	隅丸方形	不詳	大部分用地外、深い掘り方	88住重複		土師器片・前期土器片	石器7
77	92住	// 西	隅丸方形	焼土	西側耕作攪乱、柱穴4、貯蔵穴2、	104住、溝址重複		小形甕形2、環形1、前期土器片	石器17
78	93住	// 中央	隅丸方形	粘土製	深い掘り込み、柱穴3、貯蔵穴大	83・84・85住重複		遺物少、小形甕1、高環形2	石器9
79	94住	// 帙北	隅丸方形	不詳	大部分用地外、柱穴1	土坑3・5重複		小甕1、環形1	石器1
80	95住	// //	方形状	不詳	大部分用地外			土師器片	石器6
81	9住	D2B1	隅丸方形	碓粘土製	昭和28年竈検出、その後破壊、焼土確認	105住重複		環形1(大形甕・小形甕形出土)	石器8
82	105住	// E2	隅丸方形	粘土製	溝址と土坑で破壊、9住の上に貼り床 柱穴2、貯蔵穴1	9住・建物址6 竪穴重複		碗形1、環形土器1	石器26
83	106住	// C1	方形状	不詳	大部分用地外、深い掘り方	132住重複		小形甕形半完1、土師器片	石器3
84	107住	// I2	隅丸方形	碓粘土製	浅い掘り方、一辺7m、主柱穴3 1/3用地外、竈天井石原形、煙道溝で破壊	建物址11重複		甕形1、甕形1、小形甕形2、 環形1、高環形1	石鏃2・石匙1 石器31
85	108住	// L1	隅丸方形	碓粘土製	3/4用地外、竈粘土壁直、煙道残存 主柱穴2、竈周辺土器集中	125・127・129住重複		甕形1、小形甕形1、鉢形1、 碗形2、高環形6、白玉1	石器6 菰手石8
86	110住	// U3	隅丸方形	焼土	浅い掘り込み、一辺8m、焼土塊多 周囲にテラス、主柱穴不詳、特殊性	112・130住、 建物址15重複		甕形半完2、小形甕形2、環形3 高環形脚部1	石器28
87	111住	// P1	不詳	不詳	耕作攪乱、一部床面確認・他は不詳	112・113住重複		大形土師器片・須恵器片	石器6
88	113住	// R1	不詳	不詳	大部分用地外、西側壁一部確認	112住重複		土師器片・須恵器片	石器9
89	115住	D3A1	隅丸方形	不詳	3/4用地外、西側壁・床面確認	114・121住重複		大形須恵器片(1個体)土師器片、ミニ1	
90	116住	// C1	方形状	不詳	大部分用地外、掘り込み不詳			土師器片	石器3
91	117住	D1W1	隅丸方形	碓粘土製	3/4用地外、深い掘り込み、竈・煙道 配管溝で破壊、集石周辺土器集中、柱穴2	建物址4-P34重複		甕形1、小形甕形4、碗形2、 環形6、高環形1。縄文土器片36	石製嘴1 石器
92	121住	D3A3	隅丸方形	碓粘土製	深い掘り込み、火災炭化材・茅炭化材 竈崩れ、深い柱穴4、深い貯蔵穴 浅い穴に土器配置	114・115住、 建物址8重複		甕形3、甕形1、小形甕形2、 環形2、ミニ1、土鏃1、土製分銅1 炭化茅材、前期土器片	石器20
93	122住	// 東	不整形	焼土	竈不詳、焼土を持つピット列、 凹みに土器集中、特殊竪穴	126・128住、土坑 重複		甕形3、甕形3(大2・小1)碗形1 小形甕形2、環形9、高環形1 小鉢1、須恵器蓋坏2	石器15
94	123住	// 西	隅丸方形	碓粘土製	深い掘り込み、火災炭化材、焼土多 竈全面配管溝で破壊、煙道口に平石蓋	131住、建物址10・14 重複		甕形1、遺構良好ながら 土器片の他完形土器少、中葉土器片	石器23
95	124住	// 西	隅丸方形	不詳	3/4用地外、深い掘り込み、貼り床 黒色黄色の厚い等独特覆土			環形半完1、高環形半完1	
96	126住	// 東	円形状	不詳	不整形円形の落ち込み、半分用地外	122住重複		遺物は122住に包括	
97	128住	// 東	方形	不詳	大部分用地外、形態不詳	122住重複		土師器片	
98	129住	D2N1	隅丸方形	焼土	3/4用地外、浅い掘り込み、炭・焼土 多、竈不詳(崩れ?)	108・125住重複		甕形2、小形甕形1、環形土器2	
99	130住	D2R2	隅丸方形	粘土製	竈崩れ粘土塊、火災の材・焼土、 深い柱穴4、深い貯蔵穴、菰手石集中3か所	111住の下		甕形、環形土器1 土製紡錘車1	菰手石46
平安時代									
100	44住	FQ5	隅丸方形	不詳	3/4用地外、深い掘り込み、焼土充満・焼石群			灰釉陶器碗形2、同環形土器4、土師器	
101	71住	FC3	楕円状	焼土	配石・焼土、周辺方形配列ピット群	53・61住 建物址21・22重複		灰釉陶器環形土器2、土師器片	



第5图 B·C地区遺構全体図



第6图 D·E·F地区遗构全体图

Ⅲ. 調査の結果

1. 調査区と調査方法

自然環境・経過の項で触れたように伊久間原台地は、北側のハマイバ台地の幅200mほどを除いても1000m余の長さがある。昭和52年の畑灌水用パイプ敷設工事に伴う立入り調査の結果、南側やく500mの範囲に住居址が集中すると推定されていた。遺構集中状態を推定して第Ⅱ期工事予定地900mの範囲の内を、南側では地形状況により、ほぼ50m単位にA・B・C・D・E・F地区とし、北側450mの範囲は横切る道路を境にして、それぞれ100mほど毎に南側からG・H・I・J地区に分けている。用地幅はほぼ10mあるので、道路センターを基準にして、東側から1・2・3・4・5・6列に分けている。道路予定地10mの他に、畑灌水用本管敷設替えのあるところは12mほどの調査幅があるが、G地区から北は用地事情もあって道路敷だけに留まっている。

遺構集中推定状況から、B・C・D・E・F地区は現道路面を排除して全面発掘調査、G～Jは拡幅部分を試掘調査して、遺構発見が多い時は全面発掘調査をすることにした。結果は当初のような状況となり、B～F地区は全面発掘調査が行われ、各地区とも縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の住居址・建物址・竪穴址・土坑等が多く発見されている。

2. 調査結果の概要

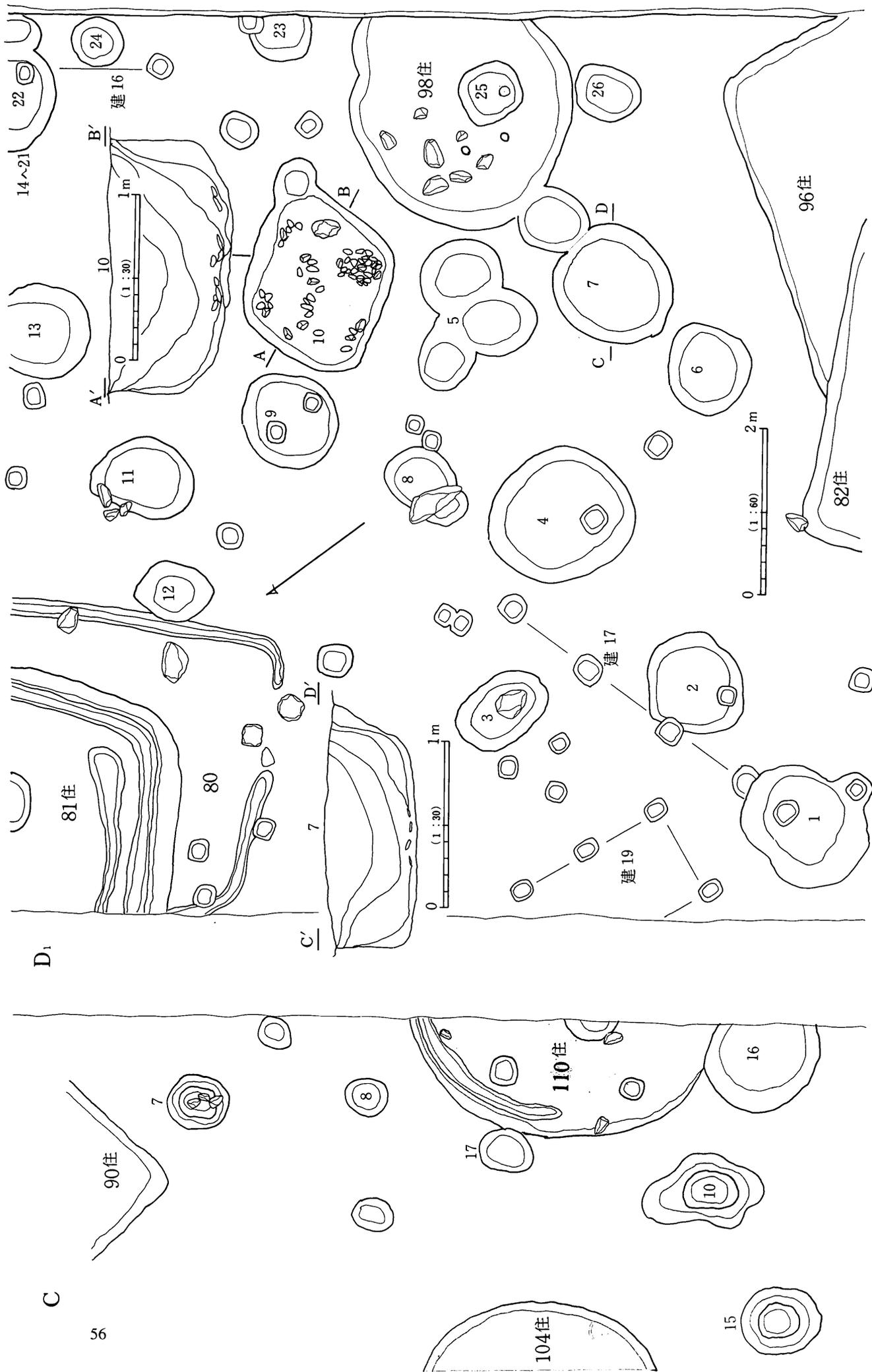
遺構・遺物が集中的に検出されたのはC・D・E・F地区で、時期的にみると縄文時代早期末・縄文時代前期初頭・縄文時代中期中葉・同後葉・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の多岐にわたっている。それぞれの遺構の種類と概数は、縄文時代早期末土坑3基、縄文時代前期初頭住居址8軒・土坑と竪穴6基、縄文時代中期中葉住居址16軒・同時期以降の土坑と竪穴169基、縄文時代中期後葉住居址39軒、弥生時代住居址4軒・囲溝址1基、古墳時代住居址32軒・建物址21棟、土坑1基、平安時代住居址（含工房址）2軒・建物址1棟・土坑3基、中世溝址1、近世以降工房址1軒・溝址5以上で住居址数は101軒に及んでいる。

3. 検出された遺構・遺物

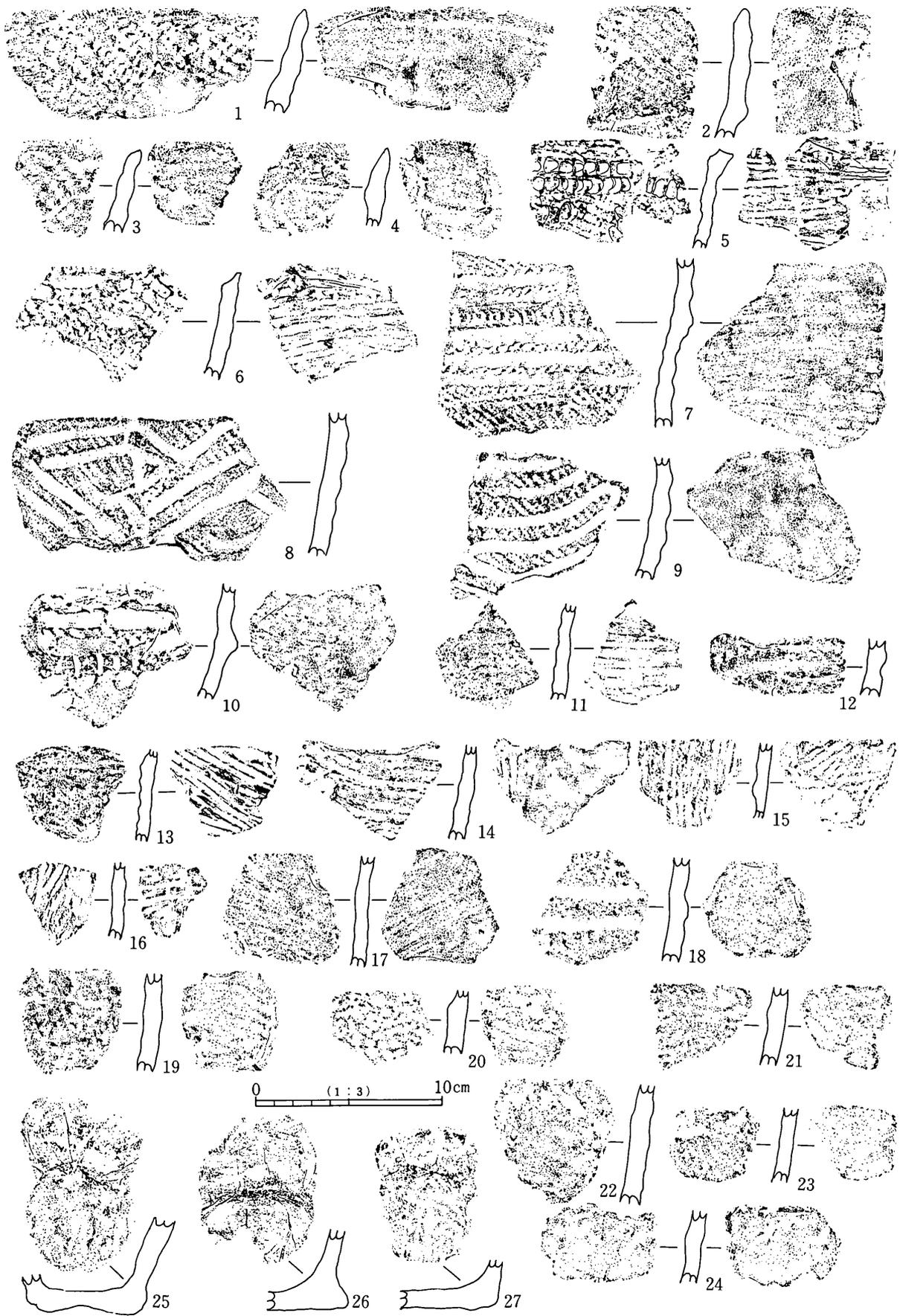
(1) 縄文時代早期の竪穴

① C地区土坑10 (図7・8)

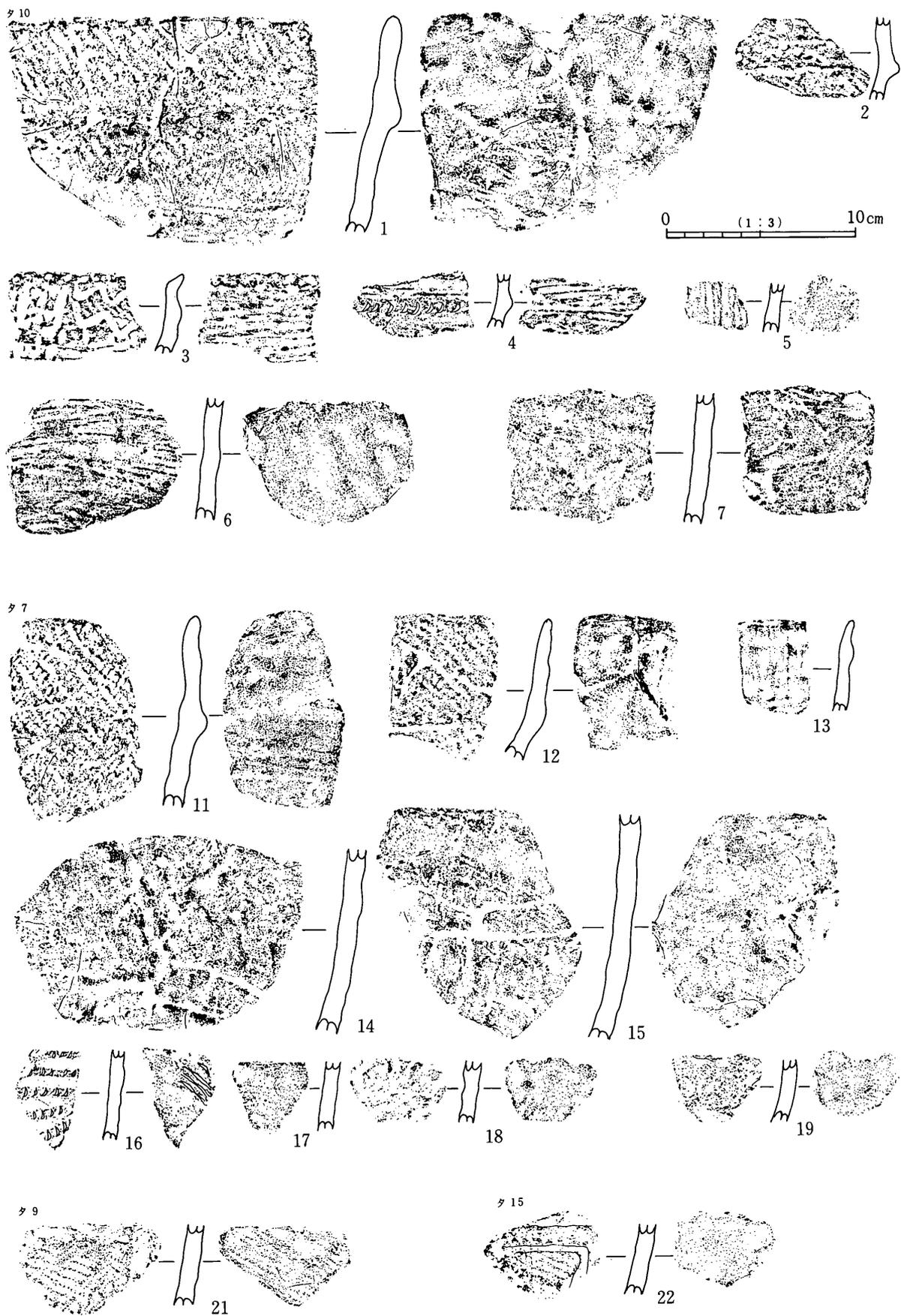
C地区西南隅に近く、101号住居址と104号住居址の中間に、径1mほど・深さ60cmの竪穴状の土坑で、掘り方は筒状に近い。上層30cmほどのところに人頭大の石が3個が置かれ、その周辺と下層から条痕文系の土器片が48点出土している。覆土は炭混じりの黒色砂質土が堆積し、焼土は発見されていない。図8の土器がそれで、大きめの斜縄文・隆帯に連続刺突文や爪形文を配するもの・太い沈



第7图 D·C地区竖穴址·土坑群



第8图 C地区土坑10出土土器



第9图 D1地区竖穴址10·7·9·15出土土器

線で斜交または蛇行区画を構成する等があり、裏面に横走、斜走の条痕文が付くものが多く、文様・形態から2～3個体の土器片が含まれている。石器は横刃形4・丸石2、黒曜石剥片26点出土している。土器形式は茅山系の土器と思われ、D1地区の堅穴10出土の土器に類似し、昭和52年の立入調査により、南側の土坑からも同様の土器片が出土している。

② D1地区堅穴10 (図7・9)

D1地区南側のL5辺りの堅穴で、径1.9×1.8m・深さ73cmの大きな方形に近い堅穴で、底に近く拳大の集石がある。大形な口縁破片のほか10数点の土器片が底近くの壁寄り3か所から出土している。覆土は上層は黒色砂質土・中層は茶褐色土・下層は黄褐色粘質土である。

図9の1～7が出土土器片で、斜縄文・連続刺突文の口縁・条痕文で裏面は条痕文、無文の厚手のものがある。C地区の土坑10の土器片と類似する茅山系か鶴ヶ島台系の土器と思われる。

(この以後、土坑・堅穴と呼び名の違うものがあるが、大きな違いはない。調査過程で、大きめなものは堅穴、小さめなものは土坑と登録したものである)

③ D1地区堅穴7 (図7・9)

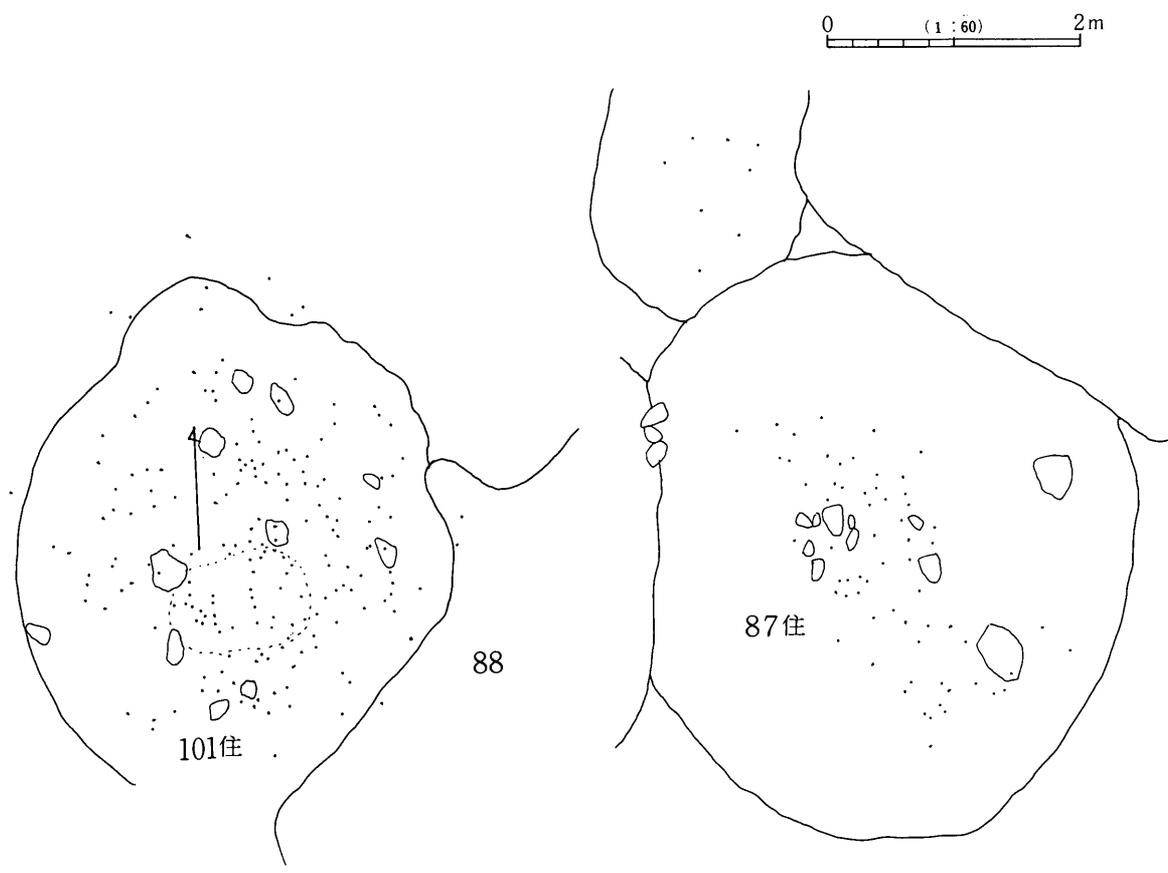
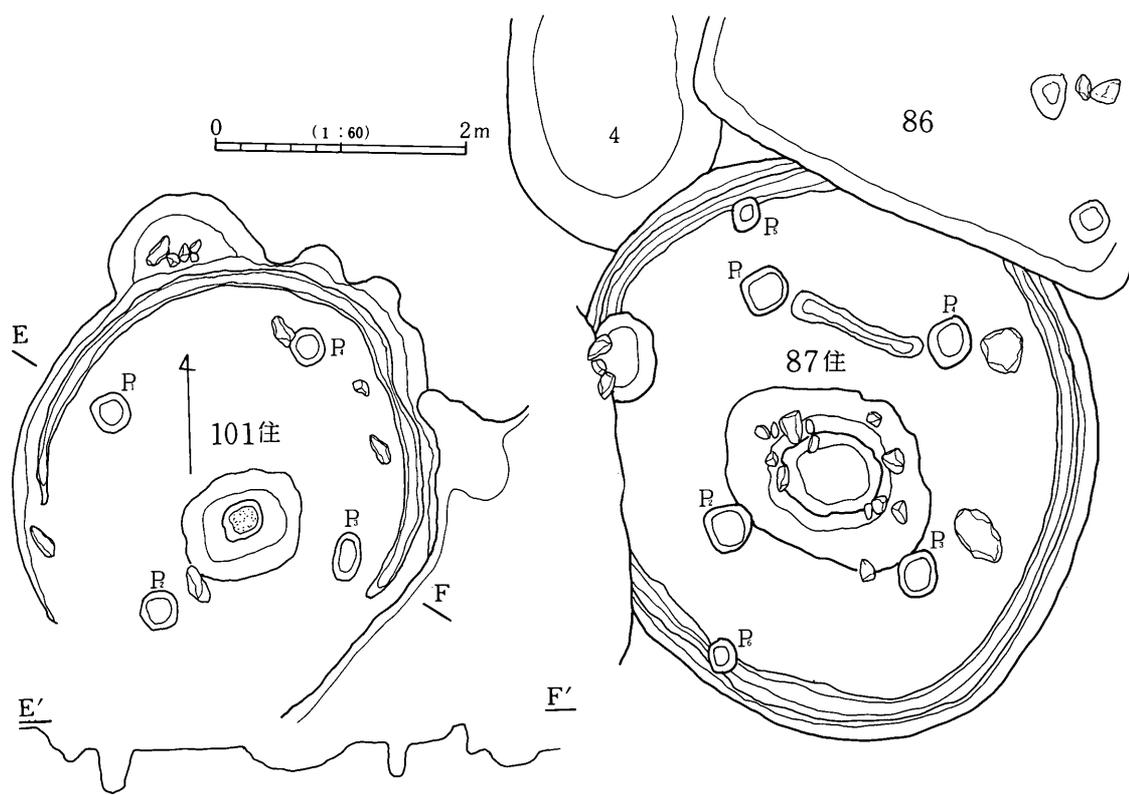
堅穴10の2m南側にあり、径1.1m・深さ51cmの円形堅穴で、穴底に口縁・胴部の大形土器片が5点、中層から前期土器片が数点出土している。9図の11～15はC地区土坑10・D1地区堅穴10と同類の早期茅山系か鶴ヶ島台系の土器である。同様の土器片は堅穴9・15からも出土している。

(2) 縄文時代前期の住居址・土坑

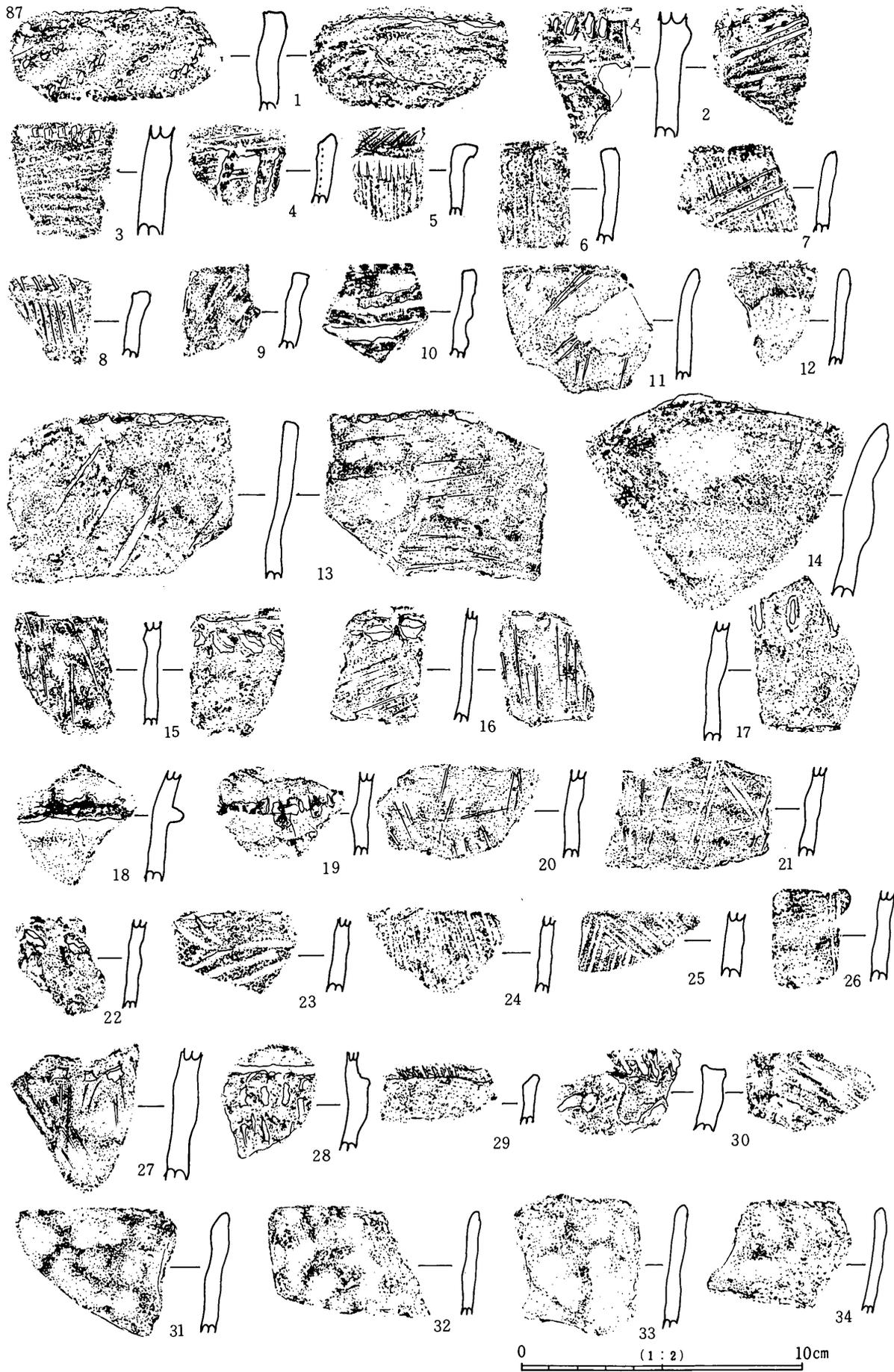
① 87号住居址 (図10、写図4)

C地区の西側中央付近、86・89号住居址に重複されて検出されている。プランは長径4.6m・短径4.1m、深さ35cmの楕円状の堅穴住居址で、中央やや南寄りに70cm幅の地床炉があり、数個の石が取り巻いている。柱穴は炉を取り巻くように4個検出され、壁沿いに補助柱穴が2個検出され、深さ10cmほどの周溝が取り巻いている。床面は比較的硬いが、凹凸の多い床である。

土器片は地床炉の周りに集中し(10図)150点ほど出土している。11図の1～3は繊維を含む厚手の土器で、横・斜の連続刺突文・口縁隆帯に縦の沈線文のあるもの・表裏に条痕が施文される。4・10は薄手のもので細い粘土紐の隆帯に条痕・条線で刻むもの。5・8・30は平坦な口縁部に斜走の沈線が並び、口辺は縦の条線が付けられている。7・9・11・12は薄い口縁に浅い刻みが付き、斜走または交差する条線が付くもの。13は口縁が指頭押圧された波状口縁で、無文を主体にして間隔の広いための斜沈線文が並ぶ。裏面は横走の細い条線が付けられる。14は無文・厚手のもので、波状口縁の高所が残っている。15～29は縦・斜の条線・竹管文の付く仲間で、口縁に近く刺突文が並ぶもの、隆帯に刺突文が組み合わされたものがある。31～34は無文の口縁で、指頭圧痕の著しいものである。上伊那地方の中越タイプの土器と思われる。



第10図 87・101住居址



第11图 87号住居址出土土器

石器は石鏃4（92図4～7）・石匙1（19図17）・打石器横刃形石器28・黒曜石片80個が出土している。

② 101号住居址（図10・11・92、写図4）

C地区西側、88号住居址と重複している。プランは径やく3.4m・深さ北側で40cmほどの円形竪穴住居址で、中央やや南側に、径90cm・深さ30cmほどの凹みの底に焼土を持つ地床炉である。南側は88号住居址の煙道で切られ、北西は土坑・ピットで切られている。柱穴は炉を取り巻くように4個方形に並び、周溝は北から馬蹄形に残っているが、南側は不詳である。床面は柔らかくはつきりしなかったが、土器片・炭の面から判断している。

土器片の出土は多く、286点出土している。12図1は朱彩された土器で、平坦に作り出された波状口縁で、貼り付けられた折り返しが明瞭である。頸部にも太めの粘土紐の貼り付けがあり、斜走の沈線文で刻まれ、裏は無文であるが、指頭圧痕がよく残っている。2・5～7・19・22・23は無文薄手の口縁に押圧・刻みのみられるものもあるが、はつきりしないものが多い。3は薄いが折り返しの口縁で、その下に粘土紐の貼り付けによる文様構成がみられるが、刻みは付いていない。8は縦に爪形が組み合わされて鎖状に垂れ下がり、その上に刺突文が並ぶように思われる。9も似たタイプである。10～17は刺突文の並び、縦・横・斜走の細い条線で施文されたもので、11を除くと非常に薄いものも多く指頭圧痕が目立つものが多い。24～33は無文薄手のものであるが、よくみると細い条線の付くものもある。

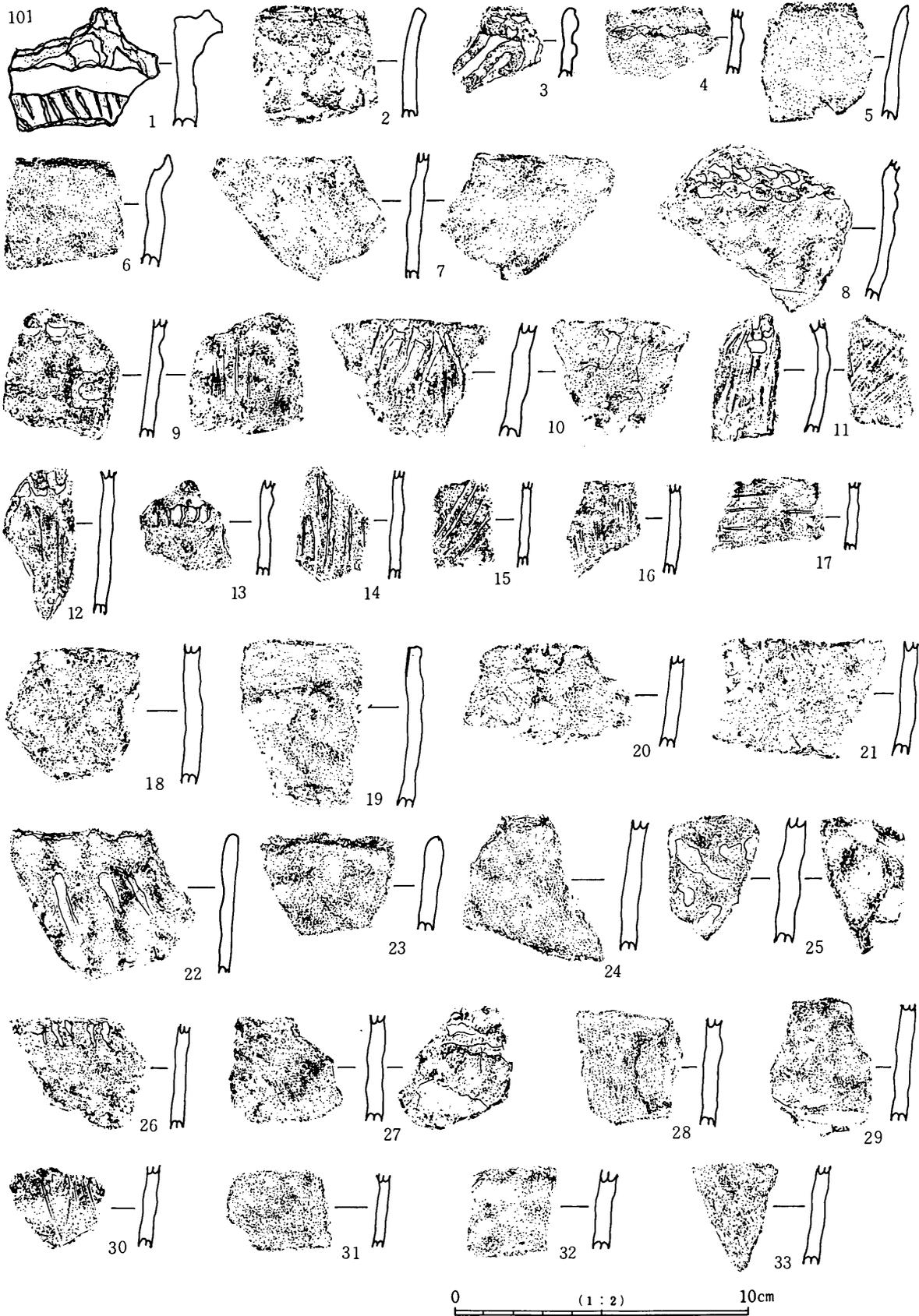
石器は、石鏃6（92図10～15）・打石斧横刃石器32・黒曜石片124点が出土している。

③ 100・102・103・104号住居址（図13）

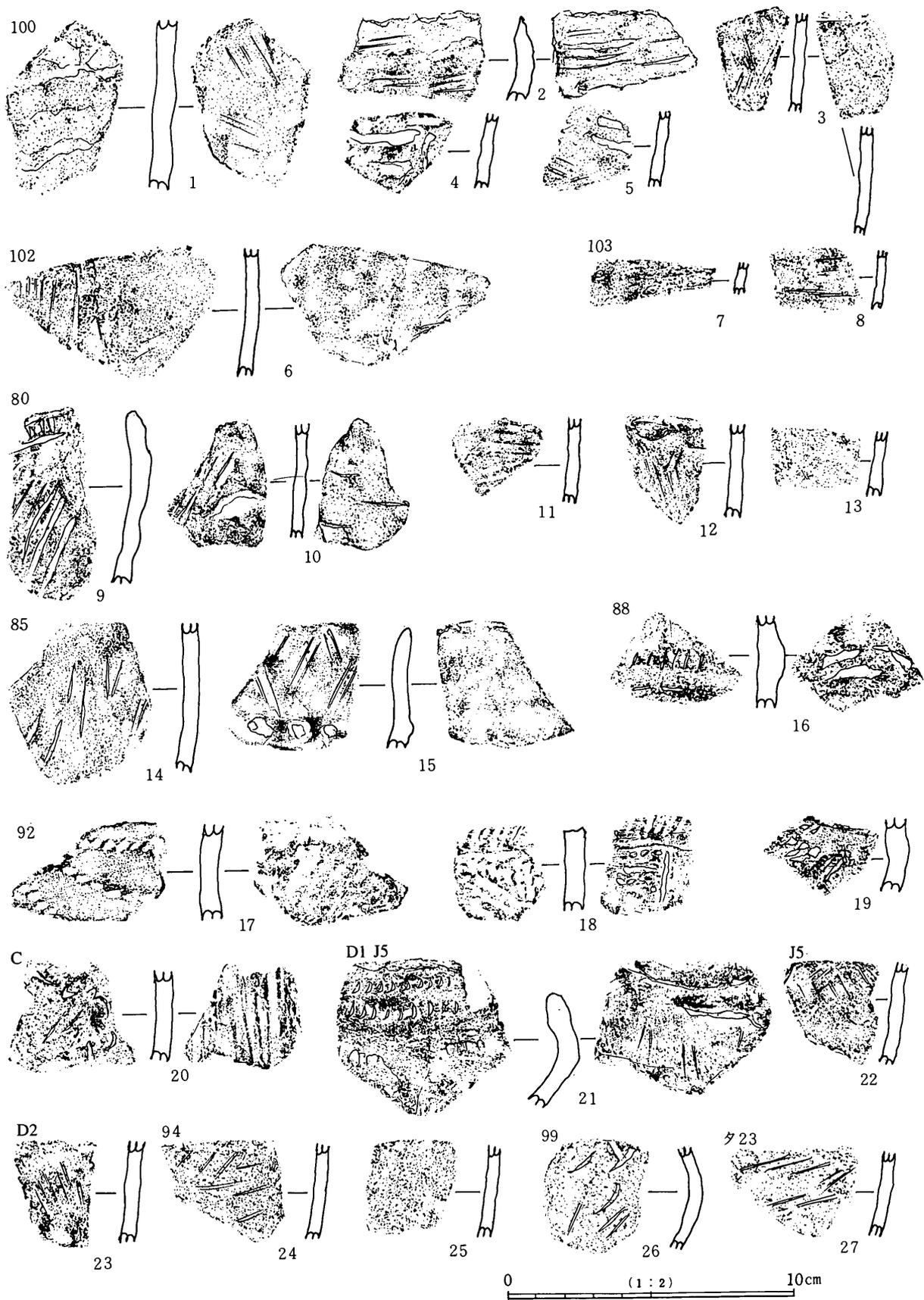
C地区南側一帯で、それぞれが大部分用地外にかかり、一部検出された住居址である。100号住居址は中央部に近い北側で85・86号住居址や土坑と重複しているのはつきりしないが、前期の土器片が集中的に出土したので、住居址に登録してある。102号住居址は、100号住居址に西側、89号住居址に切られて円形の浅い掘り込みが確認されている。土坑4・6等の重複があるのはつきりしないが、前期土器片40点ほどが出土しているので住居址と登録されている。103号住居址は、C地区中央南側の用地境で一部検出された竪穴で、方形に近い円形の掘り込みが一部検出され、前期土器片が60点ほど出土している。104号住居址は101号住居址の西側、92号住居址に大部分切られた竪穴で、92号住居址の覆土を含めて40点ほどの前期土器片が出土している。残された掘り込みは1m足らずであるが、数個の人頭大の集石と比較的大形の土器片が出土している。

それぞれの土器片が13図に採録されている。該当する住居址と、その近くの住居址の覆土から出土したものも含まれている。先の87・101号住居址出土の土器片に類似したものが多い。

拓本には採録されていないが、B・C・D1地区でも、前期の土器片の出土したところが多いが、遺構としては、B地区では土坑33・34・37・38・39であり、C地区では土坑1・2・6・12がある。D1地区では竪穴1・4・10・11・12・13・14・17・20・21・23・24・25・26・27等と81号住居址とその周辺である。



第12图 101号住居址出土土器



第13图 100·102·80·85·92号住居址出土土器

④ 114号住居址 (図14・17・92)

D2地区W3辺りに110・115・121号住居址に切られた径4.8m・20cmほどの円形の竪穴住居址である。中央やや西北寄りに人頭大以下の集石があり、僅かに焼土がある。これを取り巻くように6個の柱穴が検出されている。床面等ははっきりしないが、上層から黒曜石小剥片の出土が多く、土器片も70点ほど出土している。

17図には比較的大形の土器片を採録してある。1～15は口縁または口辺に刺突文・刻み・指頭押圧文が施された口縁と口辺で、1は連続刺突文の下に竹の鋭い工具で交差する沈線文が描かれている。2は口唇に刻みが付き刷毛目状の細い条線が表裏に付く。3は口縁に刺突文が付き、縦に押し引きによる鎖状模様が付く。表裏の沈線文は1に類似している。6は頸部に貼り付けた隆帯を刻みのある工具で押圧した文様が並び、表裏ともに指頭圧痕が顕著に残っている。9は口辺の貼り付けに山形状に刻みの付く口縁かと思われる。16～21はごく薄手の土器で、横・斜の細い条線が施されている。22は表は無文で凹凸が目立ち、裏は不整の条痕文が施文され、繊維が含まれる。10～26は無文で指頭圧痕が顕著な土器で、わずかに細い条線の形跡が残るものもある。

石器は石鏃7(92図50～56)・石匙1・黒曜石片234点が出土している。

⑤ 119号住居址 (図14・15・16、写図5・6)

D1地区北側XW5辺りで、120号住居址・建物址1・2・4と重複して検出された竪穴住居址で、長径6.1×6.0m・深さ60cmほどの円形プランで、中央付近に2mほどの範囲に焼き固まった床面がある。建物址2の柱穴と重複しているためにはっきりしないが、地床炉があったものと思われる。柱穴と思われる径30cm以下のピットが、40個以上竪穴内を取り巻いている。40cmほどの深いものを柱穴候補にしているが、穴の大きさ・位置・深さ等から抽出するとP1～P13を挙げるができる。通常の主柱穴と思われる径40cm以上のものは、建物址の柱穴の他は見当たらない。方形状に取り巻く小ピット群が、主柱穴かと思われる。周溝は途切れるところがあるが、壁際を取り巻き、北西側には内側にも周溝があるので拡張された形跡がある。東側が畑灌水パイプ本管の溝で破壊されているので不詳なところがあるが、最初の竪穴は4.0～4.5mであったが、西南へ拡張されたように思われる。床面は焼き固められたこともあるが非常に硬く平坦である。平状の石が多いのも特徴で、6個以上床面に接して置かれていた。

土器片の数も非常に多く、小片を合わせると800点余になる。15図の1～34は全部口縁である。1～22は口縁または口唇部に刺突文・刻み目の付くもので、1はごく薄手で波状口縁の様相があり、口縁に僅かに刻みの痕跡がある。口縁沿いに指頭圧の凹みが並び、その中に斜めの刻みがあり、頸部は無文で表裏ともに指頭圧痕が顕著に残る。2は口唇に縦の刻みが付きその下は斜の条痕文がある。3は口縁が平たく斜の刻みが付けられ、口辺を横3本の凹みを回し、その上に交差する条線で飾り、隆帯を竹状工具で削り取る凹みが並ぶものである。11は口縁にかけて縦の太い隆帯が貼り付けられ、細管工具により刻み目が並び、縦の刻みが付いている。貼り付けの突起を含めて口縁に縦の刻みが付けられている。18は頸部に粘土紐を貼り付け縦の刻みがある隆帯の上に横、下は交差する細い条線が付いている。他のものは、斜または横の条線が付けられたものが多い。23～34は主として無文の口縁で

あるが、中には斜・横の条線が薄く付くものもある。16図の土器は1～28は刺突文・刻み目文・横斜の条線の付くものであるが、特異なものは2・10・11である。1は肩部に隆帯が貼り付けられ、その上下を横・斜の刺突文、縄文様の押し引き文が並ぶもので、繊維が含まれ、裏面はよこの条痕文が付けられている。10は薄手の土器に縦の隆帯が貼り付けられ、押圧の凹みが並ぶ。11は横・くの字状の粘土紐の貼り付けの上に縦の細い条線が付けられている。29～37は主として無文の土器片であるが、条線が施されているものもある。30は穿孔されたもの、31は指頭圧痕の著しいもので、斜走る線が3本並ぶ。33は中央焼土の床面から出土したこの住居址最大の土器片で、表には細い短い条線がみられ、裏は整形時の指頭圧痕が横並びで、沈線文状の並列がみられる。37は砲弾形の底で、今回の調査地では唯一の底である。土器様式はG地区の87・101号住居址、D2地区の114号住居址と同様、縄文時代前期初頭の東海形のまたは中部地方中越式系のものと思われる。

石器は石鏃10(92図24～38)・石匙4(19図4～7)・スクレーパー4・打石器92・黒曜石剥片324点が出土している。

⑥ D2地区 堅穴・土坑 (図126・18)

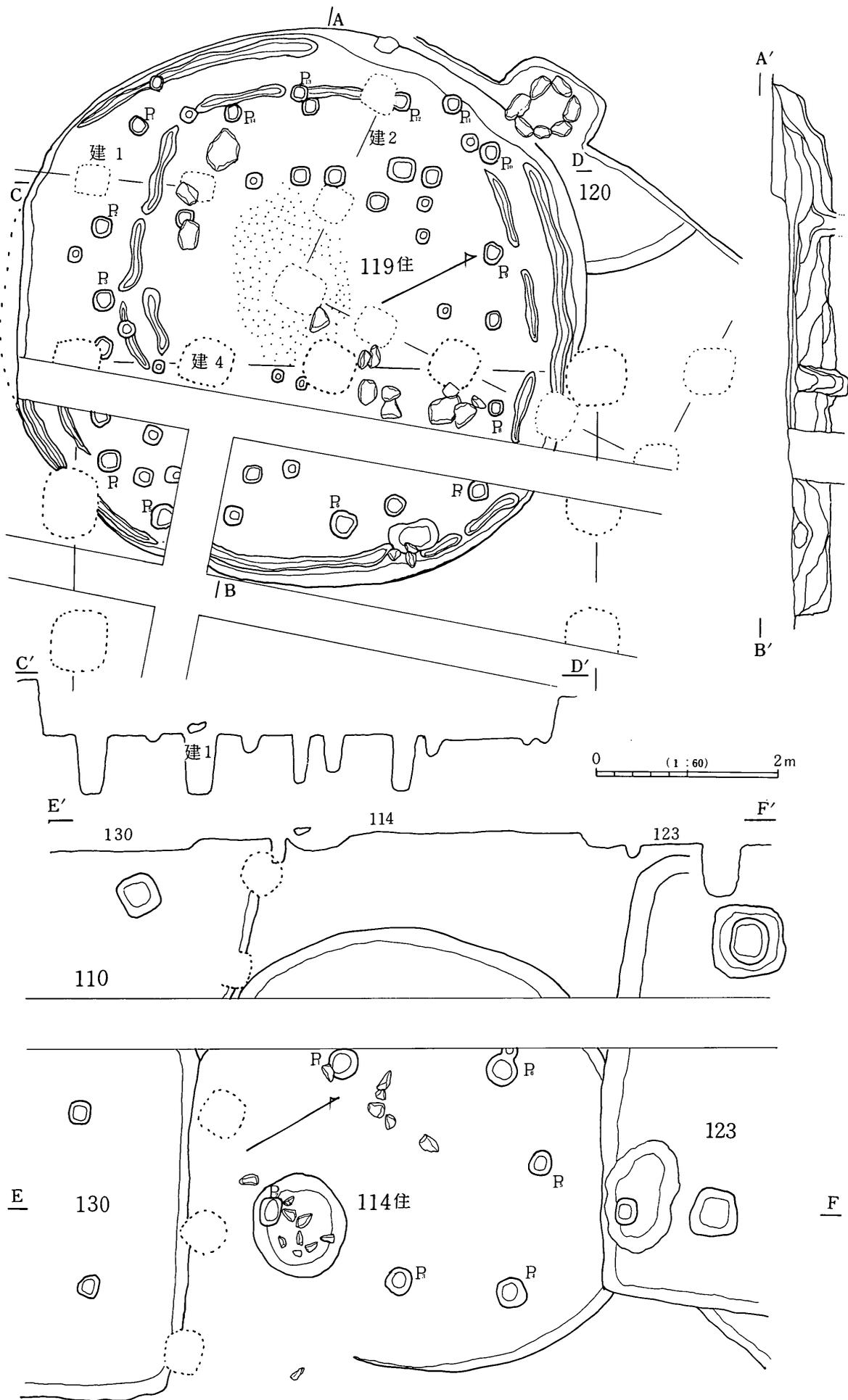
D2地区西側一帯には、前期の土器片を伴出した堅穴・土坑が多い。G4周辺の土坑10・11・12・13であり、M・N列辺り、建物址7・11、125号住居址周辺に大きく掘り方の深い堅穴址がある。前期の土器片が複数出土したものは土坑11・12、堅穴1・2・7・11・12である。

土坑11はG4にあって、径80cm・深さ62cmの碗状に掘られた土坑で、坑底に近いところから前期土器片5点が出土している。近くの堅穴1でも4点出土している。建物址7・125号住居址周辺では堅穴7は建物址7のP4に重複し(126図)穴底から2点出土している。堅穴11は建物址7のP3に重複し、深さ80cmほど下の穴底から前期土器片10(18図8・9)ほど出土している。堅穴12は125号住居址と重複している。径やく1m・深さ75cmの筒形の堅穴で、中層から縄文時代中期中葉の土器片30点、下層から前期土器片8点(18図11・12)が出土している。

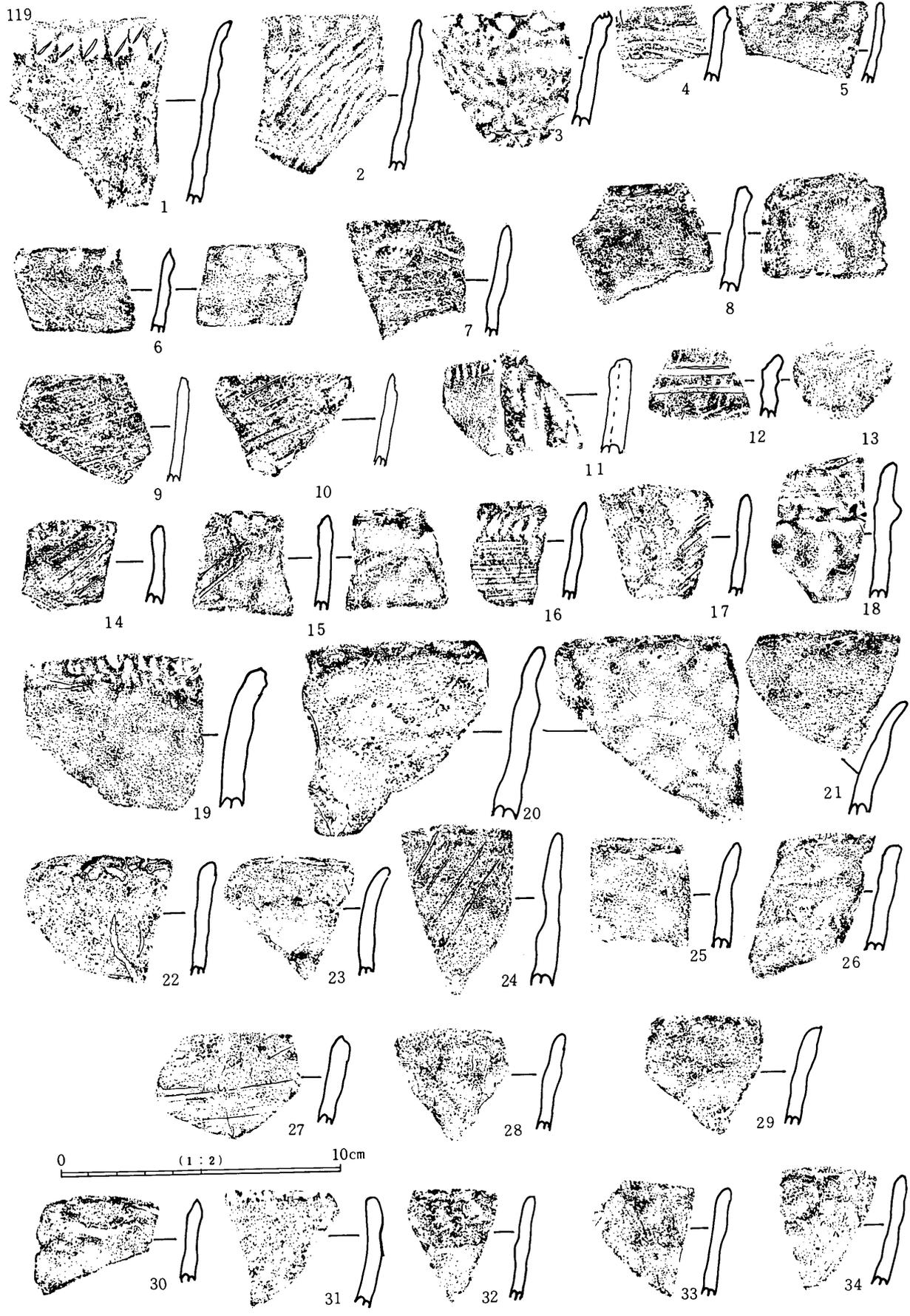
⑦ 縄文時代前期の遺構・遺物の広がり

上記のように今回の調査区の内では、縄文時代前期の遺物が多く出土したところはB・C・D1・D2地区である。B地区では遺構の確認はなかったが、全体では40点ほどの土器片が出土し、前期の遺物だけ発見された土坑は、土坑33・34であるが、前期の遺構であるかどうか不詳である、昭和52年の立入調査の記録によると、この周辺にも縄文時代前期の住居址確認の例があるので、前期の遺構があっても好いと思われる。

C地区の遺構・遺物の発見は多く、住居址と登録されたものは87・100・101・102・103・104号住居址で、確実な形で検出されたものは87・101号住居址である。土坑・堅穴の中で5点以上の土器片が出土したものは、土坑1・7・6がある。検出された古墳時代住居址からも多くの前期土器片・石匙等が出土していて、広い範囲から前期の土器片が出土している。

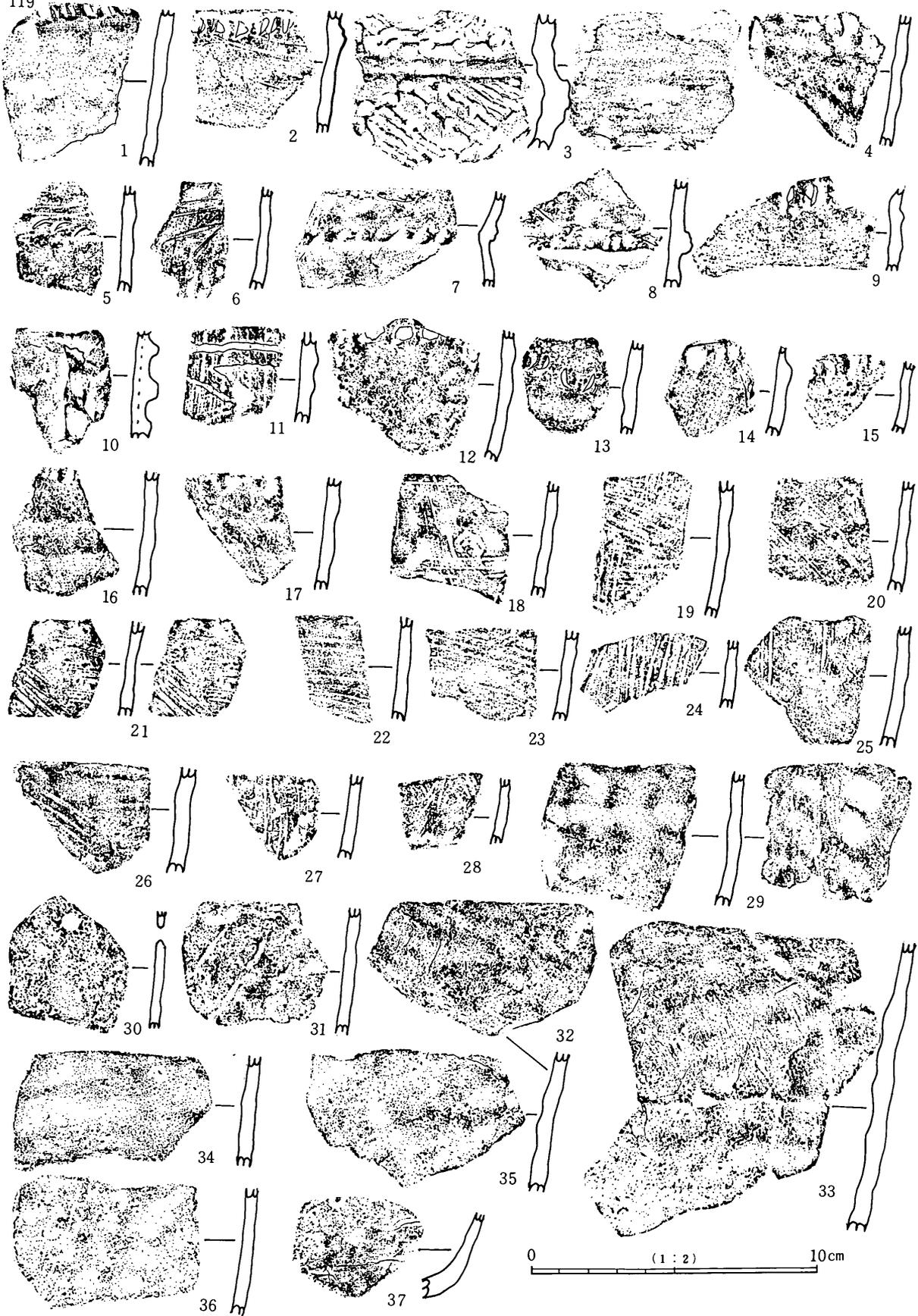


第14图 114·119号住居址

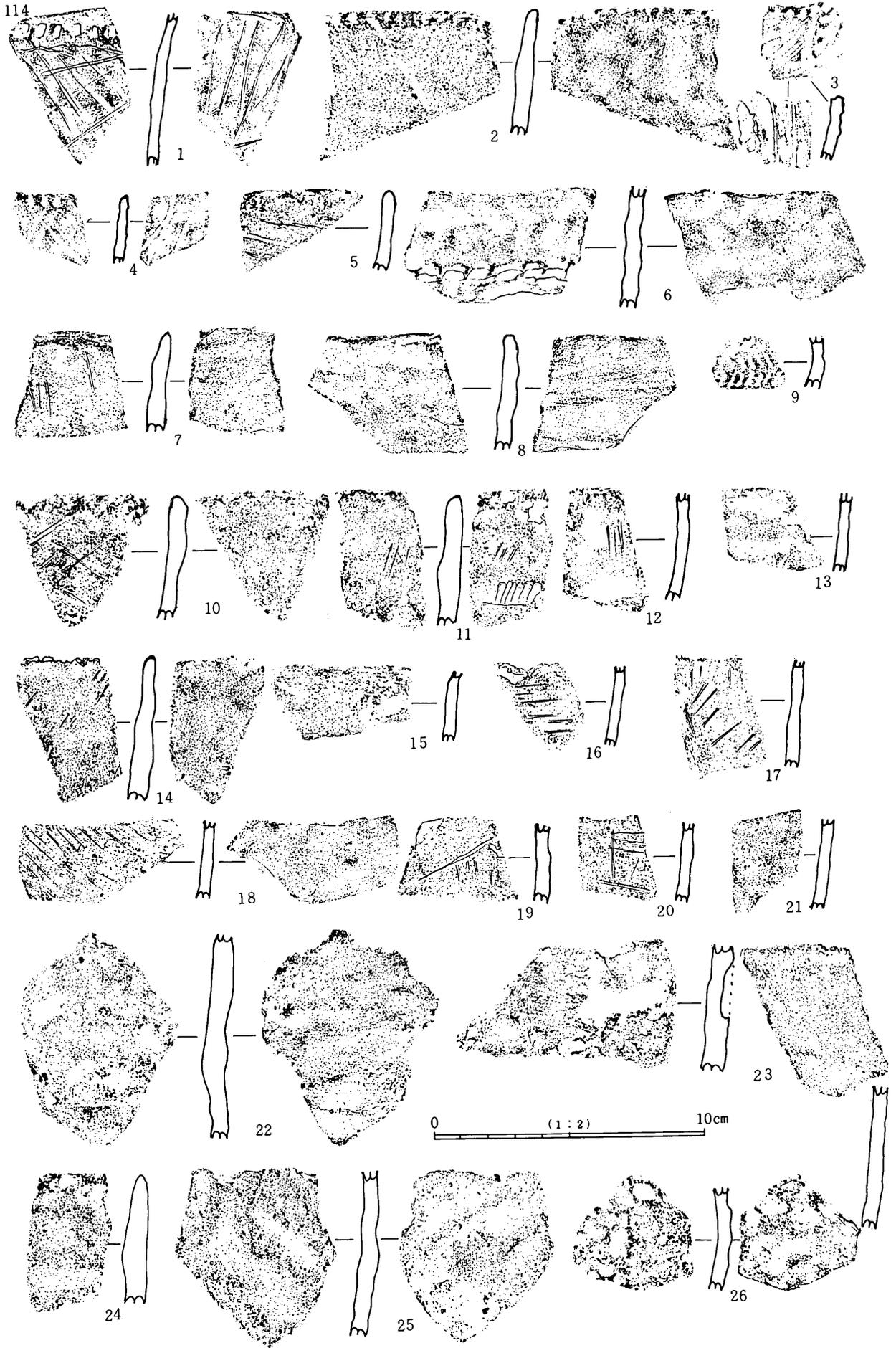


第15图 119号住居址出土土器(1)

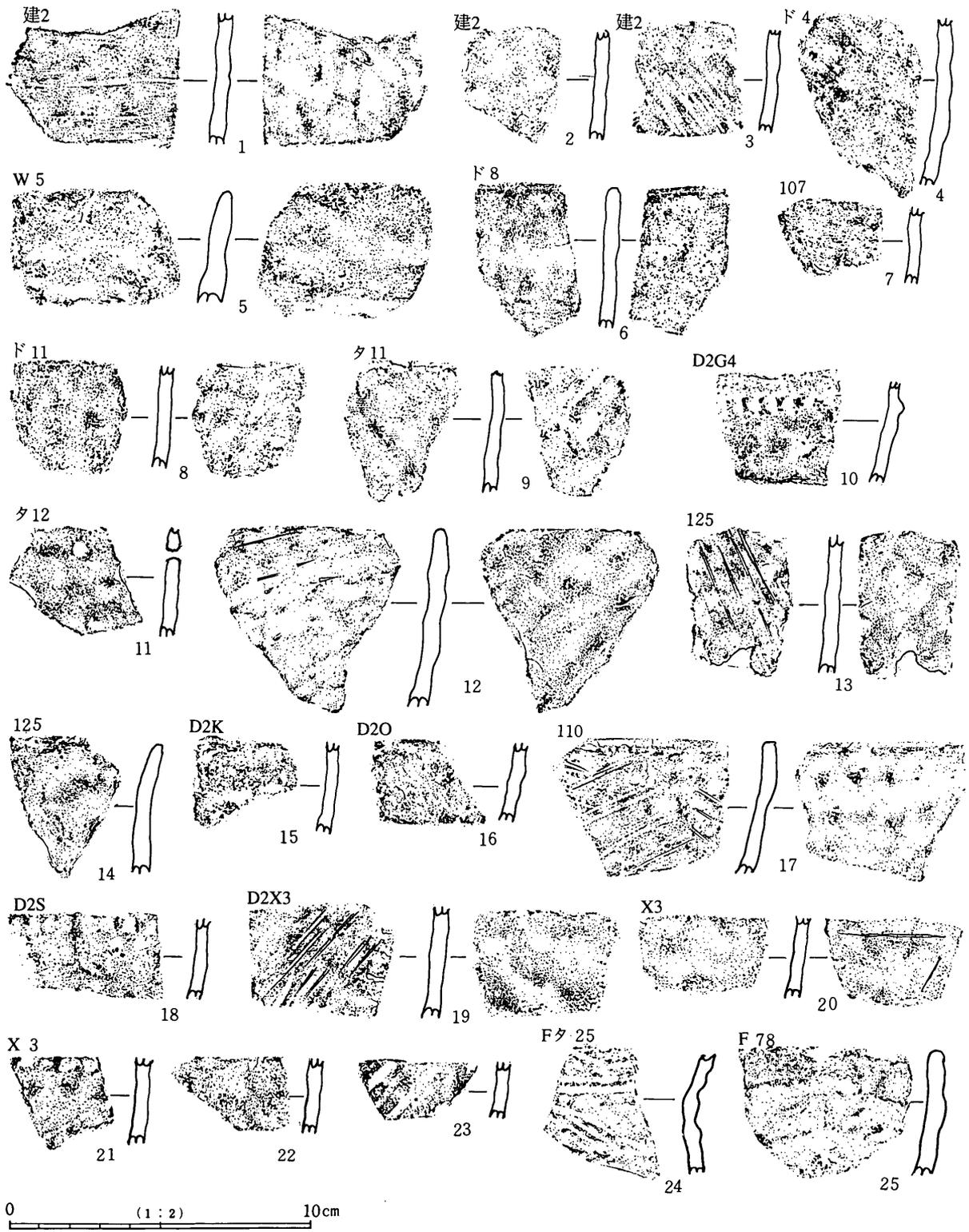
119



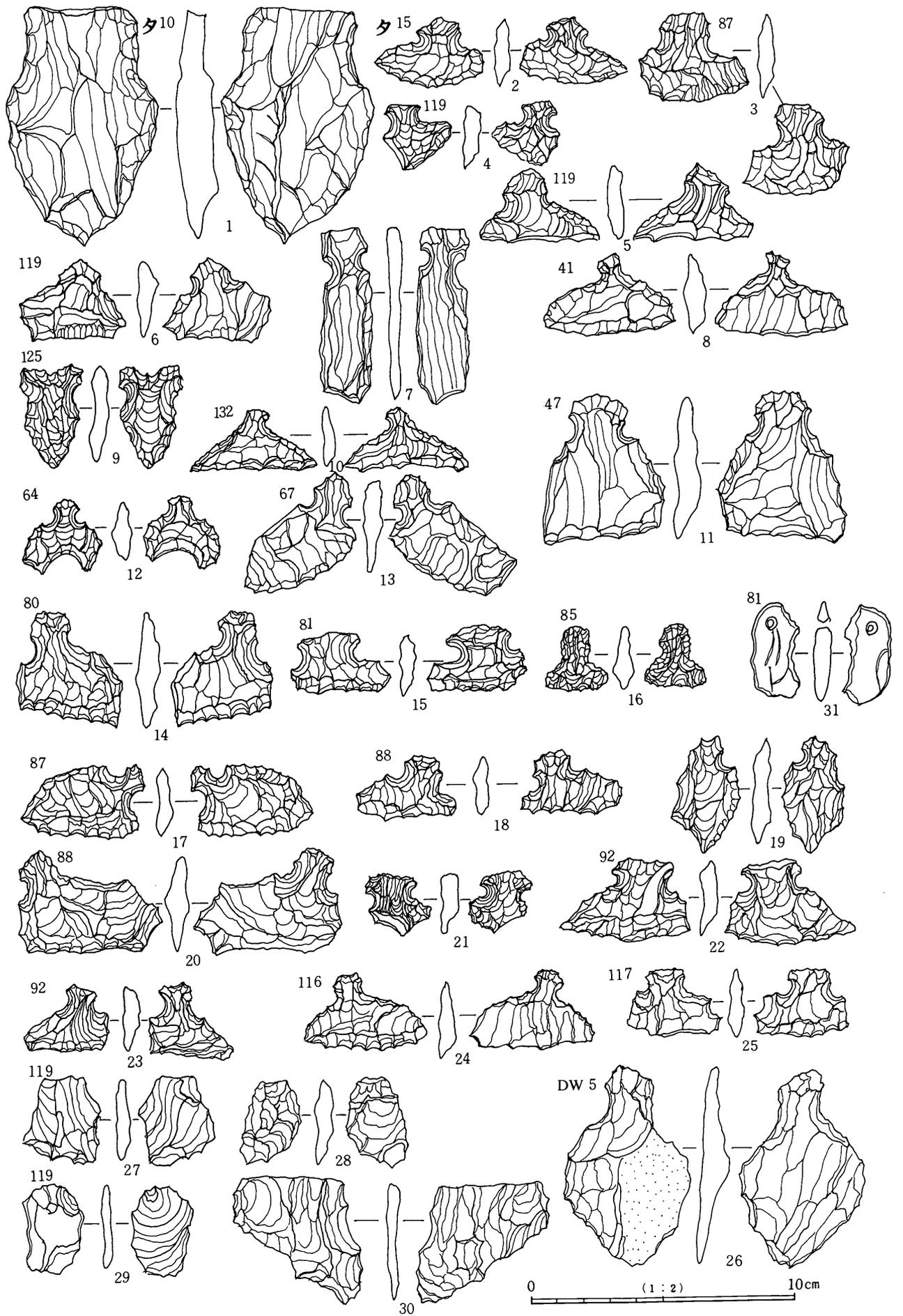
第16图 119号住居址出土土器(2)



第17图 114号住居址出土土器



第18図 建物址2・125号住居址周辺出土土器



第19図 住居址等出土石匙

D1・D2地区では、114・119号住居址が検出され、竪穴・土坑でも5点以上の土器片が出土したものは、D1地区では竪穴13・25であり、D2地区では土坑11、竪穴11・12が挙げられる。とくにD1地区では、古墳時代の住居址である81号住居址から、黒曜石剥片が93点、縄文時代前期の土器片が30点ほど出土し、住居址の東屋外から縄文時代前期の土器片の出土が多く、遺構の存在も予想される場所である。D2地区の114号住居址周辺までは多少の差はあるが全域にわたって広がっている。

D3地区からE・F地区になると、前期の遺物出土は殆ど見当たらない。F地区の北側で上層の調査をしている時に、2～3点それらしい土器片があったように思われるが、下層の調査では確認されていないので、今回の調査区では、B・C地区からD2地区までの広い範囲にわたっていることが分かる。このことは、昭和52年の畑灌用水用パイプ敷設工事に伴う立入り調査で確認された、住居址配置図(2図)によると似通った様子が伺える。記録された住居址は23軒で、今回、発掘調査したC・D1・D2地区の6軒は登録外であるから、推定される住居址の概数は28軒になる。この28軒の内訳は、F地区周辺で1軒、D2・D1地区とその周辺で5軒、C地区とその周辺で7軒、そこから南側140mほどの範囲に16軒登録されている。密度には大差ないが、南側がいくらか高いように思われるので、C地区から南側に多いように思われる。前期初頭の他に、やや時期に下がる住居址もあるといわれているが、これだけの範囲に30軒近い住居址があるとすれば、縄文時代前期の大集落があると考えられる。

伊久間原のほかに、下原地籍の立入り調査で1軒、悠生寮建設に伴う発掘調査で、縄文時代前期の住居址が7軒検出されているので、この地域の該期の集落はさらに大きくなる。

(3) 縄文時代中期中葉の住居址

縄文時代中期中葉の遺物が集中し、石囲い炉が検出された住居址は35・41・53・67・69・76・112号住居址の7軒で、埋鉢炉を持つのが125号住居址の1軒、炉・竪穴形態等不詳であるが土器が集中出土したものは、39・59・75・98・99・118・120・131・132号住居址の9軒で、合計16軒が登録されている。小振りの石囲い炉を持つものは、53・69・76・112号住居址の4軒である。67・118号住居址を除いては、後続の住居址・土坑等に切られて石囲い炉だけ残るとか、竪穴の一部しか残されているものが多い。出土する土器の種類も多様で、前葉に近い条線系の土器、区画文系の土器、竹管系・櫛刃系の土器・貼り付け文の土器等多様で、中葉の中でも時期差があると思われる。

① 35号住居址 (図20・23)

F地区P1にあって、東側は用地外、他の3方は34・40・47号住居址に切られている。中形の石囲い炉と3個体の土器集中地が確認された住居址で、竪穴は2.5mほどしか残されていない。

23図の土器で、土坑状の凹みに3個体潰れ込んでいたが、壊れが甚だしく部分実測・拓本によるもので、条線系・爪形文・区画文の土器も含まれているが、主体となるものは1～4のような櫛刃文・貼り付け文のものが大部分である。諏訪地方の井戸尻Ⅱ・Ⅲに類する時期かと思われる。

② 38・39号住居址 (図46・24・25・26、写図8・16・20・69・70・71)

F地区38号住居址の上層・F地区K2辺りの2か所から、大形な土器片が集中的に出土している。ともに竪穴の掘り込み・焼土や炉の検出もないが、大形な土器片が集中的に出土しているので、一応住居址と扱っている。38号住居址のものは、覆土中に中期後葉の土器と混在して出土しているが、39号住居址の場合は、焼土もあり、中期中葉の土器片が何か所かに固まって出土しているので、単独に独立した住居址として登録してある。

24・25図は38号住居址の上層で出土した土器で、24図の1は爪形文を施した隆帯による楕円状区画の中に半肉彫りの文様を付け、巻貝状の突起や双口把手の付く深鉢形土器の口辺部で、口径やく30cmと推定される。総体的には粘土紐の隆帯に爪形が付けられ、長方形区画を主体にしたものが多い。F地区K2辺りにやく3mほどの範囲から、大形土器片が3か所ほどから集中的に出土している。49・51・62号住居址、土坑6・7等と重複していて住居址等の形態は不詳であるが、土器の出方等から39号住居址に登録してある。

出土した土器の内1・2は大形なもので爪形文を配した隆帯の装飾と、長方形の区画文等代表的な藤内系の土器で、3～30も爪形を配したもの・区画文等も同様である。38号住居址のものと非常に類似しているが、31～34は竹管と押圧突帯の土器である。

③ 41号住居址 (図20・27)

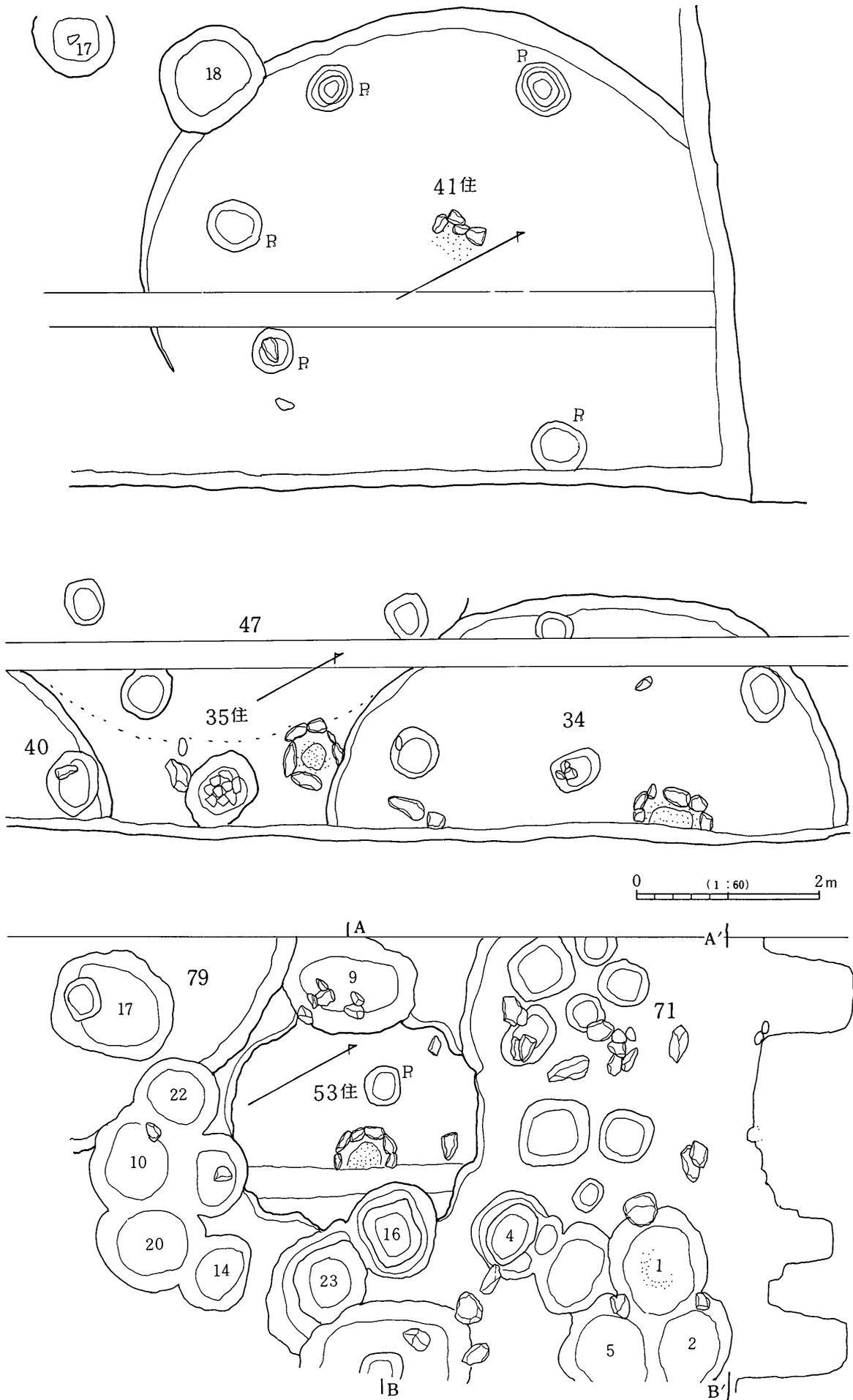
F地区の最北、W1で検出された住居址で、半分ほど用地外になるのと掘り方が浅いので、耕作の攪乱によって床面の確認が十分できなかった。中央やや西側に石囲い炉の残石4個が残り、掘り方の浅いところに焼土がある。柱穴と思われる掘り込みが5個確認されているが、P1・2は二重構造で40cmほどの深さはあるが、他のP3・4・5は20cmの浅いものである。

土器片の出土も多くなく、縄文時代中期中葉の土器片が40点ほど出土している。27図1～15は爪形文・区画文の藤内系の土器片である。石器は黒曜石を含めて30点ほど出土している。

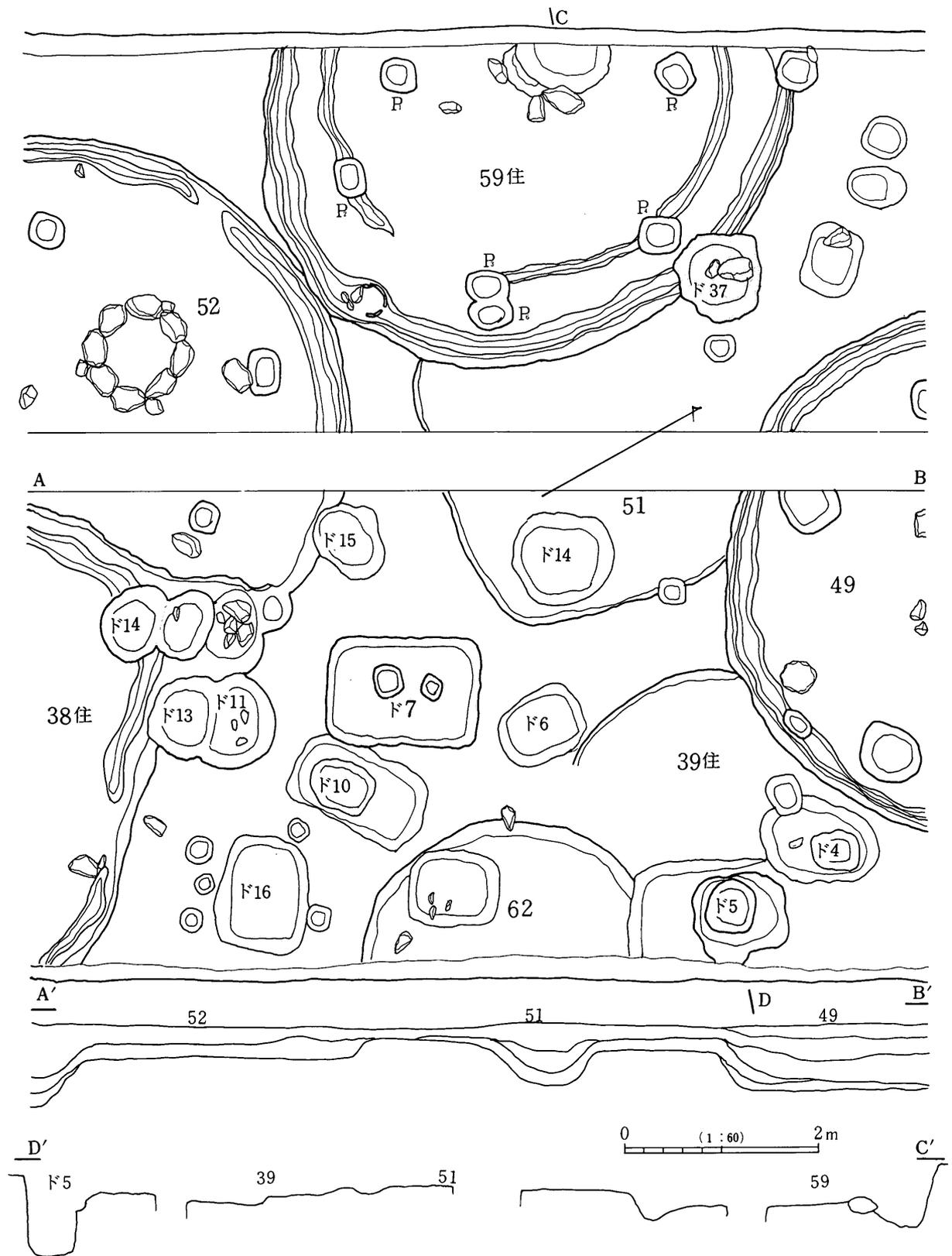
④ 53号住居址 (図20・49・29)

F地区B2で検出された住居址で、周囲を79(縄文)・61(古墳)・62(古墳)・71(平安)号住居址、竪穴9・10・16・23に切られ、2.5mほどの範囲に床面が残された住居址で、掘り込みが浅いので壁は残されていない。中央やや東寄りに6個の石が残された石囲い炉があり、大きさは55cmあって焼土が充満していた。炉の西側に2個の石があった以外は他の遺構は残されていない。

29図1～12は53号住居址、13～17は61号住居址、18～42は62号住居址、43～48は竪穴5等の出土土器である。周囲の遺構は縄文時代中期後葉であるが、53号住居址のものが混入していると思われる。土器片の大部分は藤内系の爪形文・区画文のもので、竹管文・押圧突帯も僅かに含まれている。



第20図 35・41・53号住居址



第21図 39・59号住居址と周辺の土坑

⑤ 67号住居址 (図22・30、写図12)

E地区O3辺りにある竪穴住居址で、長径6.0m・短径4.8m・深さ80cmほどの楕円形の竪穴で、中央西寄りに、水成岩6個を残す長径80cmほどの石囲い炉があり、水道管敷設により一部破壊されている。主柱穴等と思われるのはP1～P8の8個と思われる。中央付近から東側にかけて中層に人頭大以上の平石の集積があり、炉から東側にかけて焼土が厚く堆積していた。主柱穴は6本と思われるが、東側に4個ほど窪みが重なる。平状石も2個据えられているが、埋め甕は出土していない。中世以降と思われる焼土をを持つ集石遺構があり、床近くまで焼土の堆積するところがあった。竪穴が長楕円形であり、炉石の様子、出土土器から縄文時代中期中葉の住居址と思われる。

30図の土器片は爪形文・区画文の土器もみられるが、櫛形文・竹管文・押圧突帯文・粘土紐貼り付け文も含まれている。土偶が2個出土し89図11・13の胸部と大形な足である。石器は158点と数が多く、小形石棒・石鏃も出土している。

⑥ 69号住居址 (図49・31)

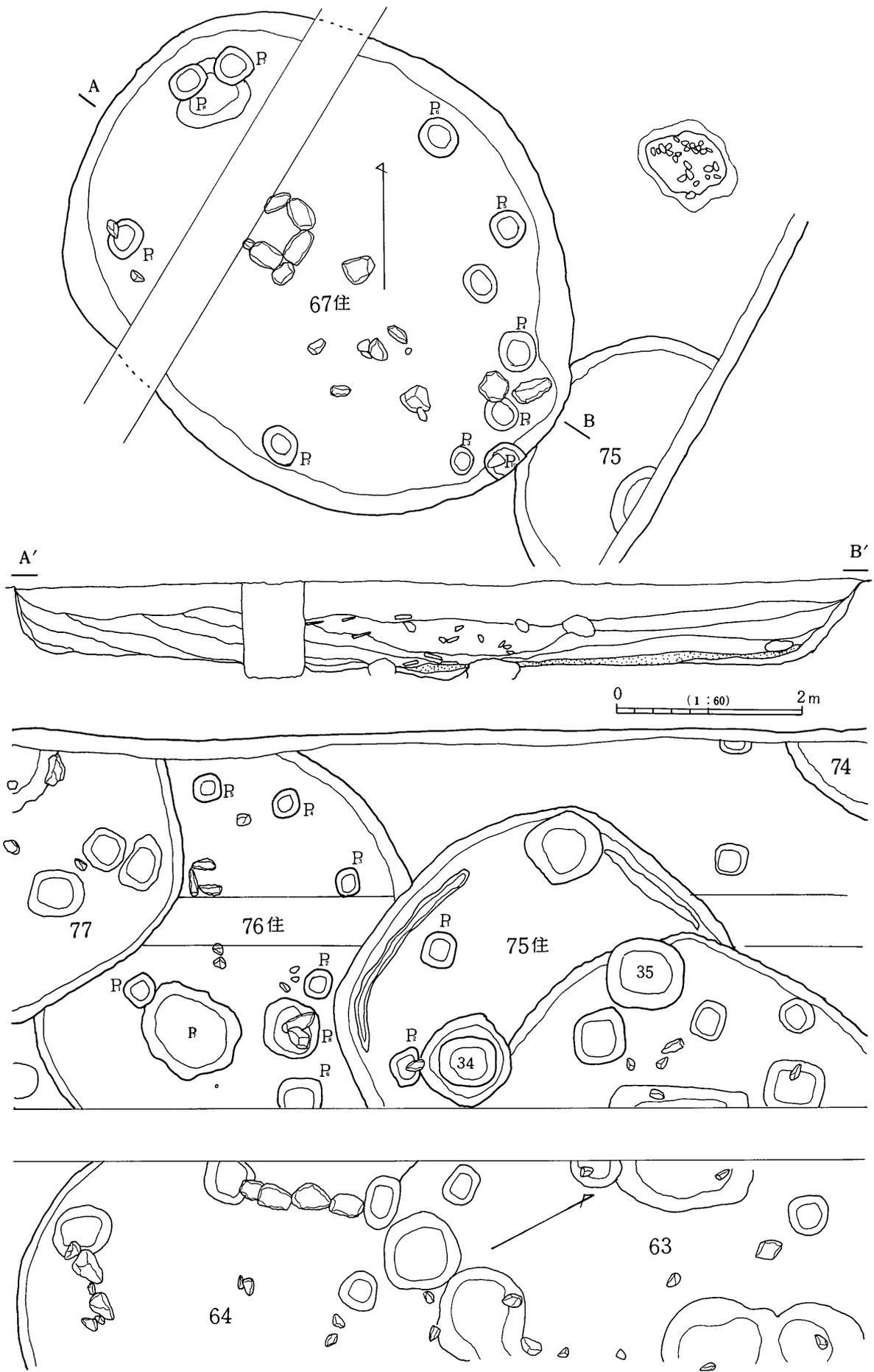
F地区B5にあって、半分は用地外、周囲は79号住居址・土坑26・27・竪穴6等に切られている。10cm程度の浅い掘り込みが検出され、3個の炉石が残る幅40cmほどの小形な石囲い炉が検出されている。小形の石囲い炉は、35・46・53・76・112号住居址にあるが、76号住居址と共にごく小さいもので、縄文時代中期中葉の古いタイプと思われる。

炉の周辺やこの付近から出土した土器片は多く、31図には藤内系の爪形文・区画文の土器も含まれているが、縦・横・斜走・格子状の条線系土器片、竹管系・櫛刃系・押圧突帯文の土器が入り組んでいる。時期ははっきりしないが、縄文時代中期中葉の古い時期のように思われる。

⑦ 76号住居址 (図22・33)

E地区R4辺りにある竪穴住居址で、西は用地外、周囲は77・64・75号住居址に切られている。10cmほどの浅い掘り込みで、残った壁でみると4mほどの竪穴で、中央西側に3個の炉石の残る幅40cmほどの小形な石囲い炉があり、その周囲を取り巻くようにP1～P5の柱穴がある。柱穴の位置からみると竪穴の大きさは3.5mほどである。東南側は63号住居址付近にかかわる深い竪穴群の重複があつてははっきりしないが、中期中葉の浅鉢形土器の完形品が出土しているので、その辺りまで竪穴は広がると思われる。

32・33図には76号住居址と、東隣の75号住居址のものが記載される。1は浅鉢形土器の完形で、口径19cm・器高9.8cmで口唇部に刻みを入れ、肩部に連続山形の隆帯は付けられ、胴部は斜縄文で飾る。双口把手に隆帯が垂下がり押圧の凹みが付く。把手は対照的に2個、その間に押圧痕の付く隆帯が貼り付けられている。中期中葉の土器と思われる。2は山形の隆帯の貼り付け、3～20・25～31は爪形文・区画文の藤内系のものが多いが、竹管文と爪形文の組み合わせ・押圧突帯文の土器も含まれている。33図のものは1～15は類似の藤内系、16～23は竹管系と押圧突帯文・粘土紐貼り付け文の土器も含まれている。31～42は隣接の75号住居址のもので、爪形文と条線文の組み合わせの土器が多



第22図 67・69・75・76号住居址

い。75号住居址のものも似通ってはいるが、76号住居址がやや古手の住居址かも知れない。

⑧ 98・99号住居址 (図17・35)

98号住居址はD1地区K5辺りの、農道2号線寄りで検出されている。平成10年のグリット掘りの時点で集石・焼土・埋鉢が浅いところで確認されている。その後、竪穴群の検出まで放置されていたので、竪穴の輪郭等ははっきりしないことが多い。東側は畑灌水本管の溝に切られ、道路下に隠れる。竪穴群のために輪郭がはっきりしないが、径2.7mほどの竪穴で西側一帯は焼けた床面があり、土器が2個据えられていた。土器の周りに集石があったり、焼けた床面が検出されているが、炉かどうか確認されていない。柱穴その他の遺構も確認されていない。

35図1は、据えられていた土器の一つで、口径やく19cm・残存部の器高15cmで底部は欠損している。口縁はやや内湾し粘土紐貼り付けによる格子目・楕円同心状に輪を描き、口縁まで貼り付けあげている。4か所に粘土紐を交差しながら隆帯に貼り付けた把手が付く。胴部は把手から垂れ下がる貼り付け隆帯の区画の中に並行条線が縦に付けられている。2は粘土紐貼り付けによるH・O形の隆帯に刻みを入れ、その間を横・縦の竹管文が施文される深鉢形土器の口縁部である。4～31の土器は、粘土紐の貼り付け・竹管文・櫛刃・刻みの付く隆帯等で構成される、諏訪地方の井戸尻タイプの土器群である。99号住居址は輪郭その他の遺構が確認されていないが、98号住居址の10mほど北側にある。竪穴群・建物址等との重複が多く、住居址の遺構は確認されていない。出土土器は記載されていないが、98号住居址のものと類似の土器片が多い。

⑨ 112号住居址 (写図19)

D2地区T2辺りにあり、110・130号住居址に切られている。5個の石による長径50cmほどの石囲い炉が検出されている。ピット・輪郭等ははっきりしないが、竹管系の土器片が40点ほど出土しているので、中葉のグループに登録してある。

⑩ 118号住居址 (図125・36・37、写図6)

D1Y2辺りで検出された円形の竪穴で、119号住居址に隣接し、建物址4・5・20のピットや大形な土坑と重複しているので、検出の困難な住居址であった。掘り方は20cmほどと浅く、径3mほどの円形竪穴住居址であるが、焼土の確認の他は、小さなピットは数個検出されているが、建物址20のピットとの区別が困難であった。

土器の出土は多く、3か所から集中出土するところがある。36・37図の土器で、1～3の条線系の土器もあるが、多くは貼り付け隆帯を刻むもの・櫛刃状のもの・竹管または条線で施文するもの・粘土紐貼り付け文のものが多い。周囲の土坑の土器も含まれていると思われるが、諏訪地方の井戸尻系の土器が多いと思われる。

⑪ 125号住居址 (図126・34・39、写図7)

D2地区N2辺りにあって、108・127・129号住居址、建物址7のP3・4、竪穴12等との重複が多く、径4mほどの円形竪穴住居と思われる。掘り方も20cmと浅いので、床面等の確認が困難であった。中央やや南側に、深鉢形土器の胴部が埋められた炉が検出されている。この炉は、40cmほどの凹みの中に土器が埋められ、土器の周囲・中には焼土が充満している。柱穴と思われるピットは5個確認されている。(図中太線のピット)

出土する土器の数は少ないが、39図1は埋鉢で口縁が僅かに残り、底部を欠くもので、口径推定28cm・残部器高17cm・胴部最大幅27cmの大形な深鉢形土器である。口縁がやや外反し摩滅しているが、平たい口縁に刻みの痕跡がある。口縁から胴部にかけて斜走の大きめな縄文が施文される。縄文時代前期黒浜系の土器のように思われる。2は口縁僅かに外反しながら立ち上がり、口縁と口唇に並行する条線で刻む。口唇に近く横走する4本に条線・その下は斜走する並行条線・さらに7本の横走の条線で飾り、肩から胴部にかけては炭手状の沈線文が垂れ下がり その間にまばらな羽状縄文が付いている。3～24の土器は2と同様な条線構成のもの・縄文と条線の組み合わせのものがある。10は文様形態から前期のように思われる。

条線系の古いタイプと思われる土器をまとめたものが34図である。この125号住居址が最も多く、69・75(含76)号住居址で、土坑で言えば土坑20・21で、75号住居址に近いところにある。

なお、D2地区119号住居址の西側に120号住居址がある。用地外に石囲い炉があるので、地権者横前さんの了解を得て検出したものである。14図にある炉で、7個の石で取り囲む径70cmほどの石囲い炉である。炉の周辺や119号住居址の上層から粘土紐貼り付けや櫛刃文の土器片(38図1～45)が多く出土している。炉の形態・横から出土した深鉢形土器が縄文時代中期後葉のものだから、後葉の仲間にしてあるが、中葉の遺構がここにあったかもしれない。

⑫ 131号住居址 (図116・40)

D3地区の最北、フルーツパークの前に、123号住居址・建物址14に切られた住居址で、径2.8m・深さ20cmほどの竪穴住居址である。土器が集中的に出土しているが、炉や柱穴等は確認されていない。土器は40図の1～29であるが、1～18は爪形文・区画文を主体にしたもので、藤内系の土器である。21～29は竹管系・押圧突帯の土器である。藤内系の土器を伴う住居址はここから北側E・F地区に38・39・53号住居址があるが、今回の調査区ではここから南のD1・2、C地区には見つからない。

⑬ 縄文時代中期中葉の土坑

数多い土坑・竪穴の中で、縄文時代中期中葉のものとする材料が乏しいが、中期中葉と思われる土器・土器片が多く出土した土坑・竪穴を挙げると、B地区では土坑37、C地区では土坑8、D1地区では竪穴20・21・25、D2地区では土坑1・2、D3地区では竪穴12、E地区では土坑20、F地区

では土坑7等で、住居址の広がりよりさらに範囲は広い。

41図はB地区土坑37の遺物である。摩滅ぎみのものが多いが、口縁折り返しの複合口縁に縄文が付くもの・縦または斜走の並行条線が付くもの・胴部の粘土紐の隆帯に刻みを入れるもの等、縄文時代中期中葉の土器片が出土している。

42図はC地区土坑8の土器群で、4は鉢形土器完形で、口径18cm・器高10.5cmで折り返しの複合口縁に刻み目が並び、半円形の連続刺突文・並行する縦の刺突文肩部に押圧突帯文が並び、へこみに並行する斜の刻みがある。1～3の口縁は無文であるが、辺部に三角刺突文または並行条線が付き、押圧突帯文の深鉢形土器の口縁部である。5～24は同様の隆帯に刻み・押圧突帯に連続刺突文・刺突文等の土器片である。

43図はD地区土坑1・2の土器で、1は土坑1の小形な深鉢形土器で、口径やく15cm・器高21.5cmで、口縁を丸く刻み口辺から胴部くびれまでは縦の条線、胴部から底近くまでは交差する条線が付く。4は土坑1の隆帯に刻みの土器、6～8は土坑2の隆帯に刻みの付くもの、9～20は粘土紐貼り付けの土器で、土坑1にも3のような貼り付けの把手がある。

⑭ 縄文時代中期中葉の住居址の配置

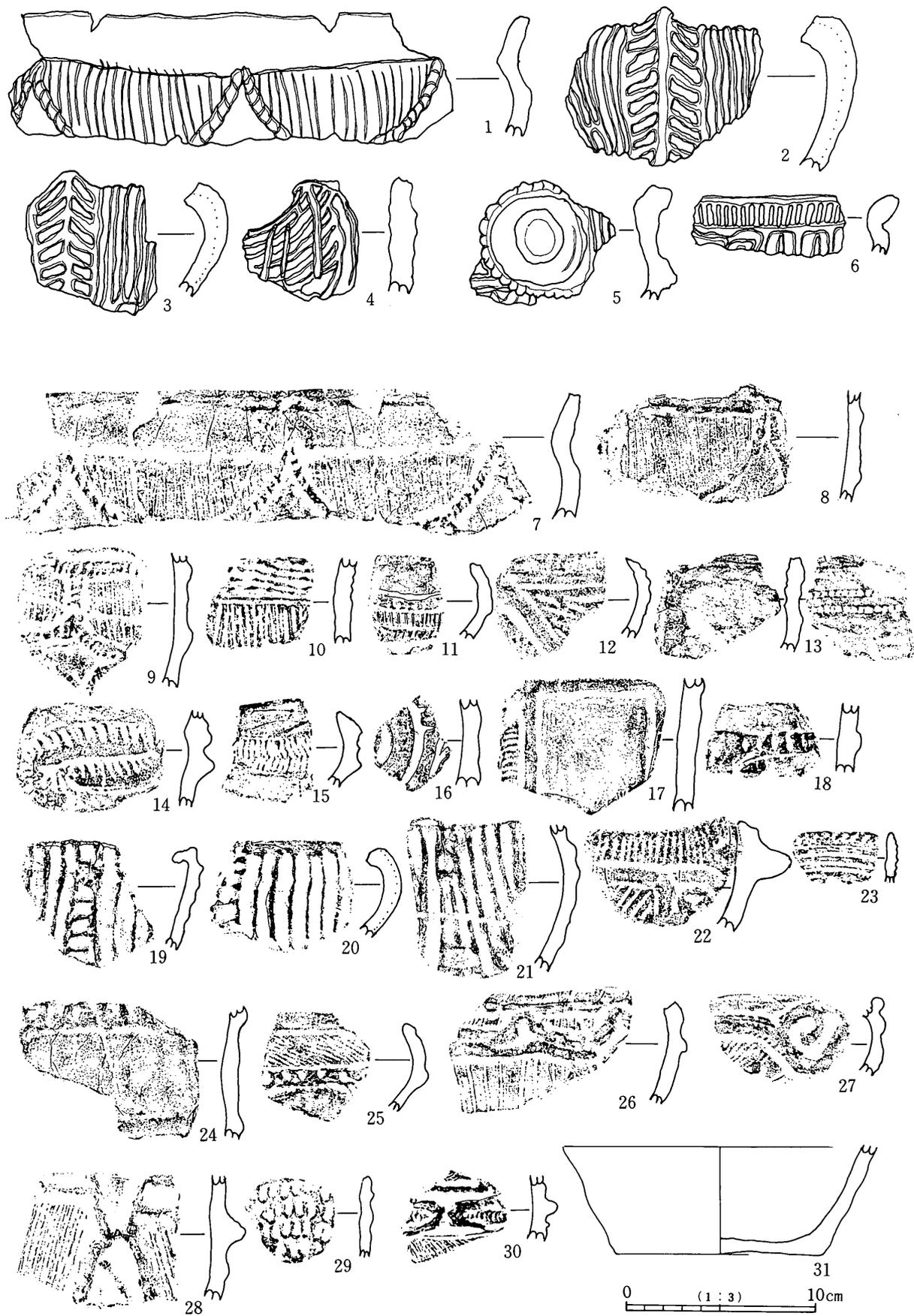
縄文時代中期中葉の住居址・類似の住居址は16～17軒ある。炉の形態・土器の形態から大まかに3時期に分けるとすれば、1. 条線系の土器を持つもの、2. 爪形文・区画文を主体にするもの、3. 粘土紐の貼り付け・櫛刃文を主体にするものである。1のタイプは、69・75・76・125号住居址の4軒、2は、(38)・39・41・53・131号住居址の5軒、3は35・59・67・98・112・118・120号住居址の7軒で、不詳なものは132号住居址と思われる。

1の条線系の土器を持つグループは、E地区からD2地区までの範囲、2の藤内系の土器を持つグループはE・F地区とD3地区の北側に限定される。3の粘土紐貼り付け・櫛刃系の土器を持つグループは、E・F地区からD1地区までの広い範囲に広がる。土坑・竪穴の土器をみると、1のタイプはB地区にもあり、3のタイプはC地区まで広がることになる。

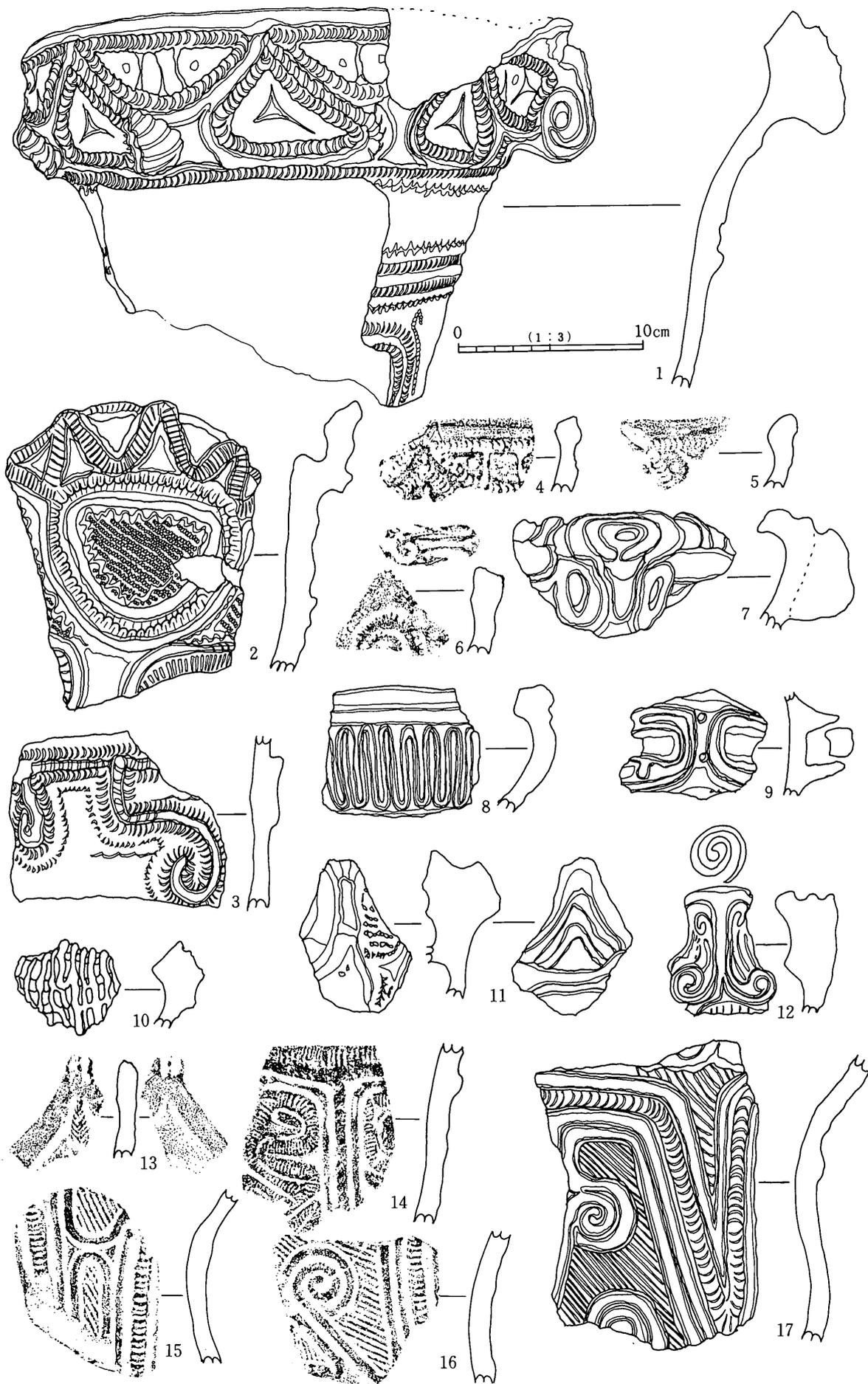
今回の調査区で言えば、土器の形態の違いはあるが、北側のF地区から西南側のB地区まで散在的ではあるが、縄文時代中期中葉の住居址・土坑等が検出されている。昭和52年の立入調査の記録では、さらに南側からも中期中葉の住居址が所在しているので、相当に広い範囲に集落が構成されていると思われる。

(4) 縄文時代中期後葉の住居址

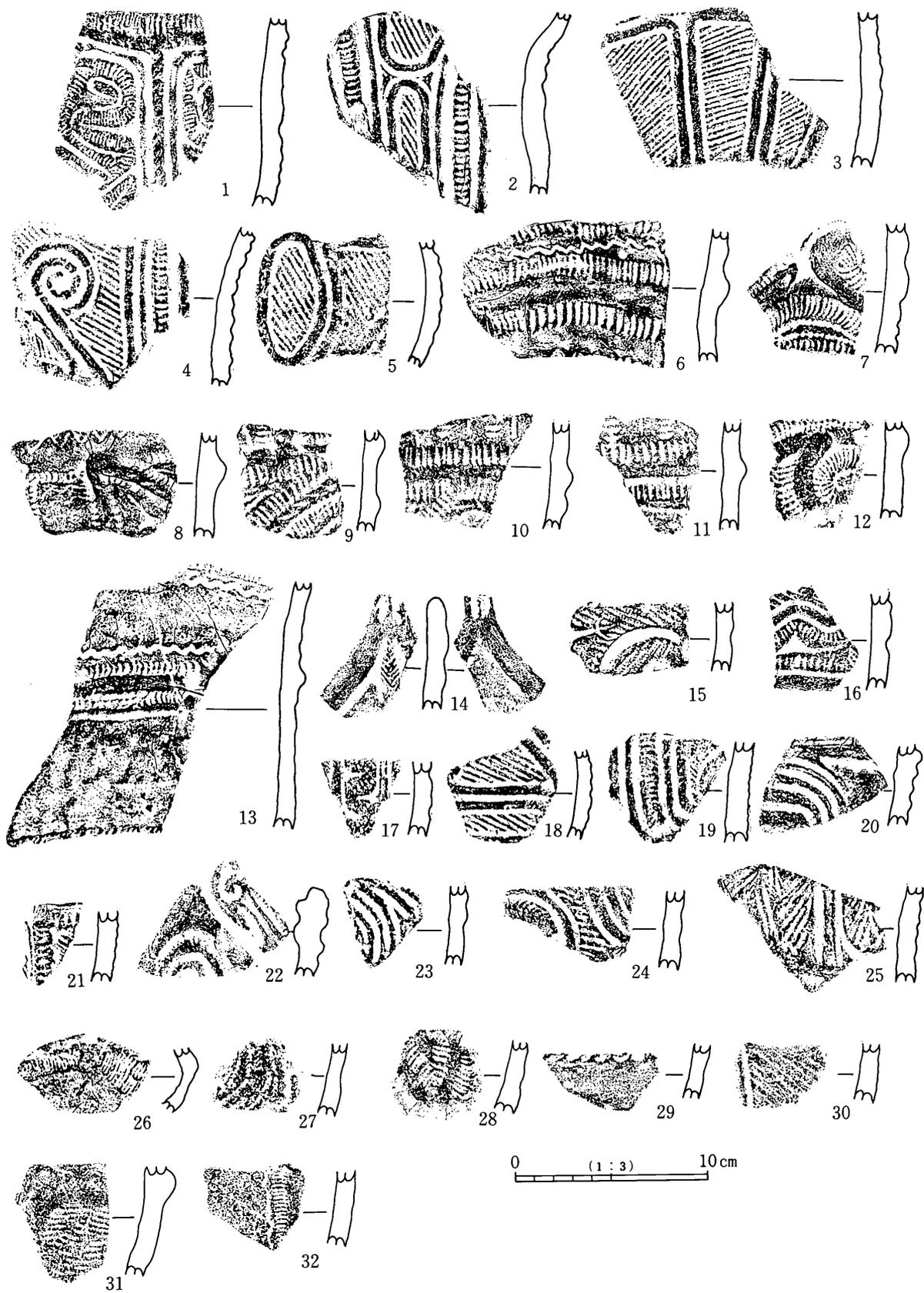
縄文時代中期後葉の住居址は39軒登録されている。その内C地区には1軒、D地区では1～2軒、E・F地区には36軒でE・F地区に集中している。用地事情から用地外へ大部分かかるものも多く、竪穴のほぼ全容を確認した住居址は、38・45・46・47・48・49・50・52・61・63・77・79・89号住居址の13軒、石囲い炉が確認された住居址は26・34・38・40・45・46・47・48・49・50・52・61・63・64・77・89・120号住居址の17軒である。



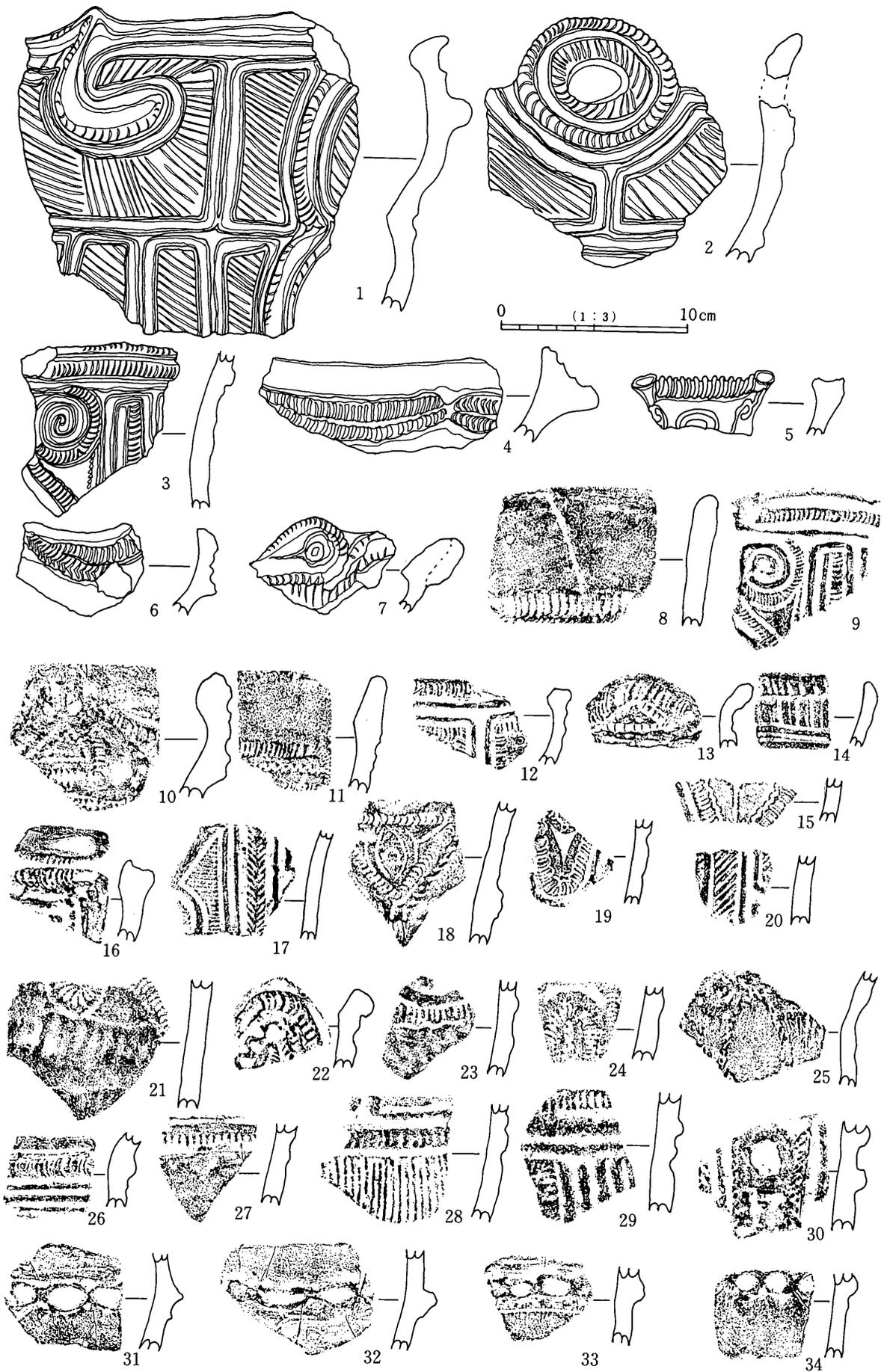
第23图 35号住居址出土土器



第24图 38号住居址出土土器(1)



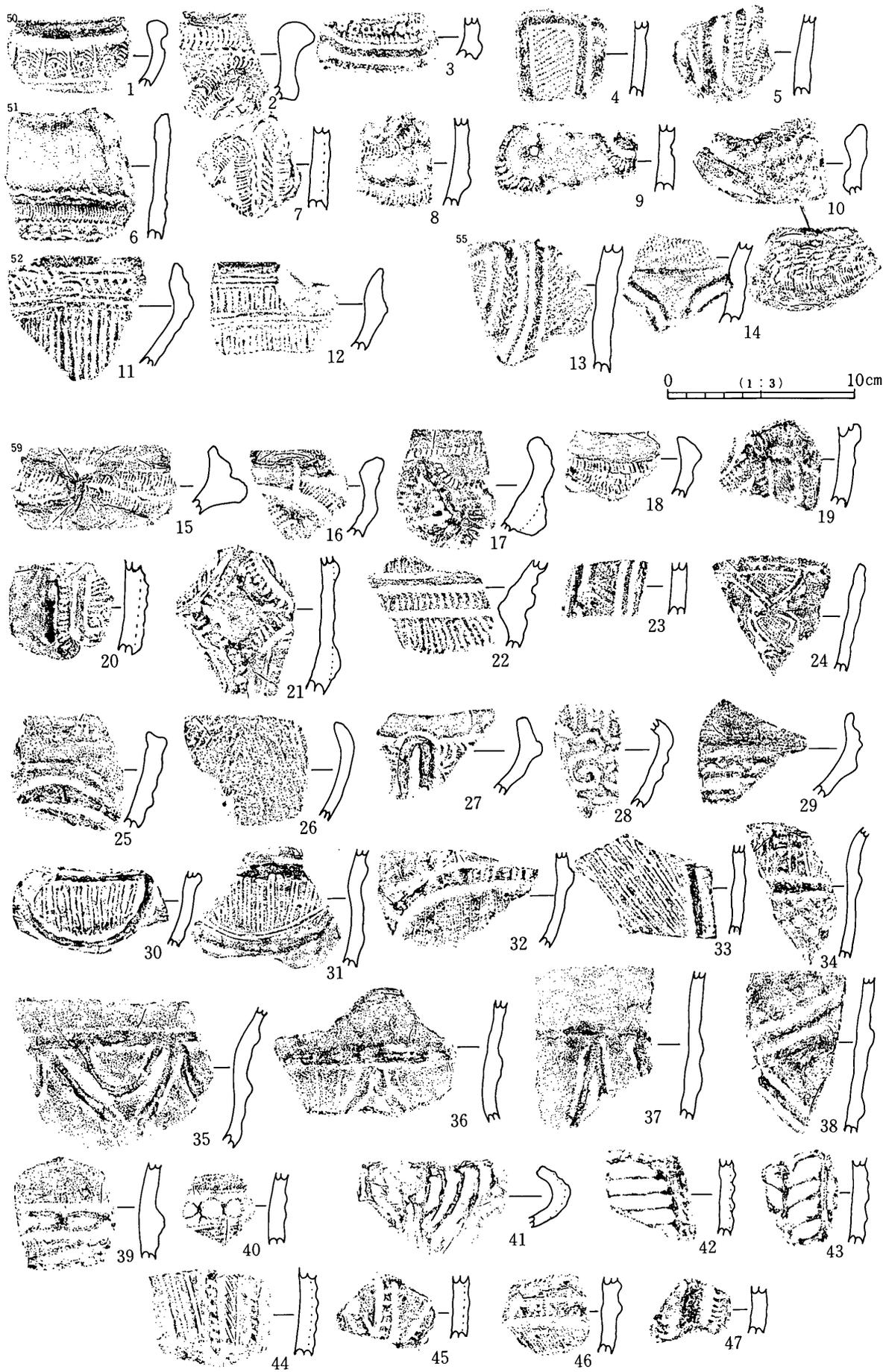
第25图 38号住居址出土土器(2)



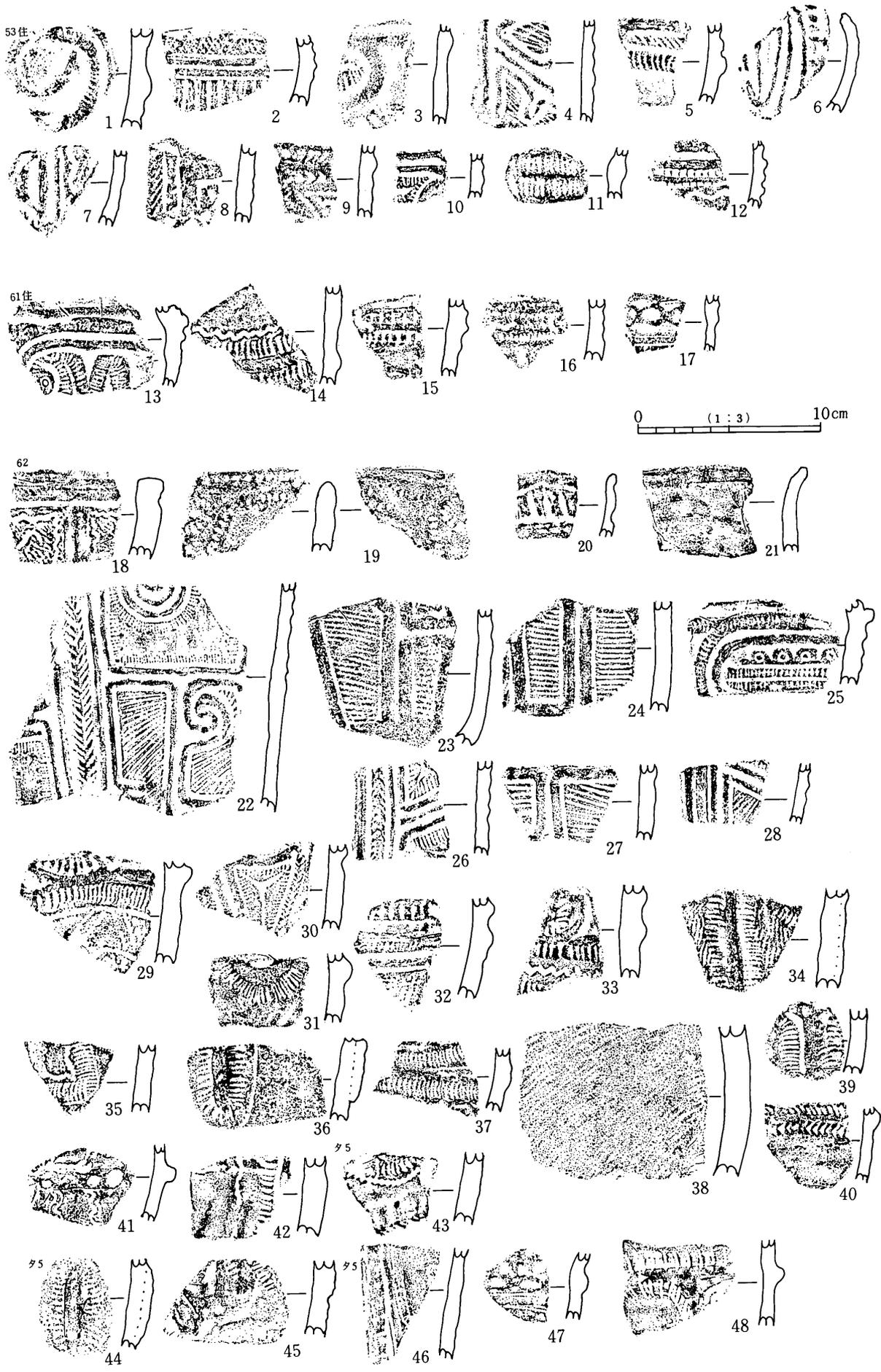
第26图 39号住居址出土土器



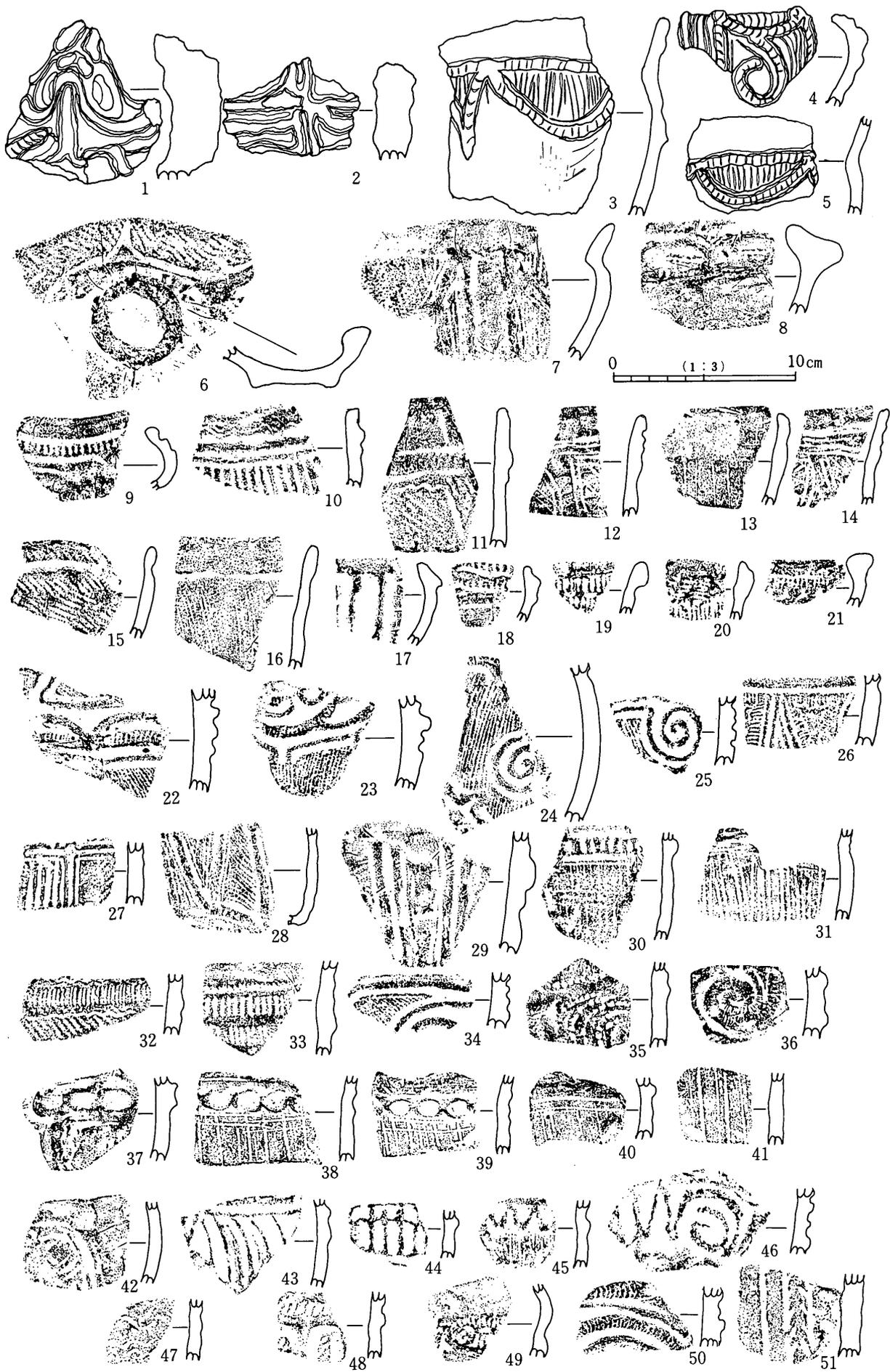
第27图 41·42·43·45·46·47·48·49号住居址出土土器



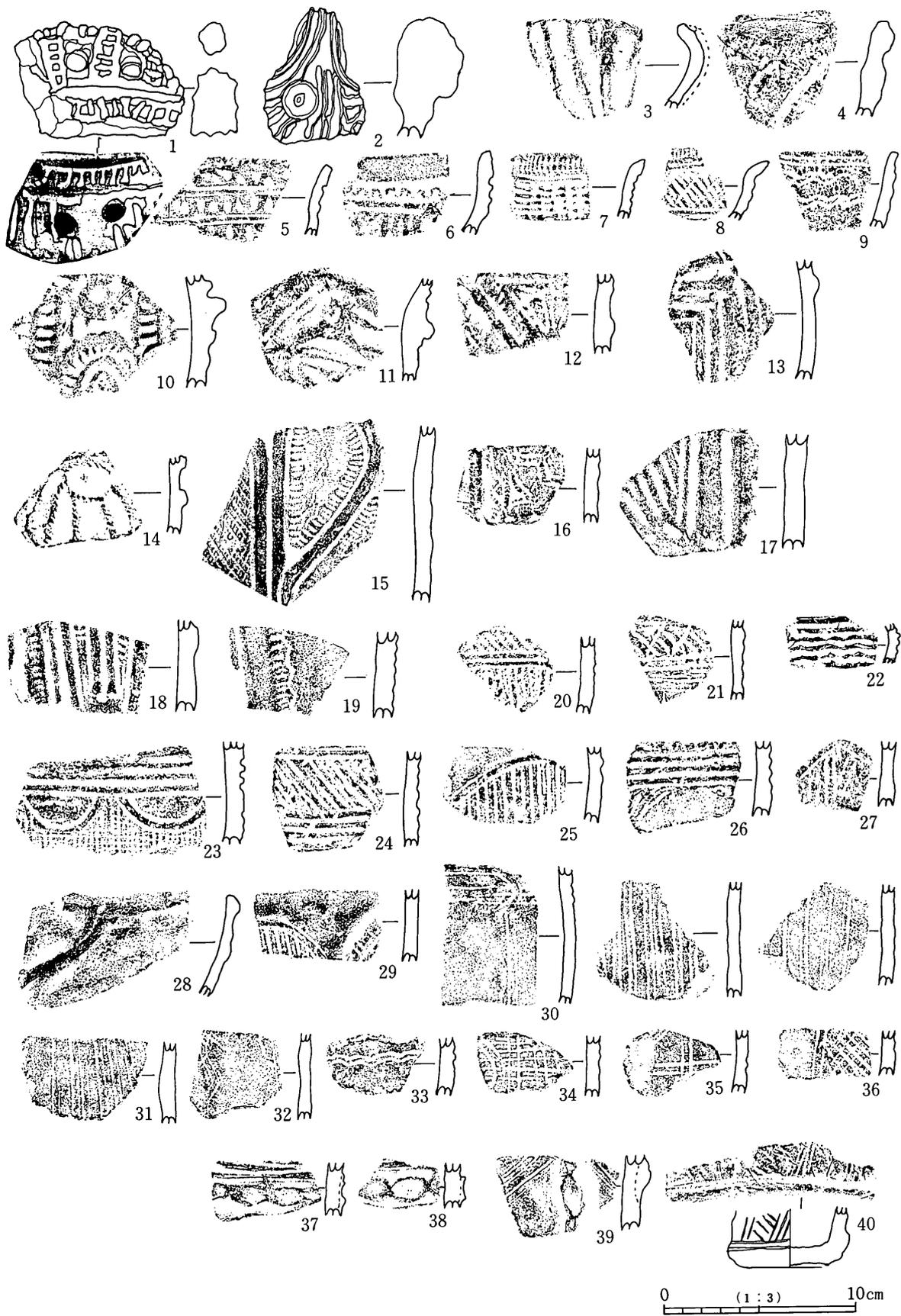
第28图 50·51·52·55·59号住居址出土土器



第29図 53号住居址とその周辺出土土器



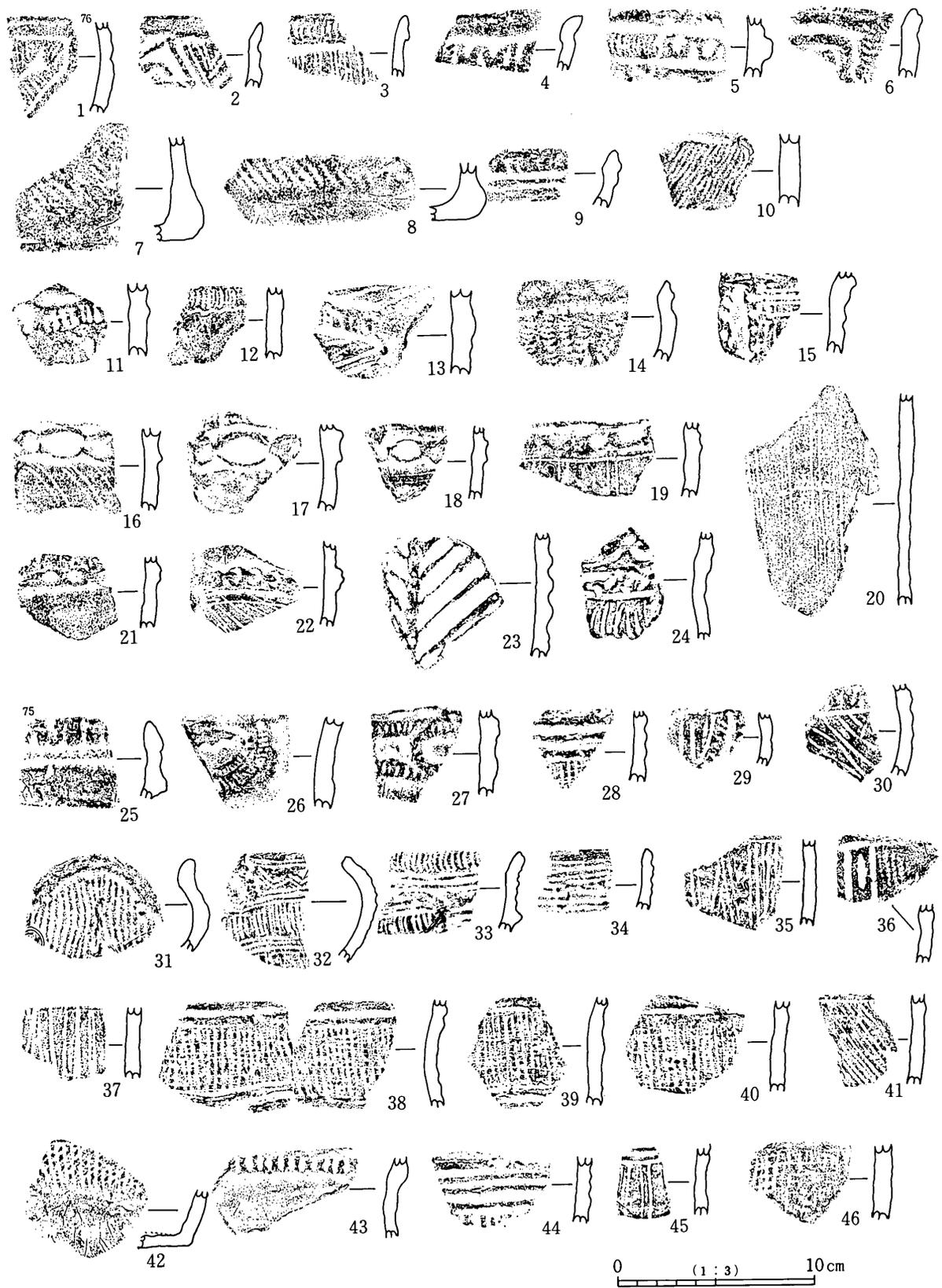
第30图 67号住居址出土土器



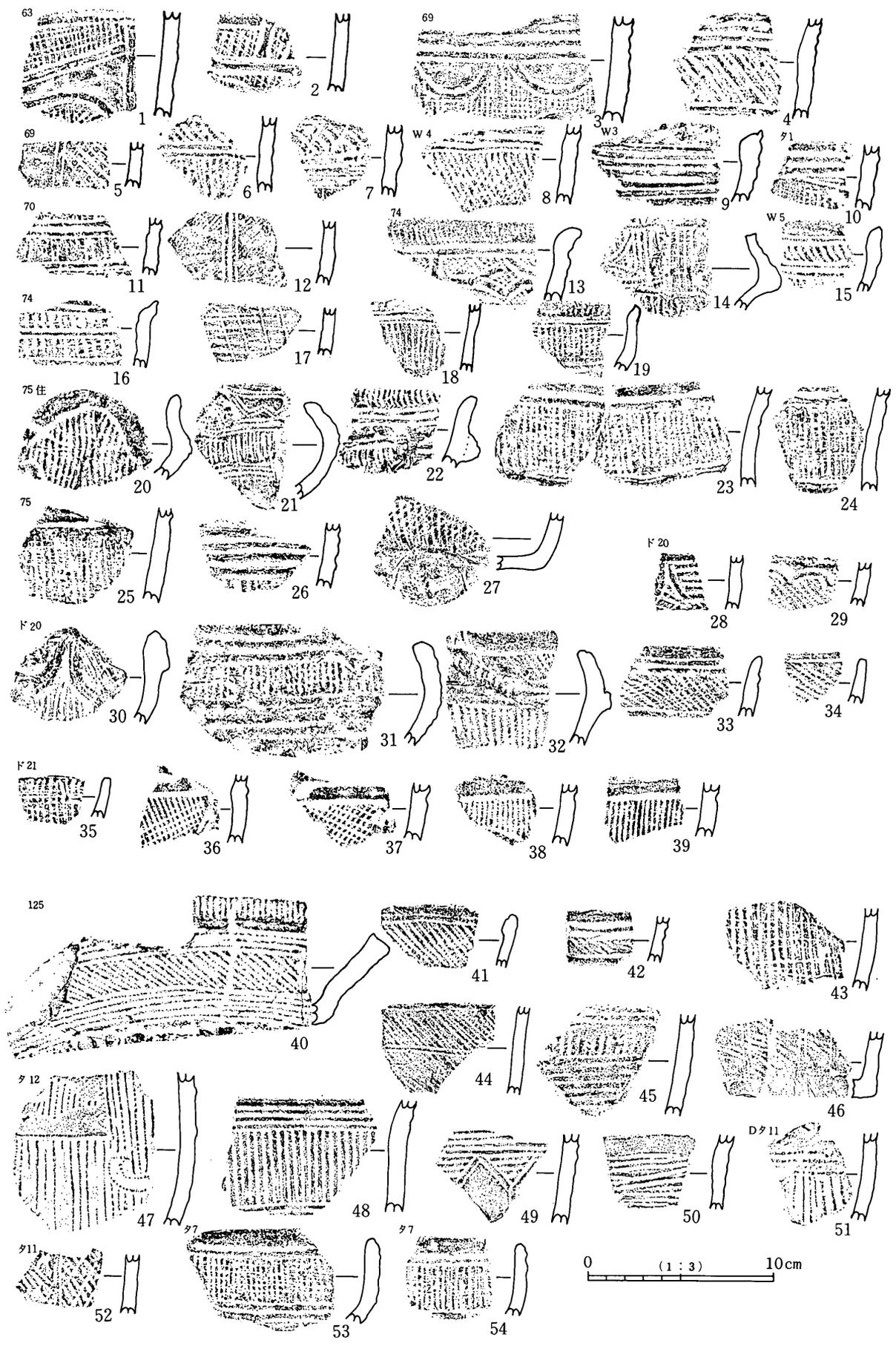
第31图 69号住居址出土土器



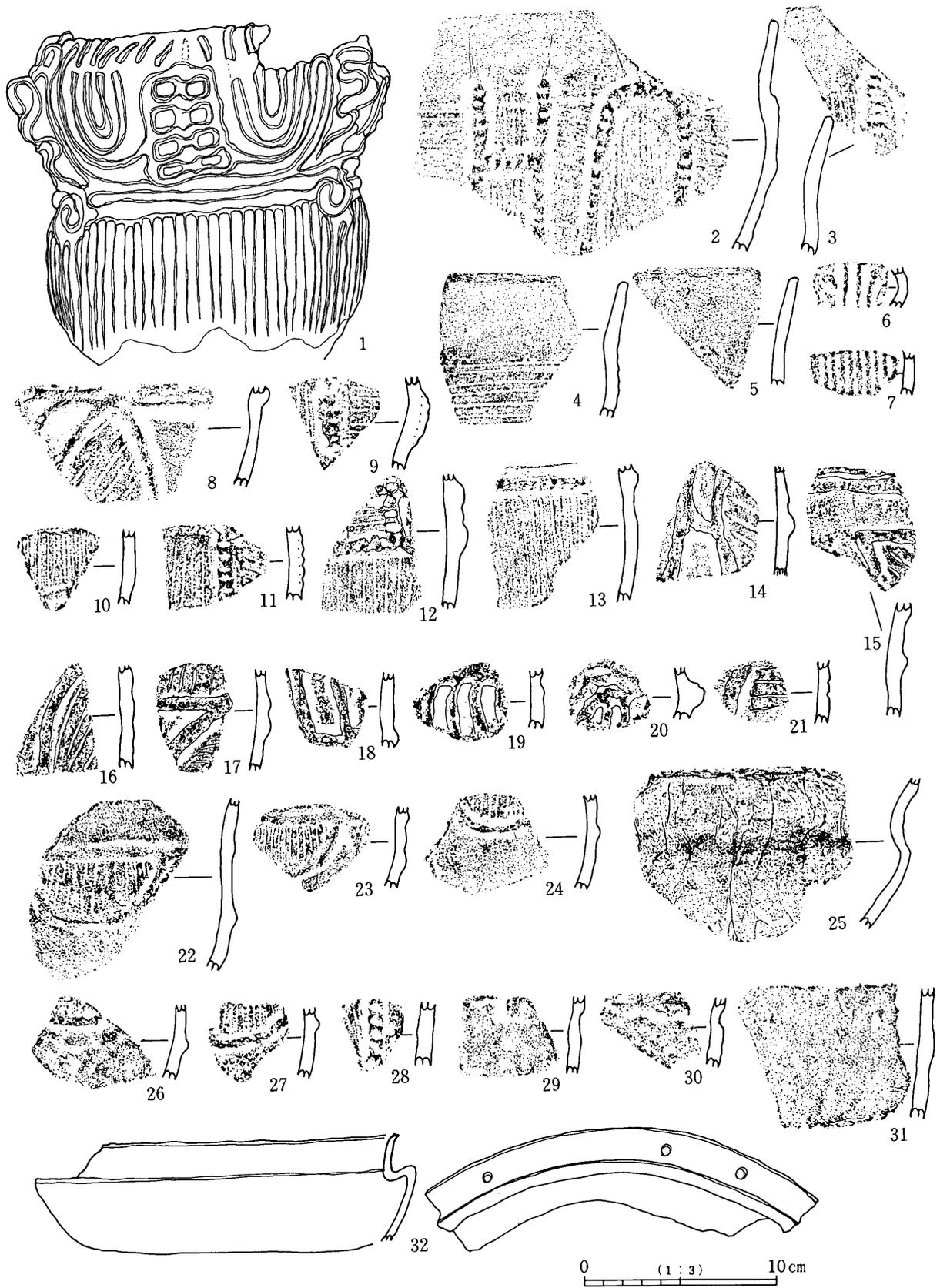
第32图 76号住居址出土土器(1)



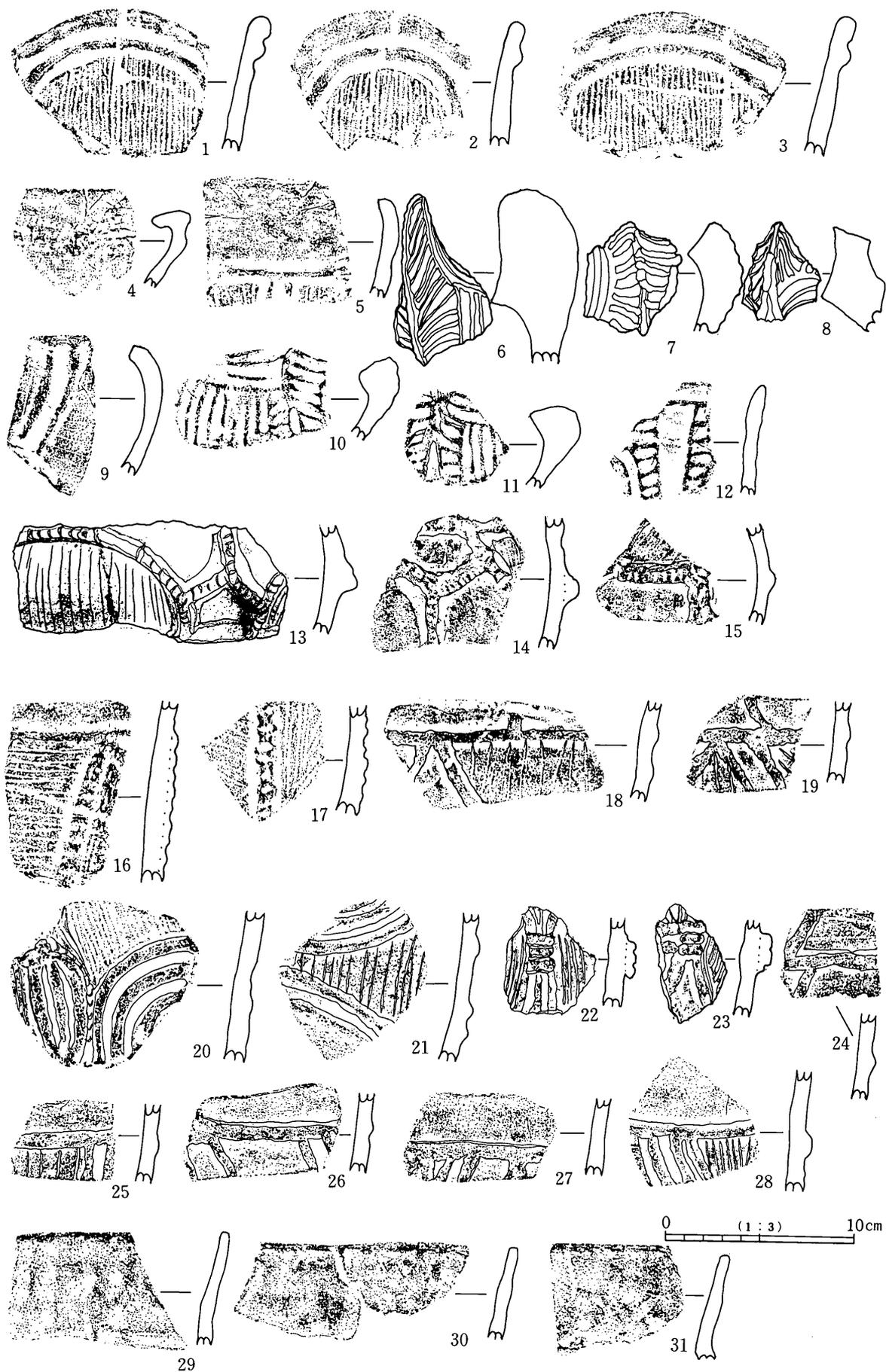
第33图 76·75号住居址出土土器



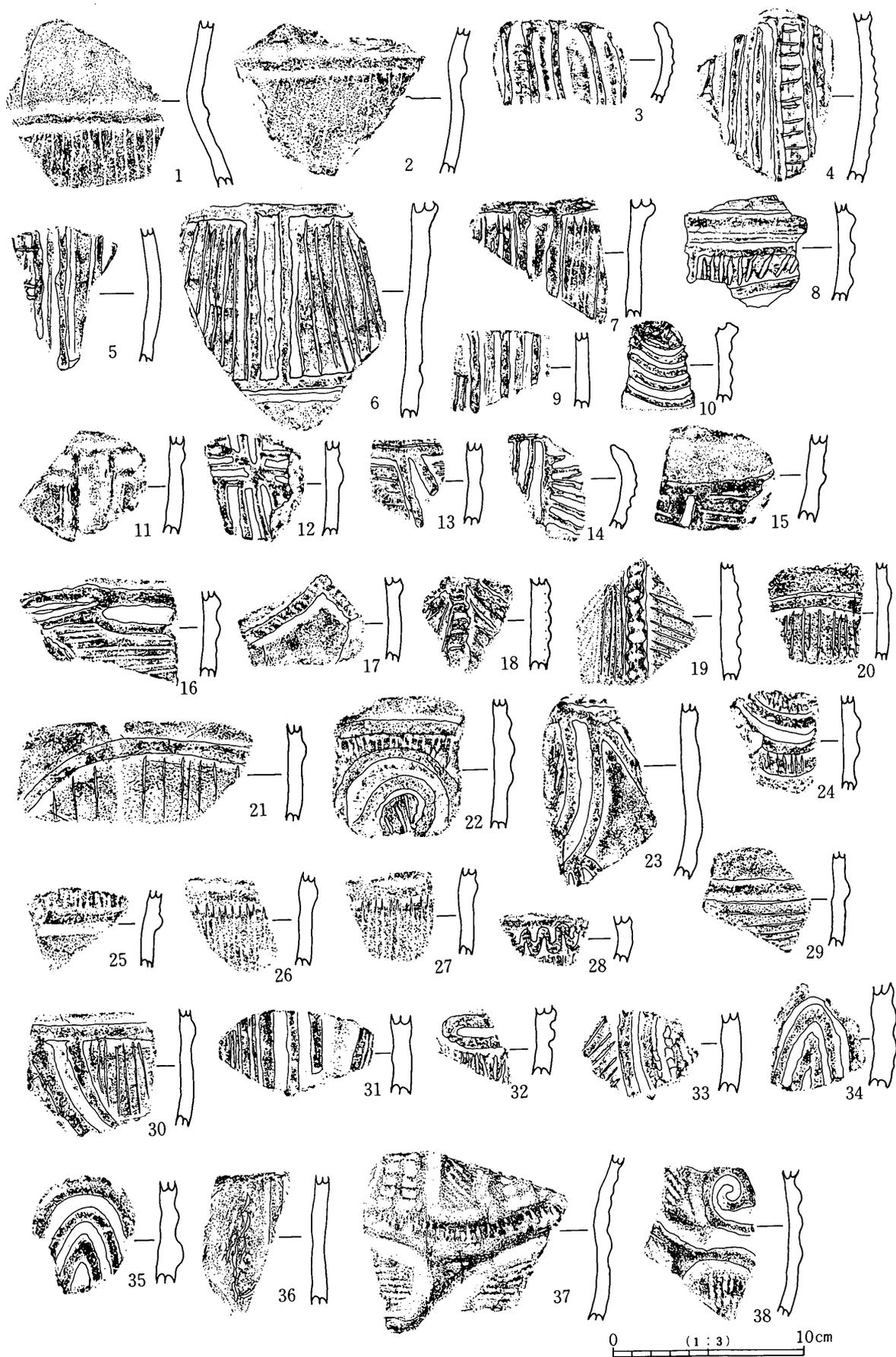
第34図 75・125号住居址ほか出土土器



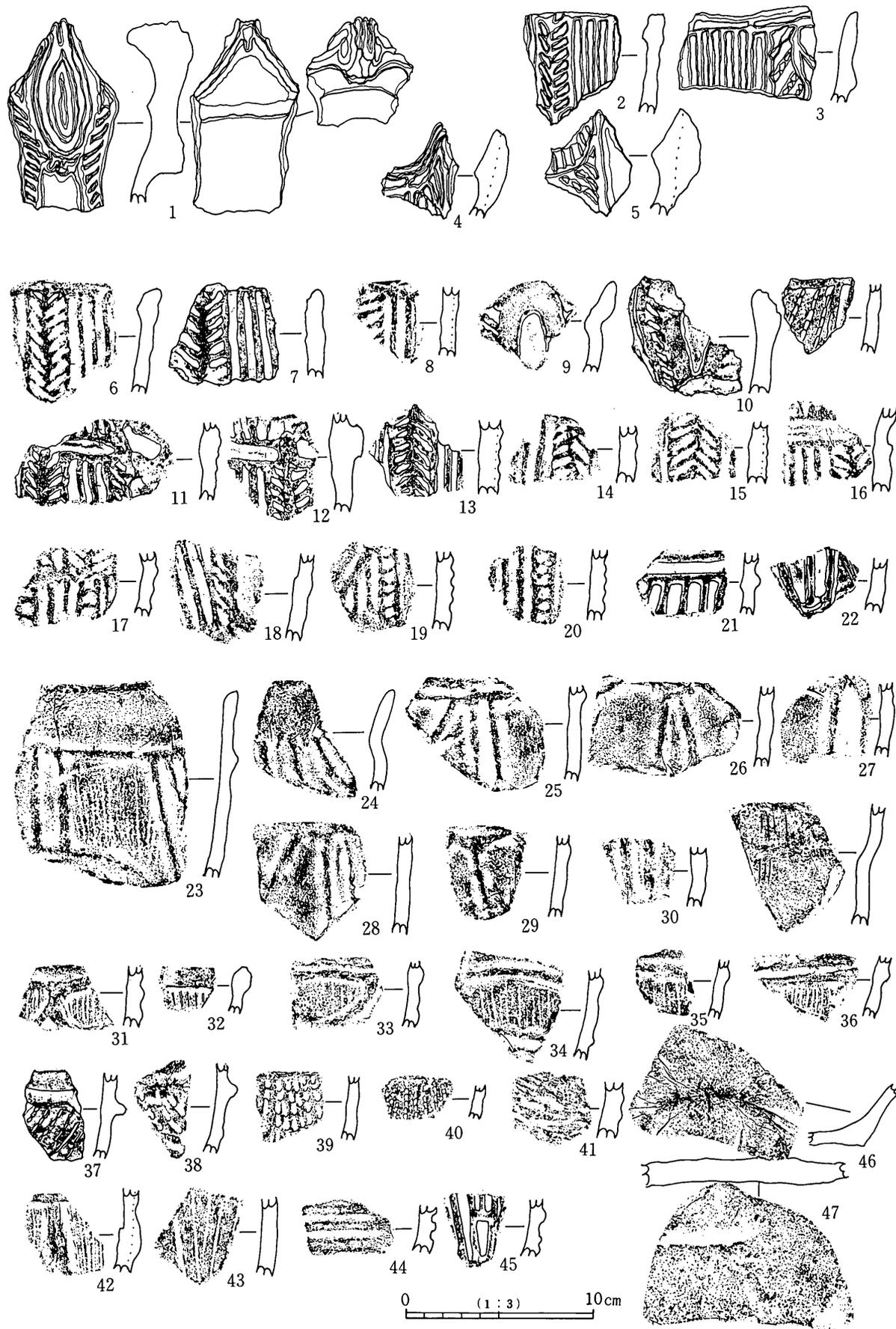
第35图 98号住居址出土土器



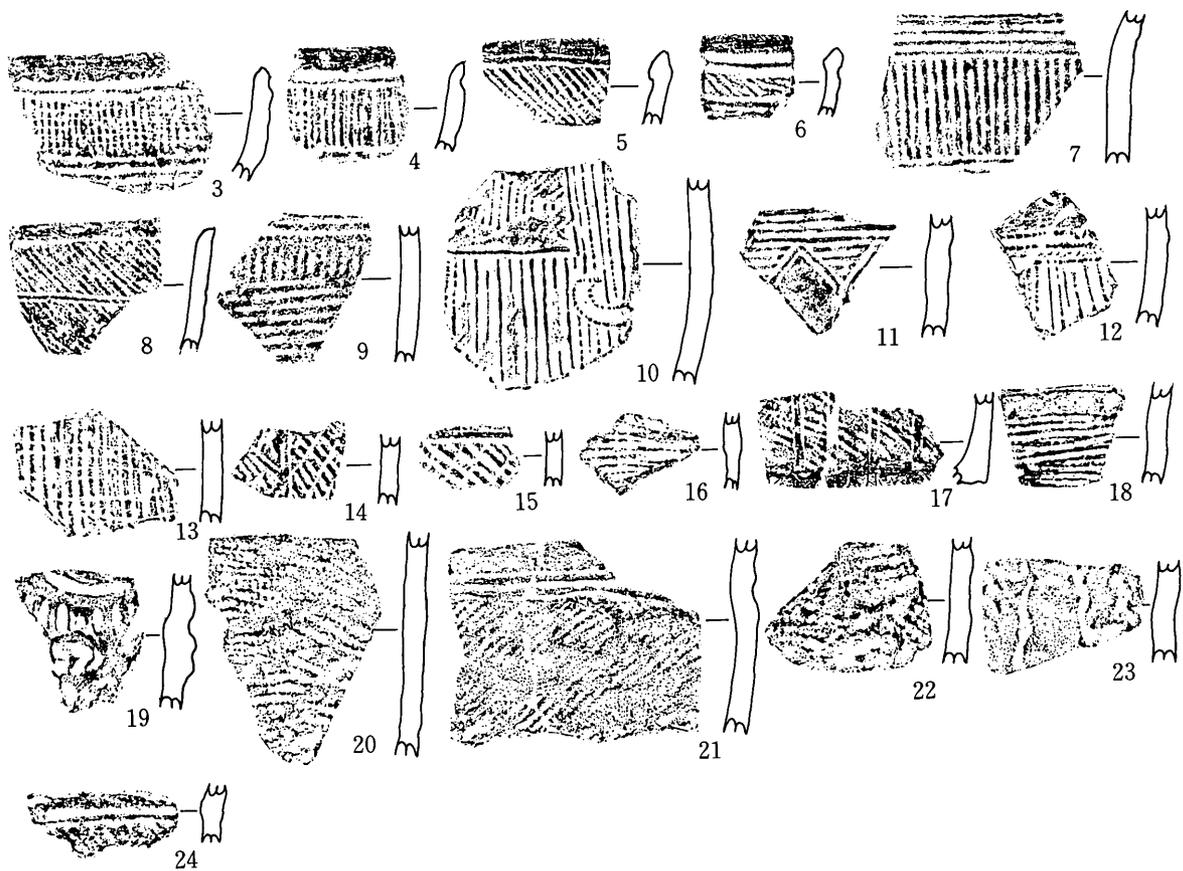
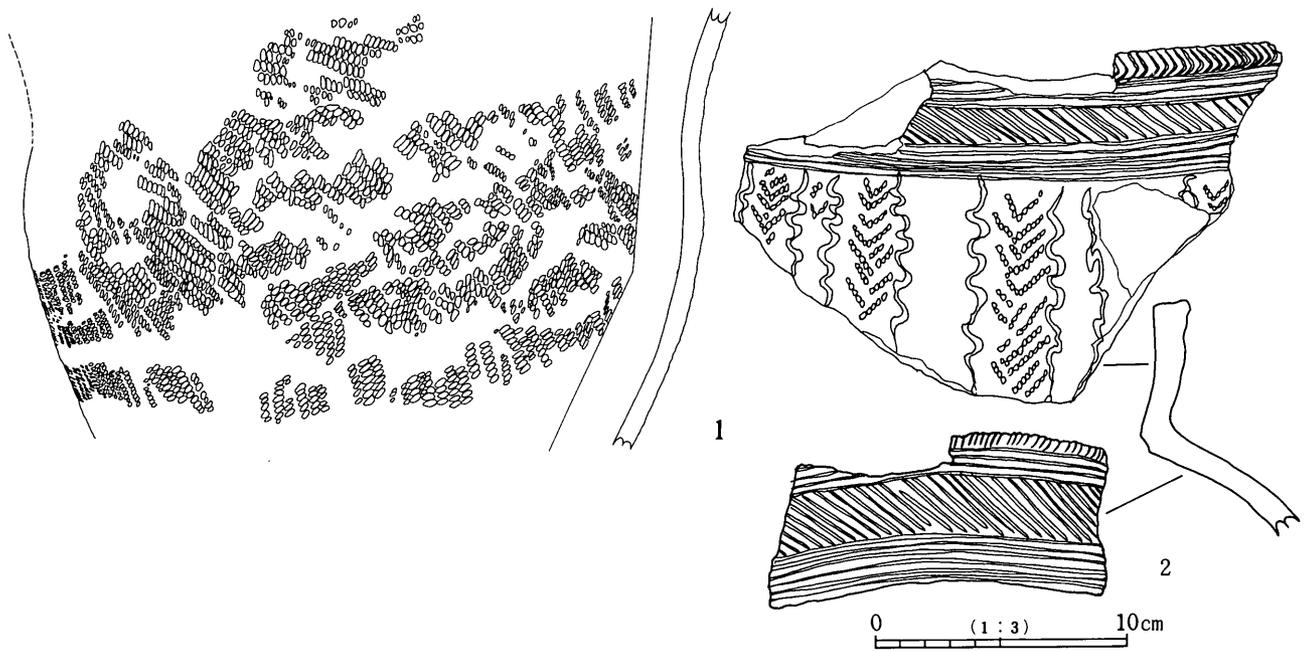
第36图 118号住居址出土土器(1)



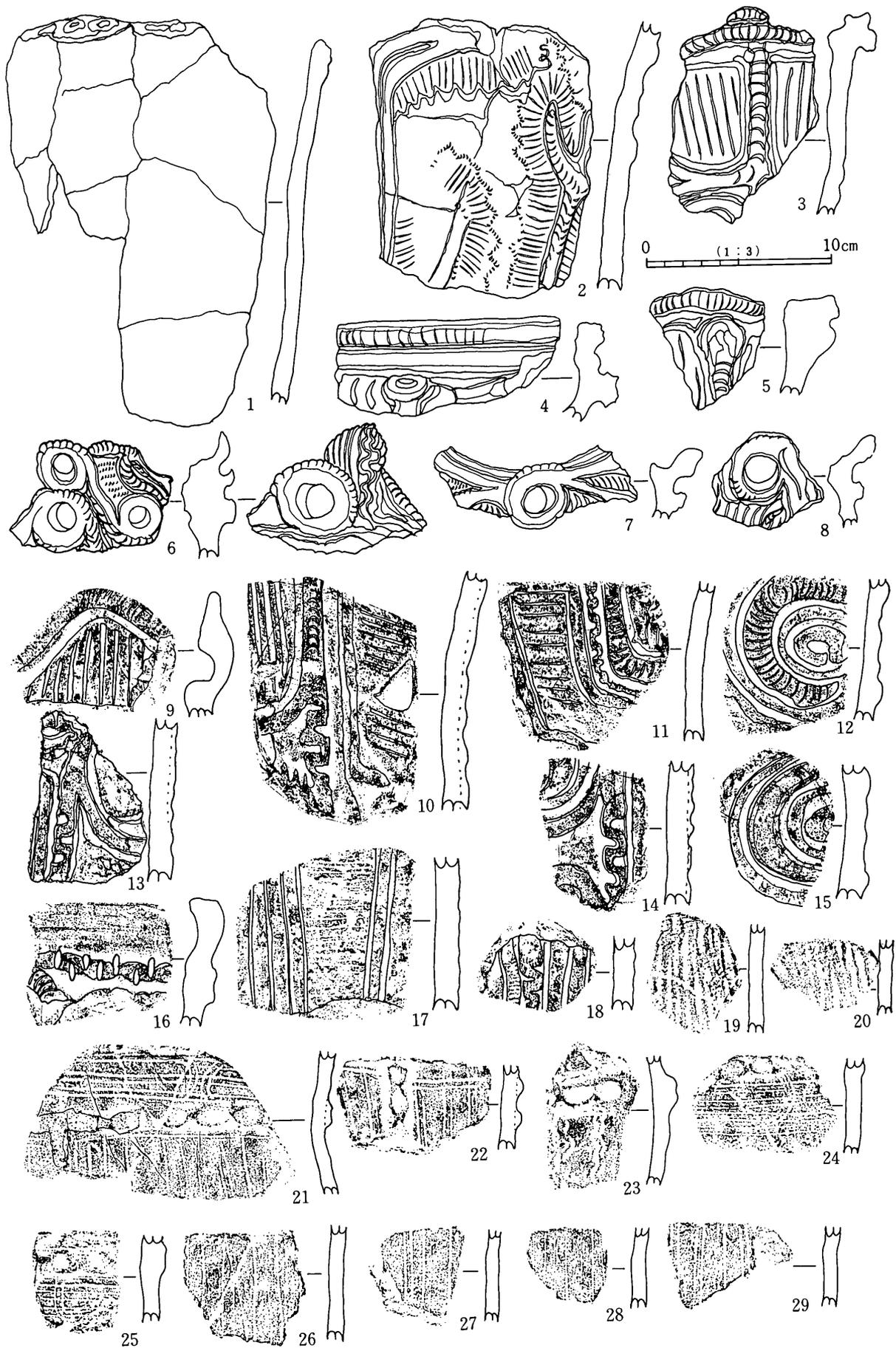
第37图 118号住居址出土土器(2)



第38图 120号住居址出土土器

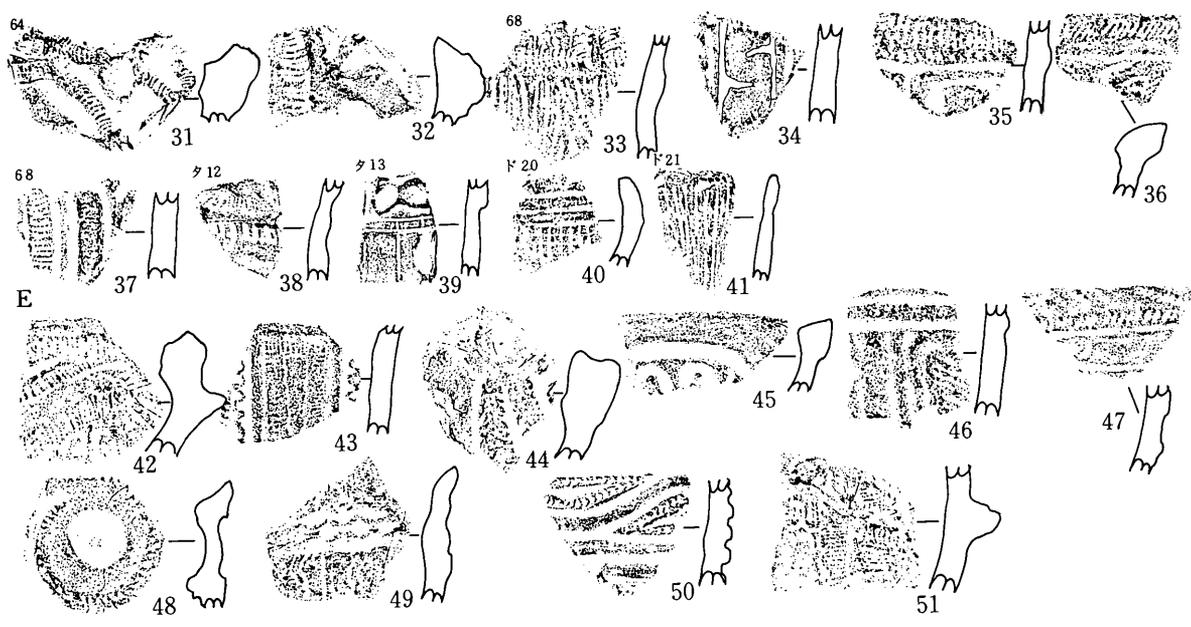
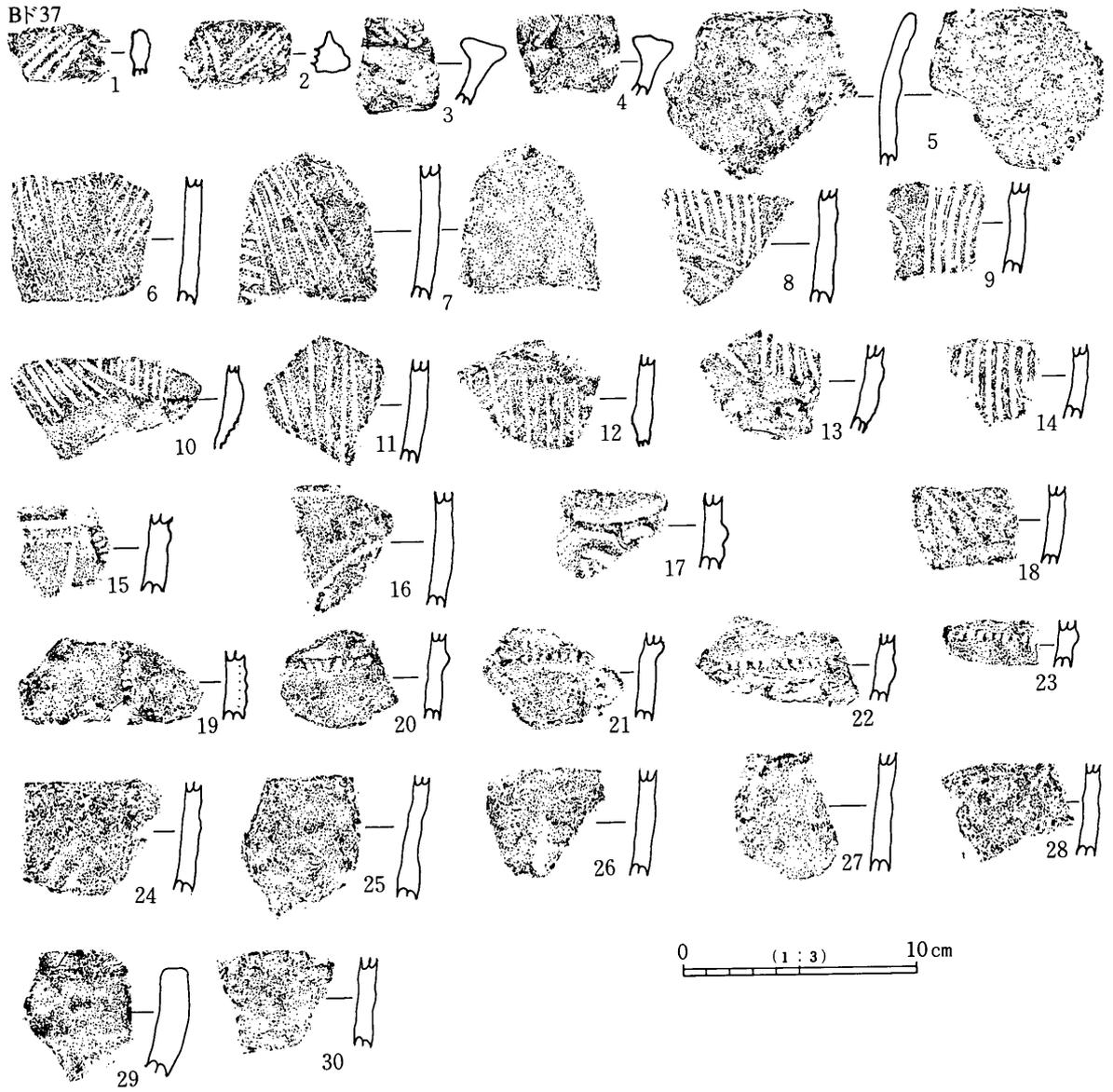


第39图 1 2 5号住居址出土土器



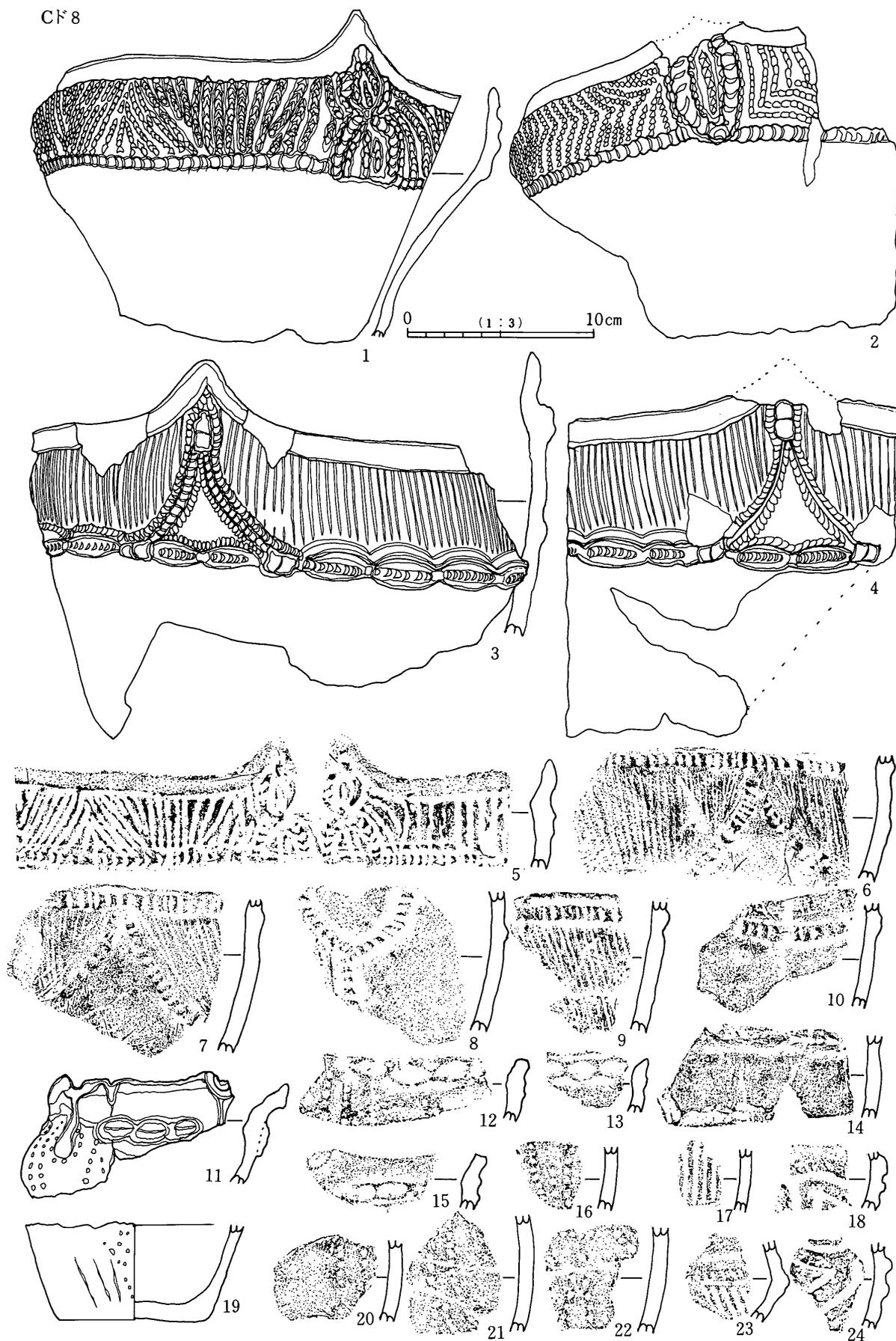
第40图 131号住居址出土土器

Bf37

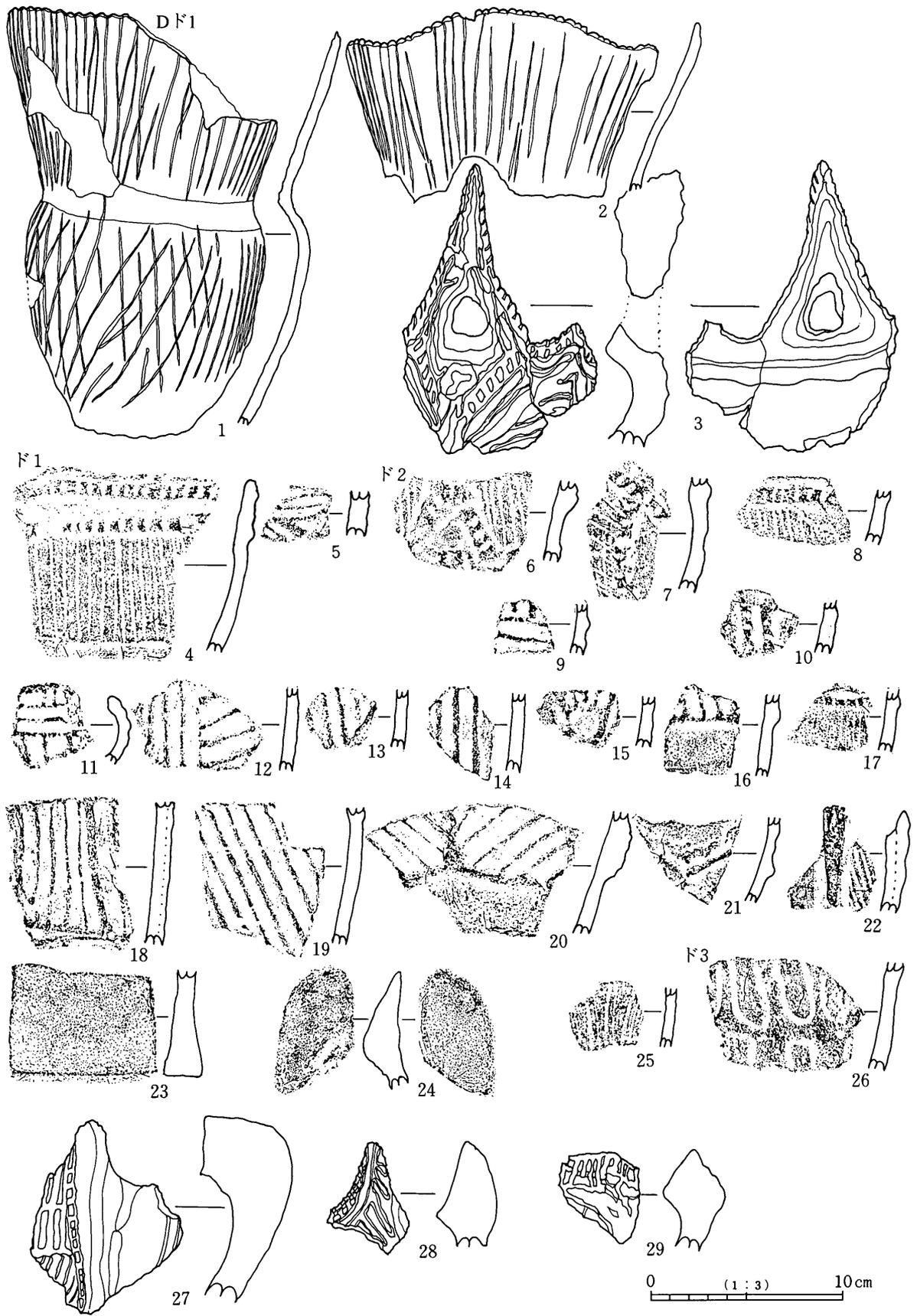


第41图 B地区土坑37、E地区土坑等出土土器

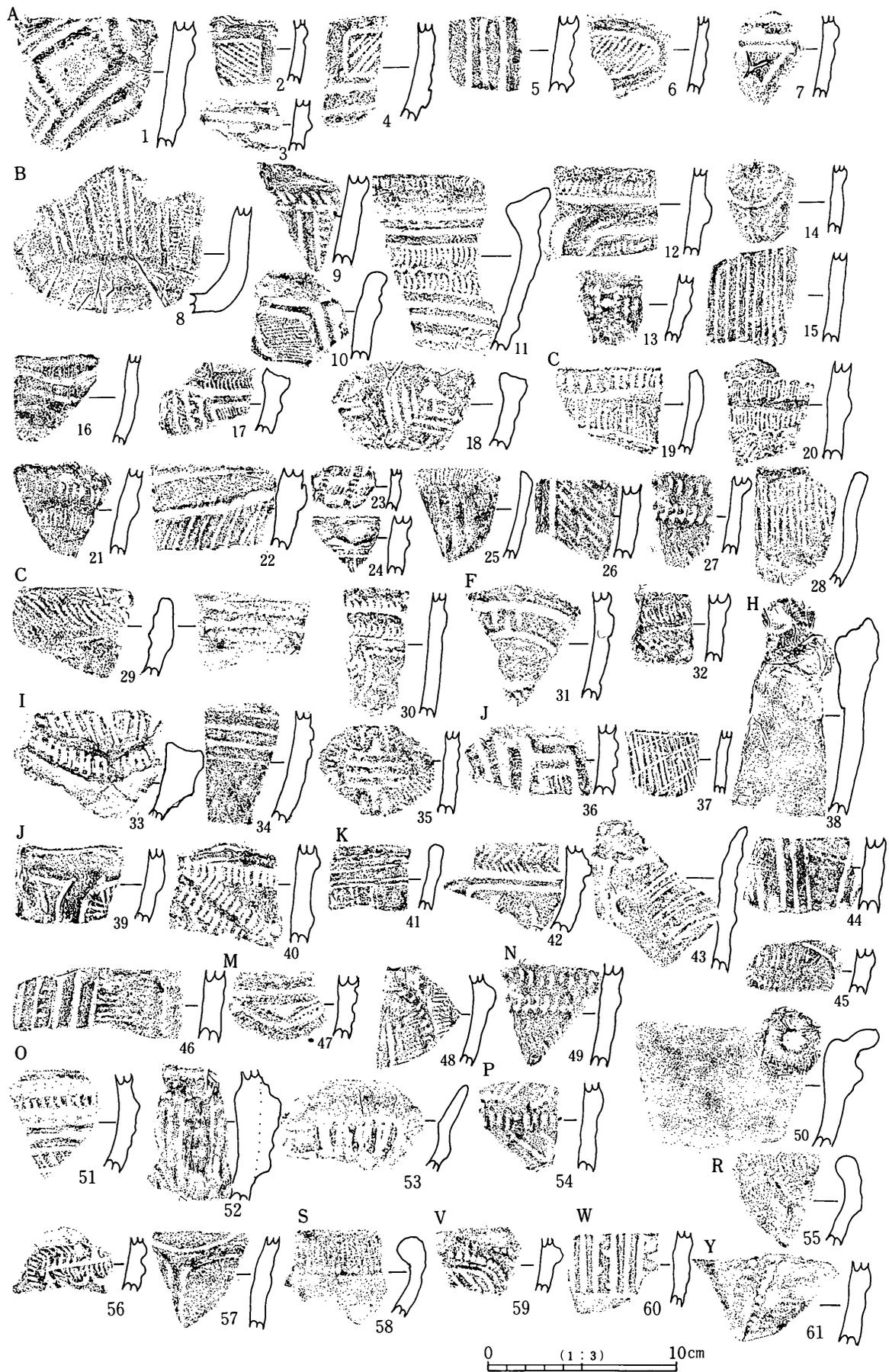
CF8



第42图 C地区土坑8出土土器



第43图 D1地区土坑1·2出土土器



第44図 F地区グリット出土土器

① 26号住居址 (図45)

F地区の北側U1で検出された竪穴住居址で、この住居址は昭和52年に、畑灌水工事に先立つⅡ調査区で確認された住居址の一つである。今回の調査では、径やく5mの西側半分が露呈している。先の報告書によると大形な炉址と大形な柱穴が検出され、完形鉢形土器・鉢形土器半完形が7～8点出土している。今回の調査により先の炉が確認されたが、その西側にもう一つ炉址があり、大きな柱穴の外側に径45cmほどの柱穴が2本追加されている。遺物は少量の土器片の他、石棒2・石鏃1・打石器16が出土している。

② 34号住居址 (図45・51)

26号住居址の南側約半分は用地外、45号住居址に接し、35・47号住居址に重複する竪穴で、径5.7m深さ50cmほどある。用地境に幅75cmほどの石囲い炉が半分検出され、柱穴は3本検出されている。床面は総体的に硬く北側P1・3の周辺は非常に焼けていて、貼り床のところがある。完形の土器は発見されず、51図1～7は把手で、太い粘土紐の貼り付け渦巻状の隆帯・連続刺突文・爪形文のものがある。10～28は口縁・肩部の土器片で、貼り付け文・隆帯の爪形文・条線文・竹管と押圧突帯の土器が含まれる。この他に円板1・石鏃2・打石器96点出土している。竪穴は全部ではないが、竪穴の広さに比べて土器の出土は少ない。土器形式からみて中期中葉に近い時期のように思われる。

③ 36・37号住居址 (図6)

36号住居址はF地区M1、37号住居址はF地区J1辺りで、共に東側用地外に大部分かかる住居址で、しかも36号住居址は土坑3・4・5と重複し、37号住居址は土坑9・10・16等と重複しているので、竪穴の輪郭が掴まれていない。出遺物も少なく、36号住居址は鉢形土器半完形・土器片、石匙1・打石器43で、37号住居址は深鉢形土器半完形・土器片、打石器7である。このように、用地外へかかる住居址は多く、F地区の34・35号住居址周辺、E地区の65・66号住居址周辺に多い。

④ 38号住居址 (図46・52・53・54・55・56・88・93・94・95・96、写図8・16・20・69～71)

F地区H1・2辺りで、東側は用地際・西側は52号住居址と重複し、南は土坑8・北東は土坑12・13・14と重複している。西側角は水道管敷設溝で破壊されているのではっきりしないが、長径5.0m・短径4.8m・深さ70cmほどの方形に近い隅丸の竪穴住居址である。主軸方向はN44°Wで、柱穴は径やく70cm・深さ60cmほどの大形なもので、隅に近い位置に4個ある。補助柱穴は見つかっていない。周溝は途切れているところもあるが、周囲を廻らし深さも20cmを越えるところもある。炉は、中央やや北に偏って、4個の大平板石を四方から組む、切り炬燵状の大形な石囲い炉で、長径1.2m・深さ60cm以上ある。床面は平坦で炭混じりの面が硬く、東側隅の近い辺りには焼土・炭塊の多いところがあり、細長く深さ10cmほどの凹みがあった。東側中央やや西側壁沿いに8個以上の累石があり、その下に正位の埋め甕がある。北隅にはP4に重なるように土坑14が、さらにその東側には土坑

12・13等の深い掘り込みがある。52号住居址との位置関係は、46図G～Hの断面図で分かるように、水道管の溝で切られているところもあるが、52号住居址と38号住居址の床面は25cm以上の高低差を持って38号住居址が切っていることが分かる。

遺物の出土量は非常に多く、表7等で分かるように完形・半完形土器は埋甕の深鉢形土器1・鐙付土器1・深鉢形土器6・浅鉢形土器2・器台形土器3で、土偶5・ミニチュア1・円板4、石鏃1・打石斧75・磨石斧6・横刃形石器215・錘石17個である。とくに、北側上層から縄文時代中期藤内系の深鉢形土器等の大形な破片が集中出土している。

52図1は埋甕で、口径29.5cm・器高44cm、胴部最大幅26cmで、口辺部に刺突文を配した同心円を並べ、頸部から底部近くまで蕨手状懸垂文を付け、その間に綾杉状沈線文で埋めている。2は北側隅に近い上層から出土した、キャリバー形口縁の長胴形の深鉢形土器である。口径推定30～35cm・器高は残存部だけで35cm以上ある。口縁部には渦巻文と弧線文の組み合わせ、胴部には蕨手状懸垂文があり、綾杉状沈線文で埋めている。3は上層から出土した把手付深鉢形土器の口縁部で、口径21.5cm・把手の高さ2.5cmで、上面に渦巻文がある。口辺は無文・刺突文入りの同心円文が並び、胴部は蕨状沈線文・区画の中に交差する沈線文がある。5は大形な深鉢形土器の把手で、渦巻文・蕨状弧線文・刺突文が組み合わされている。口径27cm以上と推定される。6～8・10は小形深鉢形土器の口縁部・同底部で施文は単純である。9・11～13は器台形土器の器台部分である。53・54・55図は大形土器片・把手・同心円文の口縁等を採録してある。53図3は器高30cm以上ある深鉢形土器破片で、口辺部に縦の並行する沈線を入れた同心円文が並び、頸部から胴部には沈線文による楕円区画の中に、綾杉状の沈線文と弧線の懸垂文が付いている。4・5は、太めの粘土紐による渦巻文と弧線文の組み合わせ・山形文の貼り付け・渦巻文の区画の中に斜走の沈線文・縄文を配したもの、爪形文のあるもの等、やや古手の要素がみられる。6～8・10～12は把手で、6は刺突文・12は粘土紐貼り付け文で、他は渦巻文主体のように思われる。54・55図は拓本で、縄文・沈線文を地文にした横の沈線文・縦の細い条線を付け、渦巻文を主体にした土器が多く、55図15～27は同心円文の種類を並べている。15・17～20は縦の並行沈線を入れたもので、16は同心を弧線文で飾るもので、さらにその下に並行沈線を入れた同心文が付いている。21は細めの縦沈線文の入ったもの、22は沈線文が短いもの、22は綾杉状の沈線文、24は交差する沈線文、25～27は円内を刺突文で飾るものである。同心円文の種別は56図にも並べてある。土器の形式からすれば、この住居址の土器編年は縄文時代中期後葉の中ごろ、諏訪地方で言う曾利Ⅲ～Ⅳ式辺りのものと思われる。土偶は88図2は頭部・3は胸部・4は腕・5・6は胴部で、多くは中層から出土している。90図ニ1はこの住居址出土のミニチュア土器である。石器の数も多く、その完形品だけ、93～96図に打石斧74・横刃形55・錘石17・磨石器4が採録されている。なお、この住居址の東側上層から集中的に縄文時代中期中葉の深鉢形土器の大きな破片が出土している。何かの都合で投げこまれたものと思われるが、東側には方形の土坑が数基あり、土坑7からは縄文時代中期の深鉢形土器が出土しているので、土坑か住居址があったと思われる。中期中葉の土器片ばかりでなく、土器片の出土する層が、少なくとも2層あった。

⑤ 40号住居址 (図47・57、写図18)

F地区N1辺りに、半分以上東側用地外に隠れ、47・49号住居址と重複している。用地境際にかか

って、幅80cmほどの石囲い炉が検出されている。出土土器は少なく深鉢形土器の口縁部のほか、土器片やく20、石器26点である。57図の5～16が40号住居址出土の土器片で、5は渦巻文を主体にした把手、縦の条線を地文にして横の弧線で飾るもの、縦の楕円区画の中に綾杉状の沈線文・刺突文を配した口縁部がある。

⑥ 42・43号住居址 (図6・45・57)

F地区の北側45・44号住居址・土坑1に重複して、黒色土の覆土を持つ径20～25cmほどのピットが、10数个円形状に並ぶものを42号住居址と登録し、その北側に5mほどの掘り込みが円形状にあり、焼土の入った凹みから後期的な土器片が出土しているので、43号住居址と登録している。ピットらしいものが3個、その外側に僅かな落ち込みが検出されている。42・43号住居址は黒色土の覆土を持つピット群の集合から、住居址として登録したもので、確実な検証資料に乏しいものである。

出土して土器片は、57図18～21が42号住居址出土のもので、縄文を地文にして横・斜の沈線文で飾る後期的な土器である。22～24は粘土紐貼り付けの把手であるが、25～27は42号住居址のものと同様の後期的な土器片である。なお、図示していないが43号住居址を含めて、北側に前期的な土器片が数点出土している。

⑦ 45号住居址 (図45・58・59・88・97・98・99、写図9・16・72～74)

F地区Q3辺りに、東側は34号住居址に隣接し、北は42・43号住居址と重複し、西南は46・47号住居址と重複している竪穴で、径5.3m・北側では深さ40cmほどの深さを持つ竪穴式住居址であるが、南・東側は重複が激しいために、結果的には掘り込みの浅い住居址となった。中央北側に水道管敷設用の溝で東側を削り取られて、半分しか残されていない石囲い炉がある。北と西に長さ60・80cmの平状花崗岩を縦に埋め、人頭大の石で挟み込む切り炬燵形の大きな炉で、推定の長さは1.2mほどあり、深さは40cmほどである。主柱穴はP1～P6の6個で、径は50～70cmで、深さは50～60cmほどある。東側と西側に壁沿いに3本単位に構成され、北のP1・6の間、南側のP3・4の間は広くその中間に石蓋を持つ逆位の埋め甕がある。したがって主軸方向はN25°Wである。床面は総体的に硬く平坦であるが、とくに東側は炭や焼土を含む覆土が厚く床面は硬かった。竪穴の形態・切り炬燵状の石囲い炉、埋め甕の位置と竪穴の方向等から、38・49・78・89号住居址と共に、縄文時代中期後葉の規範的な住居址の一つと考えている。遺物の出土も東側半分に集中し、埋め甕1・香炉形土器2・深鉢形土器4・浅鉢形土器2の他土器片多数、土偶6・円板2、石鏃1・打石斧95・横刃形26・磨石器11・錘石7等である。

58・59図は出土土器で、1は埋め甕で、口径38cm・底が欠損しているが残存部器高は28cmほどある。口縁は波状形で、緩やかに内湾するキャリバー形で、縄文を地文にして渦巻・弧線による隆帯が付けられている。頸部は無文で、胴部には山形状沈線文・三本の縄文の斜走短線・三本の弧線が横走する単純な文様である。2は口縁部を欠く深鉢形土器の胴・底部で、残存部で30cmほどの高さである。頸部は円弧文と縦の沈線文・胴部は縦の沈線文による懸垂文があり、その間は綾杉状の条線が並ぶ。3は口径31cm・底部は欠損し、残存の器高は29cmで、口縁上まで伸び上がる渦巻文が付き、

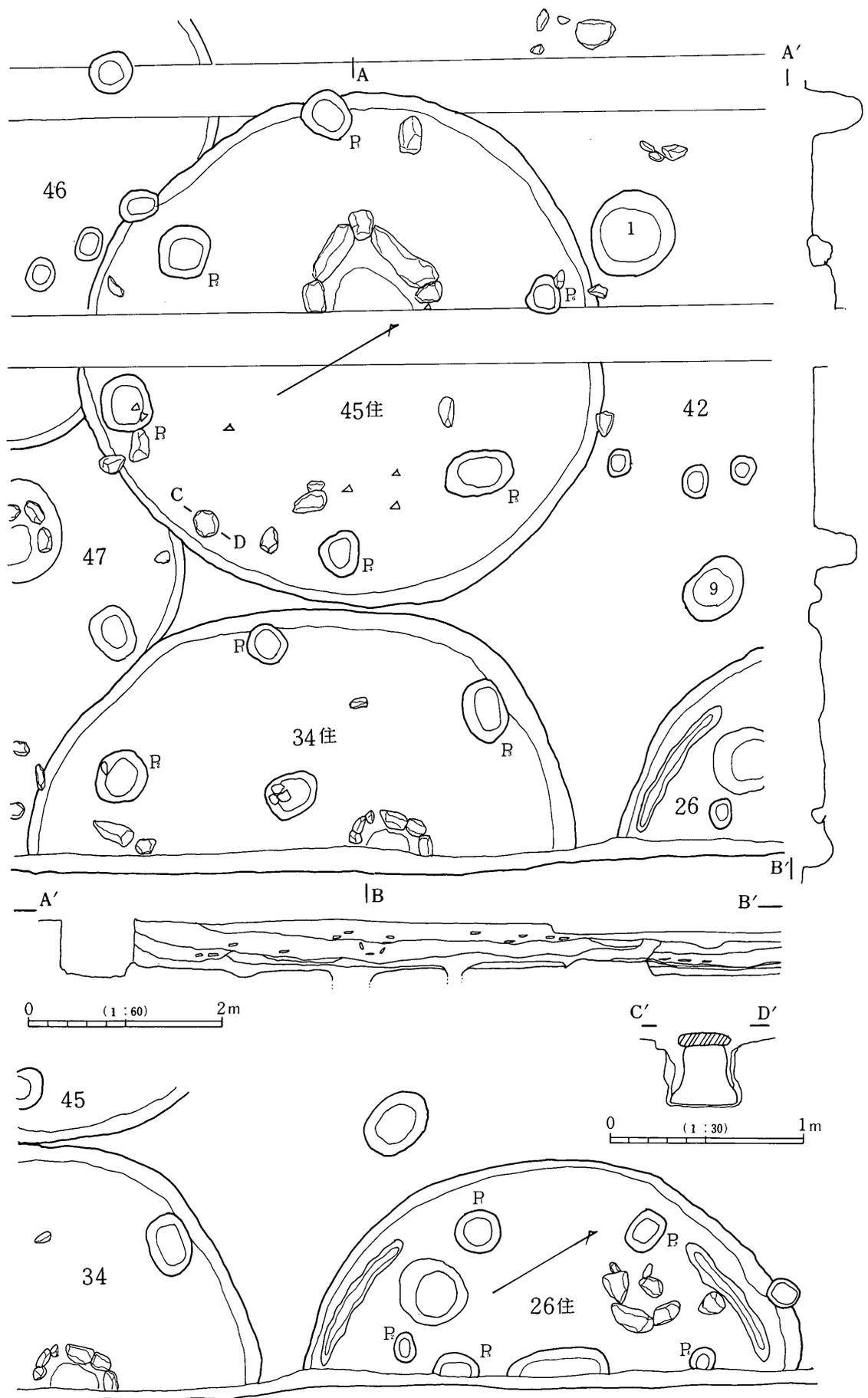
長さ12cmほどの把手が口縁で止まる小さめな把手が付く。胴部は貼り付け隆帯の渦巻と弧線で円形に区画して、その中を並行する弧状・綾杉状に飾り、把手に続く蕨状の懸垂・隆帯の懸垂が付けられている。4は底部を欠く無文の深鉢形土器で、口径18cm・残存部の器高は19.5cmある。5は口縁部を欠く深鉢形土器で、口径推定13cm・器高推定17cmほどあり、口辺には横走の刺突文を並べ、肩部には変形な単線または複線の弧状沈線文が付く。6・7は香炉形土器の平面と断面である。中央上部に口径6.2cm・高さ5cmの煙抜きを置き、両側の板状把手で支えている。把手の両側に突起が付けられ、厚く広く左右に広がって台部に繋げ、3cmほどの鏝が取り巻いている完形品である。把手の文様は煙抜き部分は縦の刺突文、把手部は渦巻文・弧線文・蕨手文を2～3条に並べている。8は南側の土坑状の凹みから出土したもので、口縁を欠く小形の深鉢形土器で、口径推定10cm・器高やく14cmある。口辺はための2本の沈線文が横走し、胴部は3本の弧線と、弧線が曲がり下る沈線文が付けられている。この穴の北側から6の香炉形土器が横倒しに出土している。9は西側の水道管敷設の溝縁から出土した小形の香炉形土器である。把手部が半分欠損しているため、上面は不詳なところがあるが、口径やく16cm・器高12cmほどある。幅2.8cmほどの張り出しの鏝には、渦巻状の貼り付けがあり、変形円筒の煙抜き口が立ち上がる。左右にあったかどうか不詳である。

59図1は底部を欠く深鉢形土器で、口径25～26cmほどある。肩部に渦巻の隆帯が並び弧状の沈線文で取り巻き、渦巻の貼り付けは3本の隆帯で口辺へ繋ぎ、把手の痕跡が残されている。2～7は各種の把手である。2はやや古手のもの、3は香炉形土器の把手である。8から27は拓本で、8・9は中葉的な要素があり、13・14は後葉でも古手のように思われる。総体的には後葉中ごろから後半にかけてのものが多い。完形品を合わせてみると、完形土器には後葉後半の要素があり、拓本等による土器には、後葉中ごろから古手の土器も含まれている。してみると、38号住居と同じ頃かやや時期が下がるように思われる。土偶は88図7～11のもので、7は胸部、8・9は胴部、10・11は腕部で刺突文状のものがあり、似通ったものは62・76・89号住居址にある。12は足で、指まで表現されている。石器は97・98・99図に採録され、打石斧は51、横刃形は24・錘石は5・磨石器は16個である。

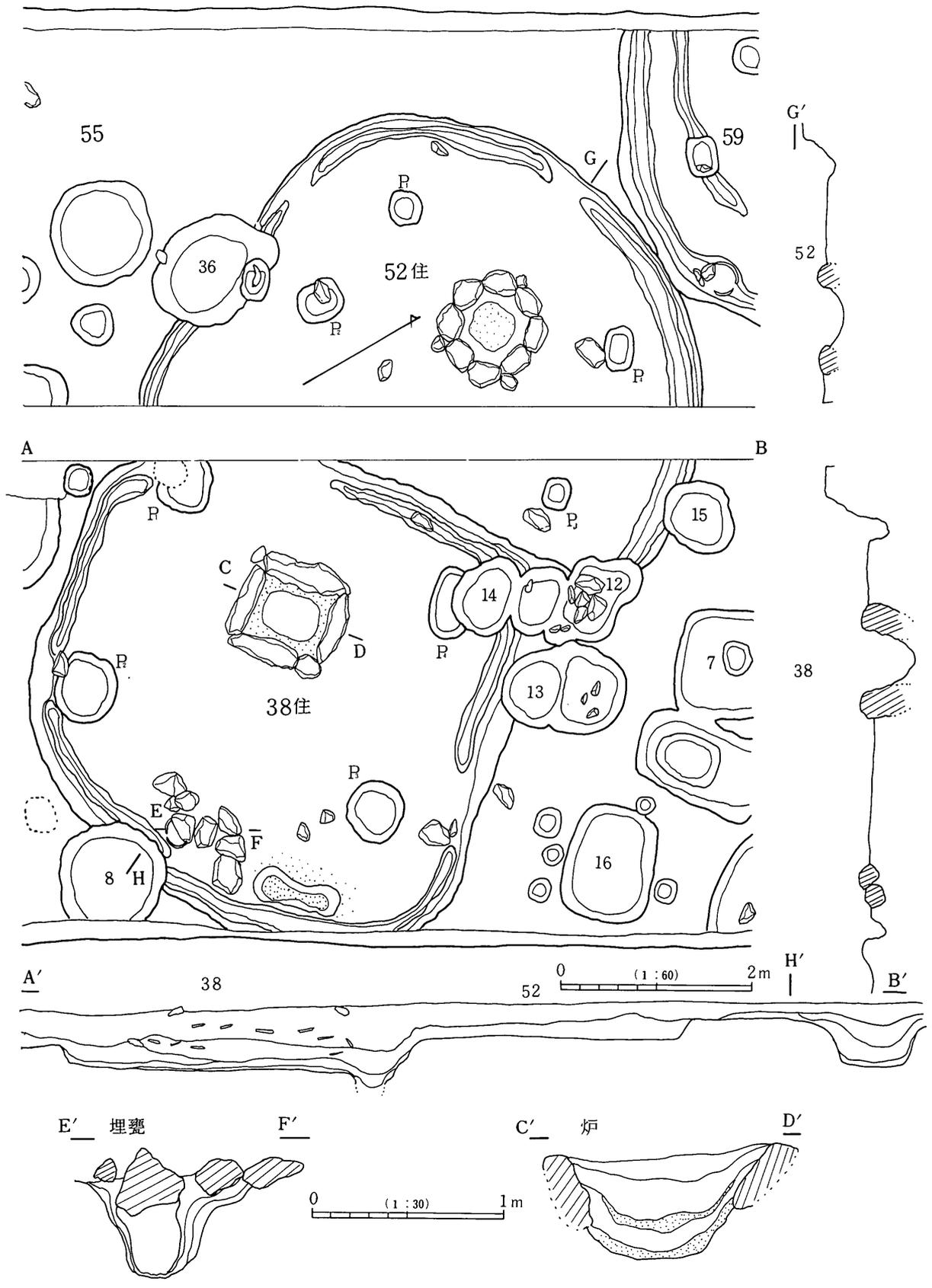
⑧ 46号住居址 (図47・60・88、写図18)

F地区P5辺りで検出された住居址で、掘り込みは10cmほどの浅い堅穴である。45・48・47・63号住居址と重複し、45号住居址に切られていることは確実である。中央北寄りに5個の炉石が残る石囲い炉で、幅は55cmの小さめな炉である。浅い掘り込みであるのでプランははっきりしないが、径5.5mの円形堅穴住居址と思われる。支柱穴と思われるピットは3個確認され、45号住居址寄りに3個並ぶピットがあるが、位置的に支柱穴には合わない。炉の西側・堅穴の南東側に支柱穴の存在を予想して検出を試みたが、63号住居址の重複・水道管の敷設による破壊もあってはっきりしない。床面も浅いこともあって軟弱で分かりにくい住居址であった。

出土遺物も少なく、45号住居址寄りに器台形土器(60図4)が出土している。場合によると45号住居址のものかもしれない。台径38cm・高さ15cmで大形なものである。2・3は後葉の土器片であるが、この他に粘土紐貼り付けの土器片が数点出土している。炉の形態等から中期中葉またはそれに近い頃の住居址かもしれない。88図13の土偶の足が出土している。



第45图 26·34·45号住居址



第46图 38·52号住居址

⑨ 47号住居址 (図45・47・60)

F地区N3辺り34・35・40・45・46号住居址、土坑2・22等に囲まれるように重複して検出された住居址で、検出の難しい堅穴であった。堅穴の推定範囲は3.5mほどで、中央やや西側に幅やく60cm・3個の炉石を残す石囲い炉がある。柱穴と思われるピットは3個確認されている。

出土遺物は深鉢形土器半完形の他、土器片30点・打石器34点出土している。60図5～10は口縁等の拓本で、櫛刃文・刺突文・竹管文の土器片も含まれ、後葉でも中ごろ以前の土器のように思われるが、周辺には、縄文時代中期中葉・後葉の住居址が入り組んでいるので、時期を決め兼ねる住居址の一つでもある。

⑩ 48号住居址 (図47・60)

F地区N5辺りにあり46・50・49号住居址、土坑10等と重複する住居址で、西側用地境沿いにあった焼土を持つ炉跡の検出だけに留まった住居址で、堅穴の落ち込み・ピット等の遺構も確認されていない。焼土を持つ凹みは長径1mほどある。焼土の部分は幅45cmほどあって、痕跡ははっきりしないが炉石があったと思われる。遺物の確認も少なかった住居址で、60図11～21の土器は、11・12・13は刺突文を主体にした把手、粘土紐貼り付け隆帯・太めの貼り付け隆帯と刺突文の構成・弧線文を主体にした土器片で、後葉でも前半に位置する住居址のように思われる。石器は砥石1・打石器56点が出土している。

⑪ 49号住居址 (図47・61・62・63・100～104、写図10・17・22・75・76・96)

F地区M2・3辺りにある堅穴で、39・40・48・50・51号住居址と重複する住居址で、西側は水道管敷設の溝で切られている。長径5.6m・短径5.4m、検出面での深さは50cmの、ほぼ円形状の住居址で、炉は中央北寄りに、長径1.5m・短径1mの長方形の掘り込みが残され、炭・焼土が充満していた。南側縁に45cmほどの平状石が2個あり、焼けただれているので、炉石の外されたものと思われる。主柱穴はP2～P6の5本で、P1は補助柱穴と思われる。炉の南側壁沿いに石蓋を持つ正位の埋め甕を配置し、炉の北側のP5を結ぶと炉の中央を通る直線が考えられる。したがって、主軸方向はN4°Eとなる。P2・3・4・5・6は、それぞれ径50～60cm・深さも50cmほどあり、炉・埋め甕を挟んだ5本構成が考えられる。P4は二重構造で深さも65cmある。周溝はほぼ全面を取り巻き幅30cm・深さも20～30cmほどある。床面は西側は水道管の溝の影響があって軟弱であるが、東側一帯は炭・焼土も重なり硬い床で、炉の中を含めて完形・半完形の土器出土が多い。(△印の位置)埋め甕はC-Dの位置にあり、幅40cmの平状蓋石が置かれ、正位に埋められている。石囲い炉は崩されているが、主柱穴と埋め甕の位置関係は、45号住居址と類似点が多い。

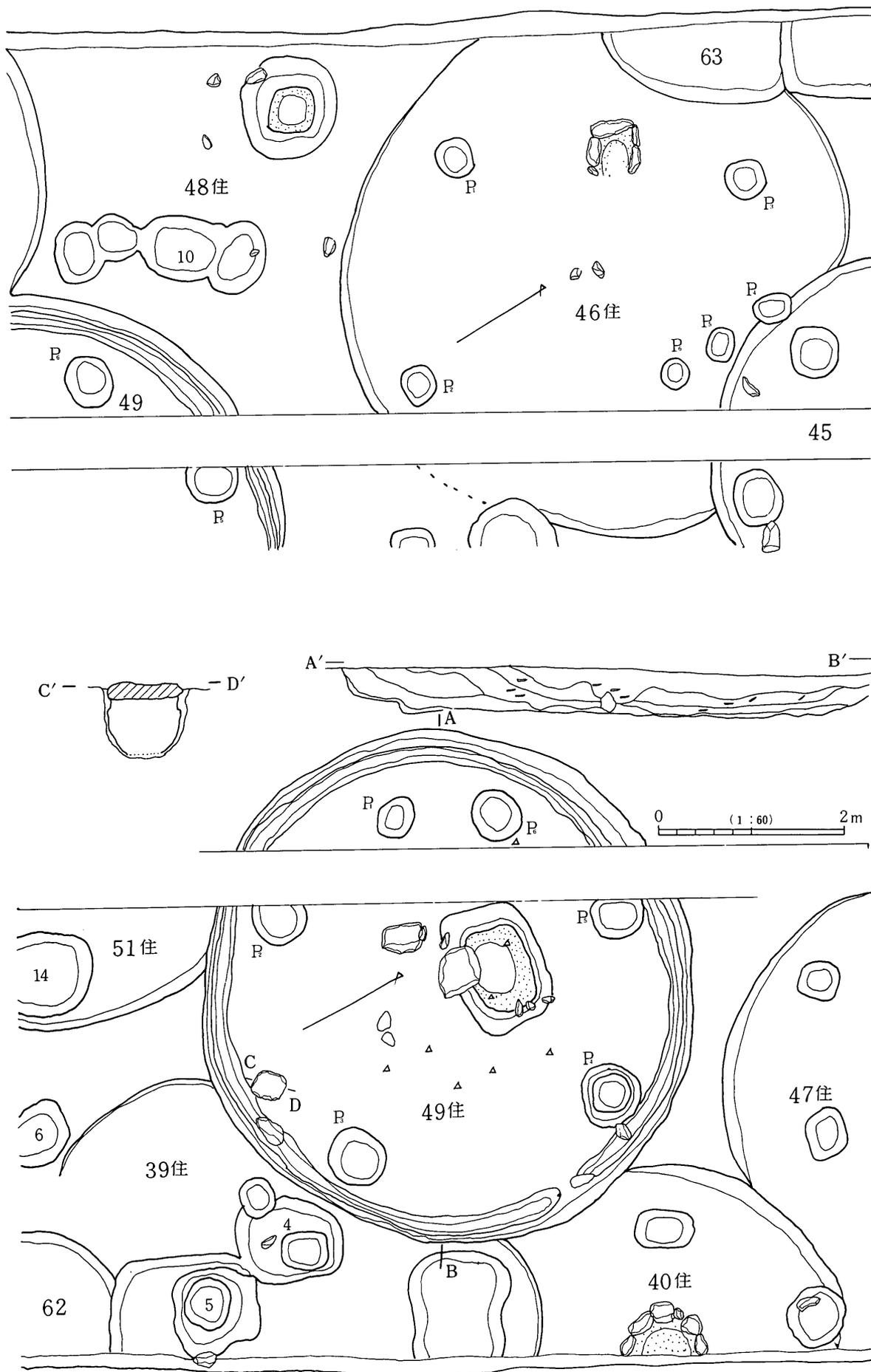
遺物の出土は多く、完半完形土器は埋め甕1・鐙付土器1・深鉢形土器6で、土偶7・円板1・石鏃4・石匙1・打石斧134・横刃形89・錘石30点が出土している。61図1は埋め甕で、口縁を欠くが口径推定28cm・器高残存部で32cmほどある。口辺は無文、頸部は粘土紐貼り付けの波状と刺突文、簡単な把手が付き肩部には、貼り付け隆帯の弧線を並べ、底近くまで懸垂している。その間に磨消縄

文を地文にして、3本の沈線文を配している。2は口径22cm・器高やく27cmの深鉢形土器で、底部が欠損している。口辺には渦巻類似の弧線文の貼り付けがあり、その中に楕円区画を構成して磨消縄文を入れてある。胴部から底部にかけては沈線文で横・楕円区画を作り、中にまばらな磨消縄文を入れ込んでいる。3は口縁推定31cm・器高残存部25cm以上の深鉢形土器の上半部分である。口辺は二本の貼り付け突帯を廻らし、貼り付け隆帯の組みひも状の文様が付く。頸部には大形な連続爪形文を横走させ、胴部には渦巻隆帯を懸垂させて、その中・周囲を弧状に沈線文で埋め込んでいる。4はキャリバー形の深鉢形土器口縁部で、口辺に細長い楕円区画を構成して、縦の並行沈線文がある。胴部は縄文を地文として、弧線状・僅かな渦巻状の沈線文で懸垂している。口径は推定22cm以上ある。5は渦巻貼り付け隆帯と楕円区画の付く口縁、6は鍔付土器の口縁・胴部の一部である。口径推定30cm・器高も底部欠損で不詳ではあるが、30cm以上はある。口辺部の穿孔は見つかっていないが、3cmほどの鍔が付き、太幅の隆帯を貼り付けて、双口状の把手や渦巻状の文様構成がみられる。この遺跡では数少ない鍔付土器の一つである。9～20は各種の把手で、10の貼り付けた隆帯の爪形に刻みを付けるものの他は、渦巻文・弧線文をあしらったものが多い。63図22・24のように爪形文を配する古手のものもある。62図1～27は大形な土器片・口縁を記録したもので、爪形・縄文だけのものもあるが、完形土器と類似するものがあり、貼り付け隆帯の渦巻文・組みひも状の隆帯・縄文を配した楕円状区画のもの等が多い。63図1～20の中には、62図の貼り付け隆帯・弧状の沈線構成等が含まれているが、1～5のような細めの沈線文による、渦巻・弧線文と横走・交差の沈線文による土器も含まれている。出土する土器は多様であるが、器形・文様構成から45号住居址に類似する土器や後述の59号住居址に類似する土器もある。総体的には、45号住居址と類似する、後葉の後半に比定されるように思われる。土偶は89図の3～6の4個体が記録されている。3は腰部で臀部の張り出しの大きなもの、4・5・6は足の一部である。ミニチュア土器では、90図の2で鼓状のものである。石器の数も多く、100・101図には打石斧完形70個、102・103図に横刃形49個、錘石30個、104図には磨石器10個擦石・丸石8個が記載されている。

⑫ 51号住居址 (図21・66)

F地区K3辺りで、39・49・59号住居址、土坑6・7・14・37等と重複し、水道管敷設の溝で掘り込まれているために、遺物出土は多かったが、遺構の検出が困難な住居址の一つである。漸く輪郭だけが確認されて、47図のような3mほどの方形状の堅穴が検出されている。炉や焼土も確認されていないし、ピット等も見つかっていない。

遺物は上層から出土したものが、多く土器片やく40・石器46点が記録されている。66図1～17の土器片がそれで、粘土紐貼り付けの隆帯で構成される把手、爪形・櫛刃・粘土紐貼り付け文等のものが記載されている。この他に上層出土のものは、沈線文を主体にした弧線文・細かい縄文を配した後期的な土器片も出土している。土偶は3個出土している。89図7は腕・8は胴部、9は足の一部と思われる。



第47图 46·48·49号住居址

⑬ 52号住居址 (図46・66、写図18・23)

F地区I4辺りで、59号住居址に接触し、38号住居址に切られ、土坑12・15・36等と重複した竪穴で、長径5.4m・短径推定4.7m・深さ35cmほどの、方形的な竪穴住居址である。炉は中央北に偏って長さ40cmほどの、水成岩の丸石8個を円形状に並べ、3個の石が押えに使われた径1mほどの石囲い炉がある。今回の調査区では類例の少ない完全な形態のもので、フルーツパークに移設展示してある。柱穴は4個確認されている。P1～4で径16～24cmあり、深さも30～40cmほどある。P4からは、20cmほど下から深鉢形土器の胴底部(66図18)が出土している。周溝は途切れるところもあるがほぼ全体を取り巻き、幅20cm・深さは10～20cmほどある。4個の柱穴は位置からすれば北に片寄っているため、南東側にもう2本あるように思われるが、水道管の溝による破壊・38号住居址の重複により確かめられていない。柱穴の位置・炉の方向から主軸方向はN28°Wである。床面は北西側は硬くて良好であるが、東南側水道管の溝の影響もあり軟弱である。

住居址の残存状況が好いのに対して出土遺物は少ない。柱穴内出土の深鉢形土器は完形の他には、土器片40点・石器39点に留まっている。66図19・22で沈線文もあるが条線系のものもある。

⑭ 50・59号住居址 (図21・64・65・67・88、写図77～79)

F地区M5に50号住居址、K5に59号住居址が重複している。遺構の状況・遺物の出土状況は59号住居址の方が中心になるので、59号住居址を主体にして報告する。59号住居址は半分くらいは西側用地外に隠れ、東側に50号住居址と土坑37等が重複し、南側は52号住居址が隣接している。竪穴の径は5.4mの円形で、西側用地境に1mほどの凹みがあり、その中に焼土があり、縁に3個の石が転がっている。炉石の痕跡は確かめられないが、石囲い炉かと思われる。柱穴はP1～P6の6個検出されP1～P5が主柱穴で、西側用地外の1～2個あるものを含めて主柱穴と考えられる。P2・P3の中間南側に埋め甕があり、炉の中央を結ぶ方向が主軸方向と思われる。したがって主軸方向はN25°Wである。埋め甕は南側壁沿いに3個の拳大の石が配置され、口縁を欠く深鉢形土器の底部(67図1)が出土している。周溝が二重に検出されている。中側の周溝は南側は途切れているが、ほぼ3.6mほどの円形になると思われる。二重の周溝が検出された住居址は、この59号住居址だけである。総じて床面は軟弱であったが、周溝によって検出された住居址である。

遺物は埋め甕1・深鉢形土器半完形3・土器片70点・土偶3・石器165点が出土している。67図1は埋め甕の深鉢形土器の底部で、口径・器高は不詳であるが、底径は32cmの大形なものである。64図1は、口縁・胴部を欠く深鉢形土器の口辺部で、口縁径・器高は不詳であるが、口辺径は56cmほどある。口辺を沈線の弧線が4本横走り、その上下に縦の並行条線が並ぶものである。2は隆帯に蕨手の沈線文・3は、表に粘土紐貼り付けの隆帯を縦に付け、裏には縦の刺突文を付け、上面にも刺突文の同心円を配した把手である。4は口縁を中に折り曲げ波状口縁にした、大きな把手の付く深鉢形土器の口縁部で、把手は太く厚い貼り付けの隆帯で、その上面・側面に連続刺突文による渦巻・弧線が付けられた豪華な土器で、把手の間には、弧状的な太めの沈線文が付けられている。5は4と似通ったもの、6は刺突文・渦巻文の構成であるが、二重に作られた把手である。7～21は隆帯に刻み・貼り付けによる弧線・条線を地文にして沈線文で飾るもの等がある。65図の1～12も類似のもの、

13・14は爪形、15・16、18～21は太めの波状隆帯の付くもの等がある。31～38は口縁に刺突文を並べ、弧状の沈線文・横走の複数沈線文の土器で、形態は異なるが、把手の付く64図4の深鉢形土器と同系統のものと思われる。似通った土器は少ないが、49号住居址にも似た土器があり、竪穴の間隔・炉の形態等から、後葉後半の住居址のように思われる。土偶は3個出土し、88図14は臀部・15は胴部・16は脚部である。

⑮ 54・55・56・57・60号住居址 (図6・66・67)

これらの住居址は、F地区の南側一帯の用地境にあるもので、竪穴の落ち込みは確認されたが、住居址の形態等を検出するまでには至っていないものである。

54号住居址は、J1辺りで大部分が東側用地外にかかる竪穴で、ほぼ1mほどの円形状の落ち込みを確認したもので、土坑5・9も重複していて、住居址の形態等は掴まれていない。縄文時代中期後葉の土器片・石器23点が出土している。

55号住居址は、F地区西側F5辺りの52号住居址の西側で、2mほどの範囲で検出されたものである。土坑17・36と重複している。掘り込みはあるものの10cmほどの浅い竪穴で、焼土が確認され、縄文時代中期後葉の土器片の他に、縄文時代後期的な土器片や、弥生時代後期の土器片も2片ほどと石器が12点出土している。ピット等は確認されていない。

56号住居址はF地区F1辺りの用地境に接して、1mほどの範囲の円形状の落ち込みが確認されている。土坑8や南側から続く平安時代の建物址群にかかわるピットが重複していて、住居址の形態までは確認されていない。後期後葉の深鉢形土器片(66図29～31)の他に、無文のミニチュア土器が出土している。

57号住居址はF地区に西側D5辺りの用地境で、1mほどの楕円形の落ち込みが検出されている。掘り下げた範囲は僅かであったが80cmほどの深さがあった。

60号住居址はF地区F3の辺り38号住居址の西側に、38号住居址の床より低い落ち込みがあった。この落ち込みは南側まで続くが、水道管掘り込みの溝があり、上には南から続く平安時代の建物址22のピットが並ぶために拡張調査が行われていない。67図8～10の土器片で、爪形・条線文の土器片である。石器も23点出土している。

⑯ 61・62号住居址 (図21・49・67・68・89)

61・62号住居址は、F地区東側D1・A1辺りで、53・77・72号住居址、竪穴群と重複して検出された住居址で、結果的には住居址の形態等が不詳のまま終わった住居址である。61号住居址の場合は北側の落ち込みの一部と、竪穴3と重複する炉址の残存部の焼土が確認されたが、62号住居址は東側の用地外へ半分以上かかっていることもあり、竪穴4・14・15・16・23等そのものも重複しあっているために、分からないまま調査が終了している。61号住居址は、北側にやや方形を呈するように壁の一部が検出され、それに沿うように柱穴と思われるP1・2・3が確認され、竪穴3の中に深さ63cmほど下から焼土が確認され、炉の底と判断された。P1・2が61号住居址の柱穴かと思われるが、確かとは言い切れない。

出土する遺物も時期差が多いもので、中期中葉53号住居址の項で触れたように、縄文時代中期中葉藤内系の土器片が多く出土している。67図11～25の土器片は61号住居址のものとして登録したもので、貼り付け隆帯に伴うもの・渦巻の太い沈線文のもの・縄文と懸垂文等縄文時代中期後葉中ごろの土器片がある。61号住居址の土器かと思うが竪穴の土器かもしれない。

68図の土器は、62号住居址出土の土器として登録されているもので、1は太い渦巻文の隆帯を口縁胴部に配し、区画内を磨消縄文で埋める、中期後葉の中ごろの深鉢形土器口縁で、3は同時期の底部である。4～29は拓本で、4～9は後葉前半の土器、10～29は1・3と同様の後葉中ごろのもので、61・62号住居址や、この周辺の竪穴群もさほど時期差はないように思われる。土偶も2個出土している。89図10・20で、10は胸部・20は胸部と腕部で、刺突文系の様子は45号住居址のものと類似している。何れにしても、いろいろ入り組んだ遺物が出土している。

⑰ 63号住居址 (図48・69・70・71・92・105・106・107、写図11・80)

E地区T2・3辺りにあって、64・75・76号住居址と重複する竪穴で、南東側は64号住居址との重複関係と、東側用地境との様子から竪穴の範囲が不詳なところがあるが、長径やく6.5m・短径5.3mほどの長方形の竪穴式住居址で、中央北側に偏って炉址と思われる、長方形の焼土を持つ落ち込みがある。水道管の溝で中央部が破壊されているので、形態・構造が不詳ではあるが、炉石の残りは見当たらないが、位置・形態から方形状の石囲い炉であったと思われる。ただ気になることは、竪穴の方向と炉の方向が異なることである。柱穴と思われるピットや竪穴状の穴の配列も不規則であり、北東側の周溝も、竪穴に沿い兼ねる状況で、判断し兼ねる住居址である。場合によると、後述の75号住居址を含めた住居址になるかもしれない。炉を中心に小振りのピットを拾い上げると、西側隅からP1・2・3が拾われ、東側隅から北へかけてP4・5・6・7を拾うと、竪穴を取り巻くような配置がみられる。南側の64号住居址のピットは除外して、P1～P8と土坑34を含めると、炉を取り巻くような配置も考えられる。周溝は北側だけにあるが、所によっては40cmほどの深さがあり、方形状の竪穴に合わない弧状を呈している。結論の出にくい住居址であった。P記号の竪穴状ピットは大きさだけでなく、深いものは80cmを越え99cmに及ぶものもある。また、東側に固まるP3・4・5・6の中には、大形土器を含む土器片出土が多く、課題の多い住居址であった。64号住居址にもかかわることであるが、双方の住居址の重複するP1・2辺りまで、異常なほどの焼土が堆積する住居址でもあった。

出土遺物は多く、深鉢形土器6・浅鉢形土器2・ミニチュア土器3・円板1・石鏃8・打石斧63・横刃形109・磨石器3・錘石8等が記録されている。69図1は、半個体の深鉢形土器で底部を欠くが、口径46cm・残存部器高38cmある。口辺は無文、頸部に連続刺突文・肩部から底近くまで隆帯による縦の長方形区画を構成して、区画内を磨消縄文が付けられている。2は1同様の深鉢形土器の口縁胴部、3・4は内湾する口辺に渦巻・弧線の隆帯を付け、渦巻または円形区画の中に縄文・刺突文をいれたもの、頸部に連続爪形文・胴部に隆帯の区画の中に、縄文・刺突文を付ける深鉢形土器の口縁である。5・6は、縦に細い条線が付く程度の無文で、胴部から直線的に広がる深鉢形土器で、6は口径25.5cm・器高26.5cmある。70・71図の土器も、渦巻文・長方形区画・縄文・刺突文・結節縄文等の完形土器と類似のものが多い。これらの土器の多くは炉より東側に集中している。(●印参照) 石

器の数も多く、石鏃は92図94・95で大形なものがある。105・106・107図には打石器完形27・横刃形47・錘石8・磨石器5・丸石11個が記載してある。記載はないが、表面が雑な花崗岩製の石棒の頭部（長さやく20cm）も出土している。

⑱ 64号住居址（図48・72、写図11）

E地区R1辺りで、東側の一部は用地外に隠れ、63・75・76号住居址と重複し、上層に中世以降と思われる工房址的な集石遺構があって、住居址の床面から上層にかけて、5～10ほどの厚さに焼土塊がある特異な住居址である。63号住居址の重複場所がはっきりしないので、プランを確認することが困難であるが、炉の位置等から判断すると、やく6mほどの竪穴と思われる。住居址の西側に偏って1.5mほどの長方形と思われる凹みがあり、焼土が充満している。東側に長さ35cmほどの水成岩が4個直線的に並んでいる。水道管の溝で切られているので西側は不詳であるが、1m以上の長方形の炉であったと思われる。柱穴と思われるものは、南側から東側にかけてP1・2・3・4の配列をみることはできるが、北側・西側では配置を拾いあげることはできない状況である。63号住居址でも触れたように、大形な竪穴状掘り込みの集団があって、区別の難しい竪穴である。切り合い状況・出土遺物の状況等からみると、63号住居址を64号住居址が切り、大形竪穴群（P1・2～）が63号住居址を切っているように思われる。64号住居址から63号住居址のP3辺りまで、異様なほどの焼土群があり、その広がりや64号住居址全域に及ぶが、焼土がとくに厚く量が多いのは、64号住居址の南側・東側であった。その辺りには、集石遺構1・2があり、焼土塊3・4がある。遺物等の発見がないので時期比定はできないが、焼土の正体を住居址の時期にするか、集石以降の時期にするか、課題の残された遺構である。

遺物の出土は63号住居址に比べると非常に少なく、半完形土器は1点、土器片やく100・石器は100点ほど出土している。72図35は西南P1沿いの集石の中から出土した深鉢形土器の口縁部で、底部を欠くが、口径20cmである。口辺に同心円文が並び、中に縦の沈線文がある。胴部は縦の隆帯を懸垂し、綾杉状の沈線文を施文してある。1～34は拓本で、条線・爪形文もみられるが、同心円の付く口辺・隆帯と弧線状の沈線文・渦巻文等の土器が主体である。

⑲ 65・66・70・72・73・74・75号住居址（図6・73・74）

これらの住居址は、主としてE地区の東側・西側の用地外へ大部分かかるもので、竪穴の輪郭の一部しか検出されないもので、中には土坑であったり住居址でないものも含まれている。

65号住居址はE地区O1辺りの用地境に、1mほどの輪郭が確認されたもので、ピット等の遺構も確認されていない。

66号住居址はE地区M1辺りの用地境に、1.5mほどの範囲の輪郭が確認された住居址で、土器片30点ほど、石器33点出土している。ピットが1個確認された以外には、遺構は確認されていない。

55図1～7は出土土器片の一部である。70号住居址はE地区K1辺りの東側用地境に、1mほどの円形状の輪郭が検出された住居址で、ピット等の遺構は確認されていない。73図31～33の土器で、31は深鉢形土器の底部で、貼り付け隆帯の懸垂・綾杉状の沈線文の付くもので、32・33は太めの沈線文

による横走・円弧の沈線文がつく土器である。

72号住居址はF地区の南側、D2辺りに円形状に落ち込む3mほどの輪郭と、それに沿う周溝の一部が確認され、伴うピットも2個検出されている。61・71号住居址と建物址22のピット等が重複して、南側に隣接する61号住居址と共に、遺構の確認が難しい住居址である。場合によると63号住居址と合体するものかもしれない。74図3～27が登録された土器片で、縄文時代中期中葉と思われる爪形・条線・竹管文の土器も含まれ、後葉の土器では粘土紐貼り付け・刺突文と条線の構成・渦巻文のものが含まれている。石器は石鏃1・打石器27点が記録されている。

73号住居址はE地区V1辺りの東側用地境に、1mほどの円形の輪郭が検出された住居址で、竪穴13が重複している。落ち込み以外は住居址の遺構は確認されていない。

74号住居址はE地区V5辺りの西側用地境に、1.5mほどの円形の輪郭が検出された住居址で、土坑23・29が重複している。土坑の他にはピット等は検出されていない。土器片の出土も少なく10点程度で、石器は7個記録されている。

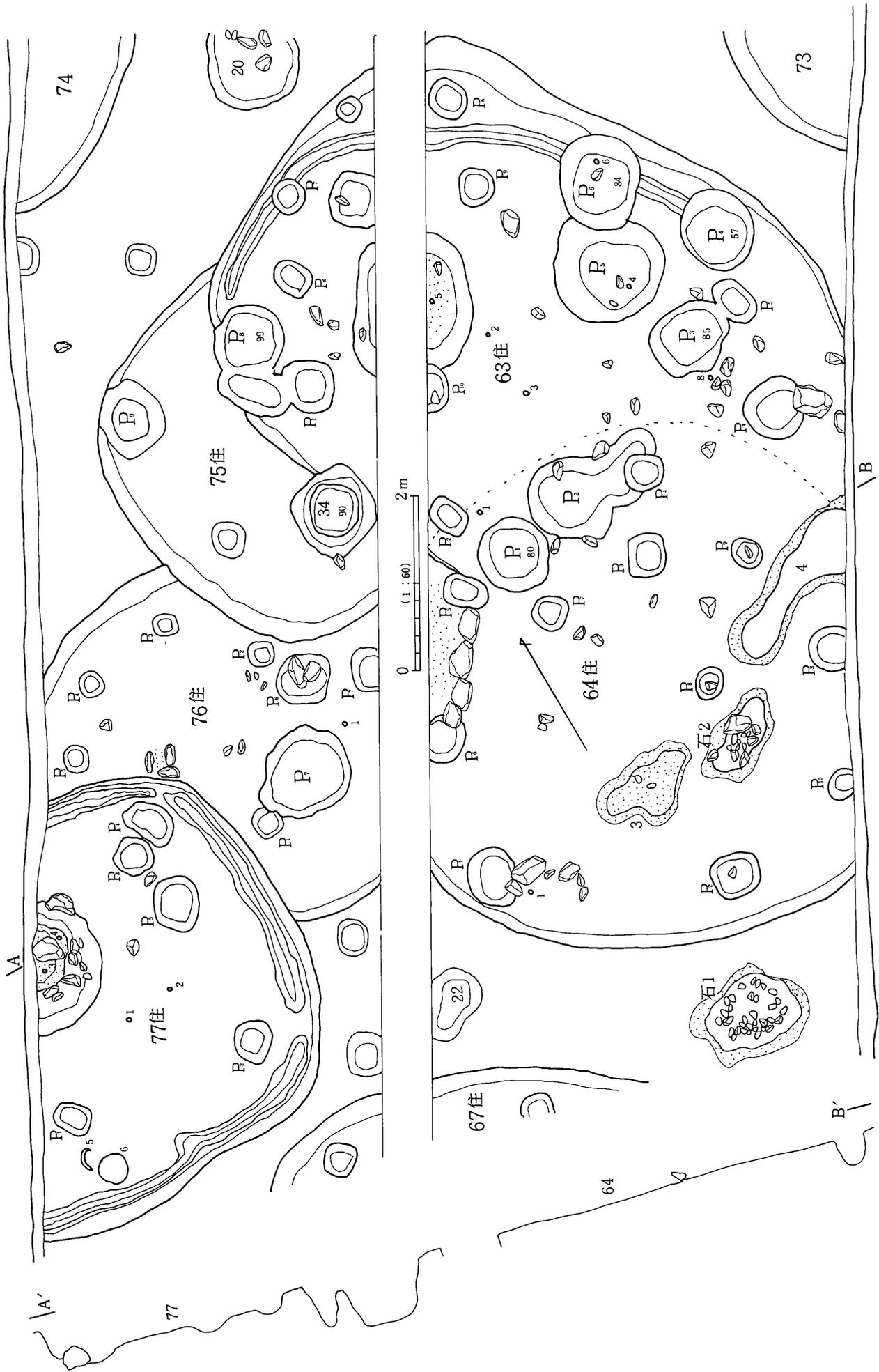
75号住居址はE地区T4辺りにあって、東側は63号住居址に切られ、西側の76号住居址を切っている竪穴で、西側やく半分が検出されている。隅丸形状の住居址で、径4mで西側の掘り込みは50cmほどあり、76号住居址との差は20cmほどある。柱穴と思われるピットは1個確認されている。63号住居址にかかわる竪穴P8・9、竪穴34の検出の追われ、細かい検出ができなかった住居址でもある。土器片やく70点・石鏃1・石器70点ほど記録されている。32・33図に記録されているように、後葉の土器片もあるが、条線系の縄文時代中期中葉の土器片も多く出土している。

78号住居址はE地区N5辺りの西側用地境沿いに、1mほどの円形の落ち込みが確認された住居址で、土坑状の落ち込みも重複していた。縄文時代中期後葉の土器片25点・石器6点が出土している。この78号住居址と、東側の用地境にあった70号住居址が住居址であるとすれば、E～F地区に集合する縄文時代中期後葉の住居址群の南限に当たる位置にある。

⑳ 77号住居址 (図48・75・76・77・78、写図17・24・64・81～83)

E地区O5辺りの西側用地境に、やく半分ほど出ていた竪穴住居址で、西側が不詳であるが、南北径4.5m東西径不詳の竪穴住居址で、西側用地境に幅1.4mほどの凹みがあり、2個の炉石と思われる石があり、焼土が充満している。形態は円形か方形か不詳である。炉の位置から推定すると南北の径は5.5～6mあると思われるので、隅丸長方形の竪穴で、炉と埋め甕の位置からみると主軸方向はN3°Eである。柱穴は5個検出されているが、P1・2・3が主柱穴と思われ、長軸に沿って3本ごとの柱穴配置が想定される。P4・5は柱穴か土坑であるか不詳である。掘り方は検出面から50cmほどある。周溝は途切れるところもあるが周囲を廻らし、幅は30～40cm・深さは40cmほどある。南壁中央に近いところに2個の埋め甕がある。5・6で5は半完形、6は完形である。炉の南東部に深鉢形土器(1・2)の完形が、炉の中には3・4の深鉢形土器があり、まだ奥にもあるのが見えているが、掘り出してない。

ほぼ半分ほどの検出範囲であるが、遺物の出土が非常に多い住居址で、埋め甕2・深鉢形土器形8・浅鉢形土器2・器台形土器2・石匙1・打石斧32・横刃形36・磨石器1・錘石6が記録されている。75図～78図は出土土器で、75図1は口径30.5cm・器高35cmの深鉢形土器で、口辺は肩部に長



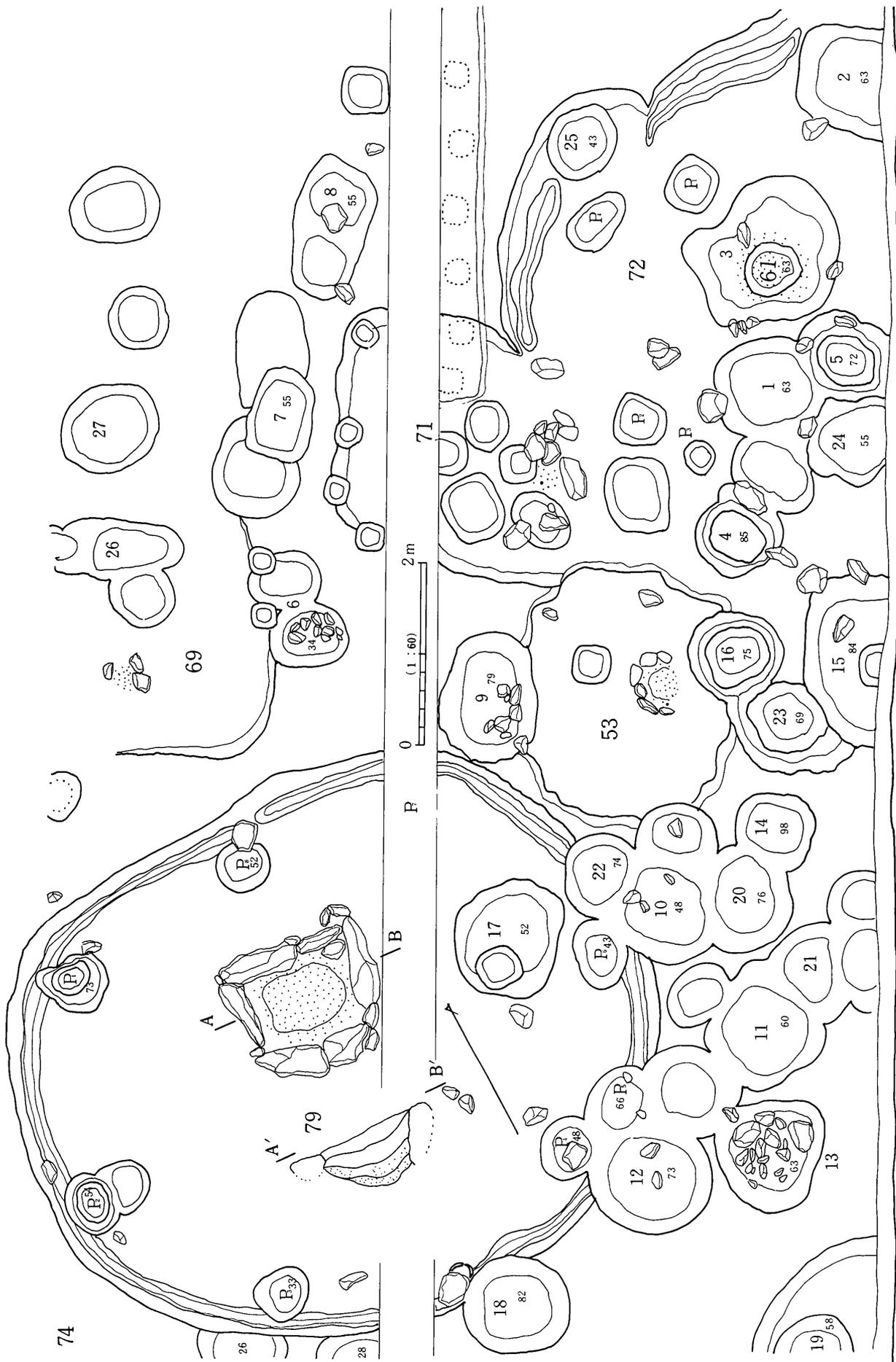
第48图 63·64·77号住居址

方形の区画の中に2段3段の山形文貼り付けが入り、胴部は渦巻文の太い隆帯で円形区画を作り、その中を弧状沈線文で埋めてある。2は6の埋め甕で、口径32cm・器高41.5cm、口辺に楕円区画を並べ、中を弧状の沈線文が並ぶ。頸部から胴部にかけて2～3本の細い条線を懸垂させている。3は口径23cm・器高29cm、口辺に楕円区画に渦巻文と弧線の沈線文が付き、胴部には隆帯で縦の楕円・方形区画を構成し、中を沈線の綾杉文で埋めている。胴部から口縁へかけて直線的に立ち上がる深鉢形土器で、このタイプのもが多い。4は同心円に縦の沈線文が付くもので、胴部は縦の隆帯の間に綾杉の沈線文が付けられる。6は刺突文・縦の沈線文の同心円と綾杉文の組み合わせたもの、5は胴膨れの深鉢形土器で、口辺には縦の刺突文2本と太めの綾杉を組み合わせ、胴部に弧線沈線文を配する同心円が並ぶ。76図1は刺突文入れの同心円と弧線文を横走させる深鉢形土器の口縁部、2は二条の沈線で縦長の区画を作り、綾杉の沈線文の入る深鉢形土器の胴底部である。3は5の埋め甕で口縁を欠く無文の深鉢形土器で、残存部の器高が28cmある。4は同心円・綾杉文組み合わせの深鉢形土器の口縁・胴部、5・6は同心円配置の小形な深鉢形土器で、5は口径やく15cm、6は口径15cm・器高は残存部で14.5cmある。8～10は綾杉文の付く深鉢形土器の底部で、11は器台形土器の台部である。77図と78図の拓本は主として同心円文のタイプを収録してある。38・49・64号住居址に類似のものが多い。

②1 79号住居址 (図49・79・80・90、写図16)

E地区Y3・4辺りにあって53・69・74号住居と重複し、土坑26・28、竪穴9・12・17・18・22等とも重複して、東側の検出が非常に困難な住居址であった。長径7.1m・短径6mの大きな竪穴式住居址で、今回の調査区の内では最大の住居址である。中央やや北寄りに、最長1mから70・90cmの花崗岩平石を組んだ長径1.7m・短径1.5m、深さ65cmほどの切り炬燵状の石囲い炉があり、東北角に2個の石をL字状に組んだ副炉が付いている。炉の方向・南側にある埋め甕の位置によると、主軸方向は殆どNの方向で、長方形の長軸を正面にした竪穴と思われる。主柱穴は東側がはっきりしないところもあるが、P1・2・3・4・6・8で東北隅は水道管溝により破壊されているが、P7の存在が予想され、7本構成に思われる。それぞれのピットは深いものが多く、P1から73・54・33・48・43・52cmで、P1・2は二重構造である。周溝は全体を廻らし幅は20cm・深さは10～15cmほどある。いずれにしても長方形竪穴の長軸側を正面にする、典型的な形態が分かる住居址である。類似するものは77号住居址で、見方によると62・72号住居址、63・65号住居址の合体したものがこのタイプのものかとも思われる。

住居址の大きさに比べてみると遺物の出土は少ない。埋め甕2個体・深鉢形土器2・土器片70・ミニチュア土器2・土偶2・石皿1・石棒2・石器126点である。79図1～8は把手で、渦巻文のもが多い。9は埋め甕の胴部片で、頸部に連続爪形文を2条並べ、胴部を沈線の渦巻・弧線で埋めるものである。この住居址の埋め甕は大きめなものであったが、竪穴18等による攪乱が激しく復原が困難なものであった。10も同時に出たものである。11～26、80図1～20、21～37は、総体的には縄文と太い沈線文の構成・太めの渦巻文・隆帯区画と磨消縄文・隆帯円弧状の区画と弧線状沈線文・細めの沈線文と磨消縄文のもが多い。21～30は爪形と円弧文・刺突文等のもの・竹管と押圧突帯・条線系のももあるが、総じては縄文時代中期後葉中ごろの土器が主体で、38・49・63・77号住居址と比べて



第49図 79号住居址と周辺の竪穴址群

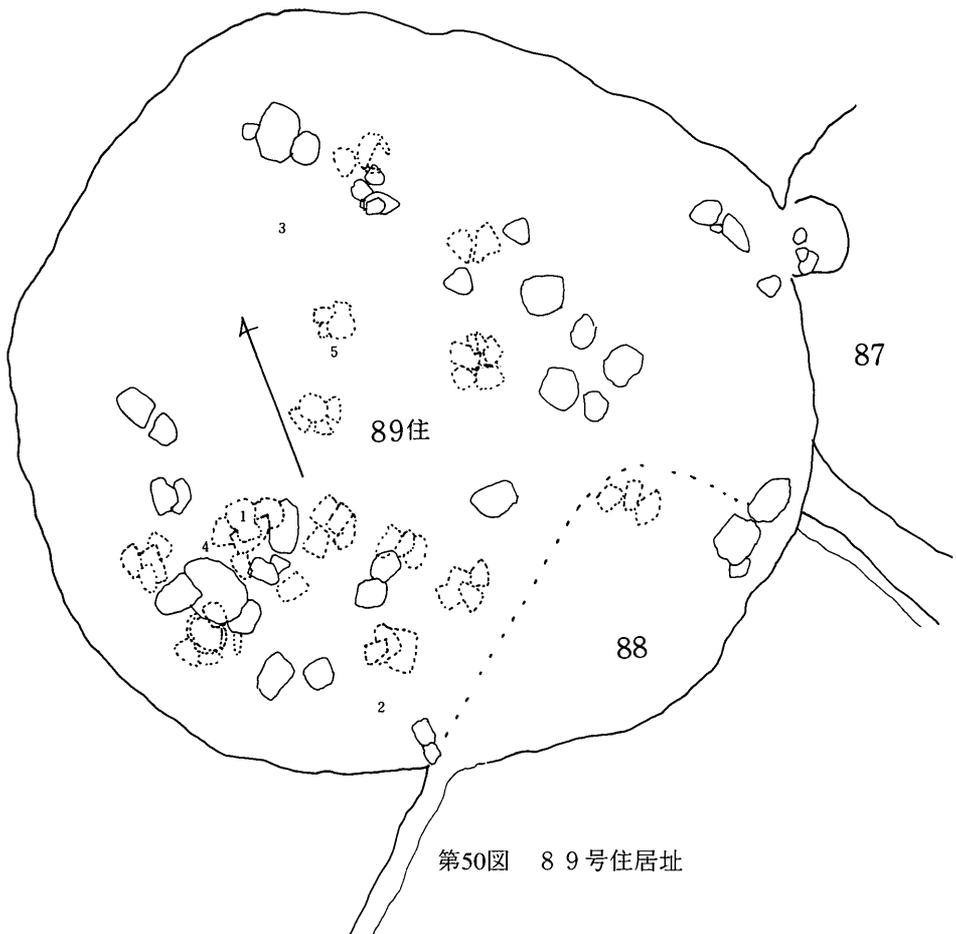
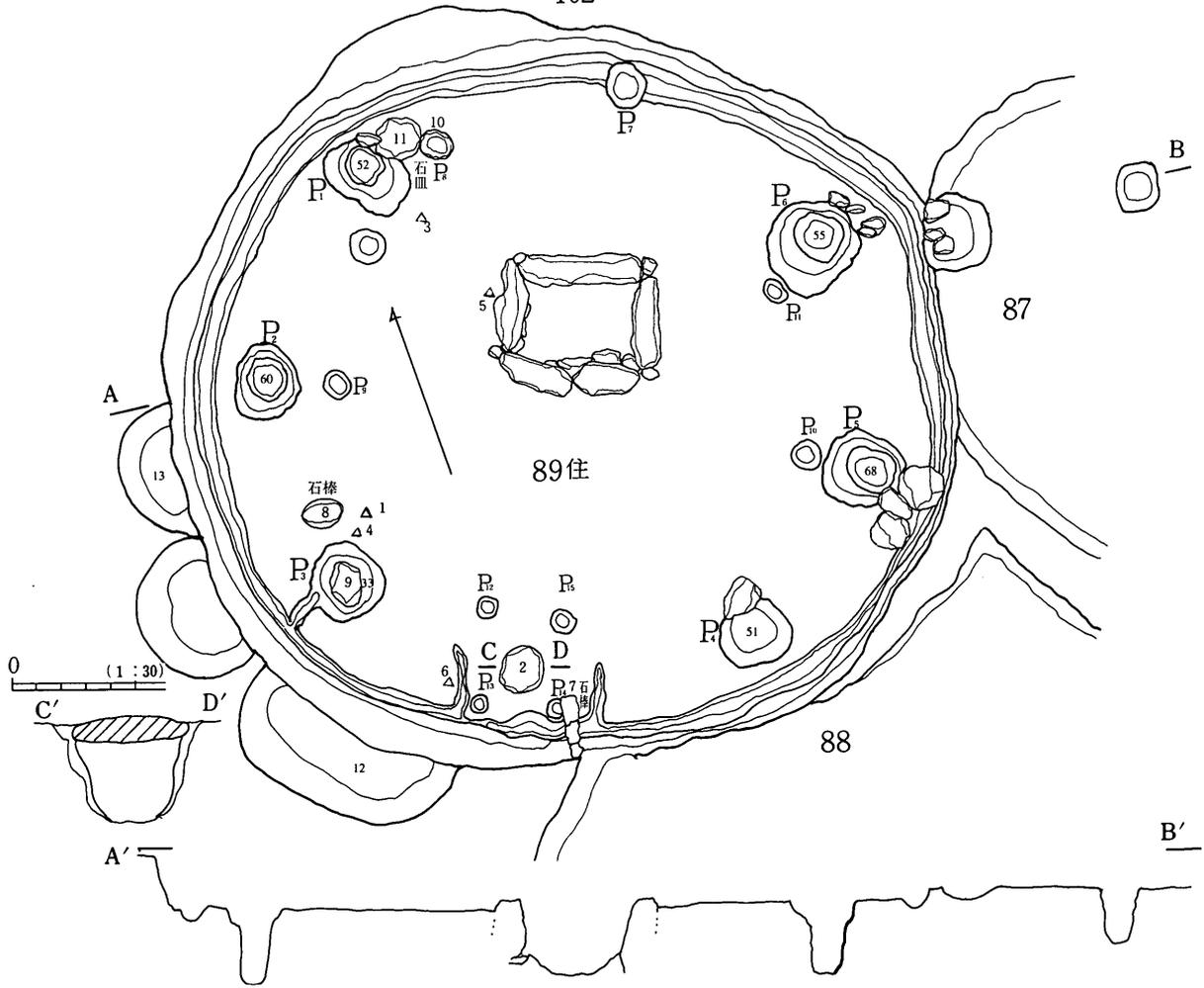
みても大きな時期差はないように思われる。90図2・3は79号住居址出土の土偶で、2は腰部・3は腕部で45・62号住居のものと同様である。土製品は10・11はミニチュア土器である。112図に石皿がある。

② 89号住居址 (図50・81・82・83・90・108～111、写真14・15・16・72・84・97)

C地区の西側中央部付近で、87・88・102号住居址、土坑12・13・14と重複して検出された、楕円形状の竪穴式住居址で、長径6.2m・短径5.8m、西側がやや広がりぎみの変形した竪穴で、西側では検出面から45cmほどの掘り込みであるが、東側は30cmほどとやや浅くなっている。中央やや北に偏って、奥石は1mほどの1枚石、東西はそれぞれ70cmほどの1枚石、南側それぞれ55・60cmほどの2個の平石により、長径1.3m・短径1.1mの長方形の切り炬燵状の大きな石囲い炉がある。小さな石で角を小詰めをして、南側は下に平状の石を敷き詰めた上に平状石2枚が据えられている。南側の壁沿いに石蓋を持つ埋め甕があり、小ピット4個を配した入口状の所がある。埋め甕と炉の中心を結ぶ方向が主軸方向と思われ、N20°Eである。柱穴の配置にもある規則性がある。西側壁沿いにP1・2・3が並び、東側壁沿いにP4・5・6が並ぶ。北側はP1・6の間に小振りなP7があり、南側のP3・4の間には4個の小ピットP12・13・14・15が方形に配置され、入口状の構成で、左右に細い溝がある。その中央に埋め甕の蓋石がある。P14の許に据えられた石棒が壁に倒れかかっていた。石棒は入口に立てられていたものと思われる。中央に位置するP1・2とP5・6にはそれぞれ内側に小ピットが穿たれている。この4個の柱穴はそれぞれが二重構造で、深さも52・60・68・55cmある。床面は全域に踏み固められたような焼土が堆積し、とくに西側の焼土は厚く堆積している。石棒にしても石皿や柱許に置かれた石まで焼けただれている。炭塊や炭化材は発見されていない。全域を取り巻くように周溝が掘られているが、溝底には焼土は見当たらない。埋め甕の周辺にはピットの外側に突出する細い溝が対称的に掘られている。完形の土器や石棒・石皿の出土位置にも目的がありそうに思われる。南側壁沿いの石棒(7)と埋め甕・鏝付土器(6)の関係、P3周辺の石棒(8・9)と完形土器(1・4)の関係、P1周辺の石皿(10)と香炉形土器(3)の関係等偶然ではなさそうな配置があるように思われる。

遺物の出土も多く完形・半完形土器は埋め甕1・有孔鏝付土器1・香炉形土器1・深鉢形土器4・浅鉢形土器2・土偶2・石鏃5・石匙1・石棒3・石皿3・打石斧53・横刃形石器39・磨石器6・錘石3等である。81図1は口径34cm・器高49cmほどの樽型深鉢形土器で口縁は無文、頸部に横線と山形文隆帯の付く楕円区画と刺突文の同心円が付く。胴部は縦長の長方形区画に綾杉の沈線文が配される。2は底部を欠く埋め甕で、口径37cm・残存部器高38cmの深鉢形土器で、口辺部に条線による楕円区画が並び、幅広い櫛状工具で縦の蛇行する櫛描文が並行して垂れ下がる。3は香炉形土器で太い沈線で鏝は渦巻、把手は渦巻と同心円文で飾る双耳のものである。P1際に石皿と隣接して出土している。4は口径22cmの深鉢形土器の口縁部、5は口径18.5cm・底部を欠くので残存部18cmで、把手の付く小形深鉢形土器で、4・5とも同心円と沈線文区画に綾杉文の付くタイプのものである。82図1は口径30cm以上の深鉢形土器の口縁部である。2～5は把手で、5を除いては渦巻文隆帯によるものが多い。9・10と83図1～22は大形土器片の拓本で、葵形の同心円文・並行沈線の付く同心円・刺突文の同心円文や渦巻文・縄文を地文にして縦の沈線文・綾杉文・弧線文のものが多い。総じて38・49・63・77号住居址の土器と類似点が多い。土偶は90図5・6・7・8で、5は腰部・6

102



第50図 89号住居址

は腕部・7は足部・8は刺突文の並ぶ腕部である。石器は108・109図に完形打石斧23点・横刃形石器33点・磨石器16点・錘石2点・丸石8点が記録されている。110図25は入口部に立てかけられていた石棒で安山岩製で基部が欠損しているが、残存部で長さ64cm・胴部径13cmの大形なものである。全面が火による軟化が著しく表面剥離が進んでいる。裏側がとくに剥離され、本体も3本に割れ、剥離片を周辺から拾い集めて漸く接合している。111図は石皿・石棒である。1はP1の北側に裏にして置かれていたもので、花崗岩製で、長さ46cm・幅32cm・擦部の厚さ10cmの大形な石皿である。火の影響による軟化状態は石棒と同様で、表面は指で触っても崩れる状態である。2はP3の北側に据えられていたもので、これも2個に割れていた。長さ50cm・幅(厚さも)19.5cmほどある。3・4は砂岩製の石皿で、3は長さ32cm・幅27cm・厚さは3.5～4cmほどある。

②③ 97・120号住居址 (図6・14)

97号住居址はD1地区の南側で、平成10年の調査で確認された、径5mほどの円形の竪穴住居址で、縄文時代中期後葉の土器片が出土していた。その後の調査により、ピット群・竪穴群の重複が多く竪穴の輪郭がはっきり掴めなかったものである。

120号住居址は、D2地区の119号住居址の検出中に西側用地外に竪穴のあることは分かり、炉もあるように思われたので、地権者横前さんの了解を得て石囲い炉を確認した。14図にあるように長径80cm・短径60cmほどの8個の花崗岩を並べた楕円形の炉が確認された。119号住居址検出中に上層から貼り付け文の土器片が多く出土している。調査中、炉の周辺と南側から中期後葉の深鉢形土器が出土しているので、縄文時代中期後葉の住居址と扱っている。

②④ 縄文時代中期後葉の土坑・竪穴

調査区全体では表9のように登録されている土坑・竪穴は、B地区では土坑5基以上、C地区では10基以上、D1地区では竪穴址28、D2地区では土坑21・竪穴址22、E・F地区では土坑37・竪穴25、G地区では30基以上で、H地区北側を含めると208基以上になる。縄文時代早期から中期中葉の項で取上げたものは17基ほどある。古墳時代・平安時代のもの5基を除くと180基ほどになるが、その多くは縄文時代中期後葉と時期不詳のものである。

縄文時代中期後葉のものが多いとは思われるが、時期比定のできるものは少ないのが現実である。縄文時代中期後葉の土器完形品や器片10点以上出土したものをおおまかに拾ってみると、C地区では土坑7・18の2基、D2地区では土坑2・5と竪穴1・2の4基と言うように僅かである。E・F地区になると、土坑8・10・12・14・19・20・21・22・28・34・35の11基と竪穴1・3・4・5・6・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・20・21・22・23の19基で、合わせると30基になる。これをみれば大部分がE・F地区となる。個々の土坑・竪穴について触れることは難しいので、土坑群・竪穴群を主体にして、特徴のある土坑・竪穴について触れることにする。

(1) D2地区の土坑群 D2地区のほぼ中央、105号住居址の西側で10基ほどの土坑が検出されている。この中で前期の土器片の出土したもの3～4基を除くと、集石があったり、大形な土器片が出土する土坑が5～6基あった。一つの土坑群である。

表4 伊久間原遺跡 主な竪穴・土抗一覧

No.1

NO	地区 遺構名称	位置	出土土器					遺構の特徴・土器の特徴等	出土石器								備考	
			早期	前期	中葉	後葉	ほか		石鏃	石匙	打斧	磨斧	横刃	錘石	丸石	磨石		黒
1	B	ド33		3							1		2					4
2	"	34		6									1		2			
3	"	37		10	45			やく2mの掘り込みで炭が多い	1		1		5	1	5	2		17
4	"	38		2	3													
5	"	39		1	2		掘3											
6	C	ド1	中北側	7		4		100号住居地に隣接し、土器片出土多					1			2		
7	"	2	"	16				87・102住に挟まれ、ド3・4と隣接										
8	"	6	中北側	8				102号住居地と重複する										
9	"	7	西側			6		集石を持つ大きめな土坑			2		3					
10	"	8	西側			多		鉢形土器・深鉢形土器3個体潰れ					2		1			
11	"	10	西側	48				径1mほどの土坑、鶴ヶ島系土器出土					4		2			26
12	"	12	西側		4	9		89号住居地に切られ							4		1	4
13	"	15	西側			5				1								6
14	"	18	中北側				14	ド1・11と重複、深鉢形土器一個体			5		4					
	"	9		2														
15	D1	竪穴1	I8		1		4	長径1.6m、深さ46cm										
16	"	"	2	I7			2	1.1 42										
17	"	"	4	J6		1	3	掘1 1.7 69			1		1	1				
18	"	"	5	K6			2	//2 0.6 25			1		1					3
19	"	"	6	I6			3	1.0 41 錘石集中					2	11				
20	"	"	7	J5	5		7	1.1 51 口縁・胴部大										4
21	"	"	8	K5			1	畔 1.1 47				1	1					
22	"	"	9	K5	3		4	0.9 40										
23	"	"	10	L5	16	2	1	囀 1.9(方形)73 鶴ヶ島系・集石	1				4			破1	26	
24	"	"	11	M6		1	2	1.1 23 配石										
25	"	"	12	N7		1	1	甃1 0.8 32 囲溝址と重複焼土										
26	"	"	13	M5		8	5	(大) 1.1 29 配石・焼土							1			
27	"	"	14	N5		1	5	掘1 1.3 10										
28	"	"	15	N5	1		2	0.9 44										
29	"	"	16	O4			4	1 0.9 26										
30	"	"	17	N4		2	4	2 1.0 24					1					
31	"	"	18	N3				2 不詳 道路下										
32	"	"	19	N4			4	1.2 26										
33	"	"	20	N4		1	10	2 1.6 30					1		1			2
34	"	"	21	O4		2	18	0.8 43 粘土紐貼り付け					1					2
35	"	"	23	L4		3	22	(大) 0.7 16										20
36	"	"	24	M4		1	4	0.6 28										
37	"	"	25	K4		8	20	(前棚) 0.8 69 竃跡・98住の下層	1		1		3			2		22
38	"	"	26	J4		1	2	0.8 50										
39	"	"	27	J5		1		2 0.8 49										
40	"	"	28	K3				4 不詳 道路下										

NO	地区 遺構名称	位置	出土土器				遺構の特徴・土器の特徴等	出土石器								備考		
			前期	中葉	後葉	土師 ほか		石鏃	石匙	打斧	磨斧	横刃	錘石	丸石	磨石		黒	
41	D2ド 1	V2	3	3	5		二重構造、深さ53cm、深鉢形土器			3		4					4	
42	" 2	V3	2	16	20		壁1.1m・深40cm、集石	1	1	3		2	1	1	1		12	
43	" 3	D4			6	土師1	0.6 25 集石 溝で切られ			1		3						
44	" 4	E4			4		0.7 42 バイブ溝で切られ								磨1		1	
45	" 5	E3			11		0.8 38					1		1				
46	" 6	E3			3		1.0 45							1			6	
47	" 7	F3			7		0.8 38			2		1						
48	" 8	H4	1		1		1.1 42							1				
49	" 9	E4			3		0.6 36 石4個					5						
50	" 10	G4	1	1	2		0.8 43			1								
51	" 11	G4	5	2			0.8 62					2						
52	" 12	G5	2	1	2		0.8 42 タ1重複 半分外											
53	" 13	H5	1				0.9 36 半分用地外											
54	" 14	G3			2		0.6 28											
55	" 15	D2				土師4	0.7 51											
56	" 16	D2			2	" 2	0.8 53 105住に重複			2		4						
57	" 17	D2			2	" 4	0.5 73 " 方形状											
58	" 18	C2			3	" 3	0.6 63 " "											
59	" 19	C1				" 5	0.5 70 " "											
60	" 20	D1U2		2	3		0.9 42											
61	" 21	"V3			2													
62	" 縦穴1	G5	4	2	10		1.3 54			1							6	
63	" 2	D1T2	2		10		1.5 75 深く方形状							2			9	
64	" 3	K5				土師5	1.1 46 半分用地外											
65	" 4	O4			2	" 6	1.1 36 方形状											
66	" 5	P3			3		1.0 43											
67	" 6	P3			2		1.2 36 半分109住に切られ											
68	" 7	N3	2		4	土師6	0.7 82 建7P4と重複											
69	" 8																	
70	" 9																	
71	" 10																	
72	" 11	M3	10	3	6	土師2	1.0 81 建7P3と重複										1	
73	" 12	N2	8	30(1個)		" 6	1.0 75 125住重複			1	1						11	
74	" 13	W2			15								1					
75	" 14																	
76	" 15																	
77	" 16																	
78	" 17	P4																
79	" 18	L5			3													
80	" 19	X5			1	土師3												
81	" 20																	
82	" 21																	
83	" 22									鏃	匙	打	磨	横	錘	丸	磨	黒

(2) F地区K1付近の土坑群 F地区のほぼ中央東側一帯に土坑3・4・5・6・7・9・10・11・12・14等が検出されている。この辺りは38・39・40・49・51・54号住居址も重複していて、検出が難しいところであるが、土坑群があると思われる。土坑7には中期中葉の深鉢形土器2個体が検出されている。ほかの土坑では、中期後葉の土器片出土したものが多い。特殊な遺物としては、土坑3からスプーン状の土器(90図14)が出土している。

(3) E・F地区境周辺の竪穴群 F地区A2辺りの53号住居址の周辺は、6・49図にみられるように61・62・71・72・79号住居址が重複し、竪穴1～24と登録した竪穴(土坑類似)が集中し、西側は用地全域、北は先の土坑群、南は63号住居址周辺の大きな土坑群(P)にまで広がりその数は70基をくだらない。とくに重複度が高いところは53号住居址周辺で、今回の調査地内の住居址の広がり、昭和52年の立入り調査による、円形状住居址群の中央部に位置するところで、東側用地外にかけて濃密な土坑群があるように思われる。場合によると、方形柱列があるかもしれないと思うほど、大きくて深いものの集団である。

㊦ 縄文時代中期後葉の住居址の広がり

表3でみられるように、今回の発掘調査では、縄文時代中期後葉の住居址は39軒登録されている。その内、C地区では1軒、D地区では2軒であるから、後の大部分はE・F地区で検出されている。それぞれの住居址の時期を比定することは困難であるが、おおまかに時期を後葉前半(I期)中ごろ(II期)後半(III期)終末(IV期)の4期に分けると、I期は34・40・46・47・59号住居址の5軒で、F地区の北側に集中する。II期は26・45・49・52・57・79・64号住居址の7軒で、東側に向かって輪を描いている。III期と思われるものは38・62・63・77号住居址の4軒で、南側で直線的の並びがみられる。IV期と思われるものは見当たらない。はっきり言い切れないが後期的な土器片が出土するものは42・43・55号住居址と思われる。

(5) 弥生時代後期の住居址・囲溝址

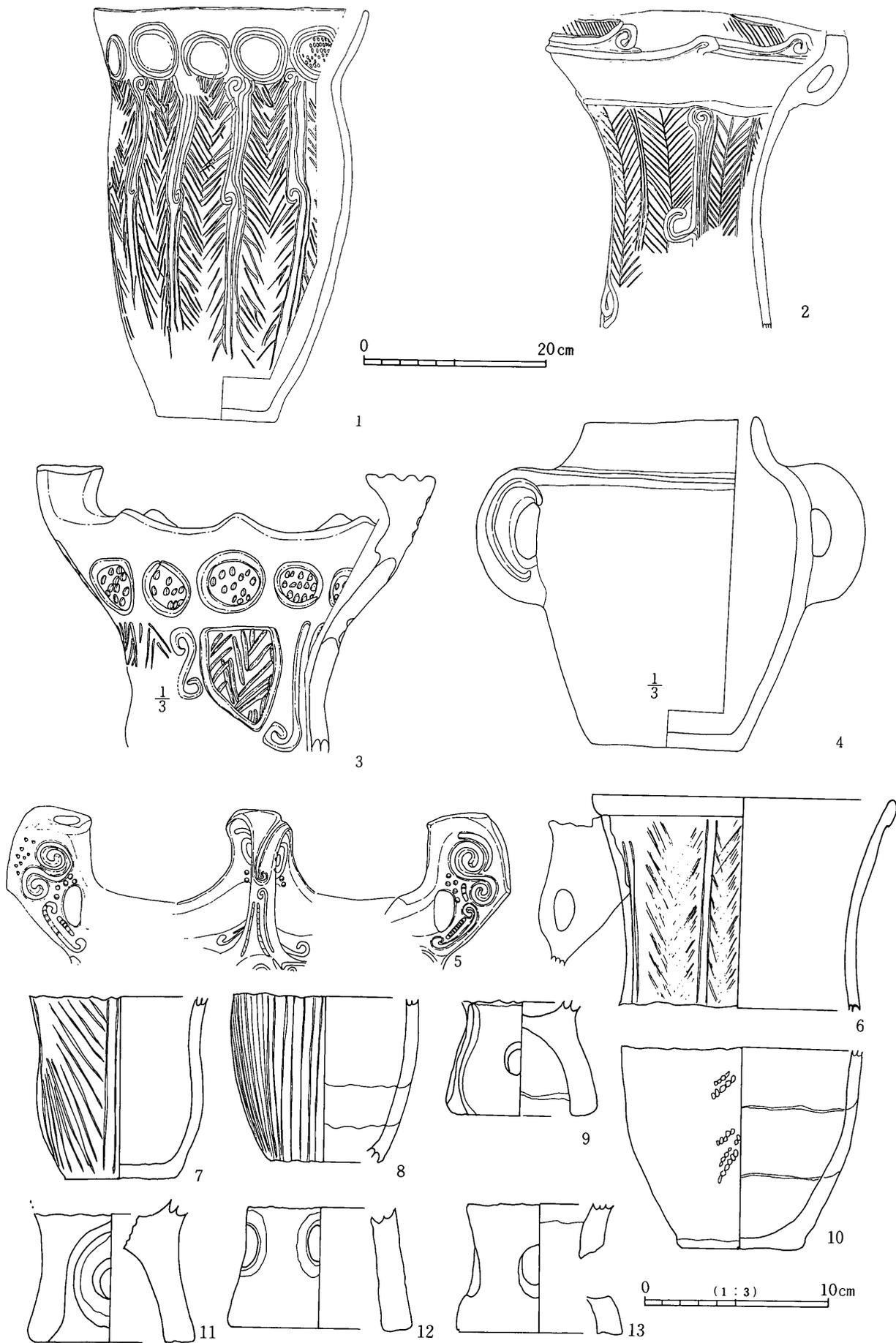
① 83号住居址 (図114・115、写図86)

C地区東側で、84・85・93号住居址と重複している住居址で、長径6.0m・短径5.8mのやや不整な方形の竪穴住居址で、北側壁から1.4mほど離れたところに、枕石を持つ埋甕炉を据えて、中央南北方向に間仕切りの穴が4個並ぶ。したがって、主軸方向はN30°Wである。柱穴は4個で楕円形の掘り方で、深さはP1～4はそれぞれ29・32・31・41cmである。東側壁沿いに深さ10cmほどの5個の小ピットが並んでいる。床面は火災による炭・焼土の固まりがあり硬く、床上2～4cmほど炭が堆積し、北側・東側に多く東北隅にかけて、幅7～10cm、長さ1.2mほどの炭化材が横たわっている。火災に遭ったものと思われる。南側の壁に近く長さ50cm・幅35cmの平状台石が置かれている。表面・側面が擦って加工されている。

遺物は甕形土器・碗形土器・器台等で、115図1・2は甕形土器で1は口径19.5cm・器高22cm、2は口径18cm・残存部の器高18cmで、頸部に4本の櫛形工具による波状文が付き、胴部には縦の



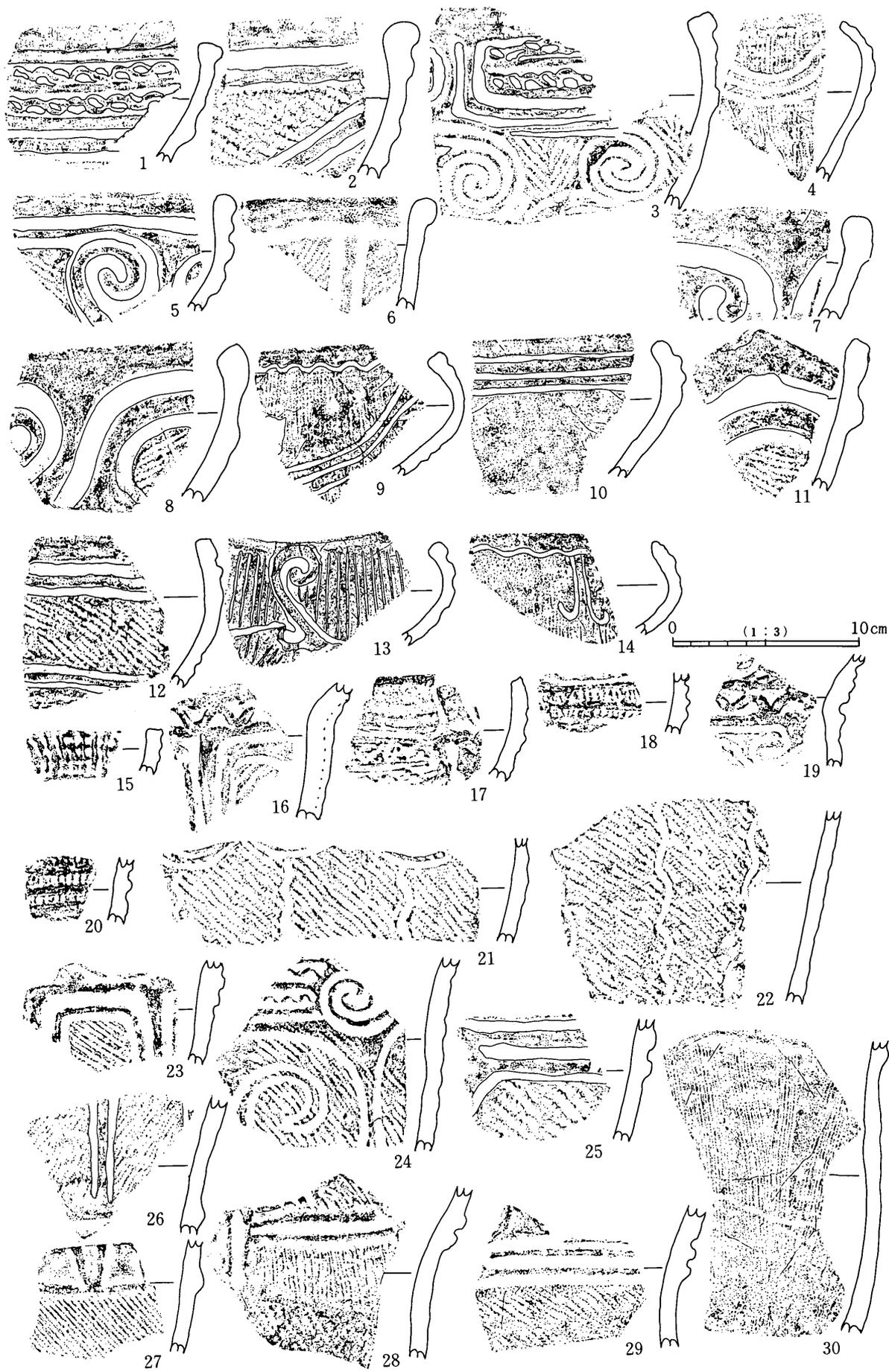
第51图 34号住居址出土土器



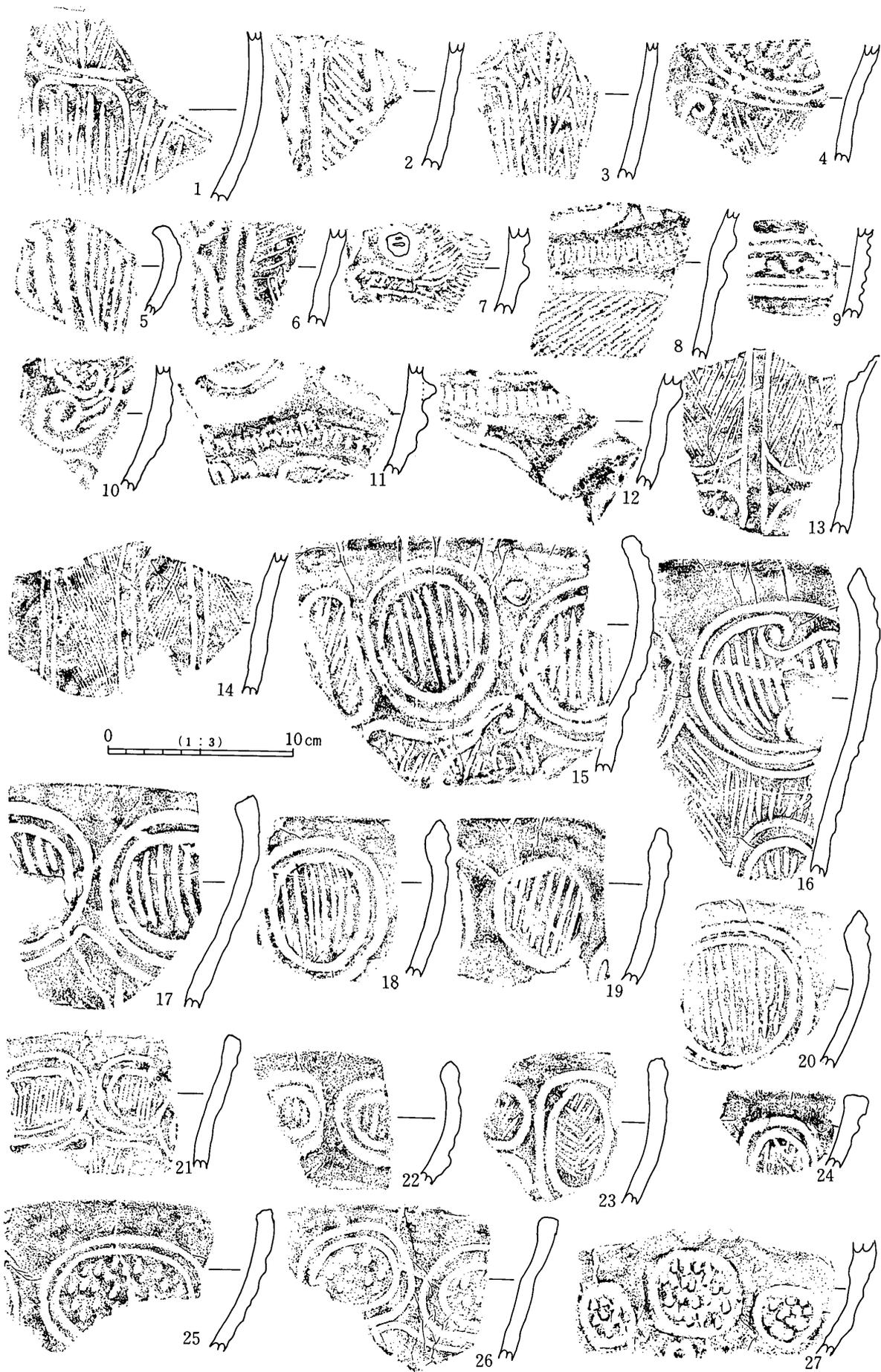
第52图 38号住居址出土土器(1)



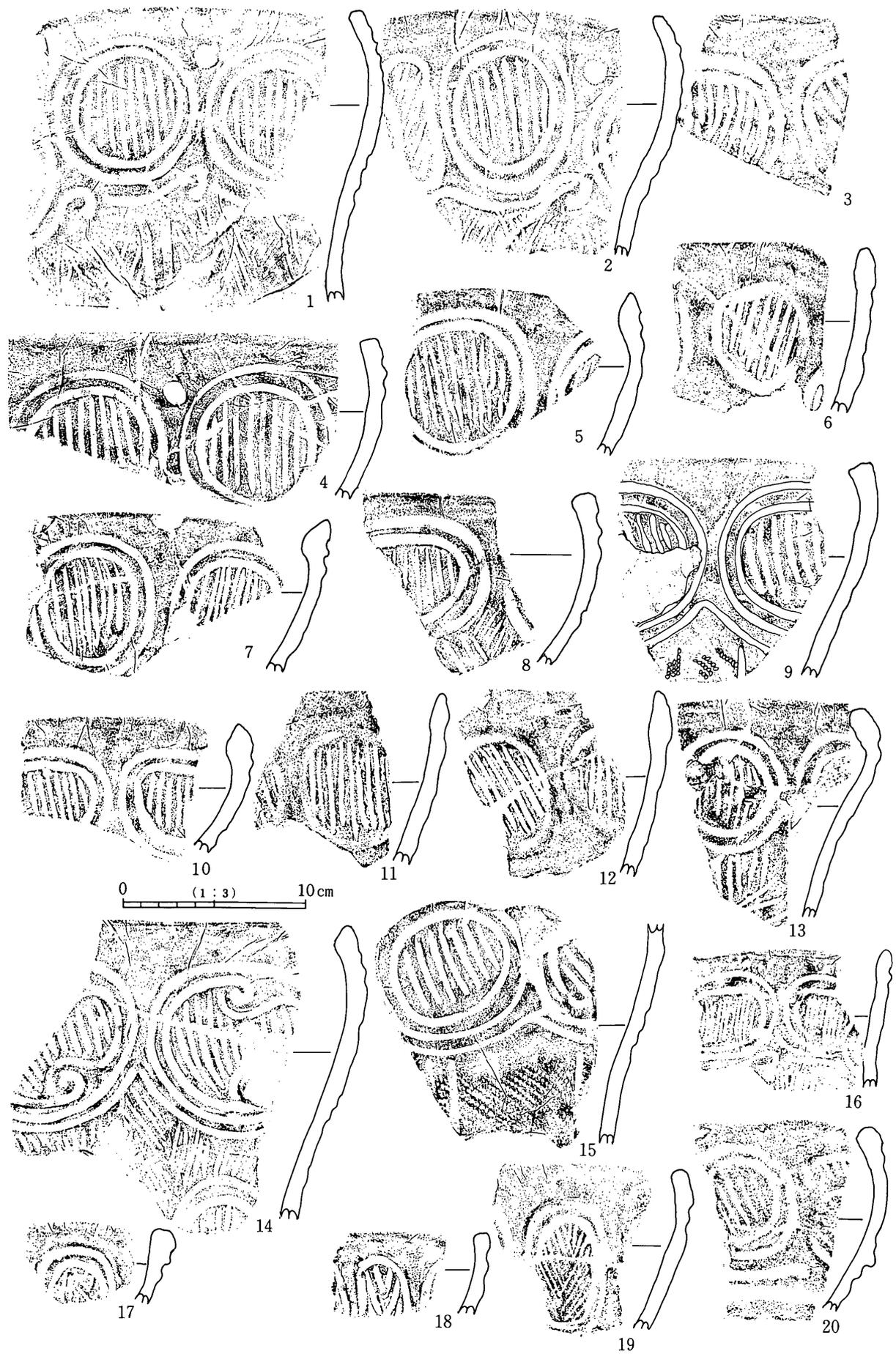
第53图 38号住居址出土土器(2)



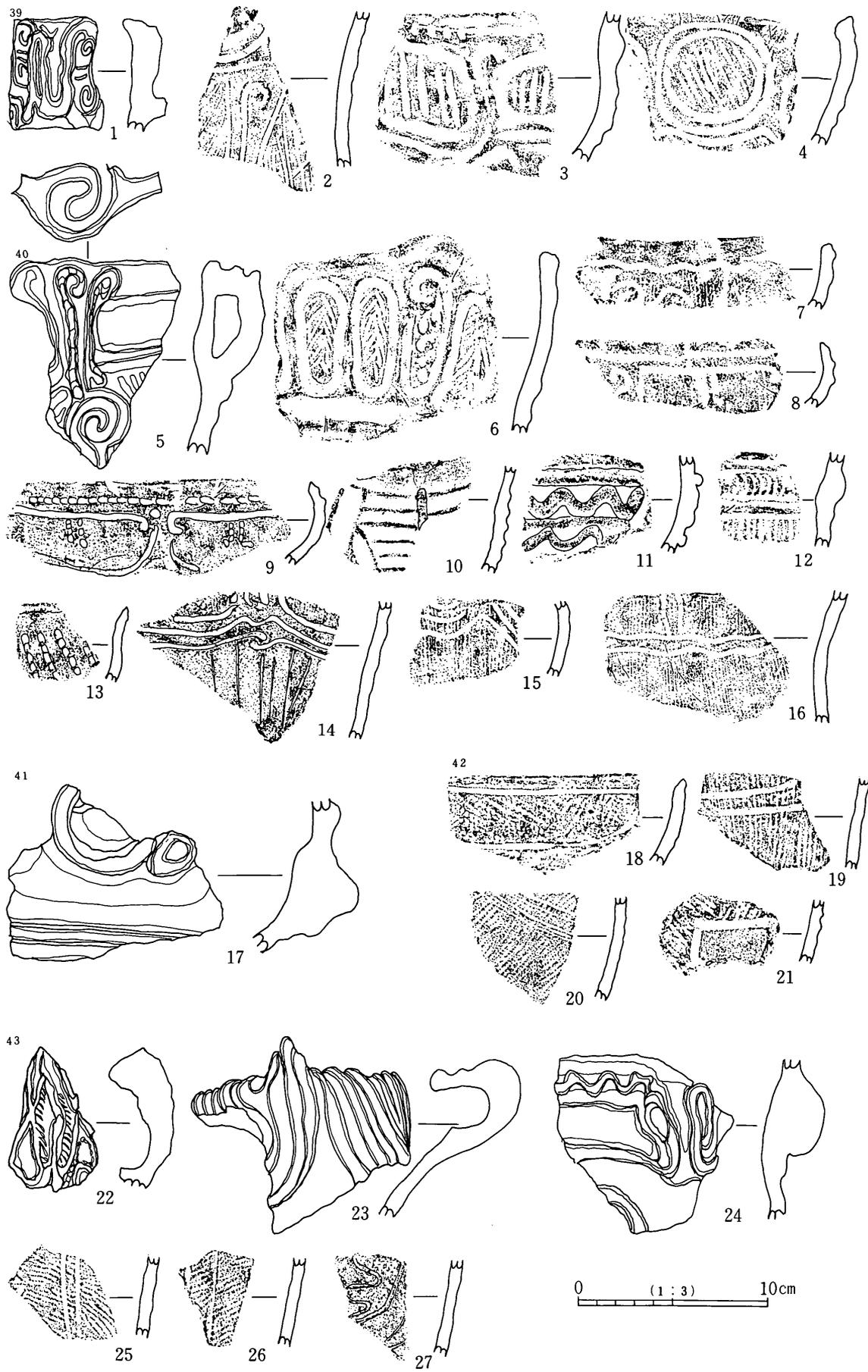
第54图 38号住居址出土土器(3)



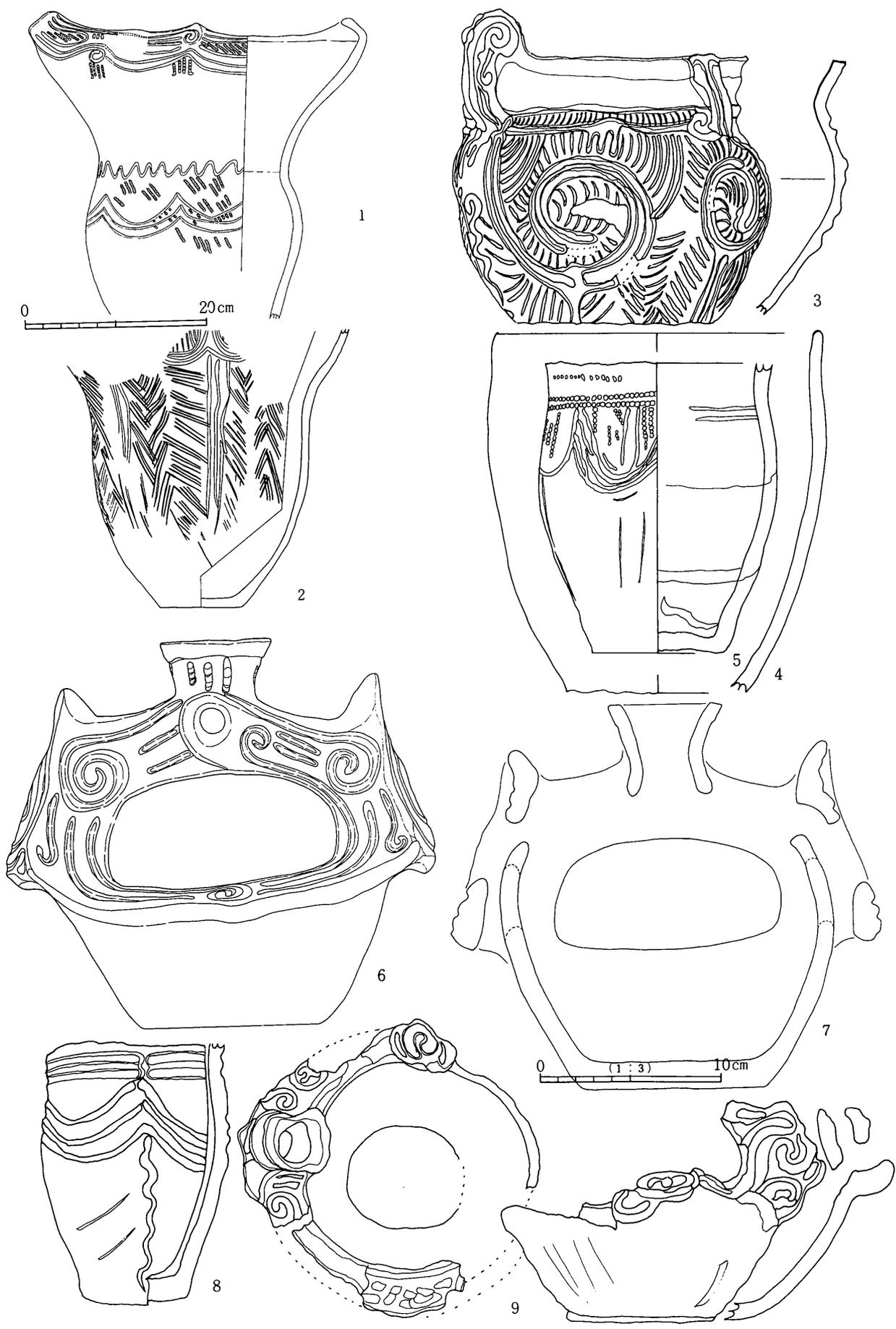
第55图 38号住居址出土土器(4)



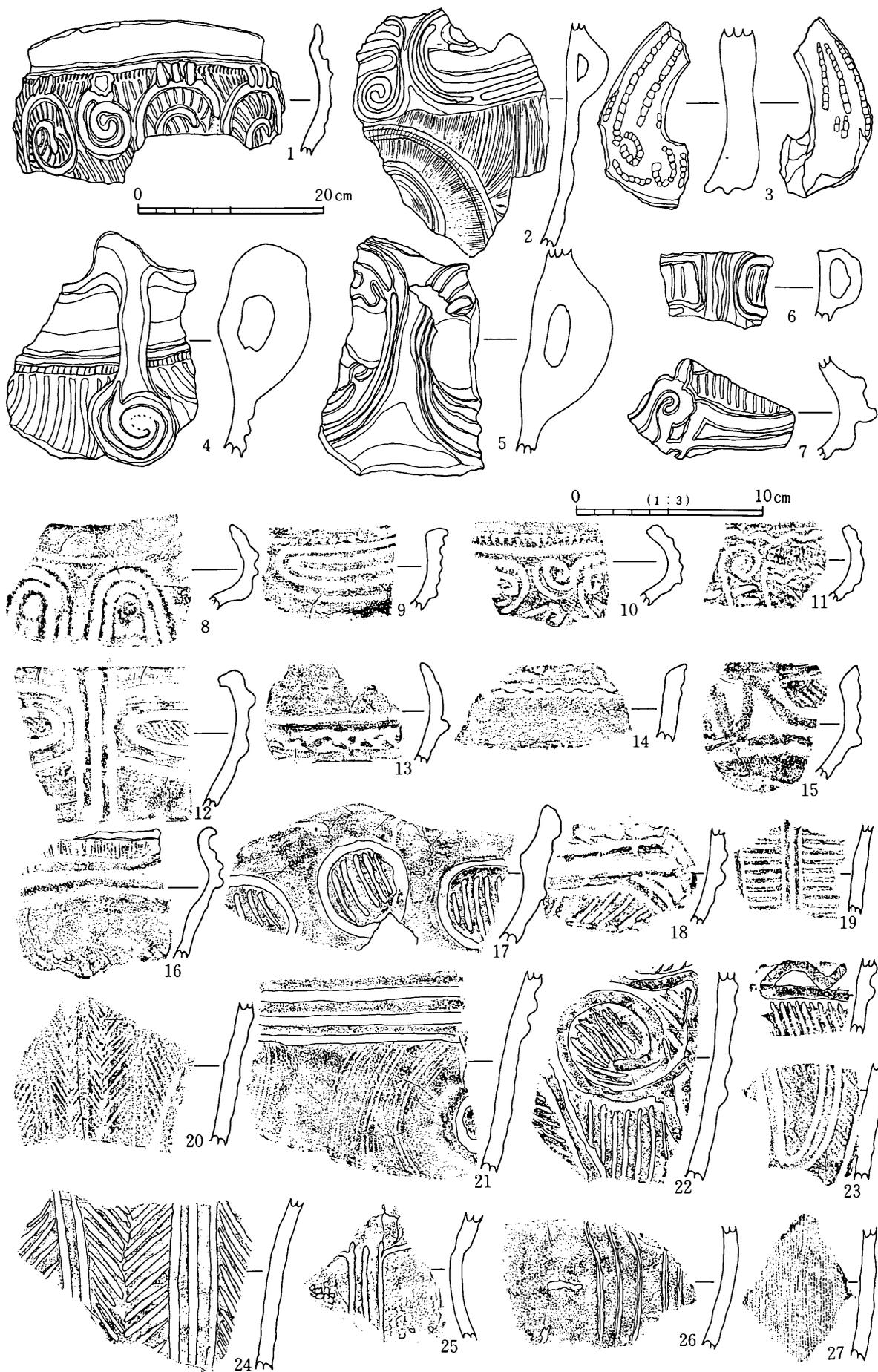
第56图 38号住居址出土土器(5)



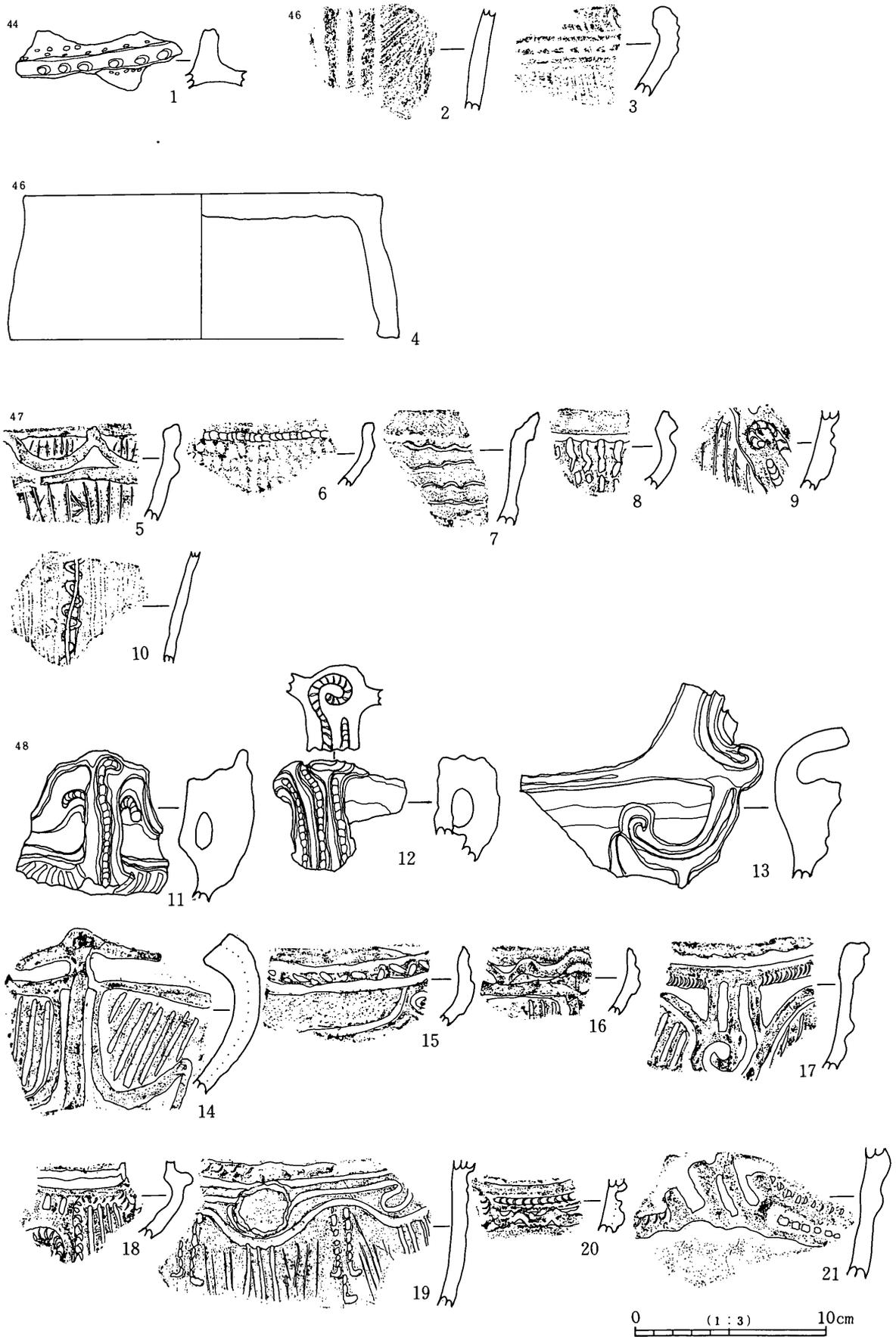
第57图 39·40·41·42·43号住居址出土土器



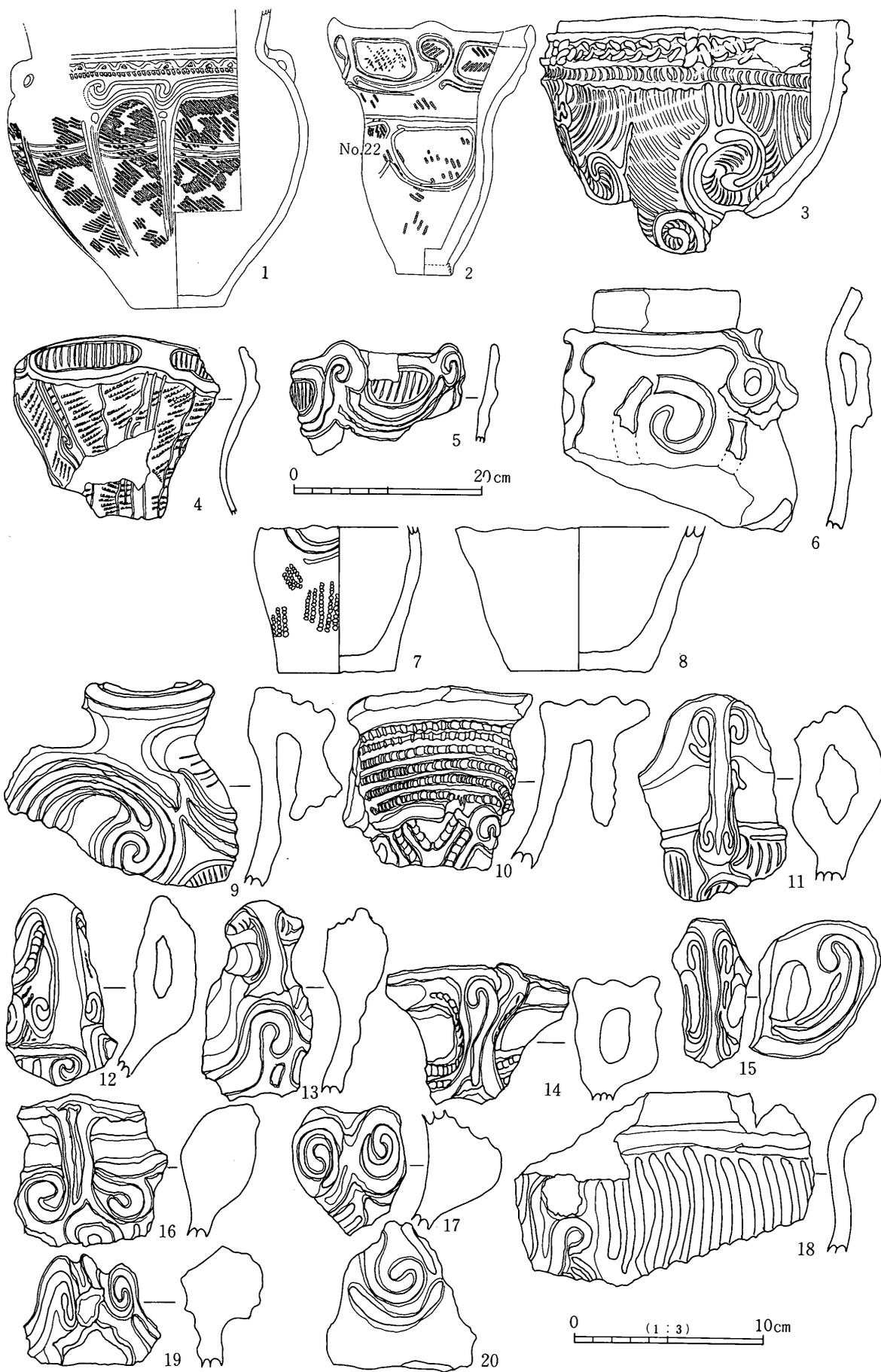
第58图 45号住居址出土土器(1)



第59图 45号住居址出土土器(2)



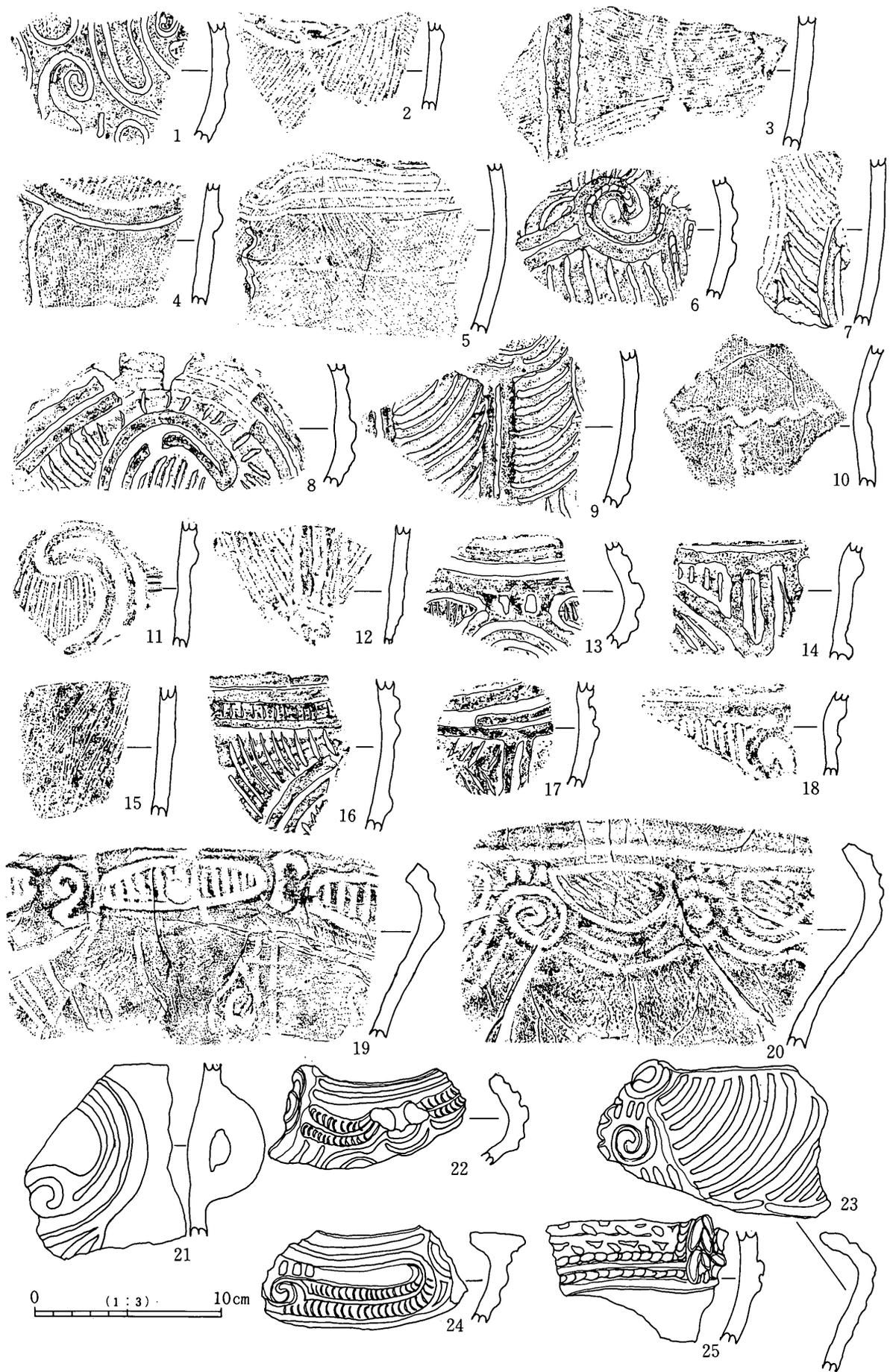
第60图 44·46·47·48号住居址出土土器



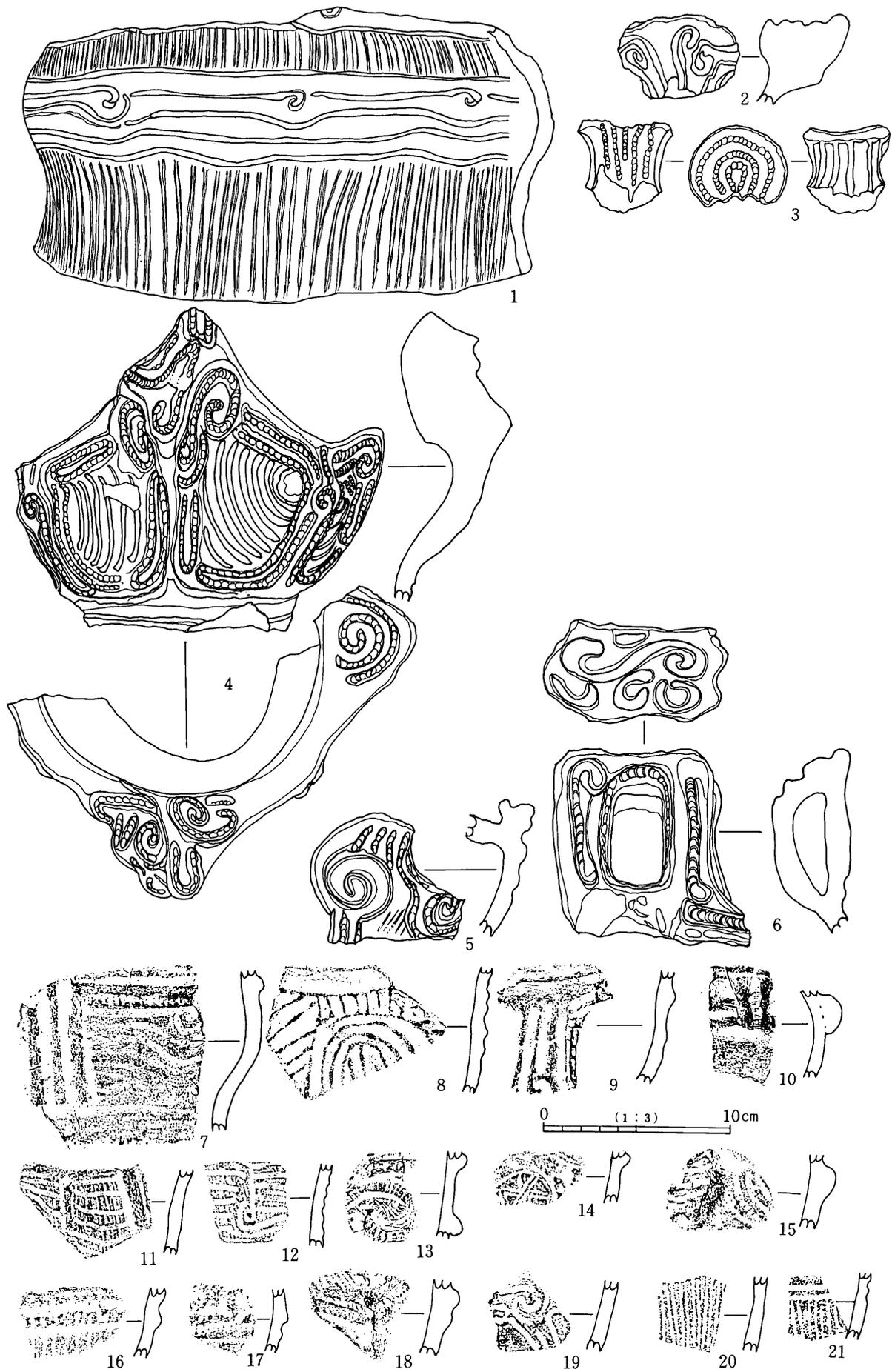
第61图 49号住居址出土土器(1)



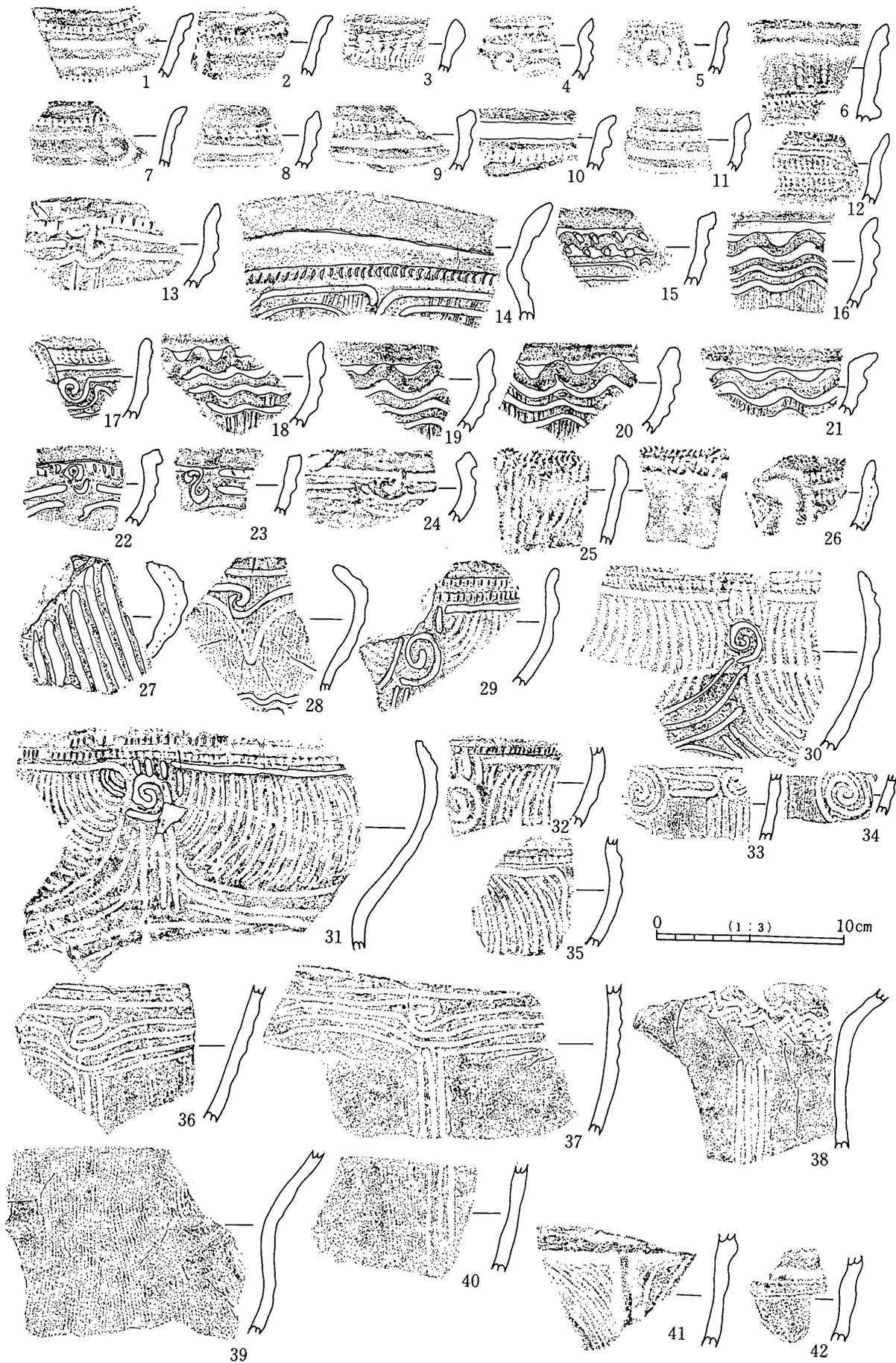
第62图 49号住居址出土土器(2)



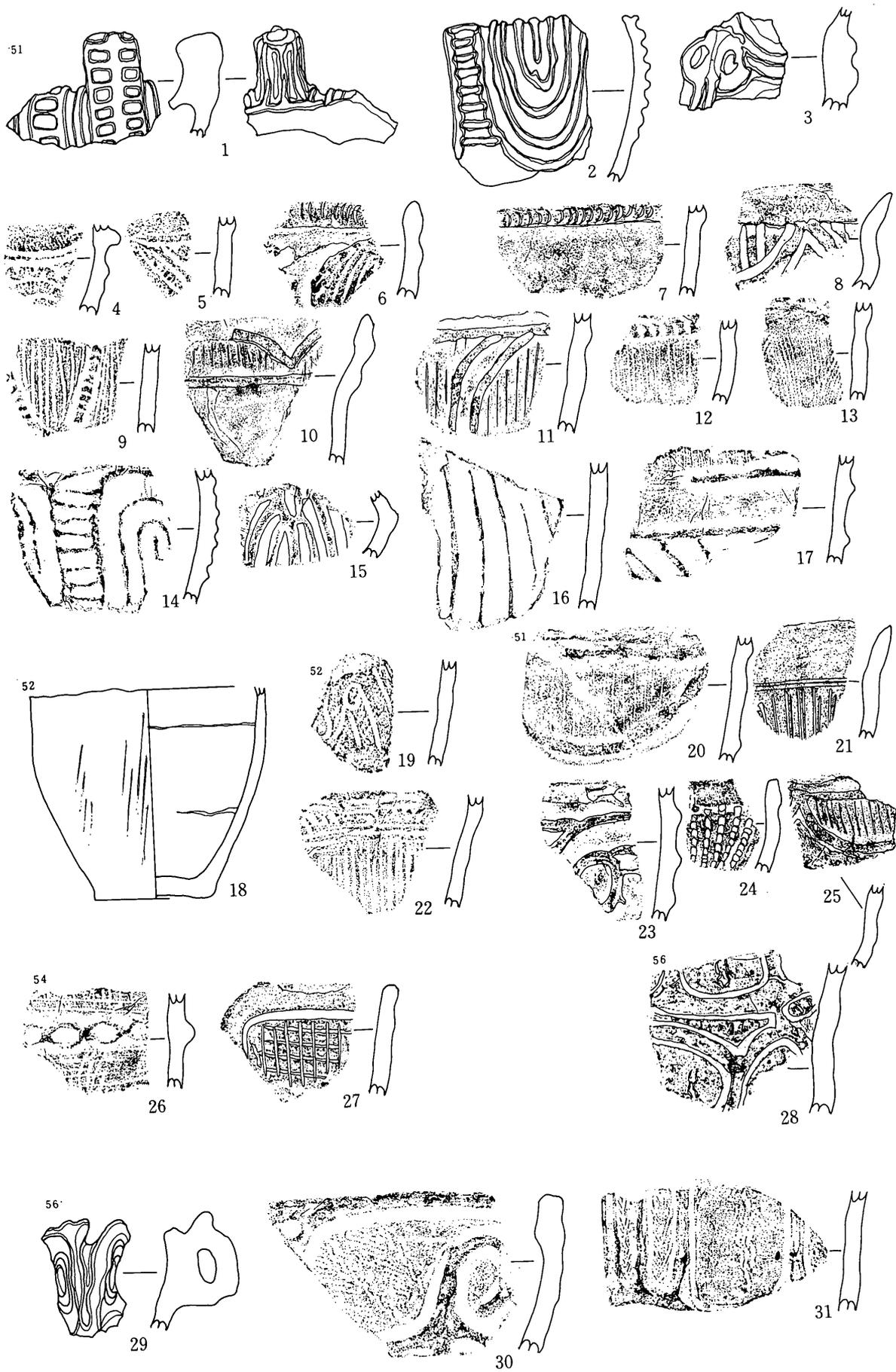
第63图 49号住居址出土土器(3)



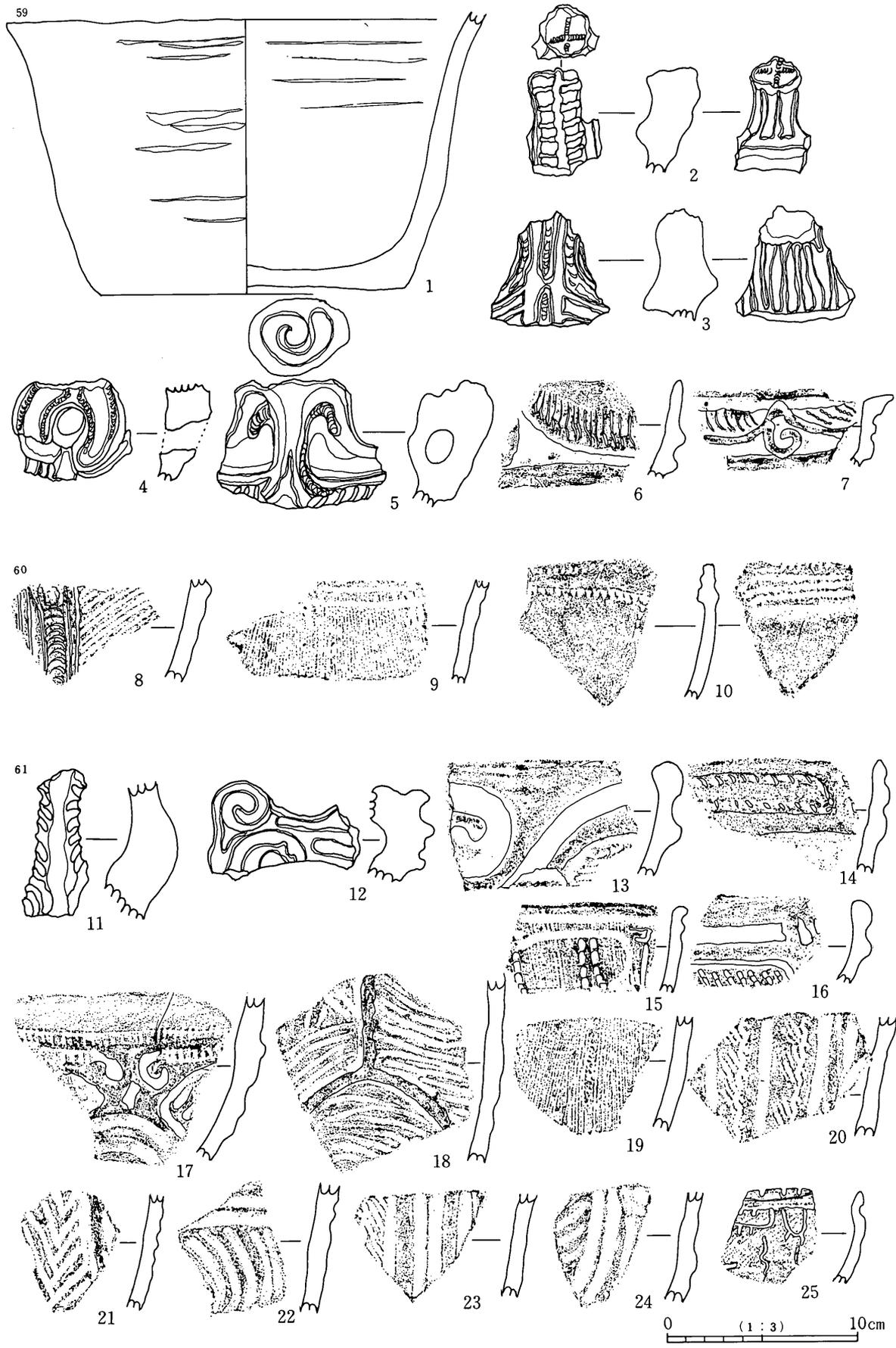
第64图 50号住居址出土土器(1)



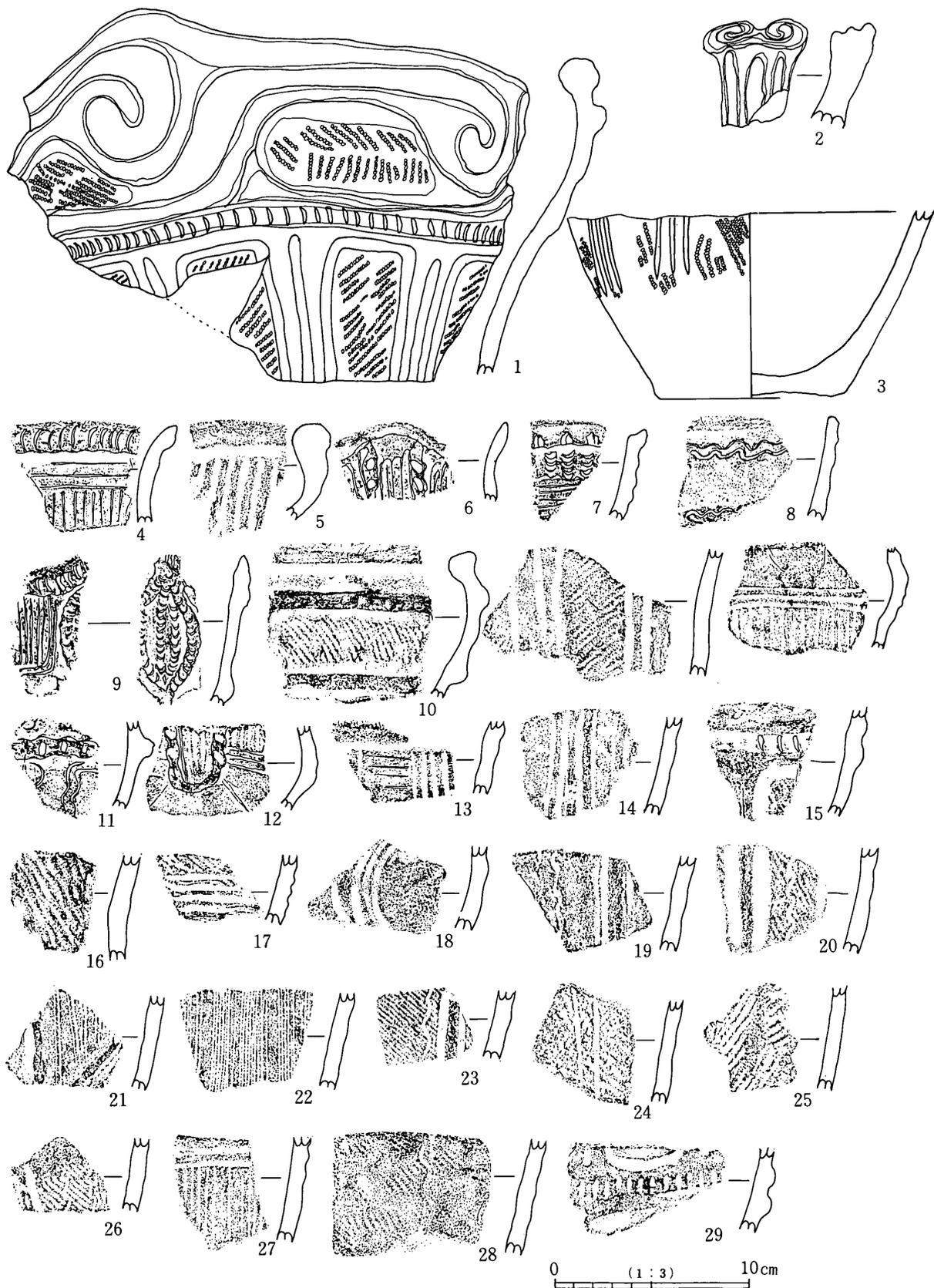
第65图 50号住居址出土土器(2)



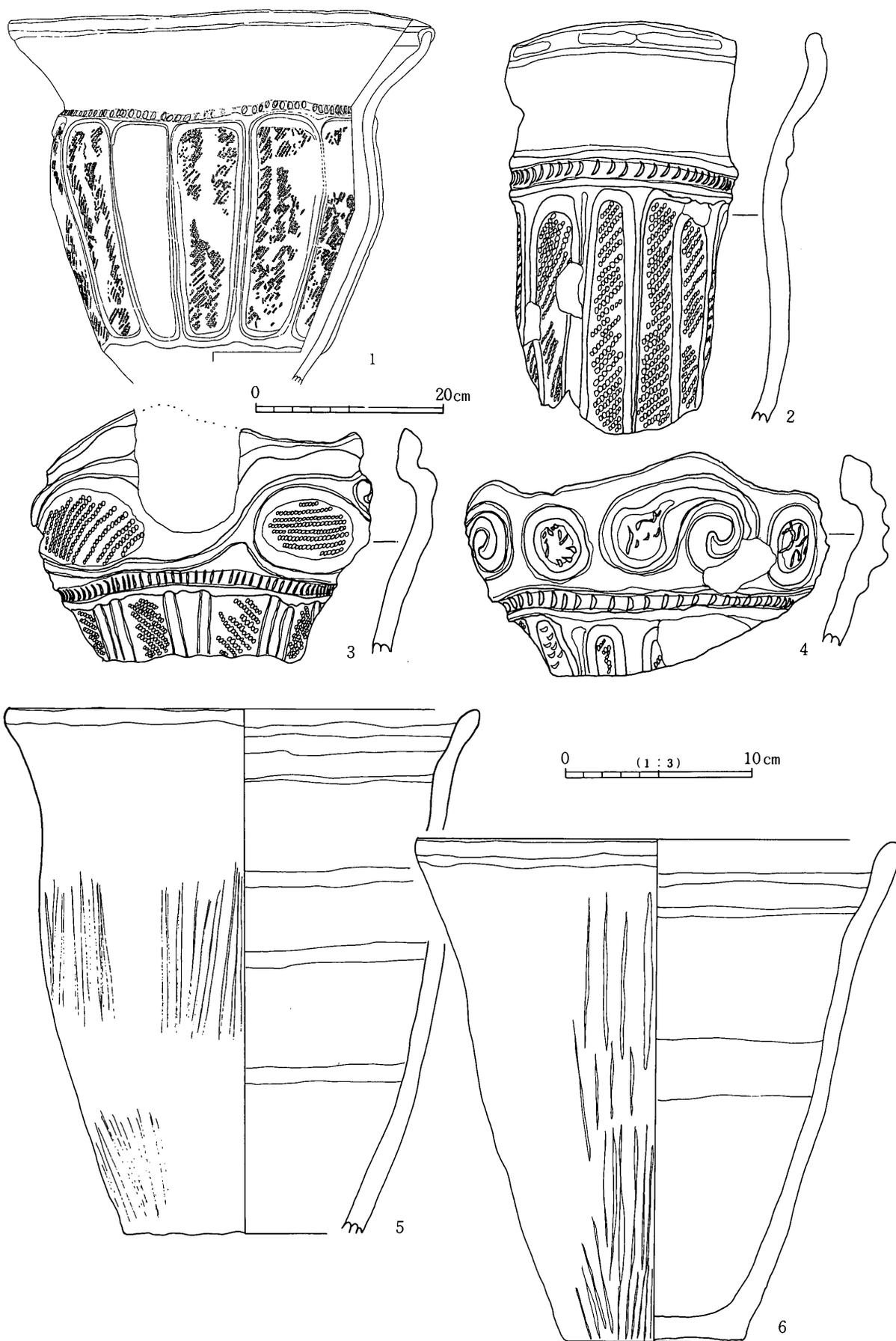
第66图 51·52·54·56号住居址出土土器



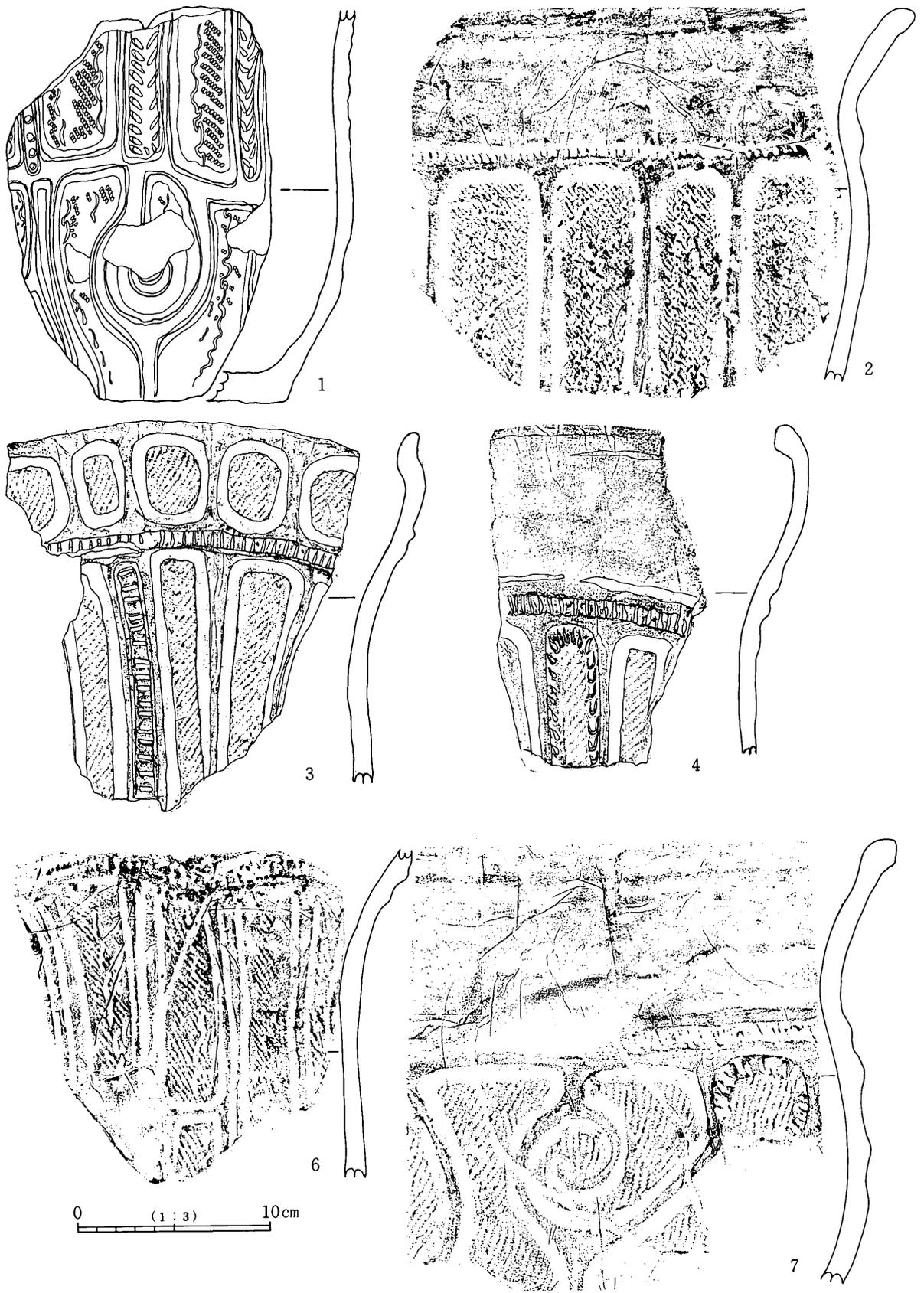
第67图 59·60·61号住居址出土土器



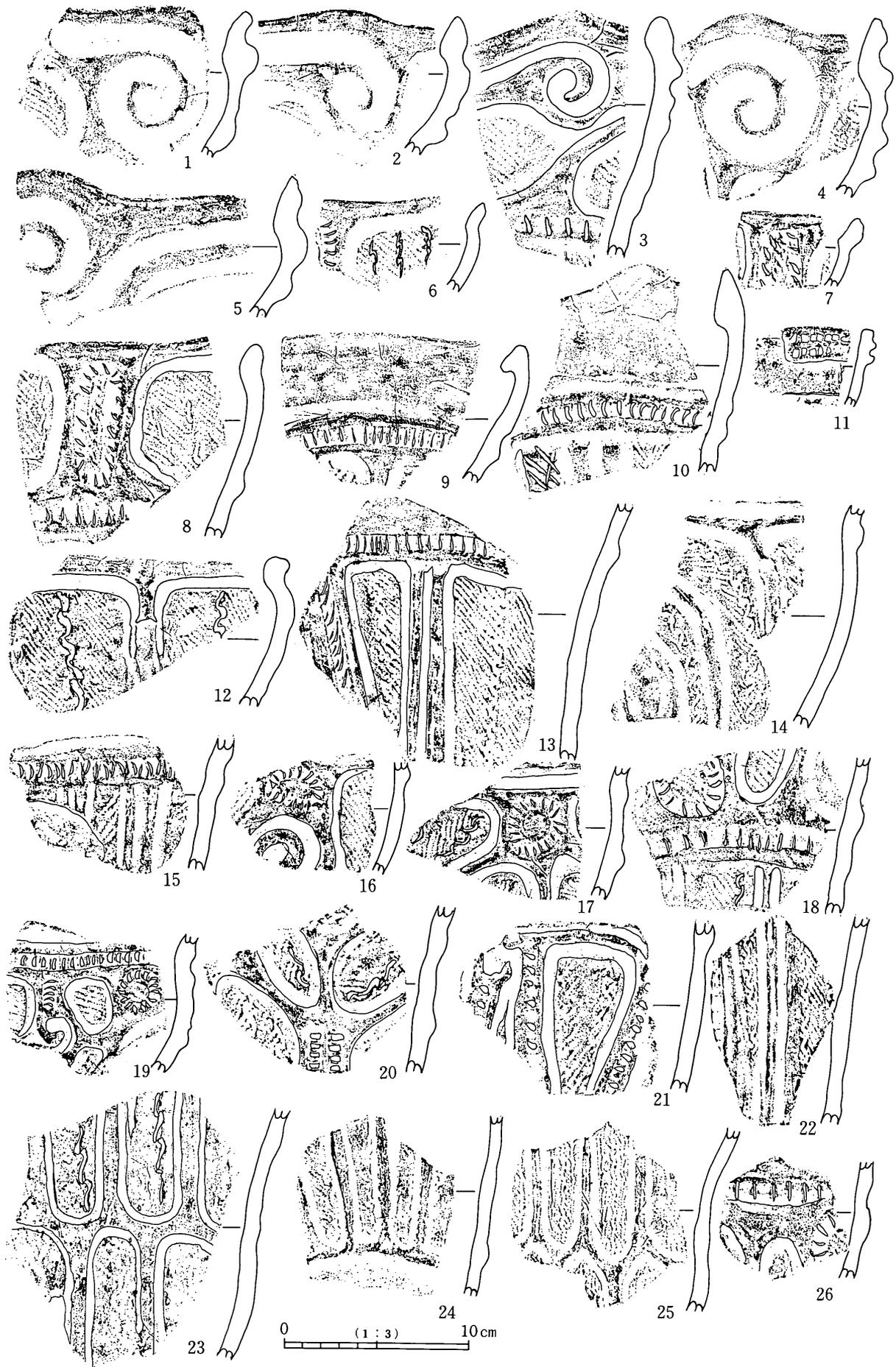
第68图 62号住居址出土土器



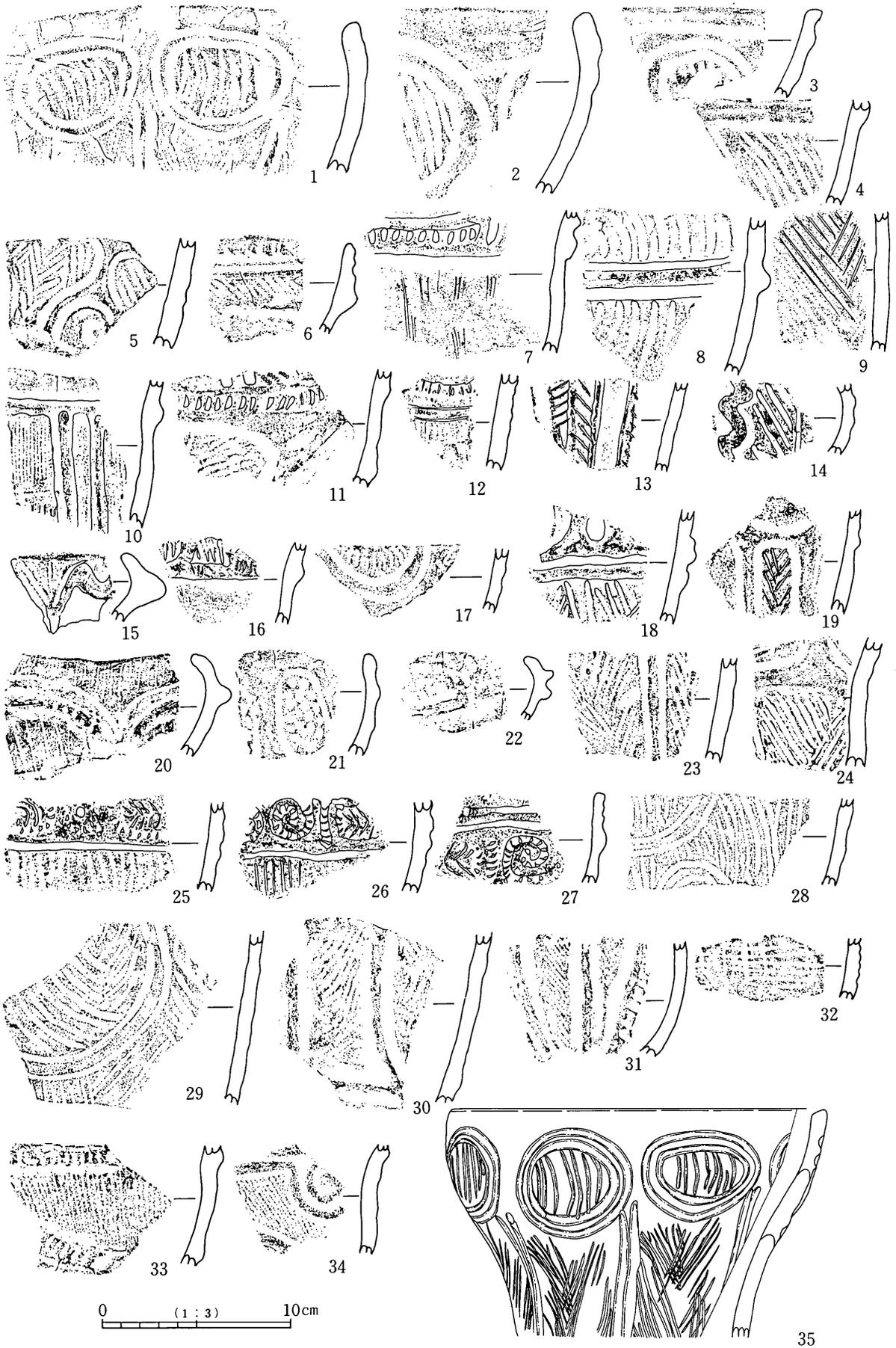
第69图 63号住居址出土土器(1)



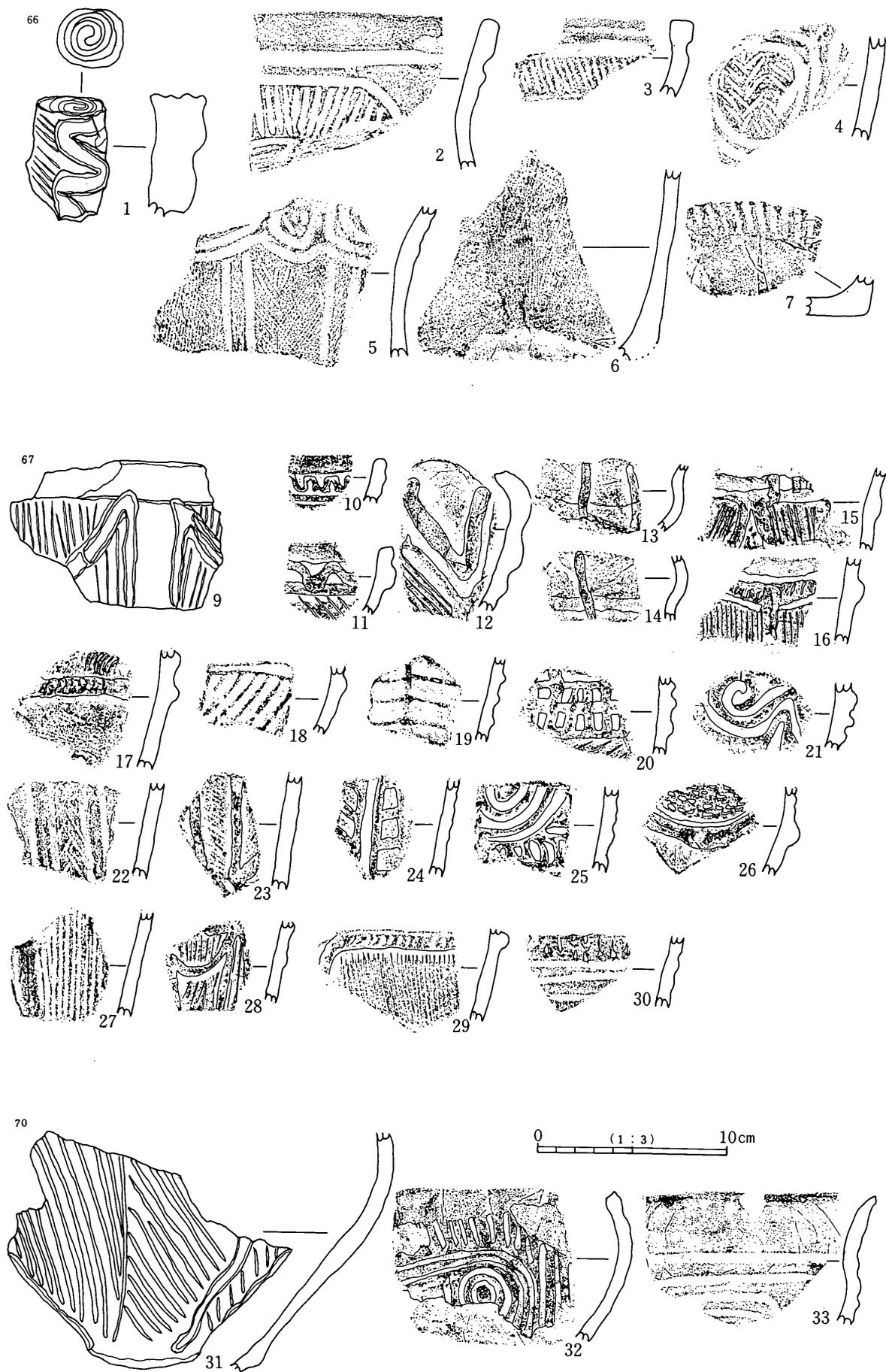
第70图 63号住居址出土土器(2)



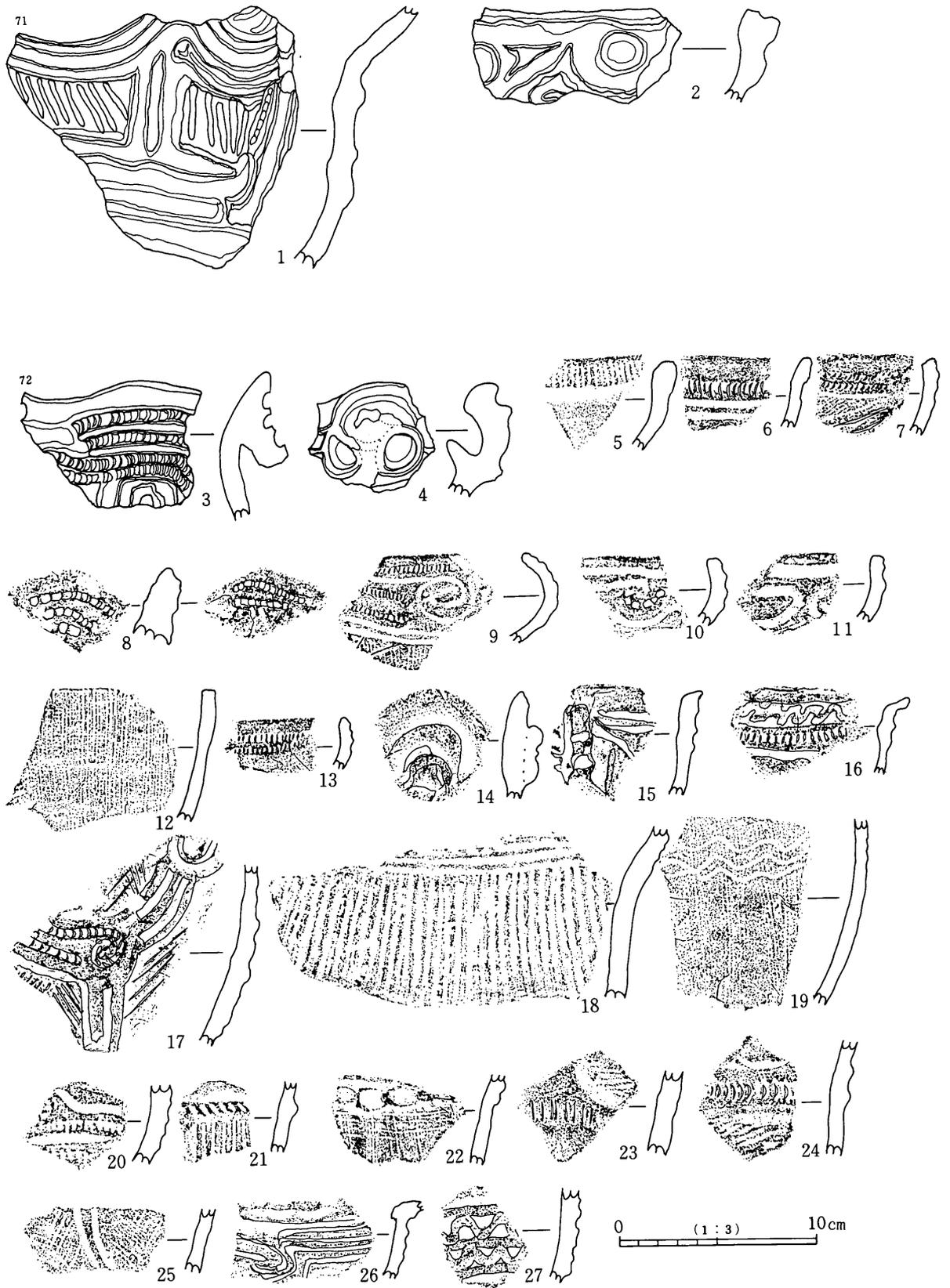
第71图 63号住居址出土土器(3)



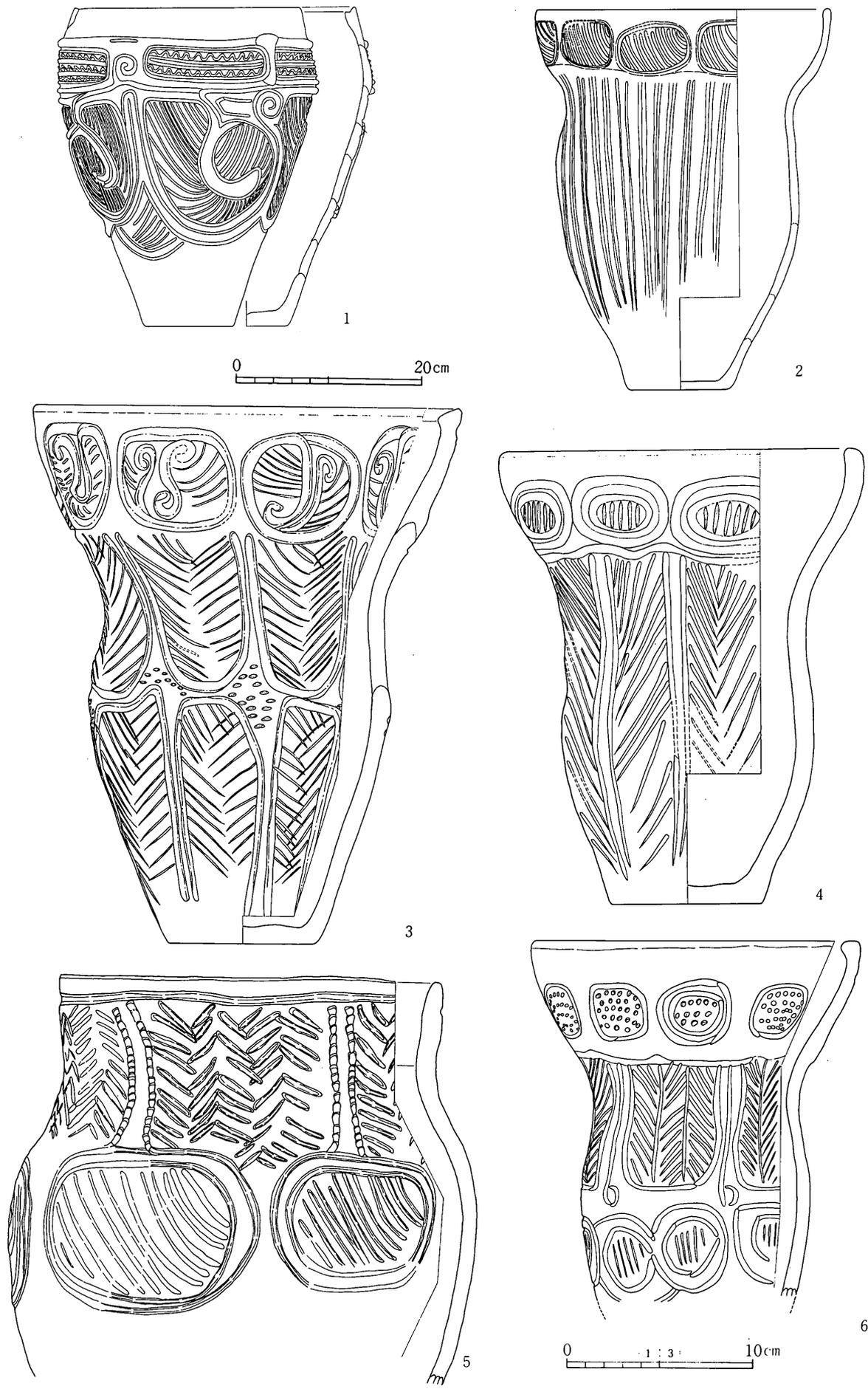
第72图 64号住居址出土土器



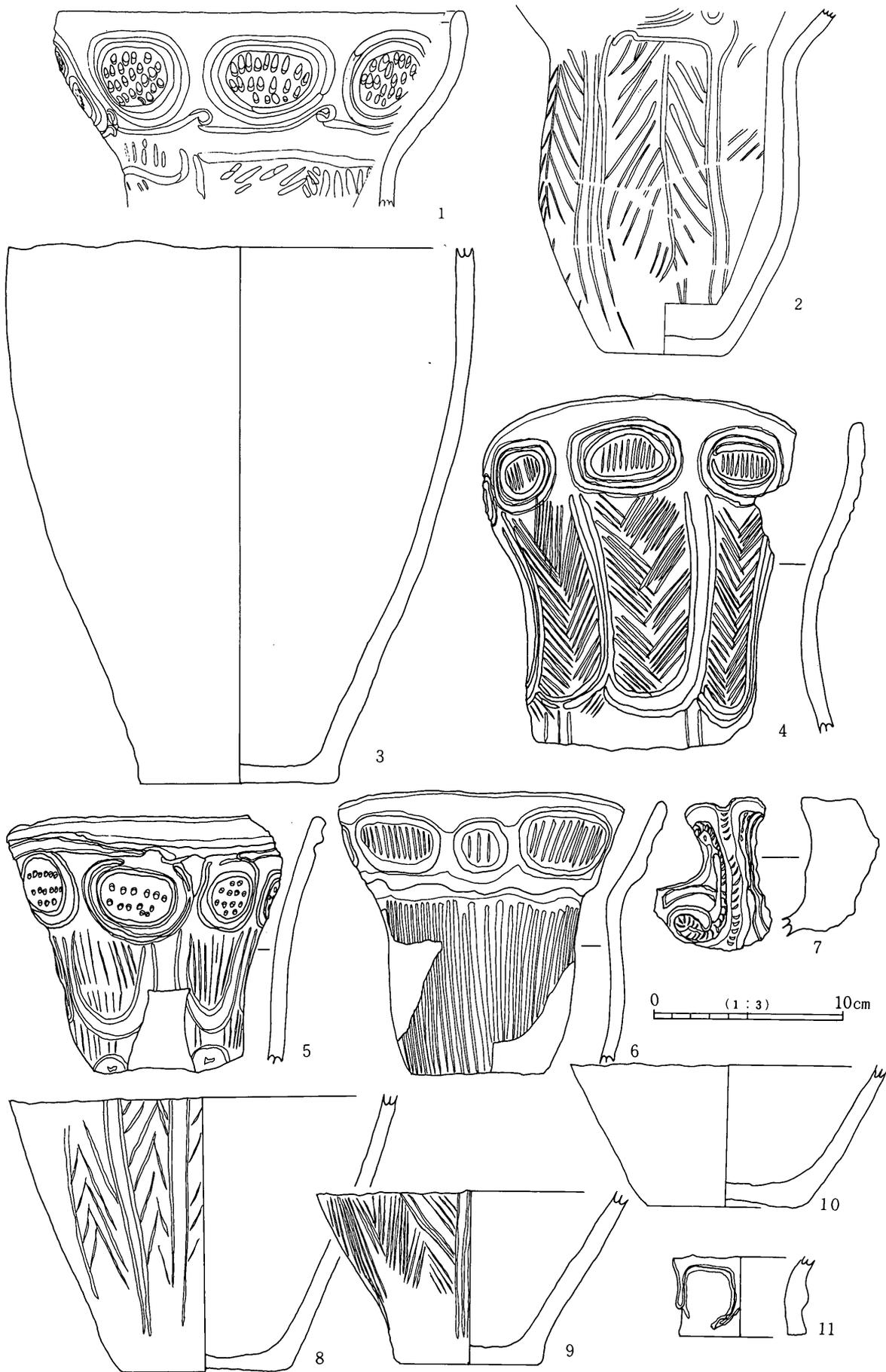
第73图 66·67·70号住居址出土土器



第74图 71·72号住居址出土土器



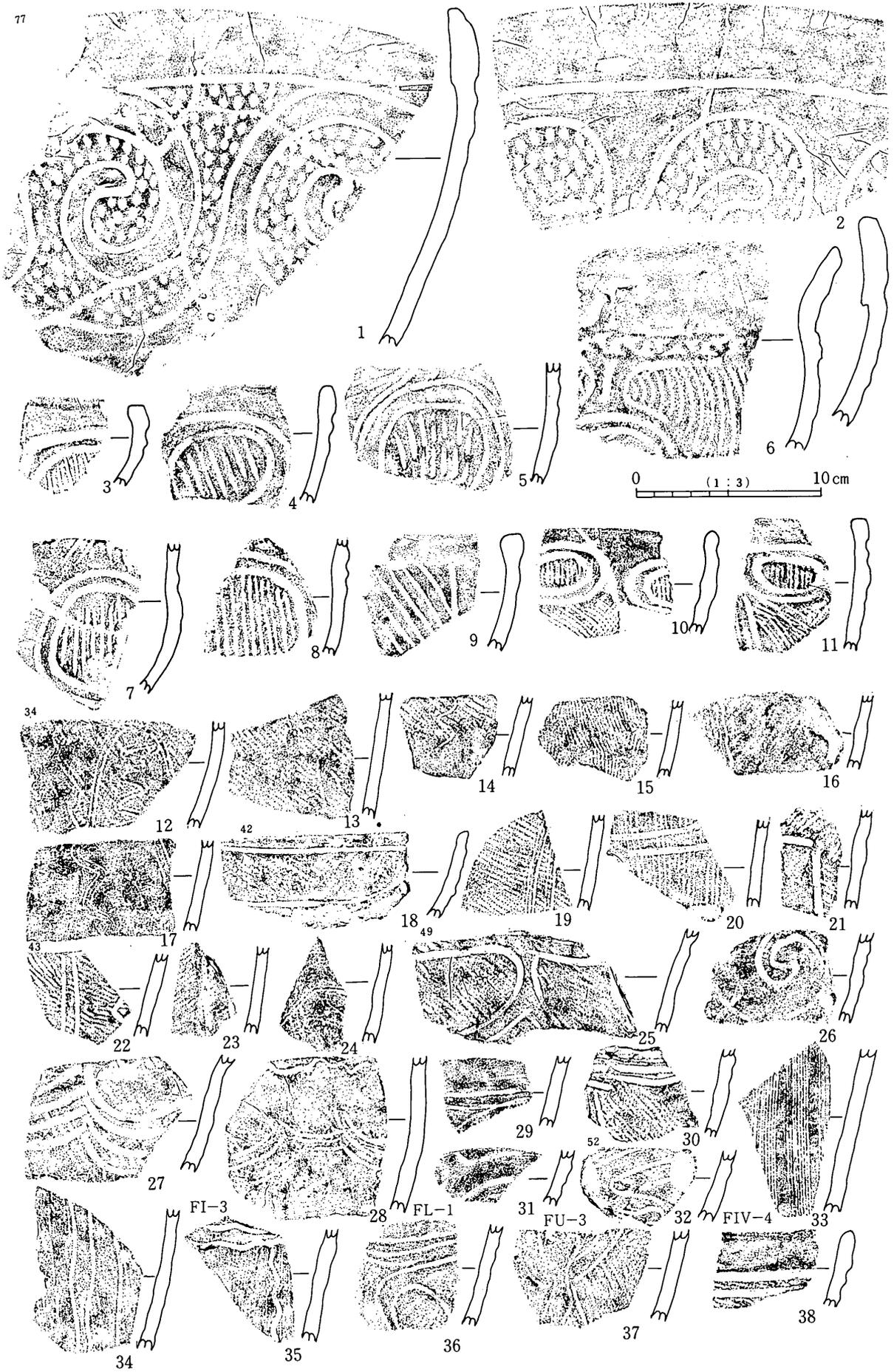
第75图 77号住居址出土土器(1)



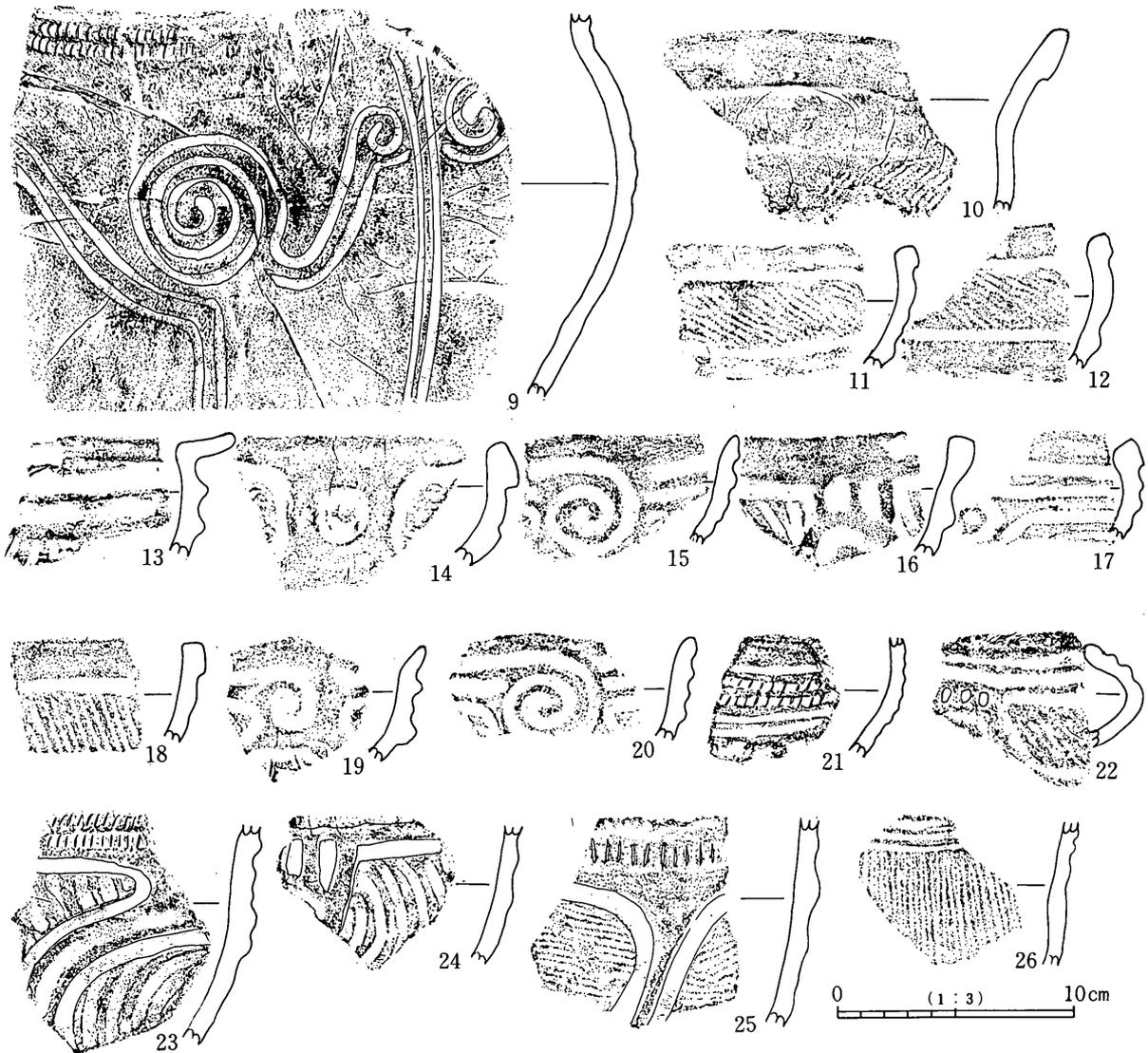
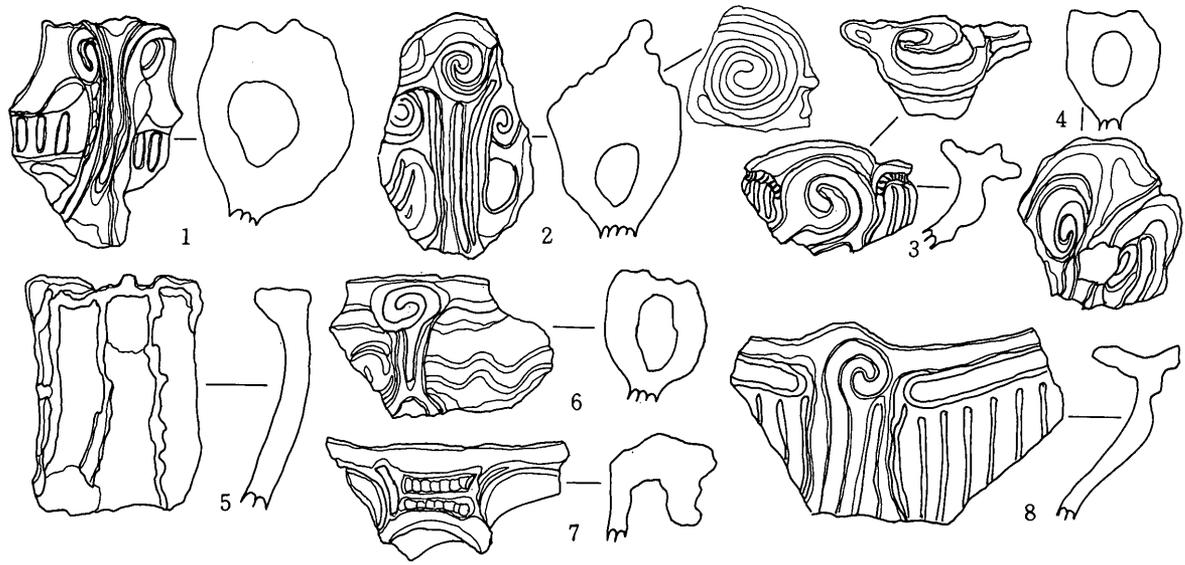
第76图 77号住居址出土土器(2)



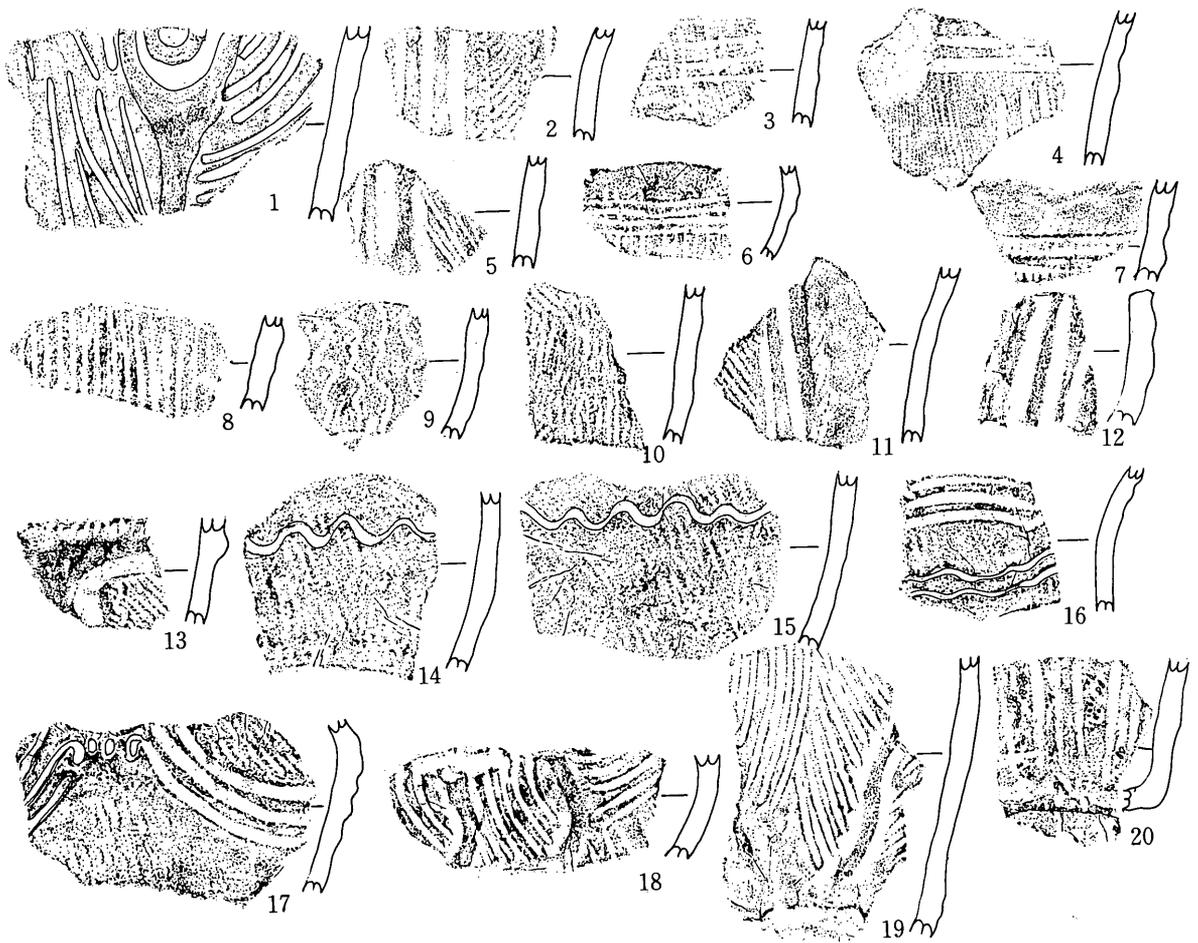
第77图 77号住居址出土土器(3)



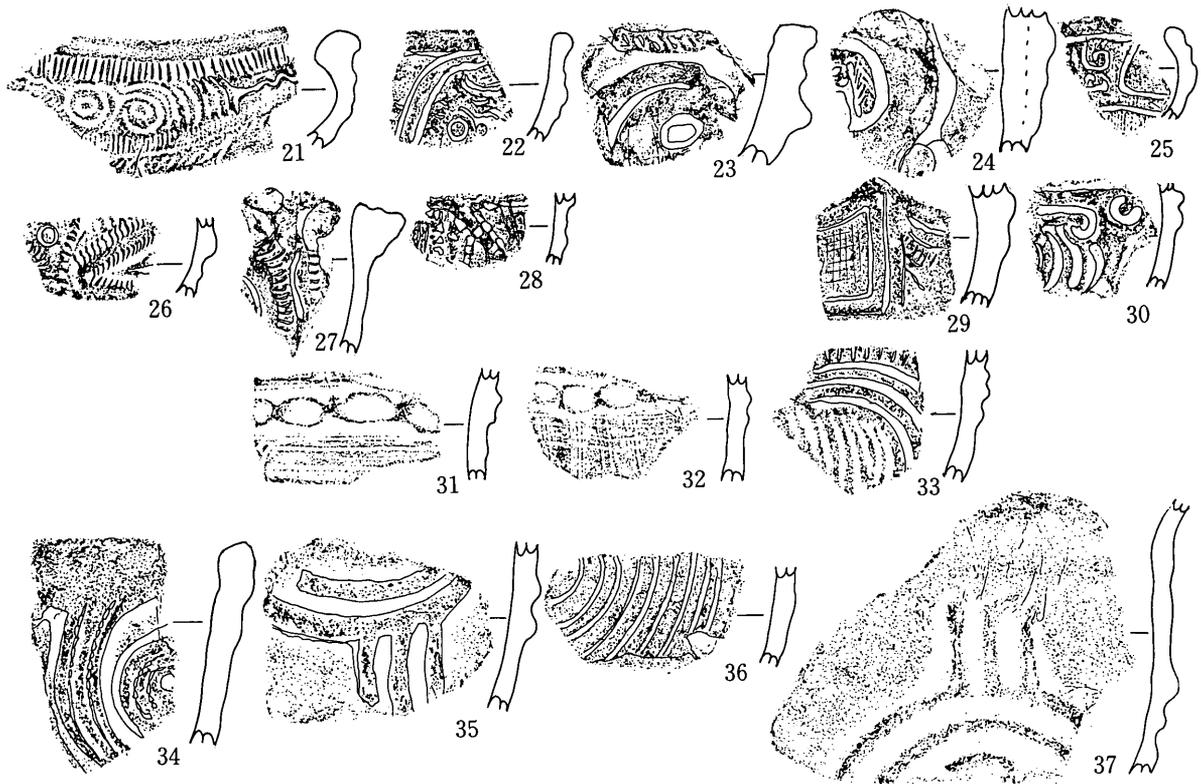
第78图 77号住居址出土土器(4)·F地区後期の土器



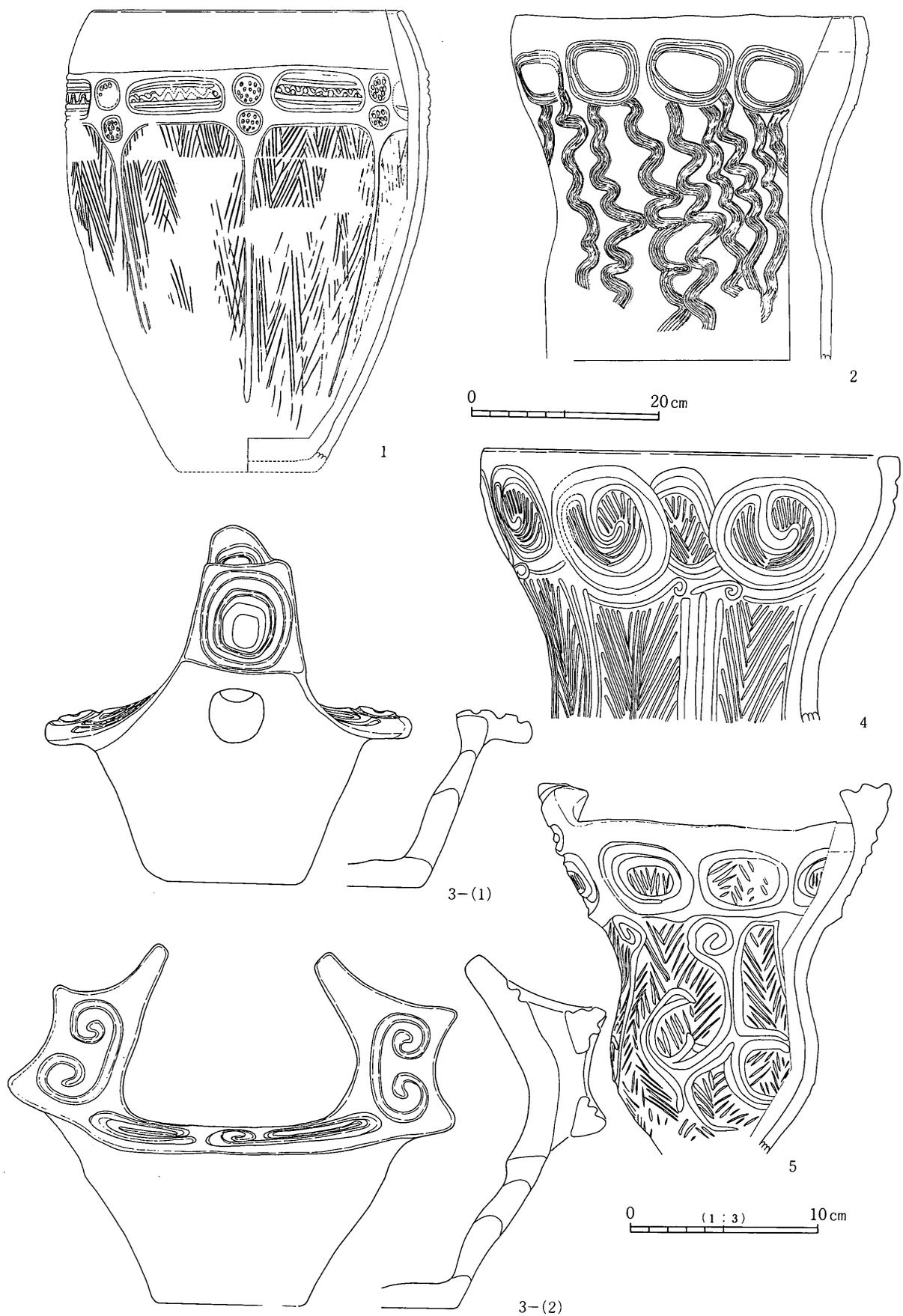
第79图 79号住居址出土土器(1)



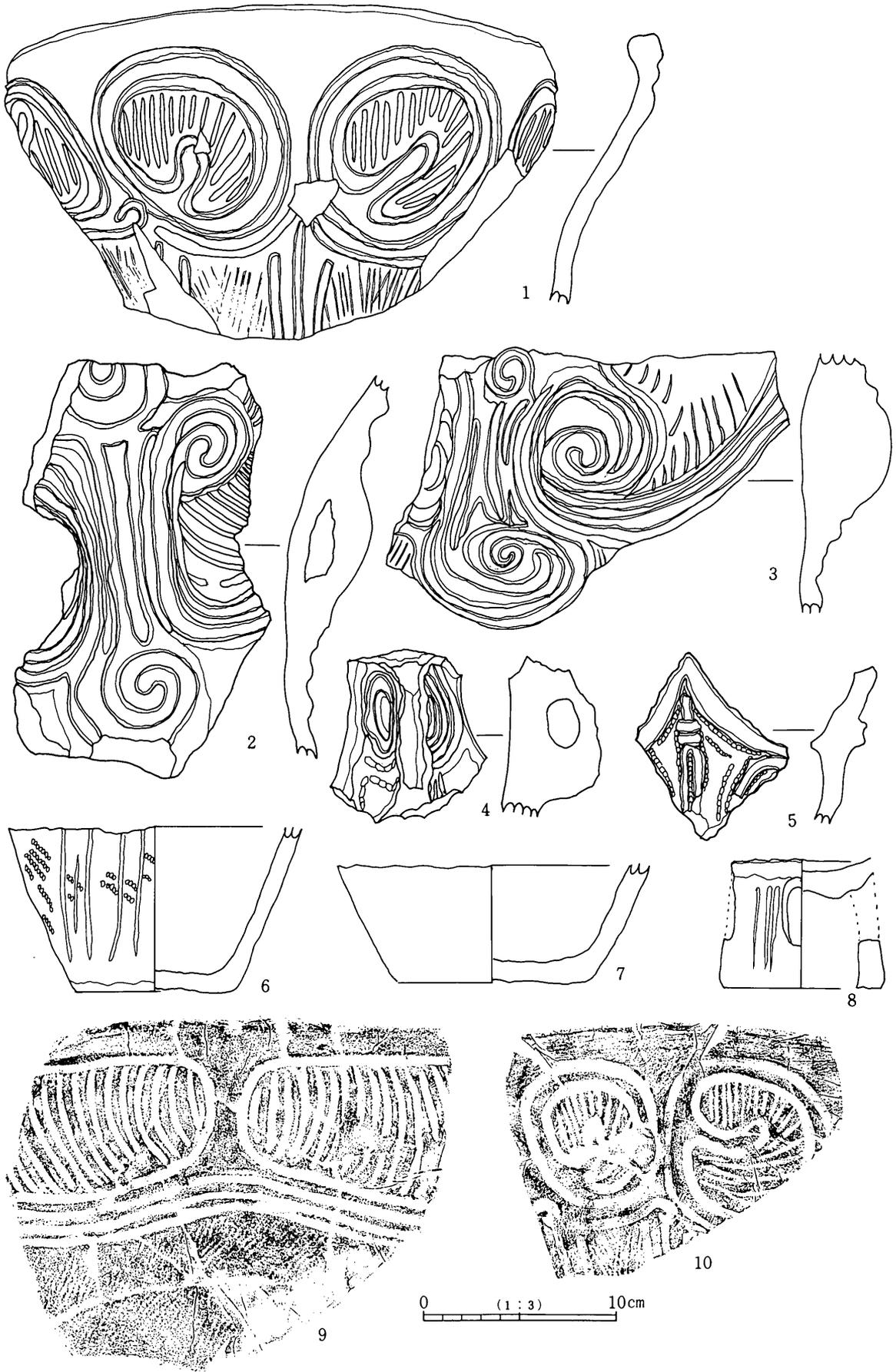
0 (1:3) 10 cm



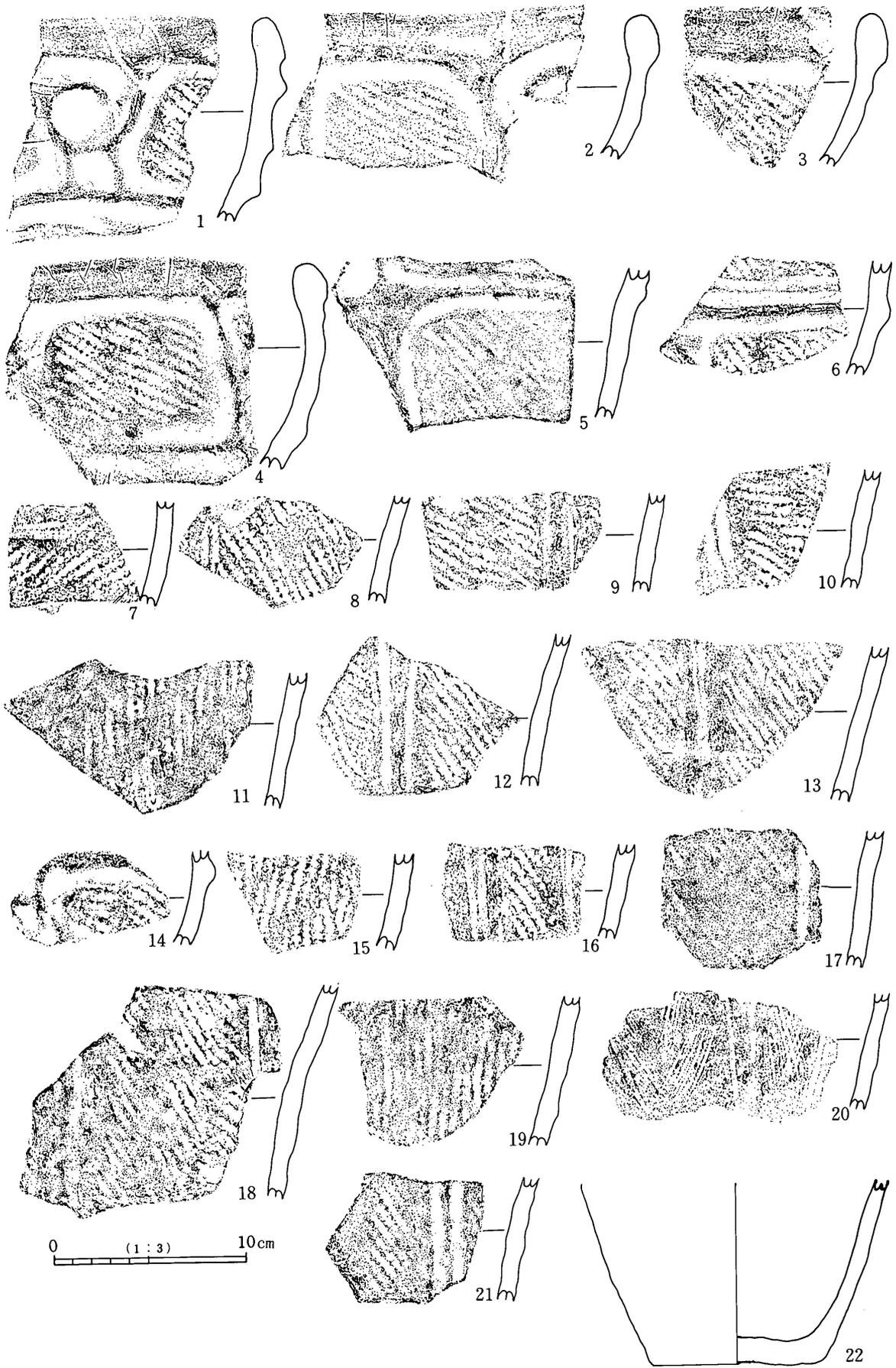
第80图 79号住居址出土土器(2)



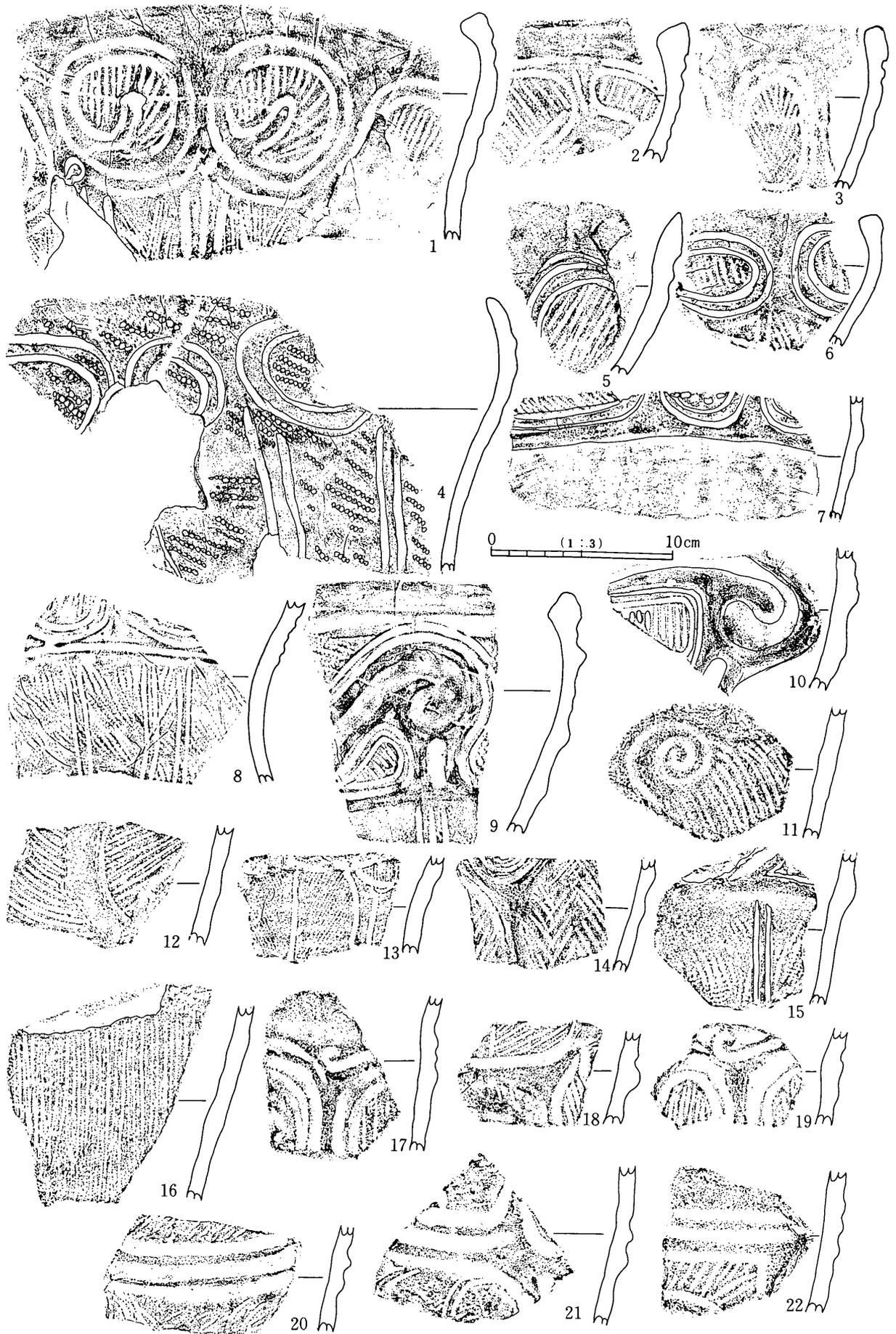
第81图 89号住居址出土土器(1)



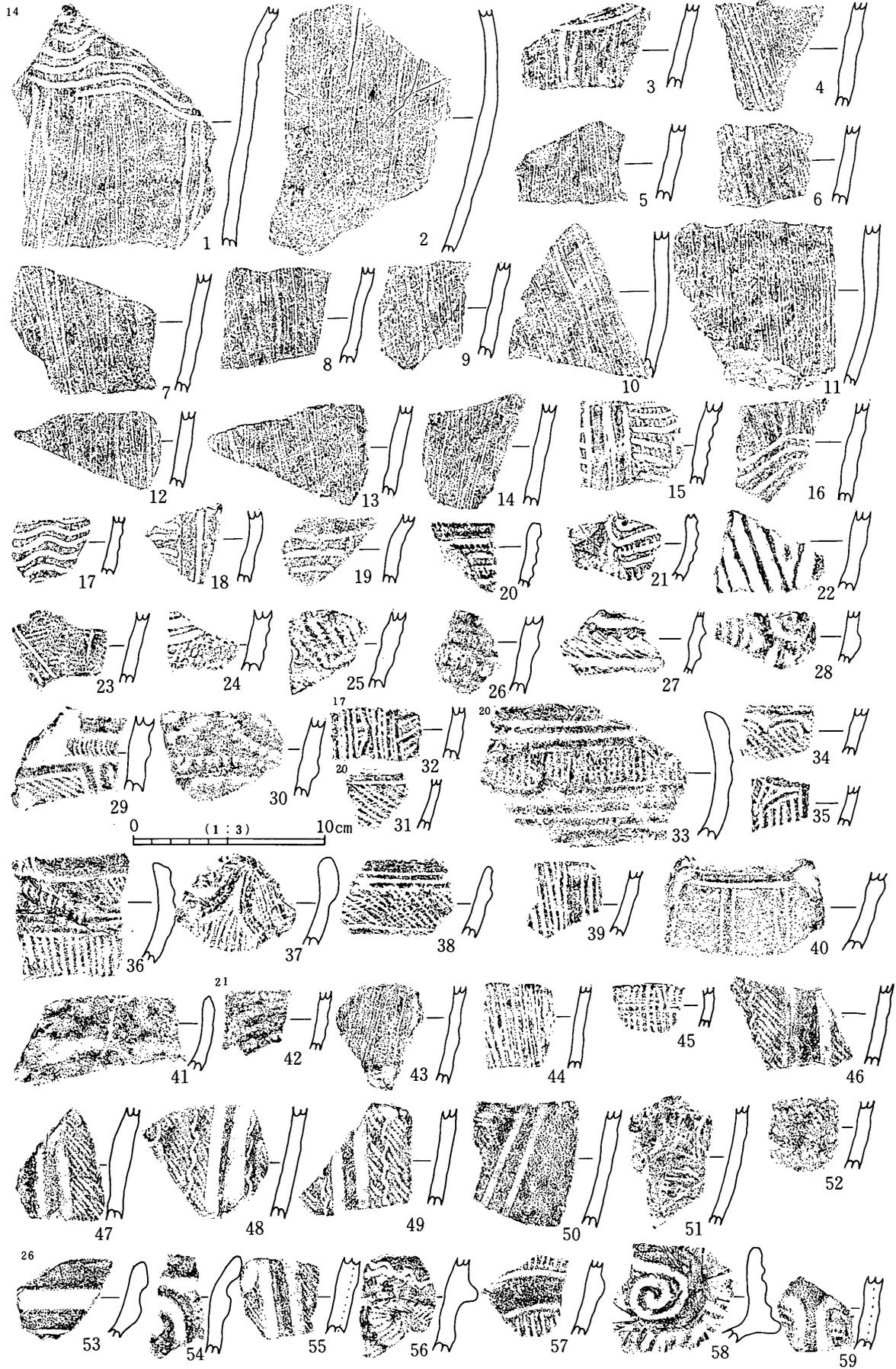
第82图 89号住居址出土土器(2)



第84图 F地区土抗7出土土器



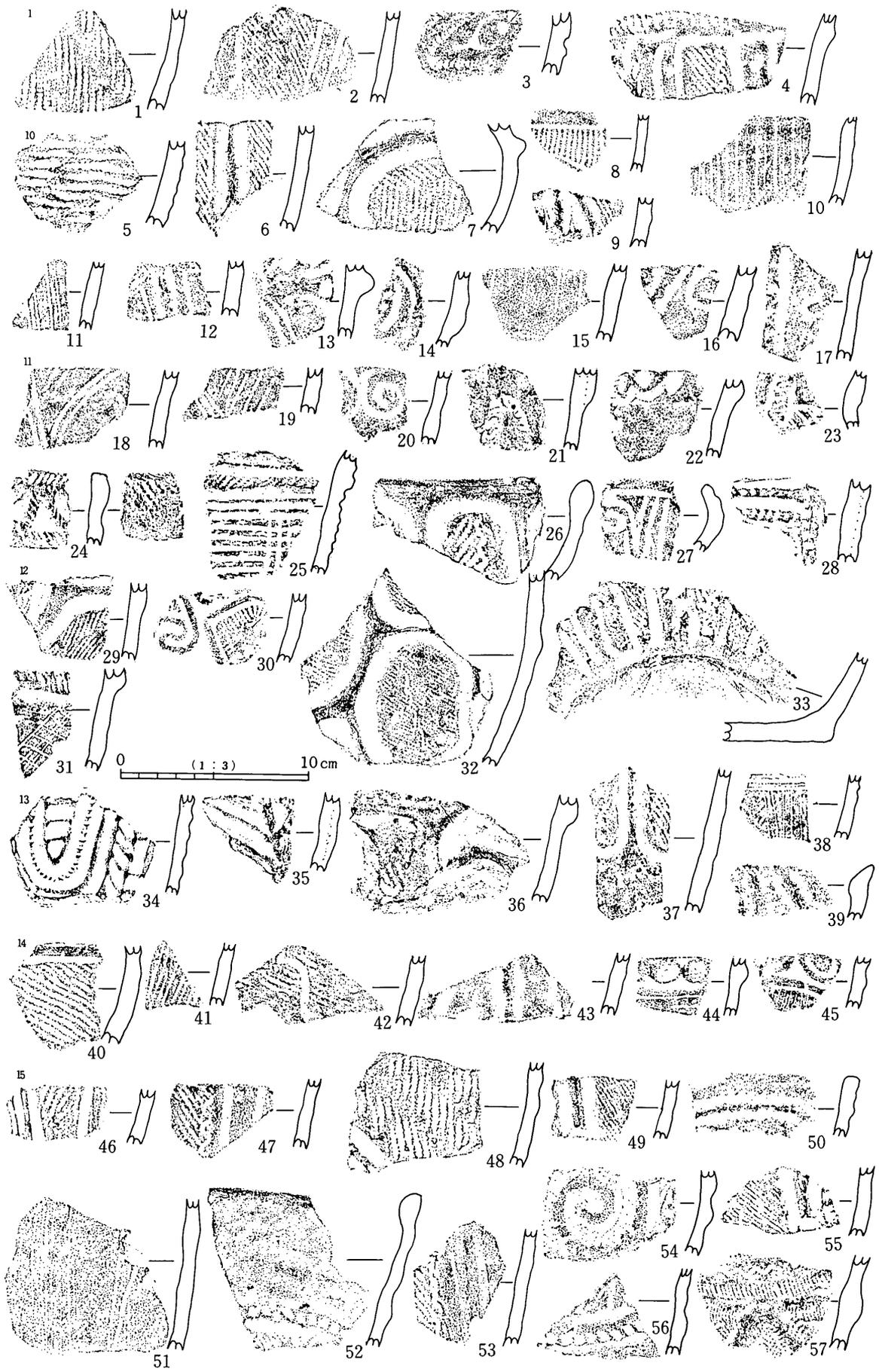
第83图 89号住居址出土土器(3)



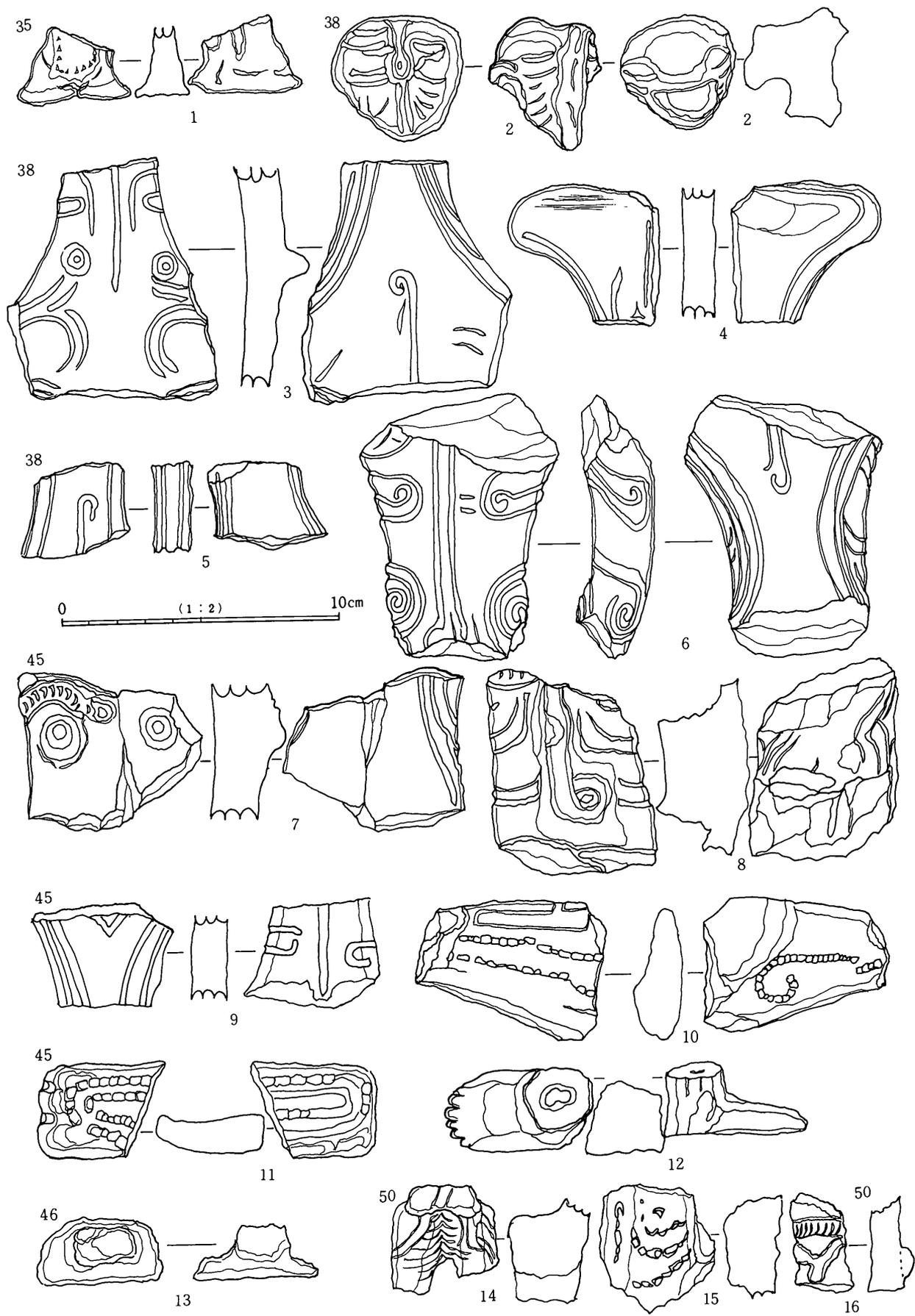
第85图 E地区土抗14·17·20·21·26出土土器



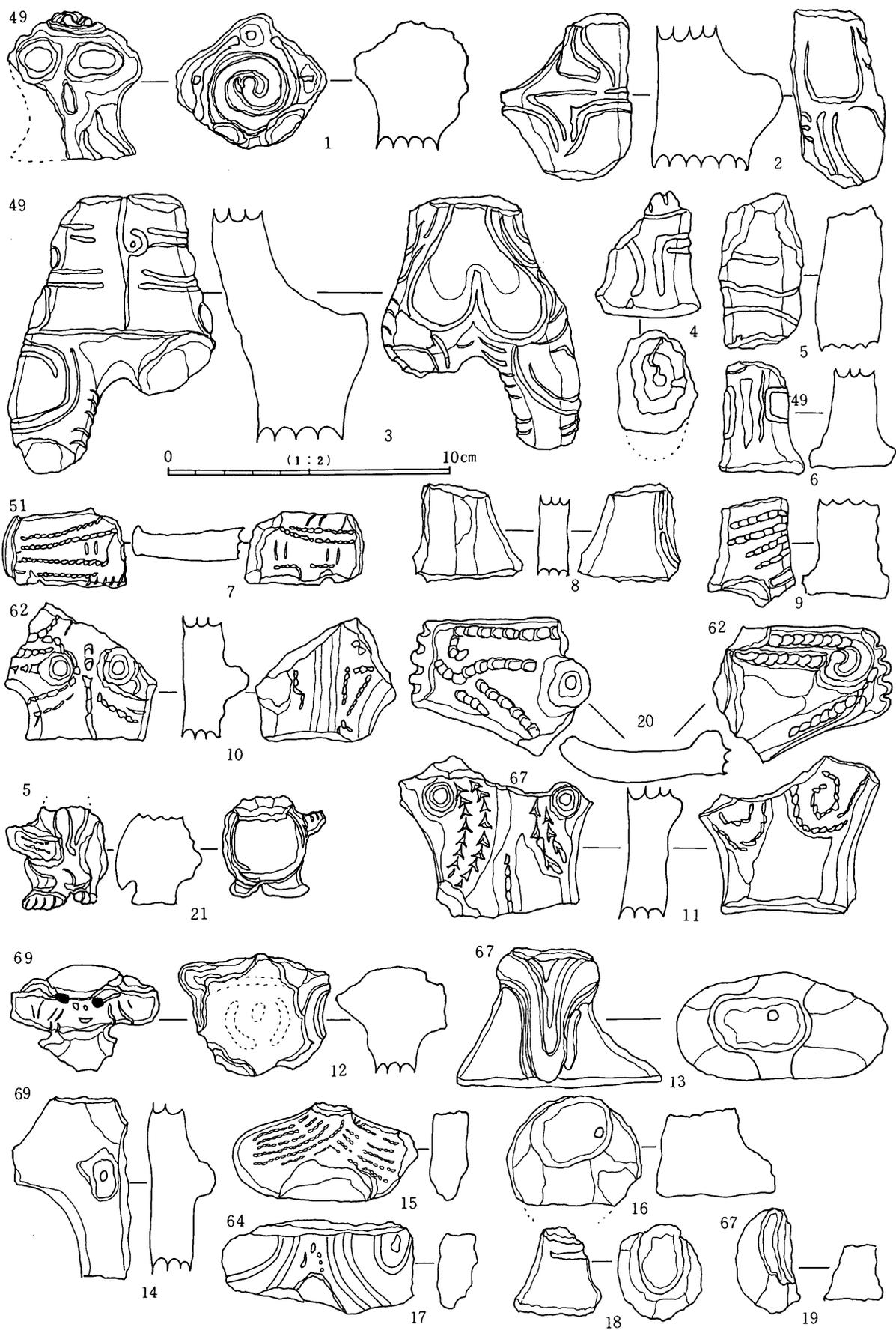
第86图 F地区土抗2·3·5·7·8·9出土土器



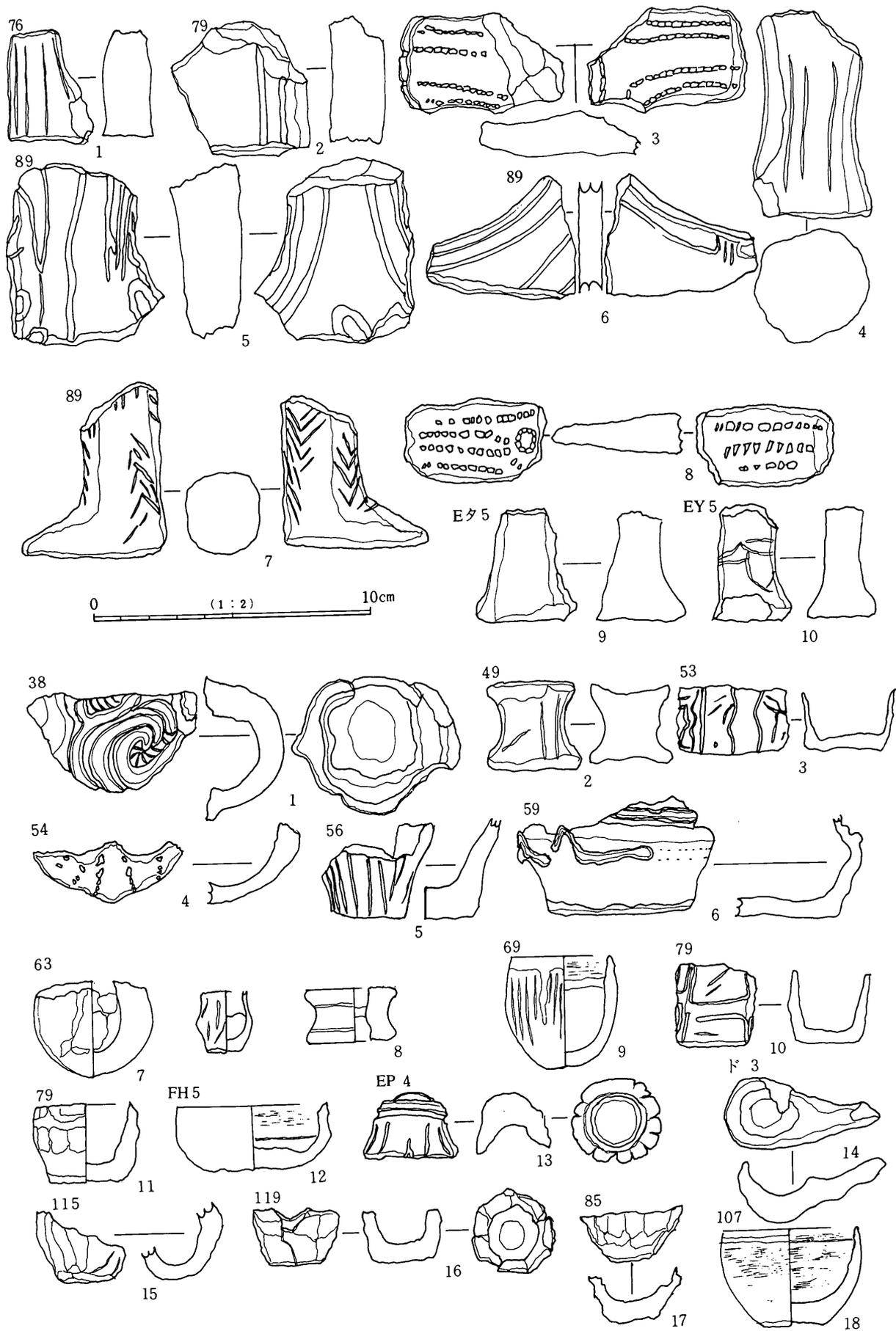
第87图 F地区竖穴10~15出土土器



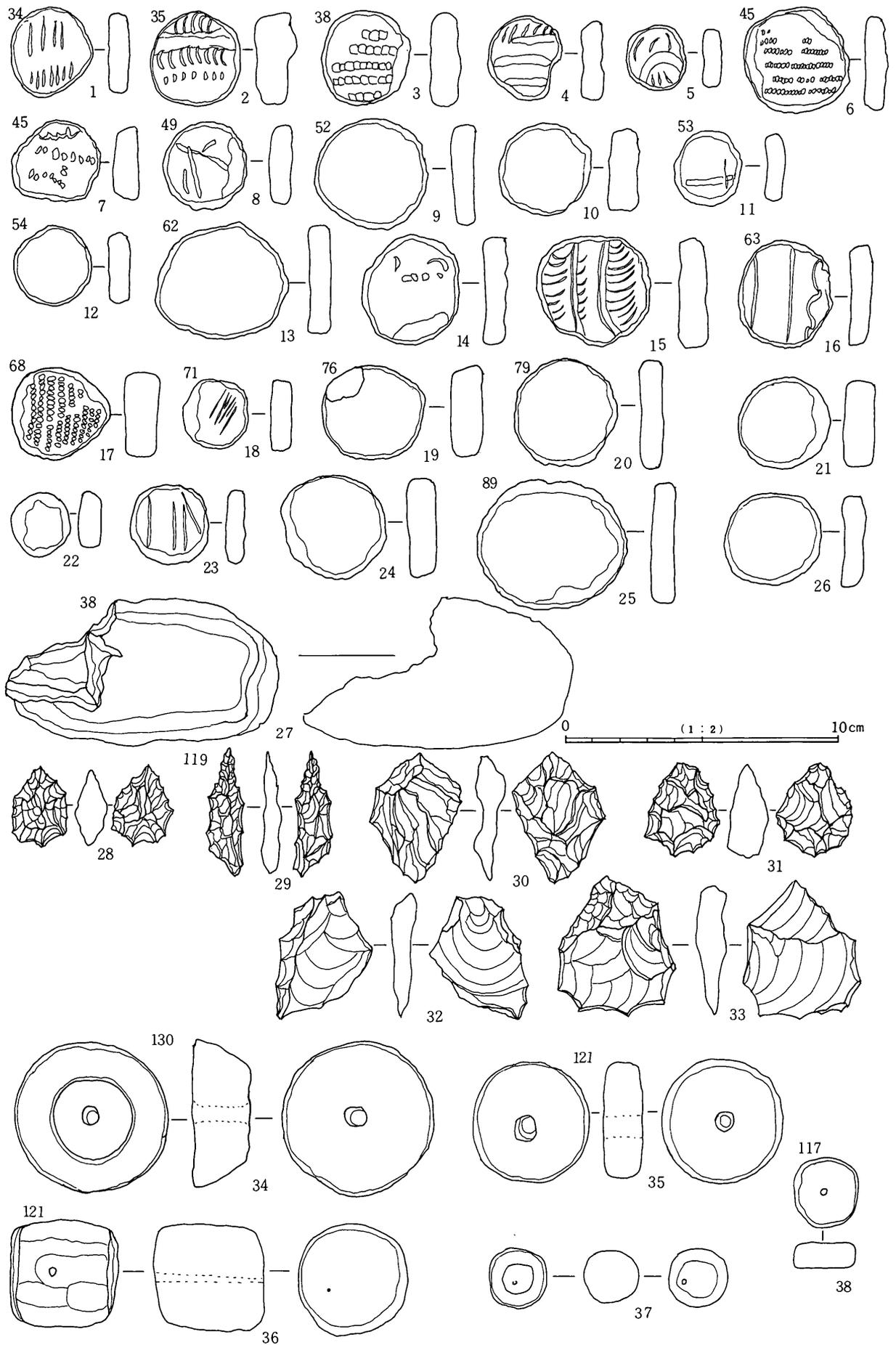
第88图 35~50号住居址出土土偶



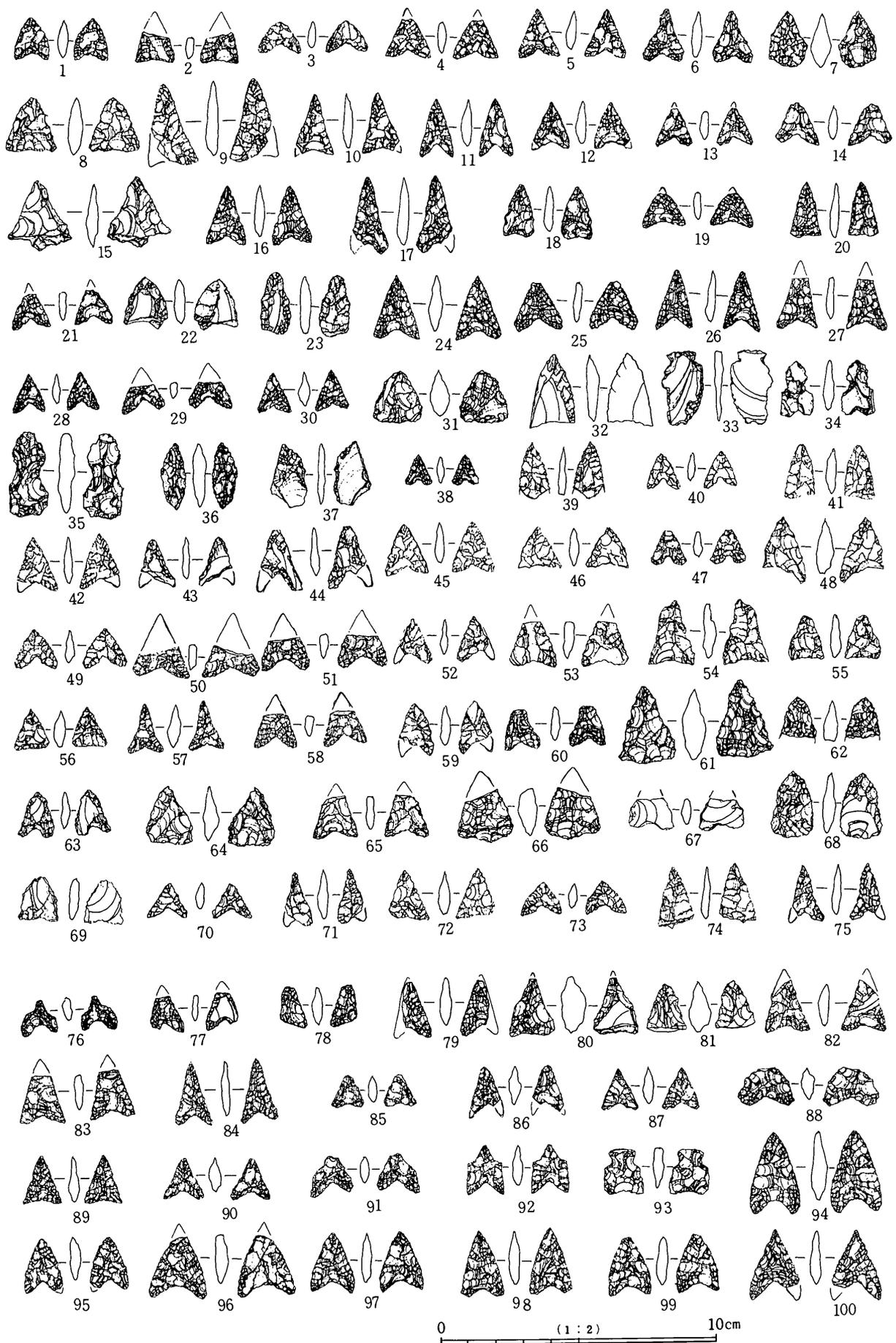
第89图 49~69号住居址出土土偶



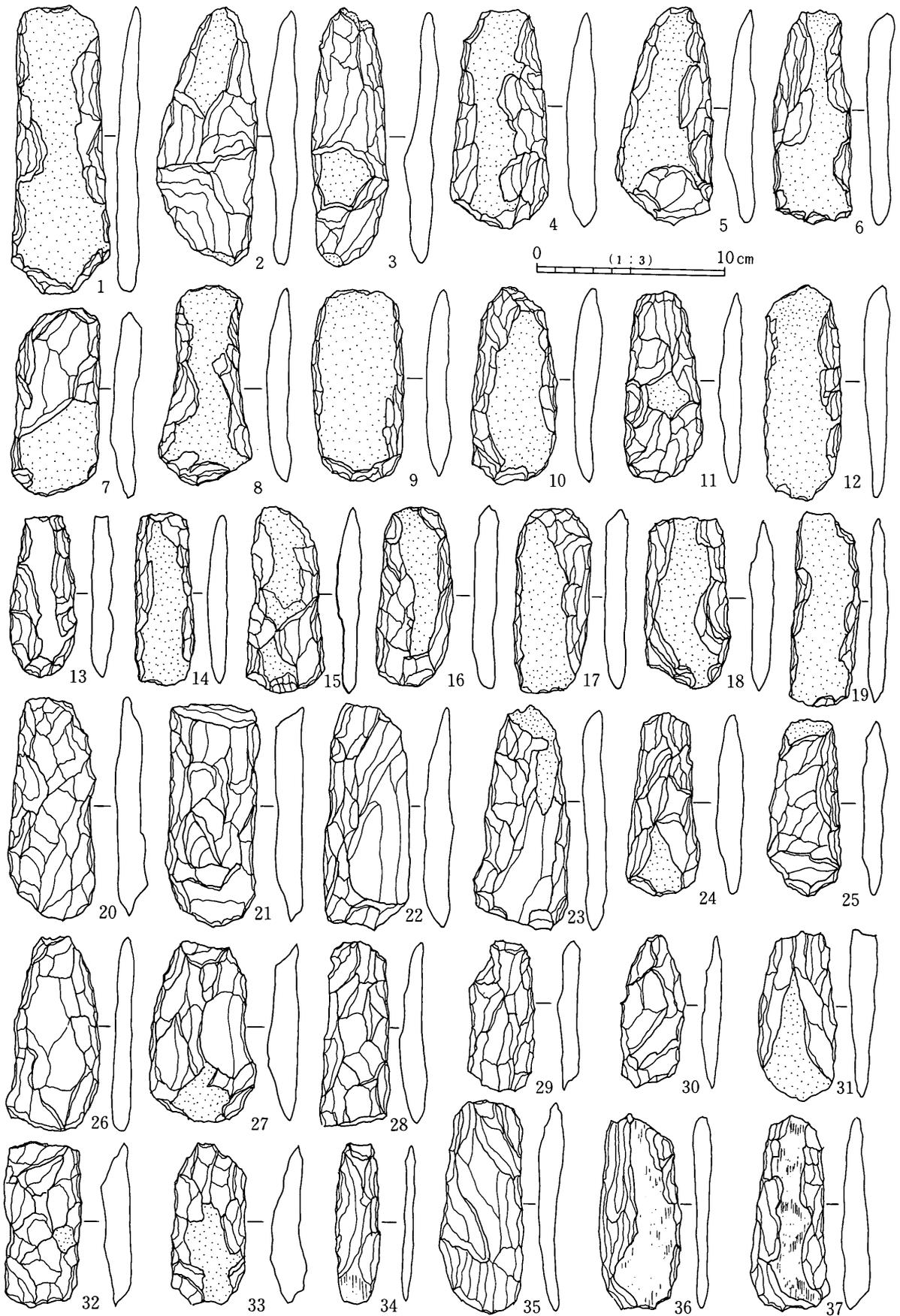
第90図 76～89号住居址出土土偶とミニチュア土器



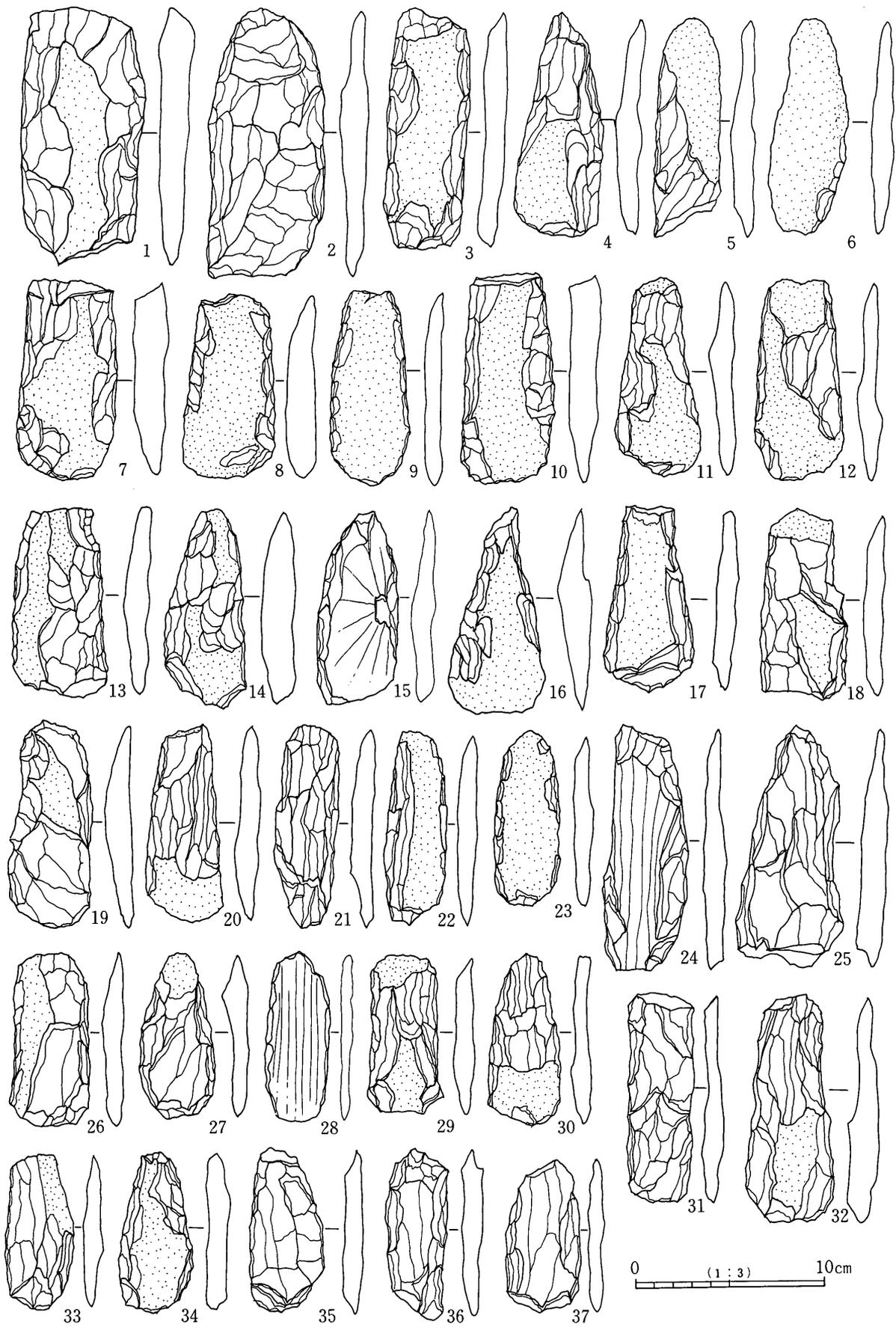
第91図 住居址等出土土製品と小形石器



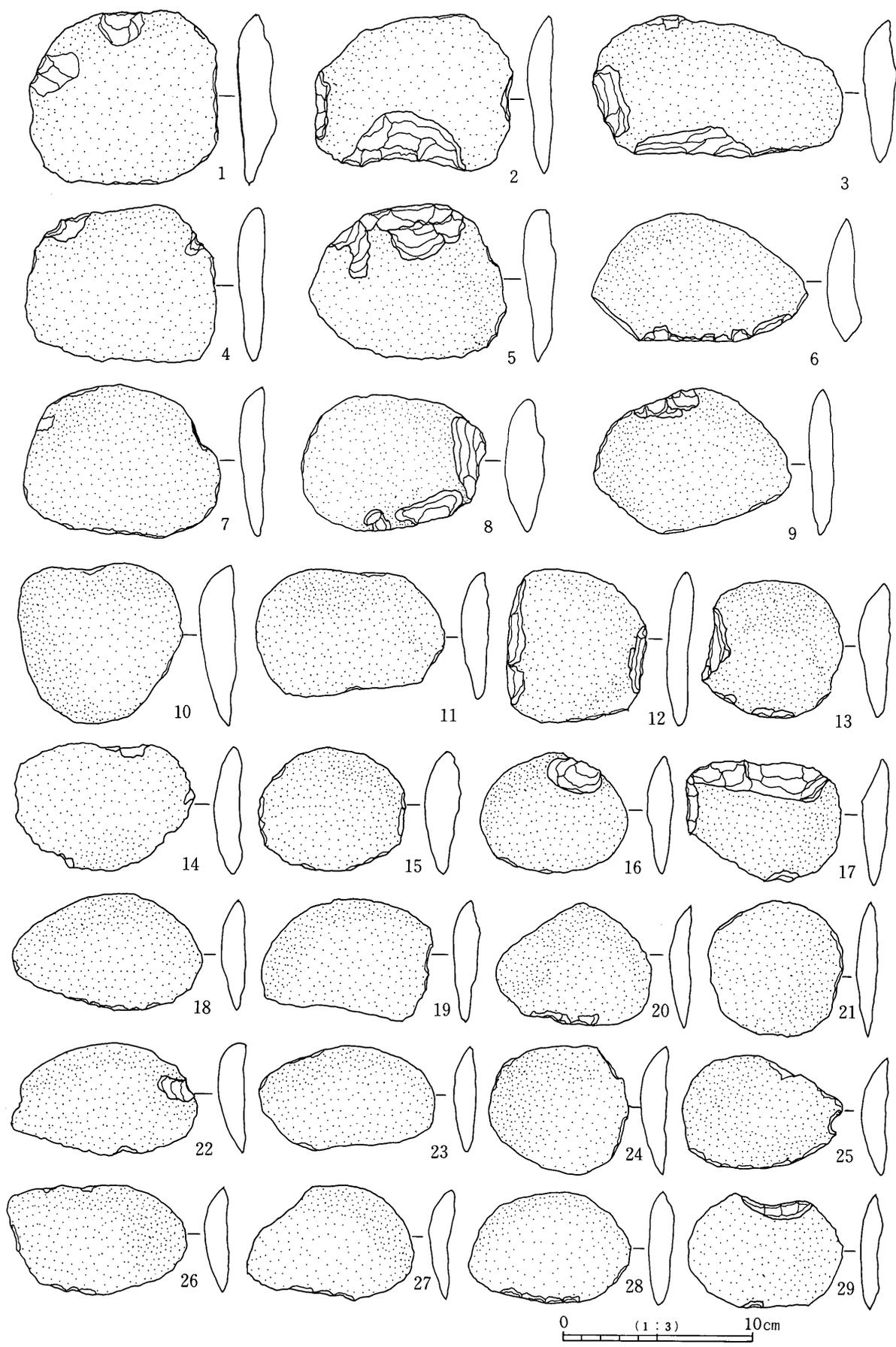
第92图 住居址等出土石鏃 100点



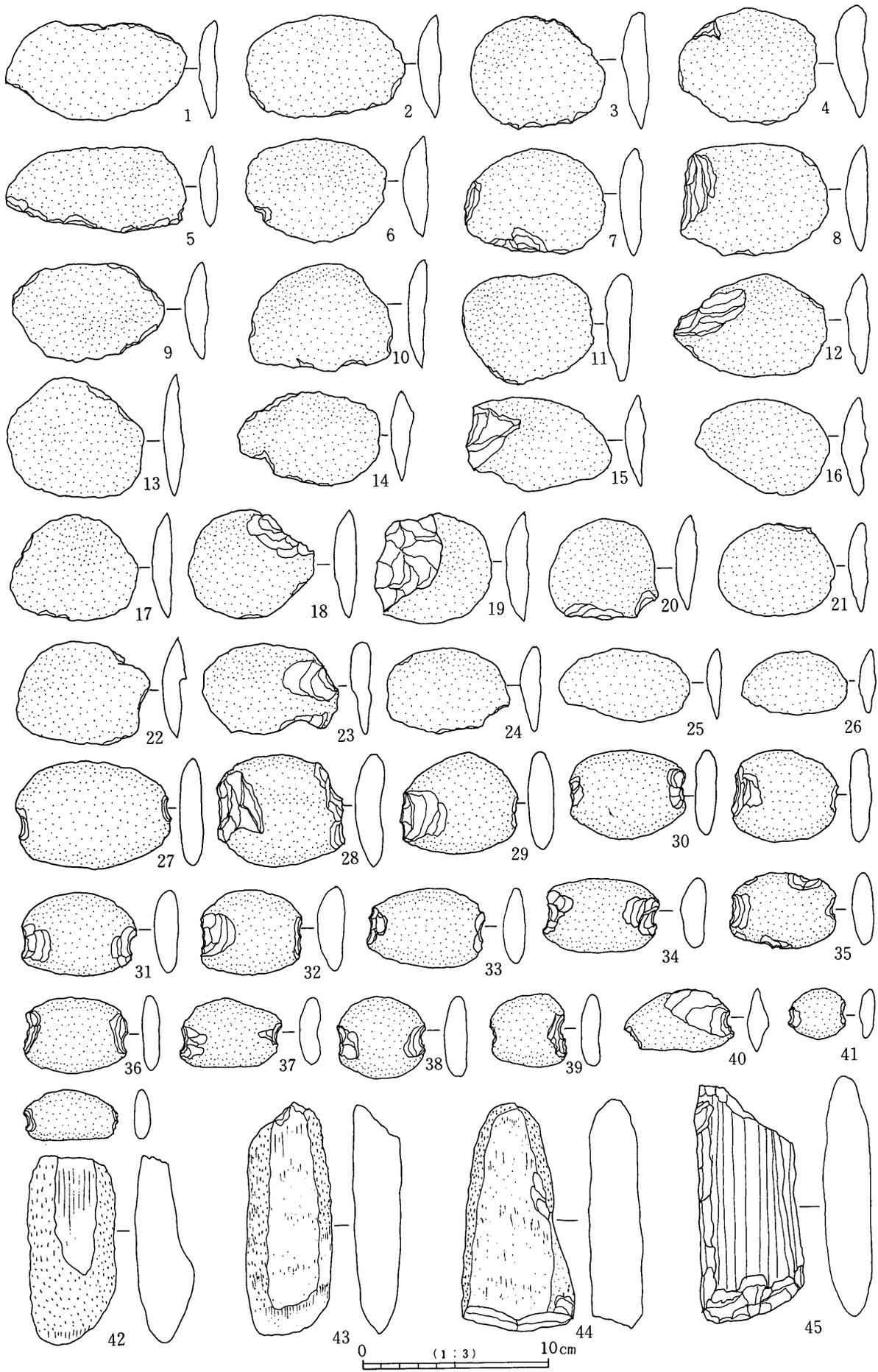
第93图 38号住居址出土石器(1)



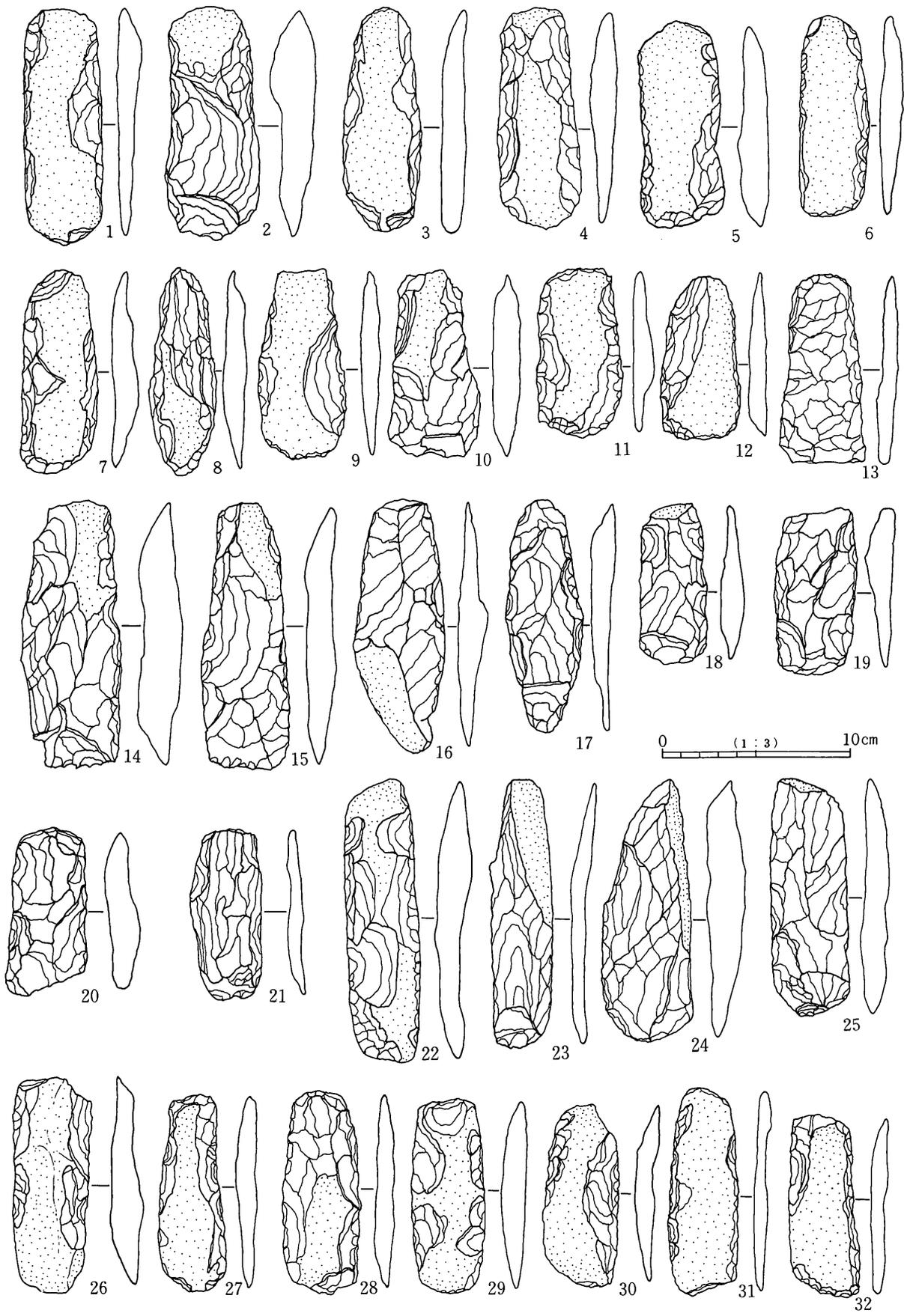
第94图 38号住居址出土石器(2)



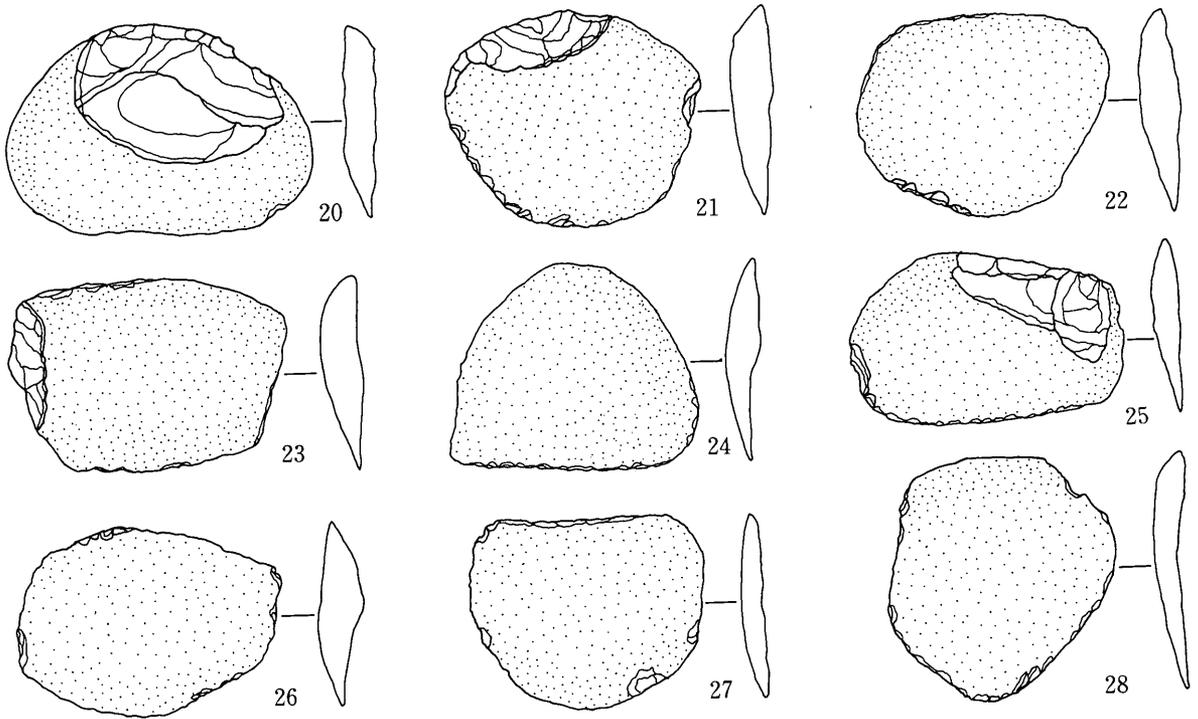
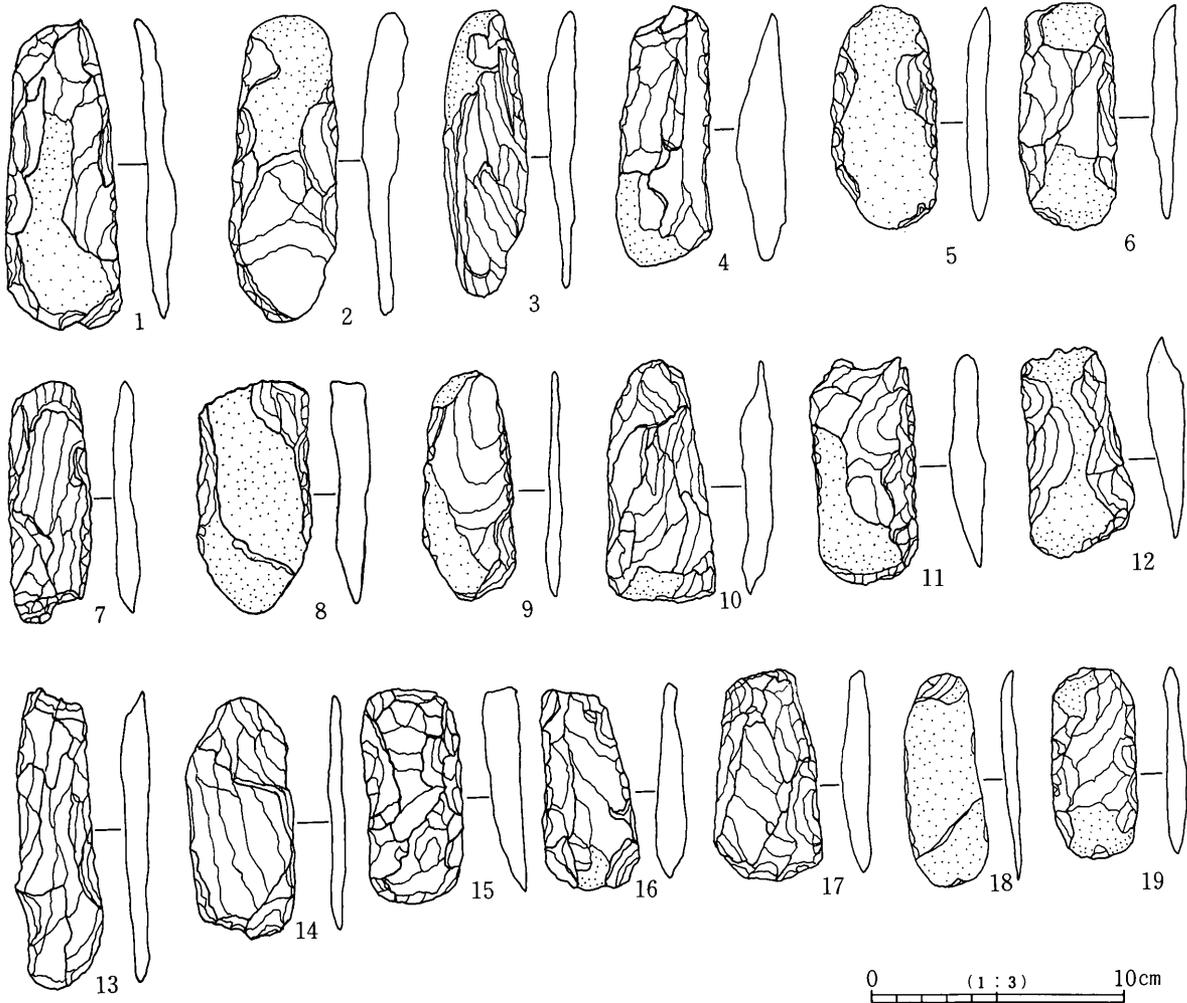
第95图 38号住居址出土石器(3)



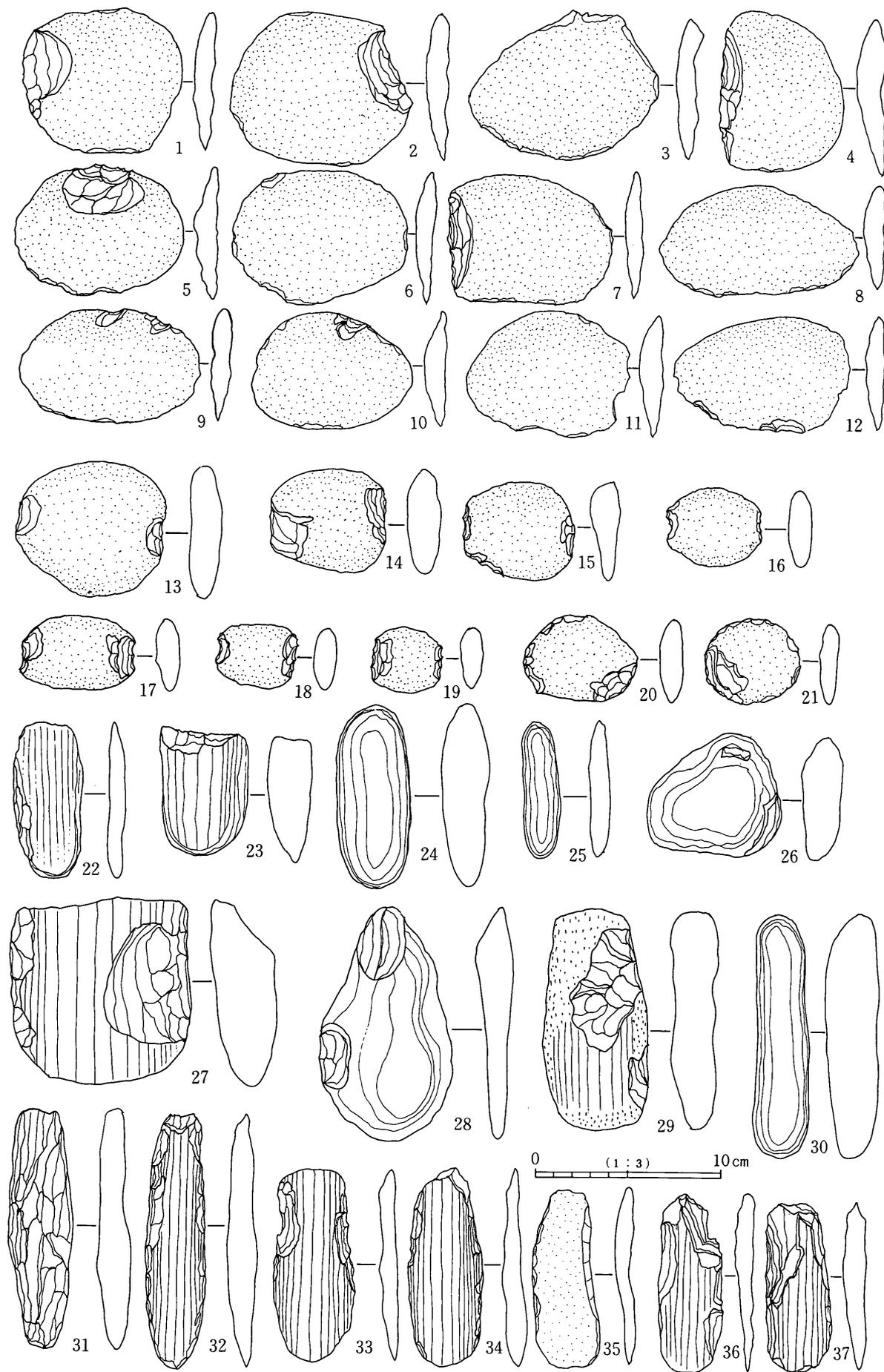
第96图 38号住居址出土石器(4)



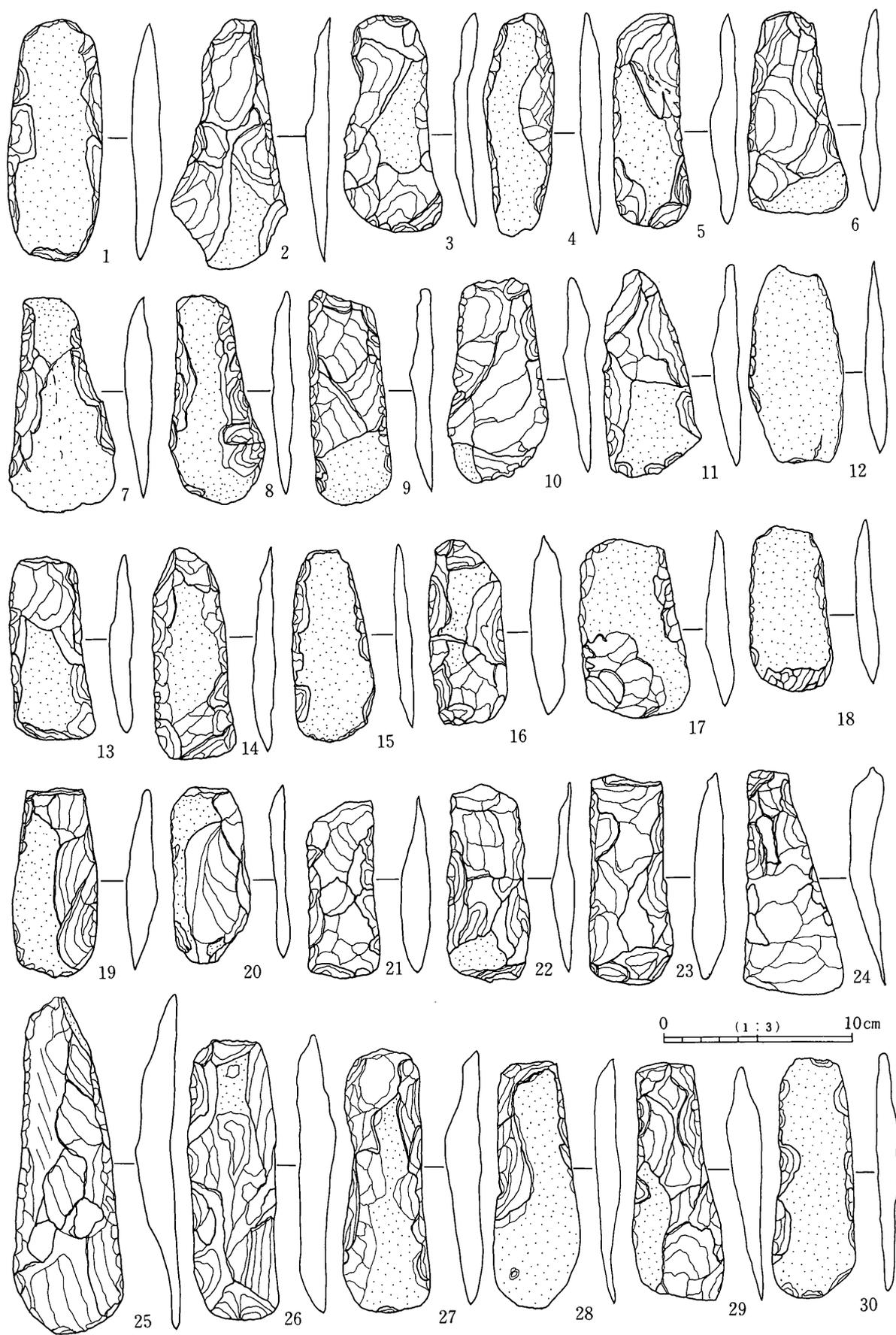
第97图 45号住居址出土石器(1)



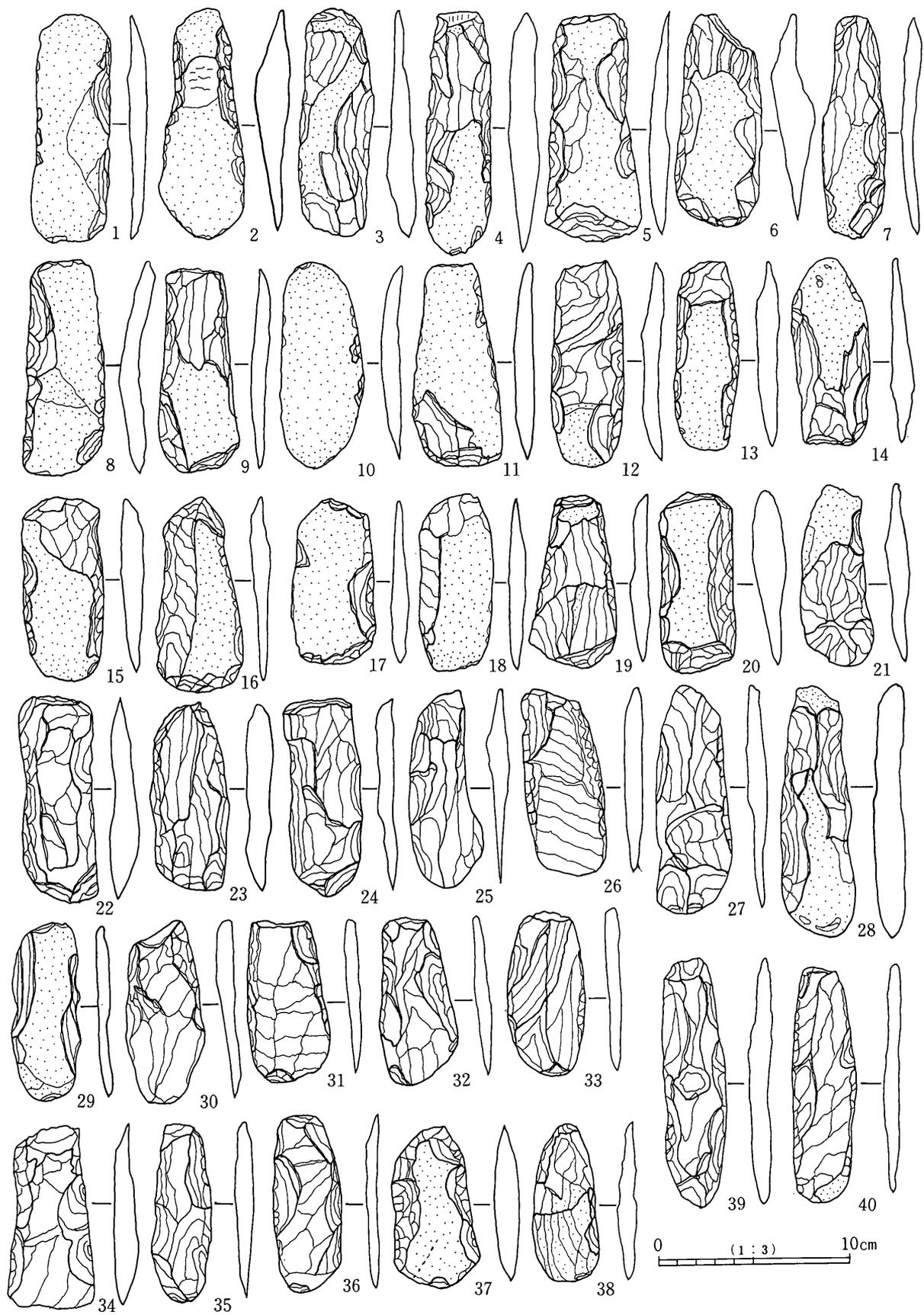
第98图 45号住居址出土石器(2)



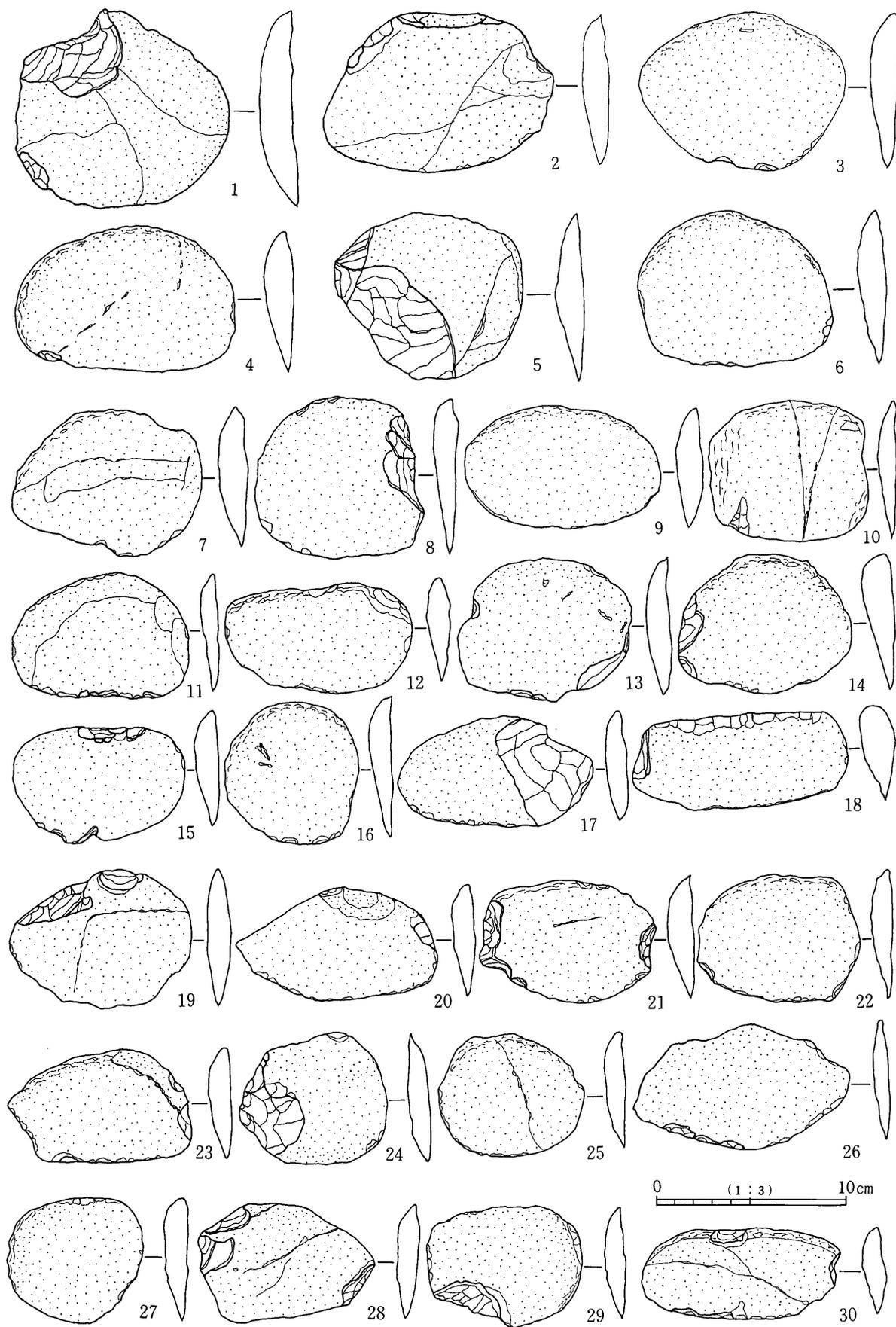
第99图 45号住居址出土石器(3)



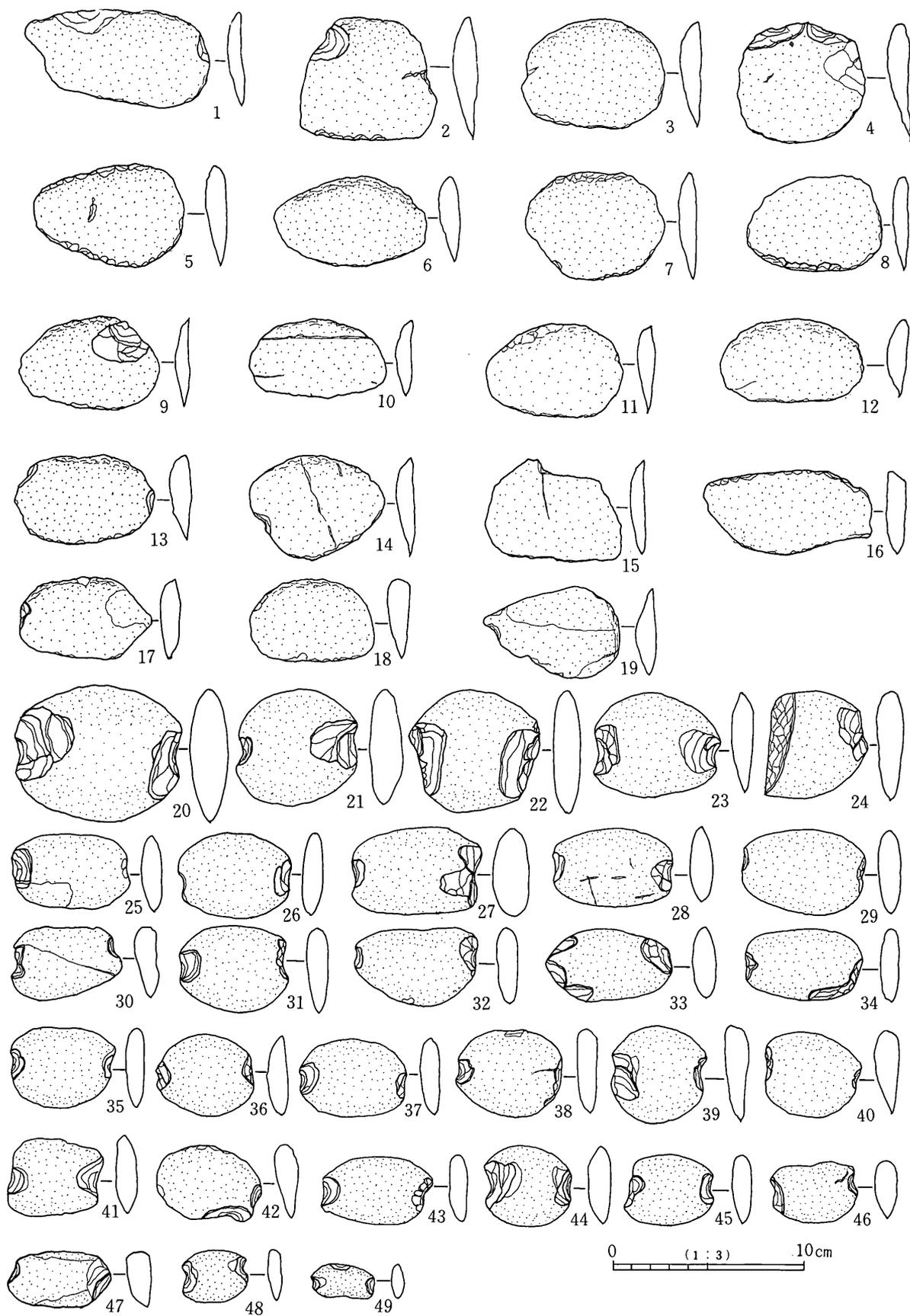
第100图 49号住居址出土石器(1)



第101图 49号住居址出土石器(2)

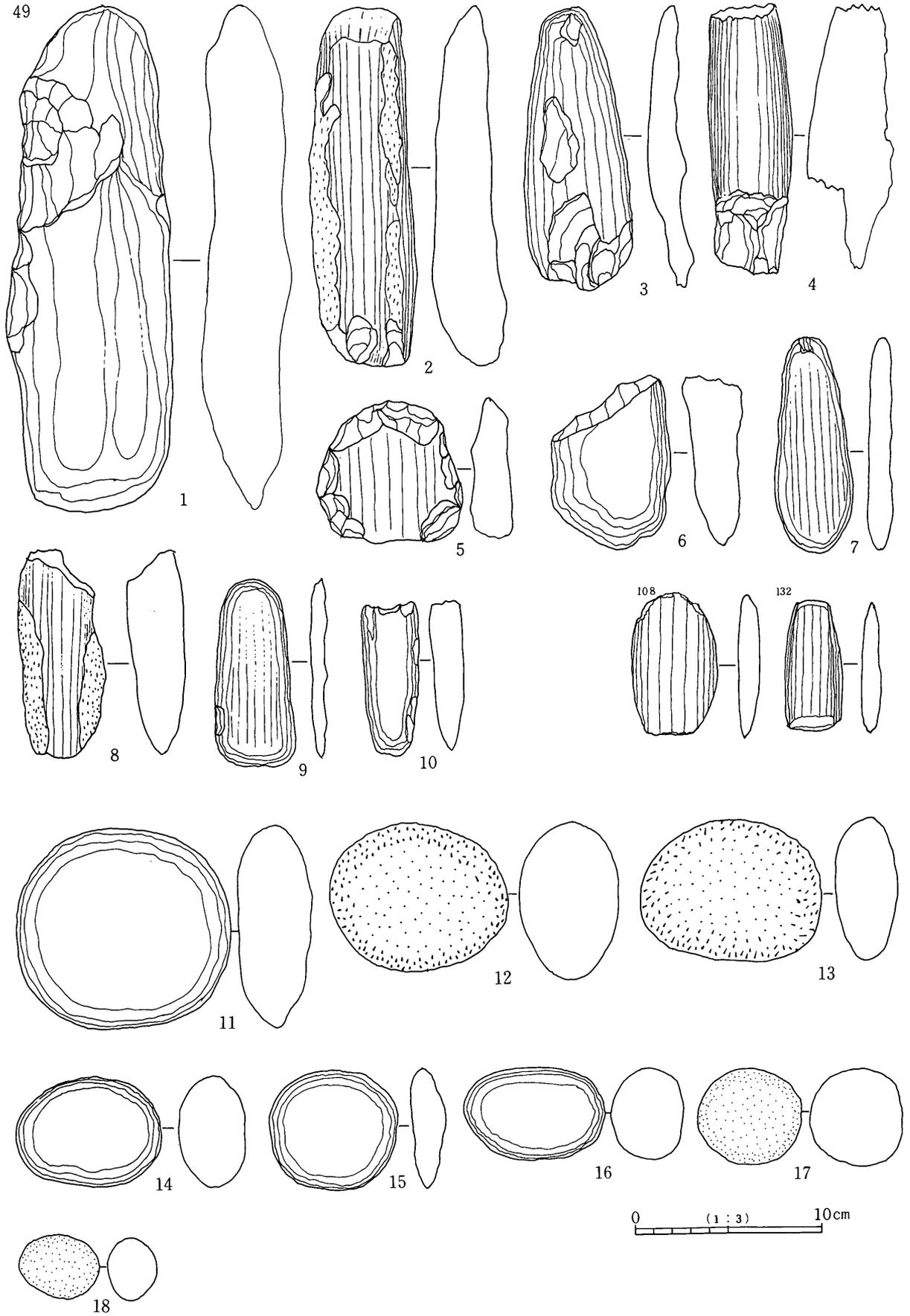


第102图 49号住居址出土石器(3)

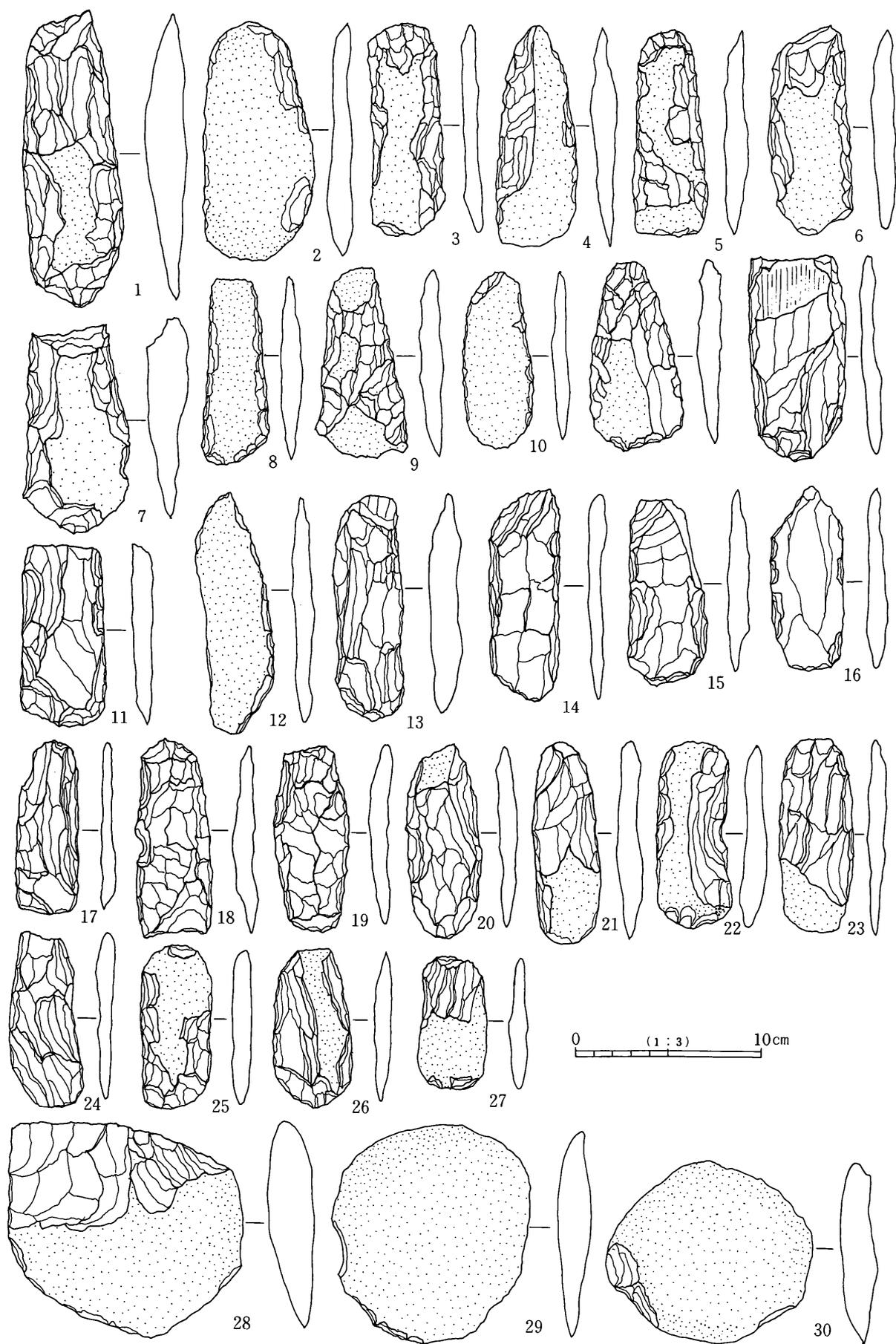


第103图 49号住居址出土石器(4)

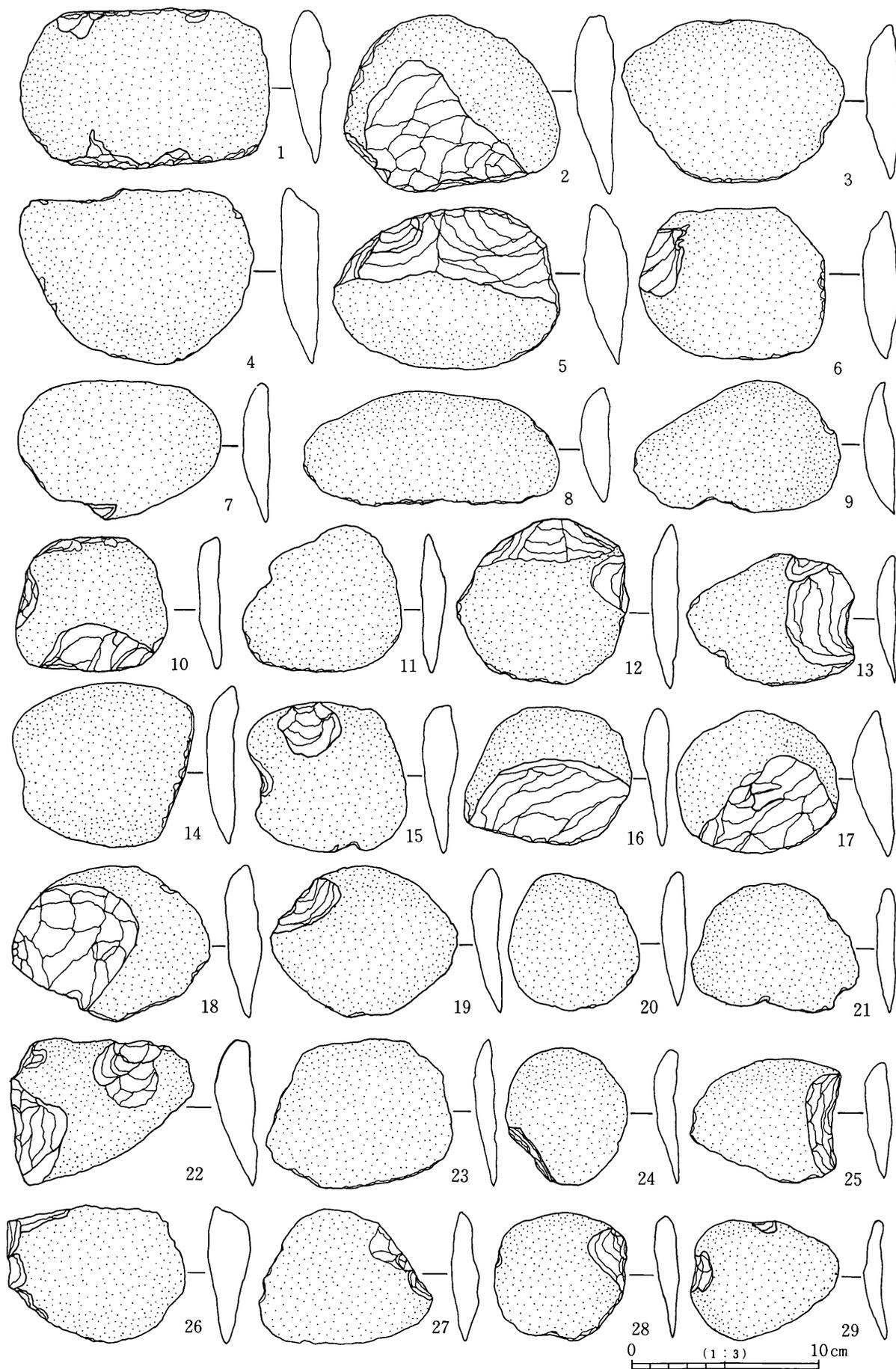
49



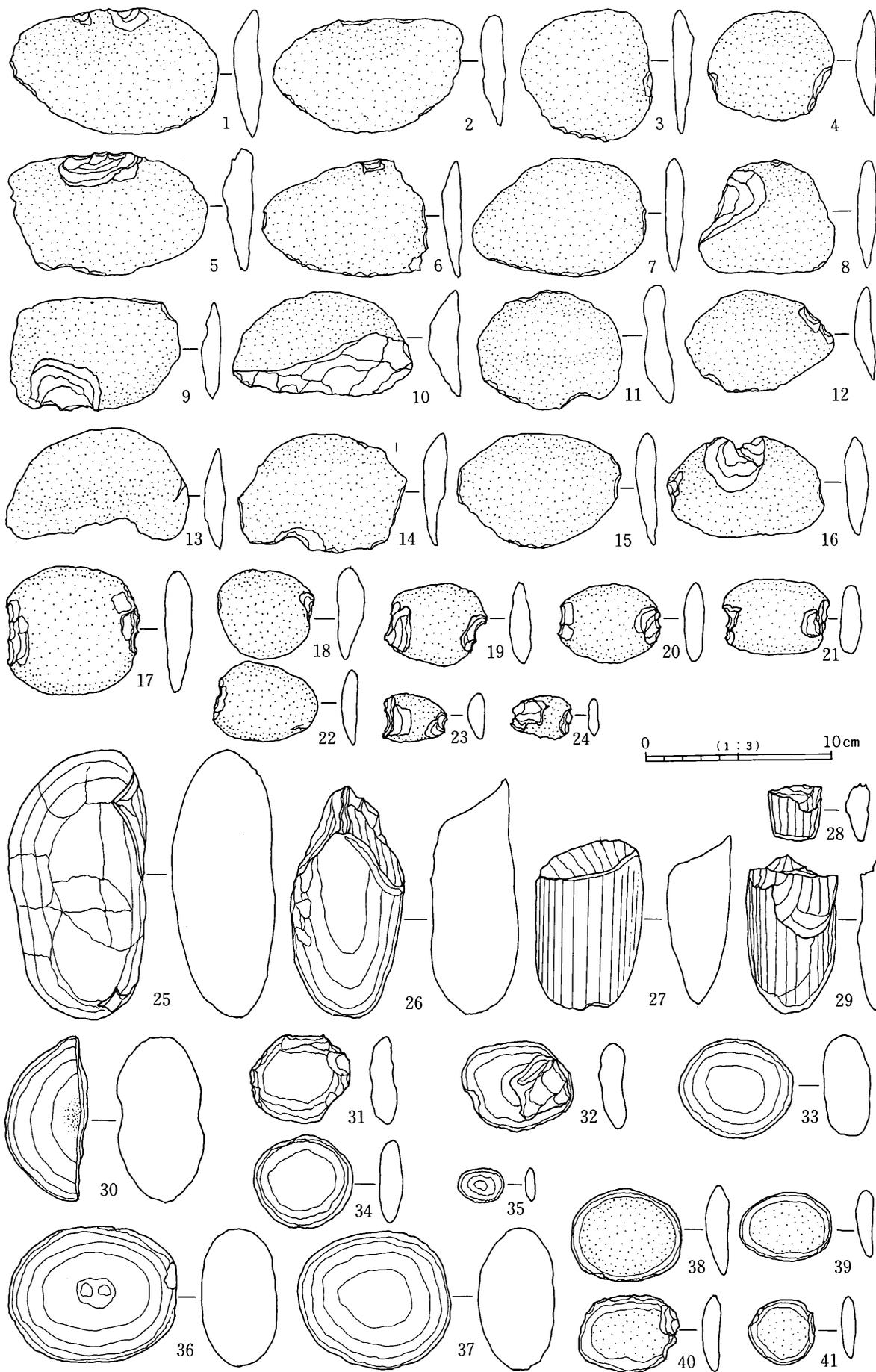
第104图 49号住居址出土石器(5)



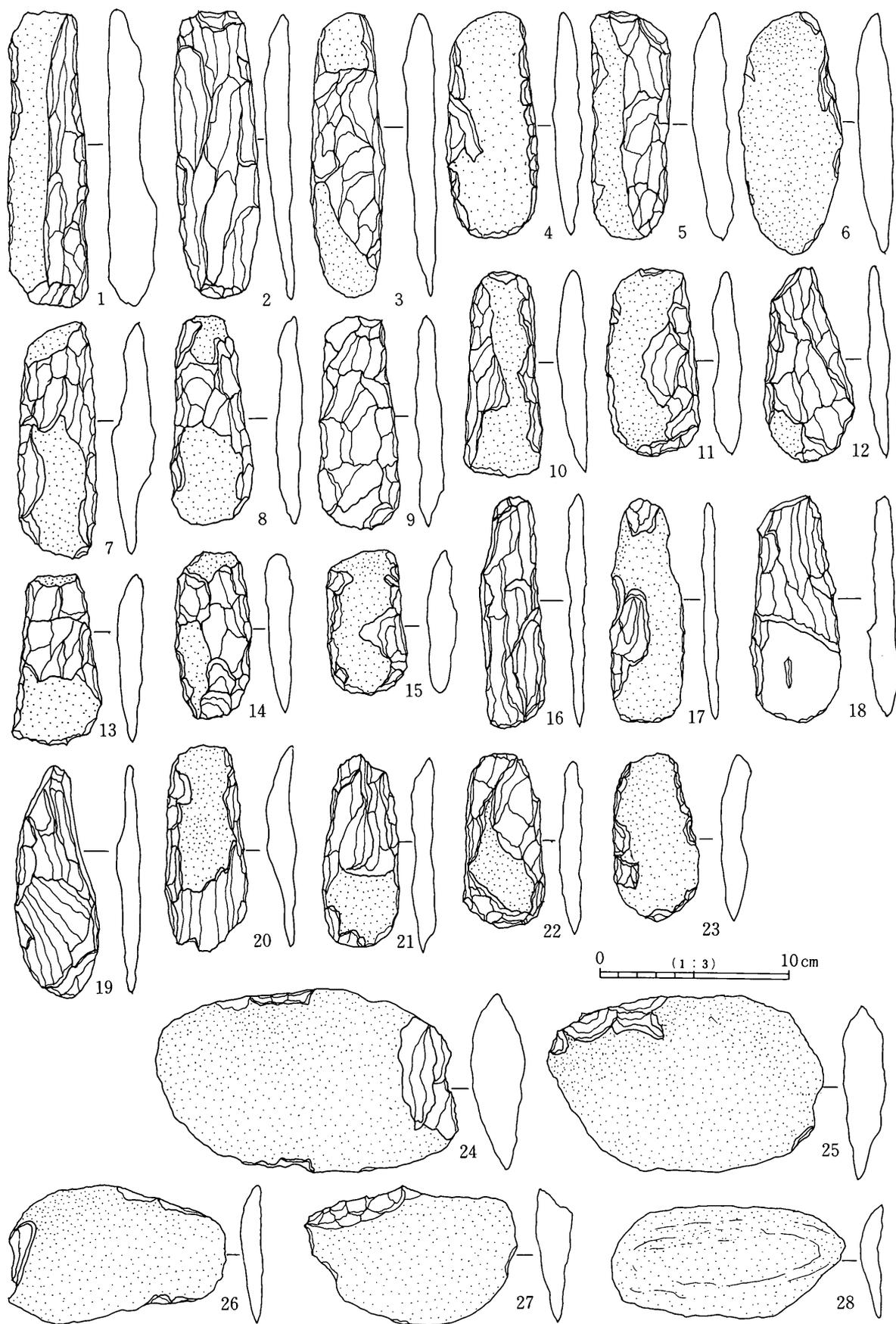
第105图 63号住居址出土石器(1)



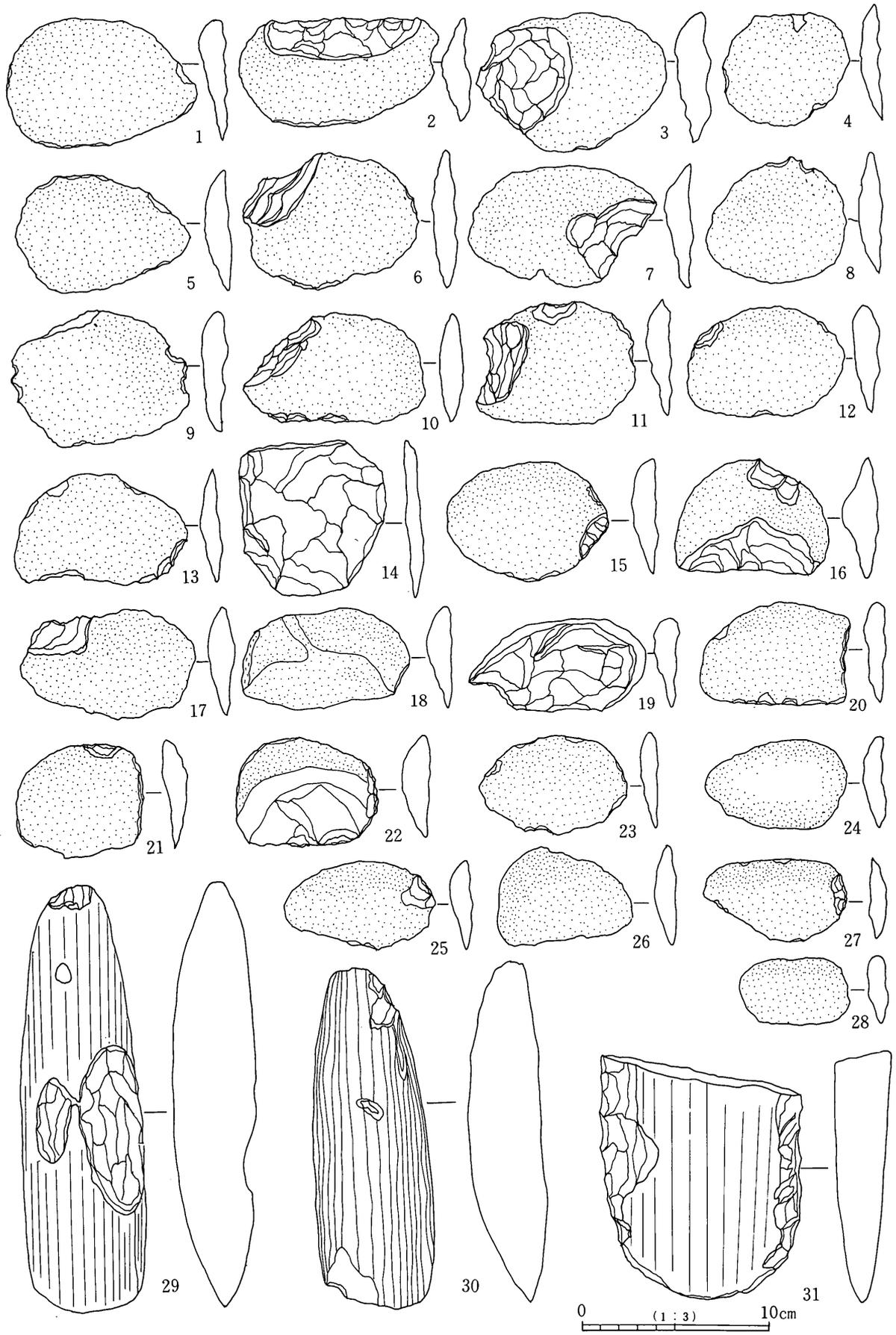
第106图 63号住居址出土石器(2)



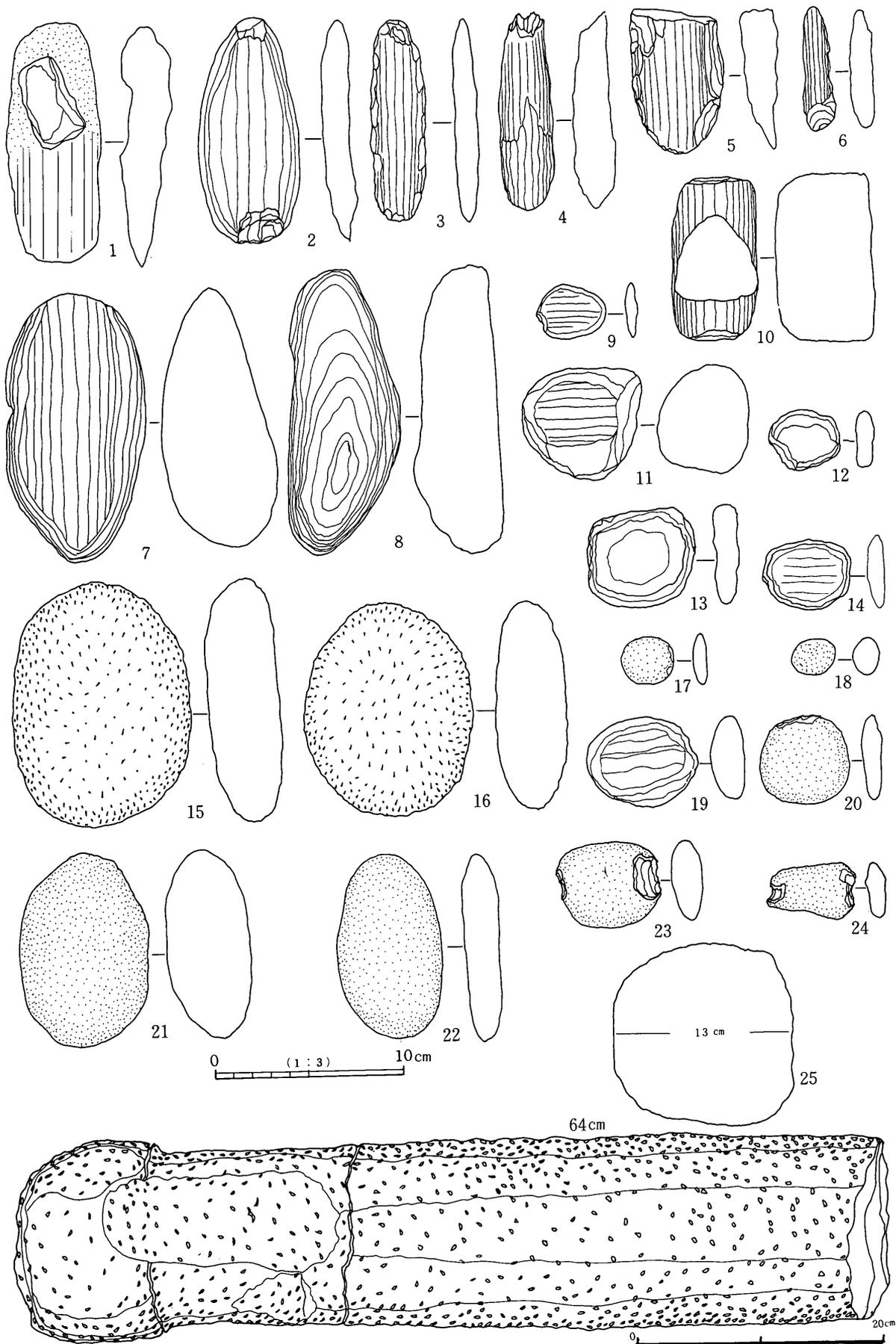
第107图 63号住居址出土石器(3)



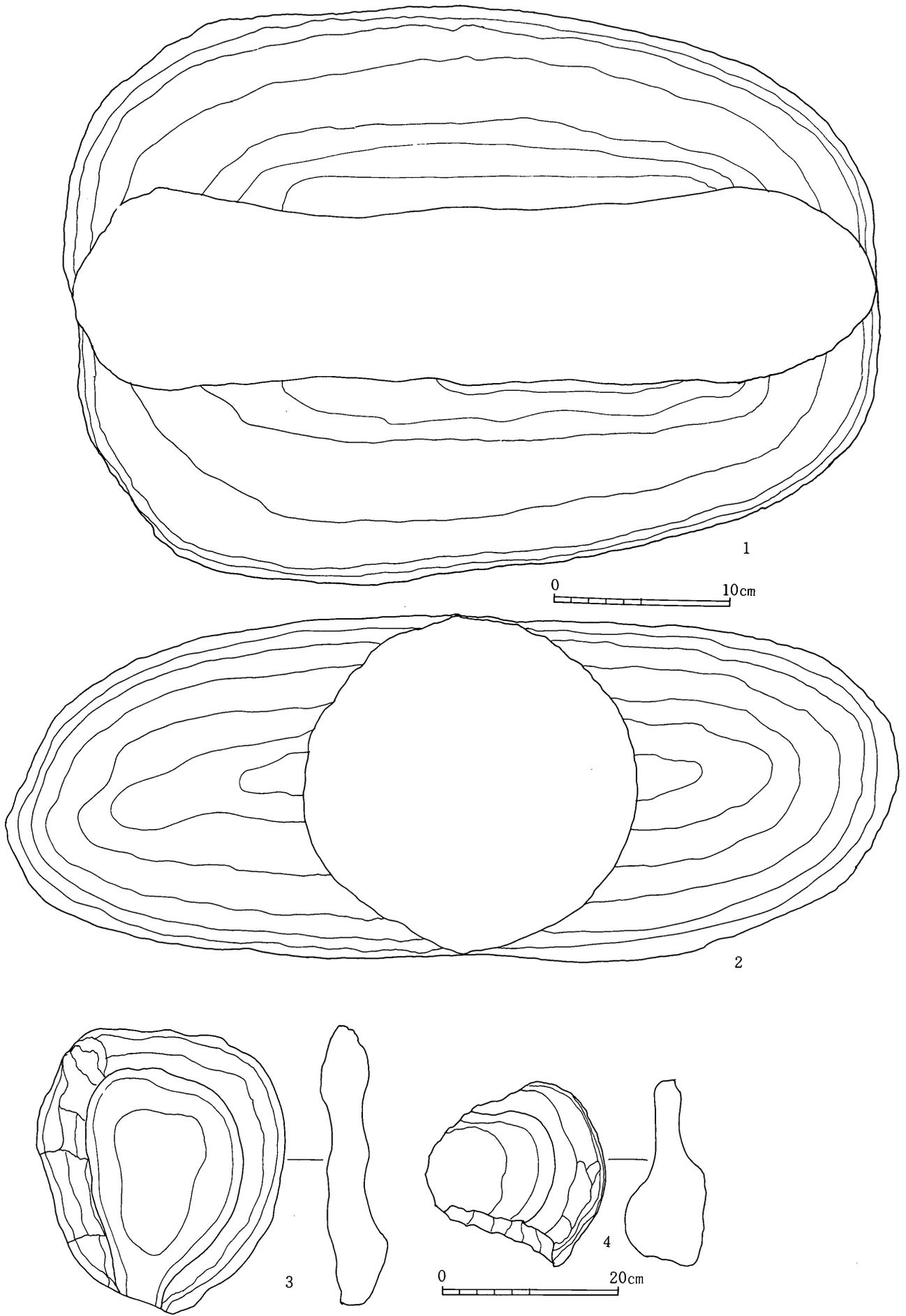
第108图 89号住居址出土石器(1)



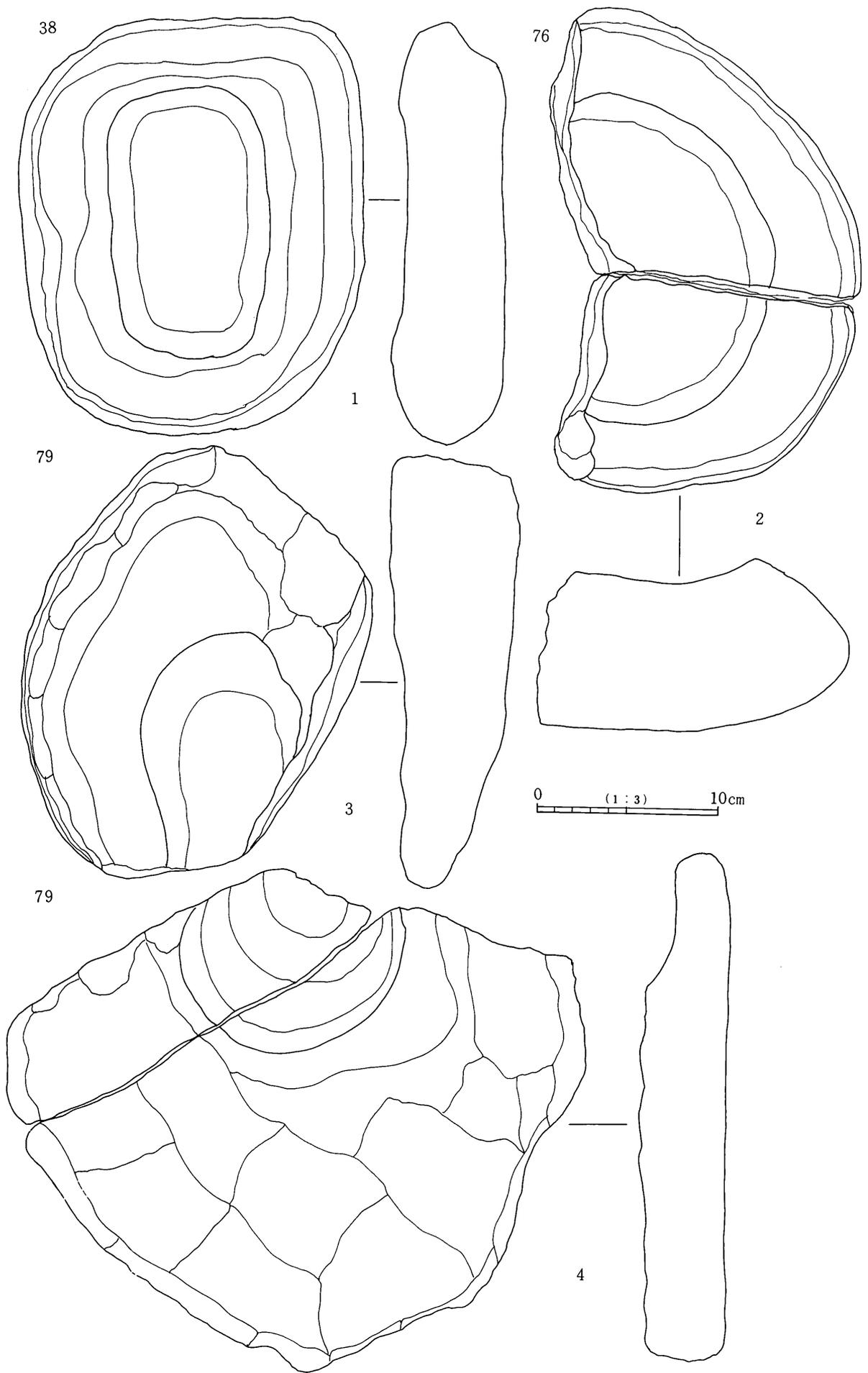
第109图 89号住居址出土石器(2)



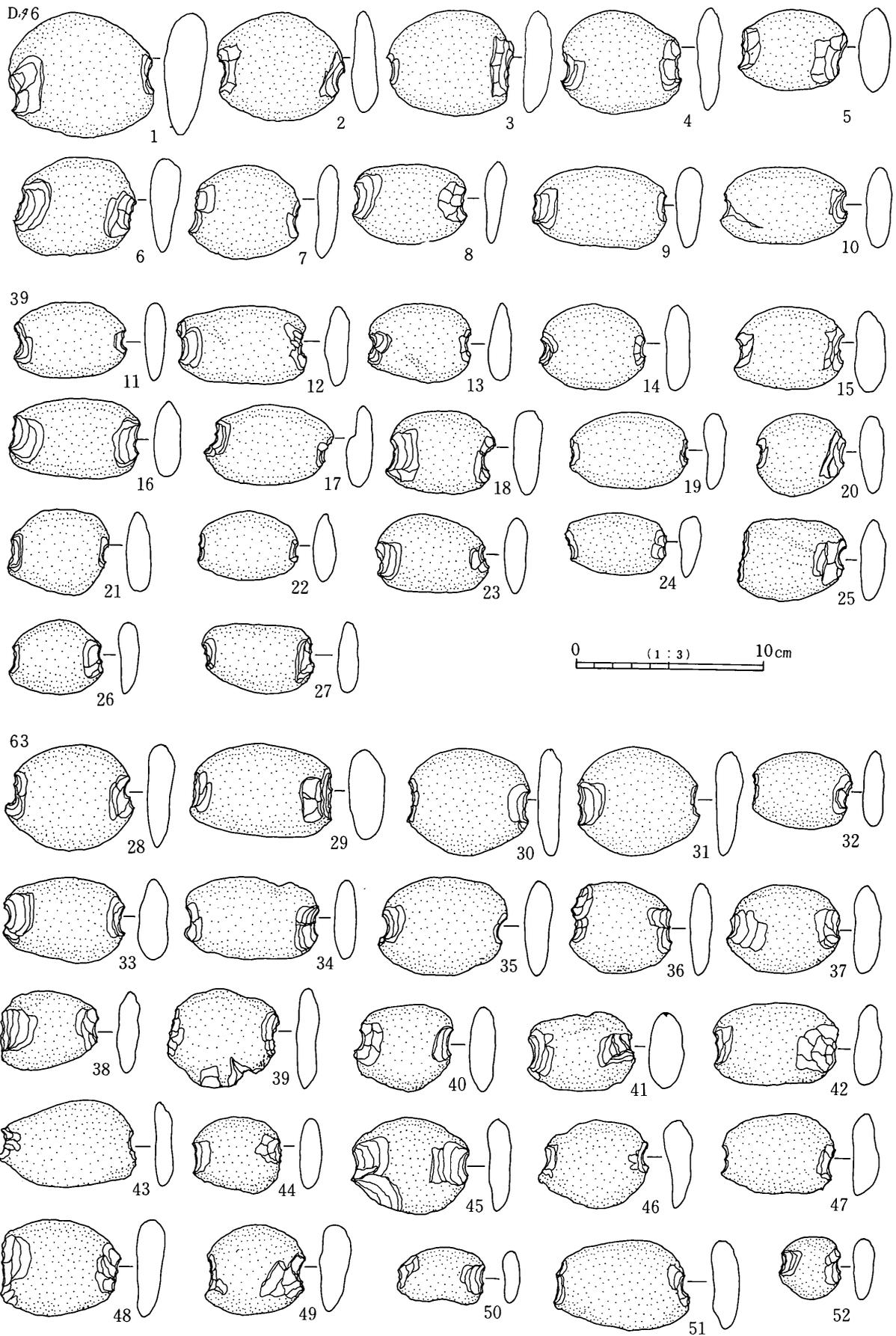
第110图 89号住居址出土石器(3)



第111图 89号住居址出土石棒·石皿



第112图 38·76·79号住居址出土石皿



第113图 D地区土抗6·39·63号住居址出土锤石

表5 伊久間原遺跡 遺構別出土石器整理表

No.1

NO	地区遺構名	IBNO	総数	石棒	石皿	石鏃	石匙	打石	磨石	乳棒	横刃	錘石	丸石	磨石	炒-	黒曜石	硅岩	石模	前土器	備考
1	C 87住	28	28			4	1	4			4	1	1	2	11	80			151	2
2	" 100	41	2			1	1									11			36	
3	" 101住	42	32			6		6			7		5		7	124	礫1		186	
4	" 102住	43	10							1	3	1	4	1		14			40	
5	" 103住	44	4					2			2					13			62	
6	" 104住	45	1					1								1			22	12
7	D2114住		29			6	1	8		2	4		5		2	234	礫1		78	
8	D1119住		92		1	10	4	28	1		23	1	11	2	11	334	15		843	(中葉土器出土多)
9	F 35住		64				1	21	2		31	4	4			8	1			3個体
10	" 39住		87			1		19	6	3	27	21	10			13				61
11	" 41住		32			1		11	1		12	3	2	2		6			5	40
12	" 53住		30			1		5	3		13	3	4	1		7				18
13	" 69住	9	34					11		1	12	2	3	5		9				64
14	E 76住	16	46		2			17	1	1	14	2	4	2		31	5			113
15	D1 98住	39	12					2			5	2		3		26		2	3	54
16	D3112住		8					2			3					9	3		5	51
17	D1118住		19					2			8	5	3	1		41				3個体
18	D2125住		14			3	1	5			2	1	2			21			3	40
19	D3131住		13			1		4	1		6		1			26				4個体
20	D2132住		10				1	4			5					8				15
21	F 26住		16	2		1		1			5	1	1	4		7				
22	" 34住		96			2		35	3	3	39	4	6	4		11				
23	" 36住		43				1	11	2		21	4	4			8				
24	" 37住		7					3	1		2	1				26				
25	" 38住		346		2	1		75	6	2	215	17	19	10		29				62
26	" 40住		26					8			12	1	3	2						
27	" 42住		25					13			9	1	2							4
28	" 43住		45					19		1	17	4	2	1	礫1	76			3	16
29	" 45住		152			1		95	11	3	26	7	5	4		89				29
30	" 46住		32			1	1	12	2		12	4				6				15
31	" 47住		34					6	2		19	4	2	1	特	8				1
32	" 48住		56	1		1		12	4		24	8	4	1	砥石	9				3
33	" 49住		271			4	1	134			89	30	8	4		134				17
34	" 50住		142					51		1	66	14	9	1		17				14
35	" 51住		46					15	2	1	17	6	2	3		2				12
36	" 52住		39			1	1	13			12	6	4	1	1	23				4
37	" 54住		23					5			11		3	2	2	10				
38	" 55住		12					3			6		2	1		2				4
39	" 56住		16					7			3	2	3	1						
40	" 57住		13			2		8	1		2									
41	" 58住		15					6			4		2	3						
42	" 59住		46			2		8	2		18	7	4	5						13
43	" 60住		8					4	1		2	1								29
44	" 61住	E 1	27					12			13	1		1						19
45	" 62住	2	61					28		2	20	9		2						46

NO	地区遺構名	旧NO	総数	石棒	石皿	石鉢	石匙	打石	磨石	乳棒	横刃	錘石	丸石	磨石	カク	黒曜石	硅岩	石模	砂調	備考	
46	E 63住	E 3	204	1		8		63	3	1	109	8	8	3		72				中棟出土	
47	" 64住	4	105				1	49	5	2	39	4	4	1	凹石	43					
48	" 65住	5	3				1					2				6					
49	" 66住	6	31					16		1	12		2			8					
50	" 67住	7	158	4		1		45	5	4	51	29	11	8		40				28	
51	" 70住	10	27			1		11			7	6	1	1		9				17	
52	" 72住	12	90					19	4	4	43	12	6	2		9				16	
53	" 73住	13	10			1		3			1	5								14	
54	" 74住	14	7					1			2		2	2		6				18	
55	" 75住	15	70			1		28	2	3	20	5	5	5	1	1	12			48	
56	" 77住	16	86				1	32	1	3	36	6	2	5		7					
57	" 78住	18	6			1	1	3			1					4				3	
58	" 79住	20	126	2	1	1	1	29	3	2	49	21	8	9		125	2				
59	C 89住	30	132	4	3	5	1	53	6		39	3	10	7					1	1	
60	D1 97住	38	24			1		5	5		10	1	1	1		18					
61	" 99住	40	19					3	1		9	1	4	1		32				21	
62	" 120住		8			1		3	1		3									26	
63	" 80住	C 21	18			6	1	4			2	1	4			65					
64	" 83住	24	4			2									2	93	3				
65	" 96住	37	40			1					6	6	24	1	#1		1	1			
66	D21 109住		20					6	2		7		4		1	54	1	1			
67	" 127住		3					1	1			1									
68	E 68住	E 8	28			1		7			10	2	2	1	1	1			孤手4	18	
69	D1 81住	22	43			1	1	9		1	6	4	18	3		93			10 12	どんぐり	
70	" 82住	23	45			3		23			8	2	7	2		80		1	1	2	6
71	C 84住	25	9					3			6					32					
72	" 85住	26	21	1		2	1	9			5		3	1		27	20	1		管玉	
73	" 86住	27	18			3		6			3	3	1	2		19	1	1	6	砥石	
74	" 88住	29	40			8	3	6	1		9	7	6			65	5		14		
75	" 90住	31	6						1		5					6					
76	" 91住	32	7					5			2					26					
77	" 92住	33	17			2	2	4			2		3	4		33			23	4	
78	" 93住	34	9					1			2	2	1	1		9				3	
79	" 94住	35	1			1															
80	" 95住	36	6					2	1		3									3	
81	D1 9住		8					2	2	1		2		1							
82	" 105住		26					7	1		11			5	2	23					
83	" 106住		3								2			1							
84	" 107住		31			2	1	5	1		10	3	7	1		75			5	7	
85	" 108住		6					4	1					1		16	3		5	5	
86	" 110住		28					6	2		7	3	10			38	1		7	8	
87	" 111住		6					4			2										
88	" 113住		9																		
89	" 115住		9					3			4		2			2					
90	" 116住		3			1		2													

表6 伊久間原遺跡 実測石鏃一覽

NO	住居址等	材 質	形態・箱罎	NO	住居址等	材 質	形態・箱罎	NO	住居址等	材 質	形態・箱位置
1	C 87住	黒曜石	1-1-1	41	D119住	黒曜石	1-5-8	79	BU8	黒曜石	2-1-1
2	"	"	" 2	42	"	硅岩濃赤	" 9	80	"	"	頭欠 " 2
3	"	"	" 3	43	"	黒曜石	小石匙" 10	81	BU9	"	鍬形 " 3
4	"	"	" 4	44	"	"	石匙状2-6-1	82	C 82住	硅岩赤	" 4
5	C101住	"	" 5	45	"	"	分銅状" 2	83	" 82住	黒曜石	頭欠 " 5
6	"	"	" 6	46	"	硅岩青	錐状 " 3	84	" 83	"	" 6
7	"	"	" 7	47	"	黒曜石	未製品" 4	85	" "	"	小形 " 7
8	"	"	" 8	48	"	"	極小 " 5	86	" 85住	"	" 8
9	"	硅岩青	" 9	49	D120住	"	" 10	87	" 86住	"	" 9
10	"	"赤	" 10	50	D1V5	硅岩赤	1-7-1	88	" "	"	" 10
11	C 88住	黒曜石	1-2-1	51	D1V3	黒曜石	" 2	89	" 94住	"	2-2-1
12	"	"	" 2	52	D1W3	"	" 3	90	" 97住	"	" 2
13	"	"	" 3	53	"	"	足欠 " 4	91	D1 夕25	"	" 3
14	"	"	" 4	54	"	硅岩青	" " 5	92	107住	"	新體 " 4
15	"	"	" 5	55	"W5	黒曜石	" 6	93	"	"	" " 5
16	"	"	" 6	56	"	"	" 7	94	E 63住	"	" 6
17	"	"	" 7	57	"	"	" 8	95	"	"	" 7
18	"	硅岩赤	" 8	58	"X5	"	" 9	96	F 26住	"	大形 " 8
19	C 81住	黒曜石	半欠 " 10	59	"Y5	"	" 10	97	" 38住	"	" 9
20	" 89住	"	鍬形 1-3-1	60	建2P1	"	1-8-1	98	" 45住	"	大形 " 10
21	"	"	頭欠 " 2	61	"P16	"	鍬形 " 2	99	" 49住	"	2-3-1
22	"	"	足欠 " 3	62	D1W2	"	" 3	100	" "	"	" 2
23	"	"	" " 4	63	125住	"	頭欠 " 5				
24	"	"	" 5	64	"	"	" 6				
25	"100住	硅岩赤	足欠 " 6	65	"	長石	" 7				
26	"104住	硅岩青	" 7	66	108住	黒曜石	" 8				
27	"ド 8	黒曜石	" 9	67	"	"	足欠 " 9				
28	"	硅岩赤	有舌 " 10	68	D2夕12	硅岩赤	" 10				
29	" 89住	黒曜石	半欠 1-4-1	69	114住	黒曜石	頭欠 1-9-1				
30	D 80住	"	" 7	70	"	"	" " 2				
31	"	"	" 8	71	"	"	足欠 " 3				
32	"	硅岩青	" 9	72	"	"	頭欠 " 4				
33	"	"赤	" 10	73	"	"	" 5				
34	"119住	黒曜石	1-5-1	74	"	"	" 6				
35	"	"	" 2	75	"	"	" 7				
36	"	"	" 3	76	110住	"	" 8				
37	"	"	頭欠 " 4	77	"	"	頭欠 " 9				
38	"	"	" 5	78	"	"	" 10				
39	"	"	頭欠 " 6								
40	"	"	" 7								

調整痕が明瞭に残る。口縁の外反のきつい、弥生時代後期中島式の甕形土器である。3は口縁・底部を欠く甕形土器の胴部で、5は共に甕形土器の底部、4は縦の細かく丁寧な調整痕が残る碗形土器で、口径17cmある。6は器台形土器の台部である。石器は石鏃1・打石器4で弥生時代独特の石器は見当たらない。

② 96号住居址 (図117・115)

D1地区の南側、82号住居址に切られ東側道路下にかかる竪穴で、東北側の掘り込みの一部が確認された。焼土・ピット等は確認されていない。口径20.5cmでくの字状に折れ曲がる壺形土器(115図7)の口縁部と甕形土器片3点が出土している。

③ 109号住居址 (図114)

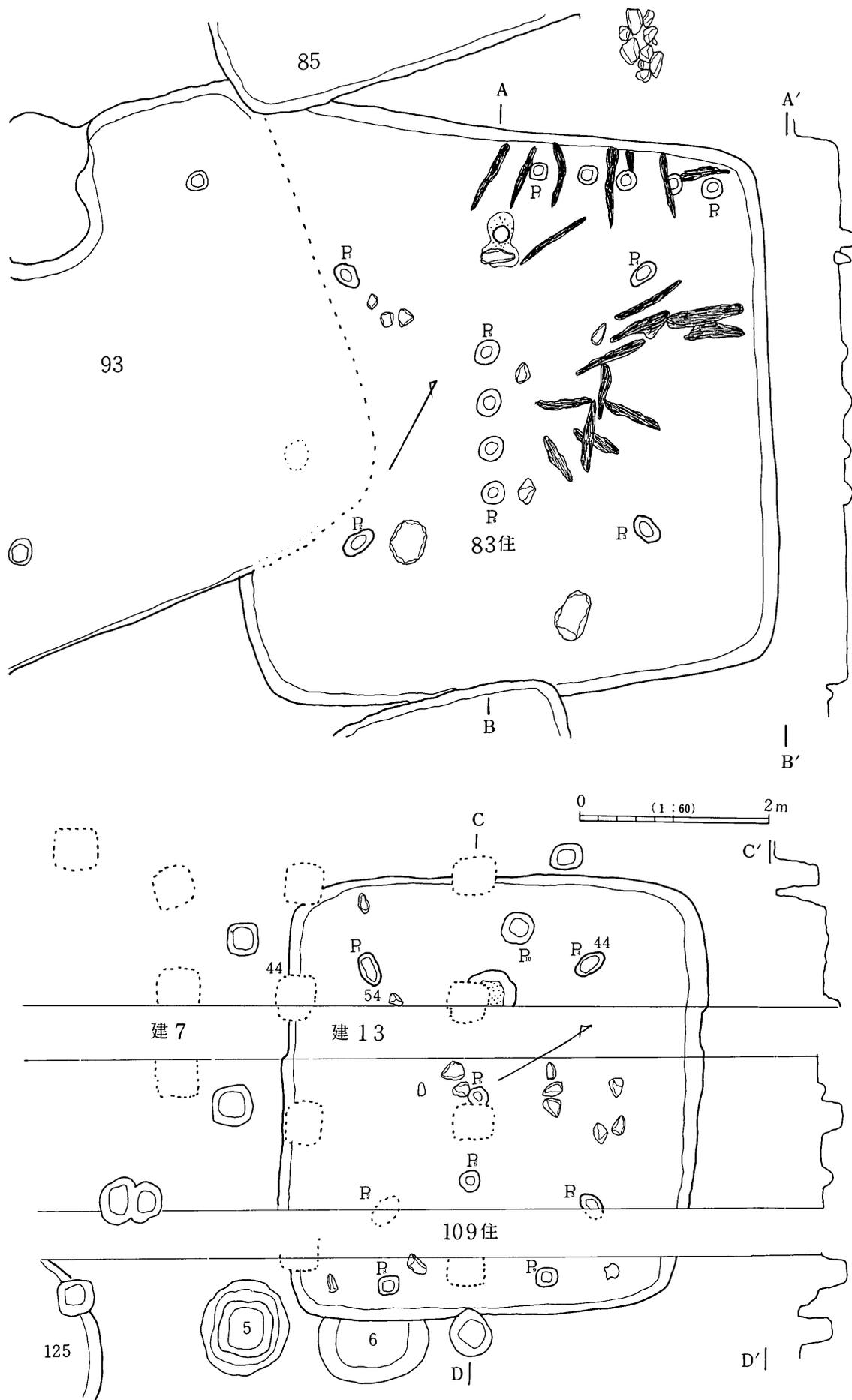
D2地区北側、建物址13・土坑6と重複して検出された竪穴で、長径4.6m・短径4.4mの隅丸長方形の竪穴住居址で、掘り方は45cmほどある整った竪穴で、中央西側壁から1.3mほどのところに焼土を持つ窪みがある。畑灌水本管の溝と、建物址13のピットで壊されているのではっきりしないが、地床炉と思われる。そこから南東に2個の間仕切りのピット(P5・6)があるので、主軸方向はN60°Wである。支柱穴は3個検出され、楕円形のP1・3・4は、それぞれ深さ54・41・44cmある。床面は平坦で硬く整った竪穴であるが、遺物の出土は少なく地床炉の近くに甕形土器片・東側隅近くに小形な有形扇状形石器が1個出土している。甕は無文ではあるが、形態からみると後期中島式の竪穴住居址である。

④ 127号住居址 (図126)

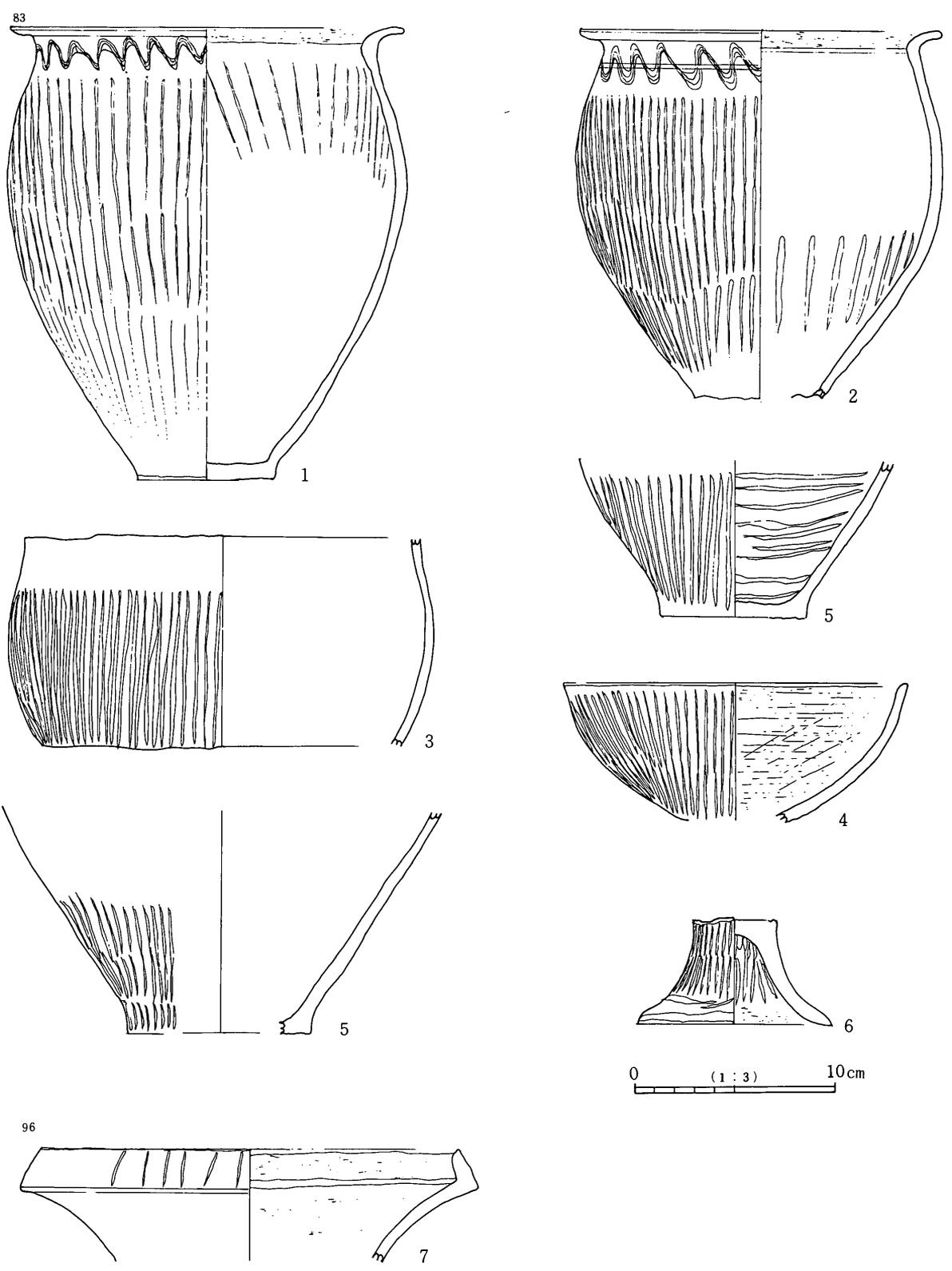
D2地区中央付近、108・125号住居址、竪穴群と重複して検出された竪穴で、108号住居址に切られているので、西側の落ち込みが検出されただけで、焼土・ピット等は確認されていない。竪穴方向は109号住居址と同方向のように思われる。遺物も甕形土器片の他には時期を決めるものは殆ど出土していないが、周囲の状況から弥生時代の竪穴式住居址と登録してある。

⑤ 囲溝址 (図117)

D1地区の西側81号住居址に北側が切られている。当初は80号住居址と登録したが、検出の結果囲溝址としてある。長径やく3.7m・短径3.6mのほぼ正形状に、幅15cm・深さ10cmほどの溝が取り巻いている。縄文時代の土器片が出土しているほかは、時期を決める遺物は発見されていないが、形態的にみて、弥生時代の囲溝址と扱っている。



第114图 83·109号住居址



第115图 83·96号住居址出土土器

表7 伊久間原遺跡 古墳時代住居址一覽

NO	住居址名	長 径 ・ 短 径	大きさ	主軸方向	竈の形態	時期	特殊遺物	出土完形土器等	備 考
1	92号住居址	6.5×5.8m	中	N64°W	焼土	Ⅲ		小形甕形2・坏形土器1	竈不詳
2	90号住居址	4.3×3.8	小	N55°W	粘土製	Ⅰ		甕形1・小形甕形2・坏形3・高坏形6・須恵蓋坏2	竈潰れ
3	88号住居址	7.4×7.0	大	N44°W	石芯粘土	Ⅱ	白玉4	甕1・小形甕形2・碗形1・坏形7・高坏形3	火災
4	86号住居址	4.7×3.6	小	N48°W	石芯粘土	Ⅱ	白玉1	甕形2・甕形2・小形甕形6・碗形1・坏形5	火災
5	85号住居址	4.7×4.6	小	N49°W	石芯粘土	Ⅱ	白玉10 管玉1	甕形2・甕形2・小形甕形2・碗形1・坏形8・高坏形12・須恵鉢1	屋内祭祀場
6	93号住居址	5.5×4.9	中	N47°W	粘土製	Ⅲ		小形甕形1・高坏形2(長脚)	
7	82号住居址	6.5×6.0	中	N49°W	石芯粘土	Ⅱ	剣形1	甕1・小形甕形1・碗形1・坏形2・高坏形1	煙道口焼土
8	81号住居址	8.1×?	大	N47°W	不詳	Ⅱ	土玉1 どんぐり	土師器・須恵器片	
9	117号住居址	7.2×?	大	N48°W	石芯粘土	Ⅱ	石製円板	埴形1・小形甕形4・碗形2・坏形6・高坏形1	建物址4と重複
10	9号住居址	?×?		N45°W	石芯粘土	Ⅱ		甕形1・小形甕形2	昭28確認
11	105号住居址	6.2×6.0	中	N80°W	不詳 (溝2(礎))	Ⅲ		碗形1・坏形1	9重に重複
12	106号住居址	5.0×?	小	N50°W	不詳	Ⅱ		土師器・須恵器片	
13	107号住居址	7.2×6.5	大	N47°W	石芯粘土	Ⅲ		甕形1・甕形1・小形甕形2・坏形1・高坏形1	
14	108号住居址	4.8×?	小	N63°W	石芯粘土	Ⅱ	白玉1 菰手石8	甕形1・小形甕形1・鉢形1・碗形2・高坏形6	
15	129号住居址	3.5×?	小	N48°W	不詳	Ⅱ		甕形2・小形甕形1・坏形2	
16	110号住居址	7.3×6.1	大	N28°W	焼土	Ⅲ		甕形2・小形甕形2・坏形3・高坏形1	竈不詳
17	130号住居址	4.3×4.3	小	N40°W	粘土製?	Ⅱ	土製紡錘車1 菰手石46	甕形1・坏形1	火災
18	121号住居址	5.9×5.3	中	N58°W	石芯粘土	Ⅱ	土錘1・分銅 茅炭化物	甕形3・甕形1・小形甕形2・坏形2・ミニ1	火災
19	124号住居址	4.8×?	小	N48°W	不詳	Ⅱ		坏形1・高坏形1	
20	30号住居址	4.~	小	?	不詳			土師器・須恵器片	平7調査
21	33号住居址	4.3×4.2	小	N43°E	石芯粘土	Ⅱ		甕形・小形甕形・鉢形・碗形・坏形・高坏形・須恵器はそう	平7調査 竈北側
22	122号住居址	4.5×?	小	N32°W	粘土製	Ⅱ		甕形3・甕形3・碗形1・小形甕形2・坏形9・高坏形1・小鉢1・須恵器蓋坏2	土器溜まり
23	126号住居址	?×?		?	不詳	Ⅲ		122号住居址に包括 鬼高式新期(Ⅲ)坏	
24	123号住居址	4.5×4.3	小	N58°W	石芯粘土 (丸大蓋石)	Ⅱ		甕形1・小形甕形1	火災
25	68号住居址	6.8×6.	中	N64°W	粘土製	Ⅱ	菰手石4	甕形3・甕形1・小形甕形4・鉢形2・碗形3・坏形10・須恵器はそう1・須恵器蓋坏1	貼り床 火災 工房址状
26	1号住居址	5.0×4.8	中	N44°W	石芯粘土	Ⅱ		甕形1・甕形3・小形甕形4・碗形・坏形土器土器	昭27調査
27	13号住居址	8.1×7.1	大	N42°W	石芯粘土	Ⅱ	茅炭化物	甕形・甕形・小形甕形・碗形・坏形土器等 48個	昭29調査 火災
28	44号住居址	5.0		N58°W	焼土	平安		灰釉陶器碗形2・坏形4	
29									

表8 伊久間原遺跡 建物址一覽

NO	遺構名	位置	時期	構造(本)	位置 柱間隔	図NO	確認柱穴数	主要柱穴土層	主軸方向	方向等	重複状態
1	建物址1	D1T~Y	古墳時代	5×3~ 5.5m	西側用地外 不詳 1.2~1.5m	図27	方形7個		N43W	建物址2・20と 同方向	119住
2	" 2	" W~Y	"	5×4~ 4.3m	西側用地外 1.0~1.2m	図27	方形9個	P13・14・16 P14 建4と重複	N43W	建物址1・20と 同方向	119住 建4
3	" 3	D2C~E	"	4×? 4.0m	西側用地外 不詳 1.2~1.3m	図26・27	4個直列	P3・5・6	N54W	建物址4と類似	
4	" 4	D1V~Y	"	5×4 5.6m	方形全部確認 1.3~1.6m	図27	方形14個	P14・29・32・34	N64W	建物址3・6と ほぼ同方向	117・119住 建2
5	" 5	" X~A	"	4×? 4.3m	一部方形他は不詳 1.1~1.9m	図27	方形5個 (不整)	P23・25	N82W	他と異方向	9・117住 建6
6	" 6	D2A~B	"	4×? 3.5m	東側用地外 不詳 1.1~1.3m	図27	4個直列 (不整)		N59W	建物址4に類似	9住
7	" 7	" M~O	"	4×4 3.6m	方形確認 11個 1.1~1.5m	図27	方形12個	P3・4・11 14・15	N42W	建物址3・11・ 13等と同方向	竪穴11・13
8	" 8	D3A~D	"	5×? 5.9m	西側用地外 不詳 1.2~1.9m	図5	5個直列または 9個並列			南北方向	
9	" 9	" B・C	"	3×? 5.8m	東側用地外不詳 1.4~1.8m	図5	3個方形 (不整)		N52W	南北方向	
10	" 10	D3 西	"	4×? 4.0m	西側用地外 不詳 1.4~1.6m	図20	4個直列		N48W	建物址3・7・ 13等と同方向	建14
11	" 11	D2 西	"	4×3? 3.5×3.6	方形全部確認12個 1.2~1.6m	図28	方形12個		N42W		107住隣接
12	" 12	D2 中央	"	3×3? 2.5m	方形配列・直列 1.3~1.4m	図28	方形7		N 5 E	南北方向	127・125住 建7・11
13	" 13	D2 PQ	"	4×2 4.0m	8個並列・方形 1.3~1.5m	図28	方形8個		N42W	南北方向	109住
14	" 14	D3 西	"	4×? 3.9m	西側用地外 不詳 1.2~1.6m	図20			N54W	南北方向	123・130住 建10
15	" 15	D2 西	"	4×? 5.0m	西側用地外 不詳 1.3~2.0m				N 5 E		
16	" 16	D1M4	"	3× 3.0m	1.3~1.5	図7	3個直列		N53W		
17	" 17	D1J7	"	4× 3.6m		図7	4個直列		N 9 W		
18	" 18	D1I6	"								
19	" 19	D1I8	"	3× 2.8m	0.9~1.0	図7	方形6個		N81W		
20	" 20	D1Y2	"	2×2 2.3m	1.1~1.2	図27			N46W		
21	" 21	D2B1	"	3× 4.0m	1.3~1.6	図27			W 5 S		
22	" 22	FD2・3	平安時代	5×		図32					

建 1 N43W

" 2 N43W

" 3 N54W

" 20 N46W

建 8 N48W

" 9 N52W

" 10 N48W

建 7 N42W

" 11 N42W

" 13 N48W

建 4 N64W 建12 N 5 E

" 6 N59W " 15 N 5 E

表9 伊久間原遺跡 古墳時代土器数一覧

NO	住居址 等	甕	甑	小形甕	鉢	碗	坏	高坏	埴	ミ	ニ	はそう	蓋坏	須恵鉢	須恵甕	石	模	菰手石	
1	68号住居址	5		3	1	3	10					1							
2	81 "																		
3	82 "			2	1		2	2										剣1	
4	84 "																		
5	85 "			2			7	12						1				白11・管1	
6	86 "	2	2	4	2	3	3											" 1	
7	88 "		1	3		1	7	4										" 5	
8	90 "	1		2			3	6					2						
9	91 "																		
10	92 "			2		1	1												
11	93 "							2											
12	94 "																		
13	95 "		1				1												
14	105 "	2		1			1	2											
15	106 "																		
16	107 "	2		1				1		1									5
17	108 "	3	1		1	1	1	5										白 3	5
18	110 "	3		1		1	3	2											
19	111 "																		
20	113 "																		
21	115 "									1					1				
22	116 "																		
23	117 "	2		3			9	1	1										
24	121 "	3	1				1			1									7
25	122 "	4	3	1			4	1		1									1
26	123 "	1					2												7
27	124 "																		
28	126 "					1	3	1					2						
29	128 "																		
30	129 "	3		1			1												
31	130 "	2					1												44
32	9 "		1	1			1			1									
	E 卜							1											
	合計	33	10	27	5	11	61	40	1	2			4	1			1		196
33	44 "(鞍)					2	6												
34	71 "						1												
	E 卜31						1												

⑥ 弥生時代の住居址の位置・広がり

弥生時代後期の遺構は、C地区東側とD1・2地区に限られている。遺物出土もF地区では3点程度・C地区で2点、D地区でも数点に過ぎない。昭和52年の立入り調査の結果では、D地区の東側一帯から南側にかけて集落の存在を予想している。調査地の西側には弥生時代後期の住居址が記録されていないから、今回の道路敷きから東側に弥生時代の集落があって、83・109号住居址は西限になるのかと思われる。

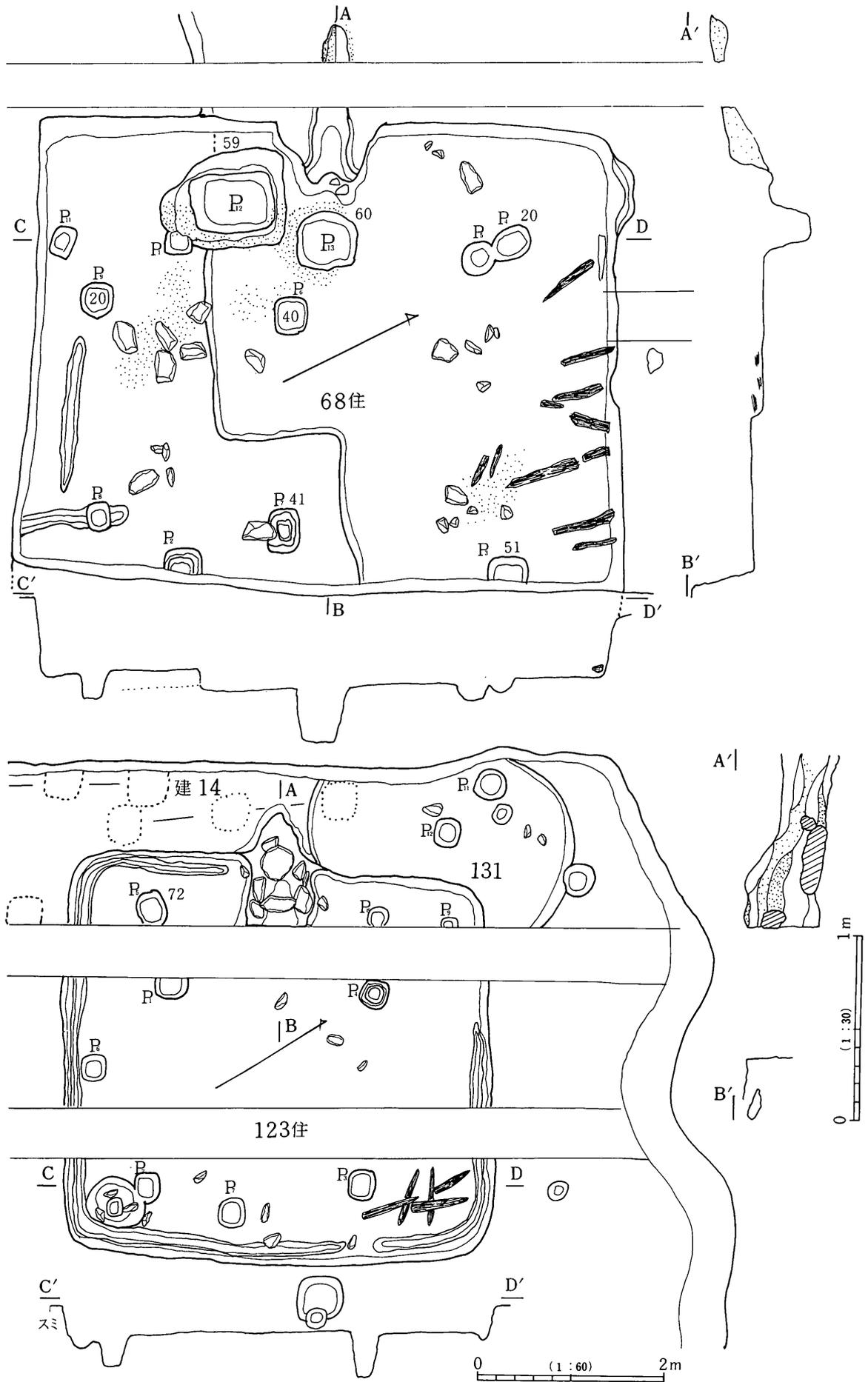
(6) 古墳時代の住居址

古墳時代の住居址は、E地区の南側の68号住居址からC地区西側の92号住居址まで、用地外に大部分隠れるものも含めて、殆ど途切れることなく32軒の竪穴式住居址と、21棟の建物址が検出されている。重複するもの・近接するもの・主軸方向・出土遺物の時期差等によって2～3時期くらいにわたる住居址・建物址群かと思われる。出土する完形土器も多く、完形土器の概数は、表9でみられるように甕形土器33・甑形土器10・小形甕形土器27・鉢形土器5・碗形土器11・坏形土器61・高坏形土器40・埴形土器1・須恵器6の総数196点以上になる。

① 68号住居址 (図116・128・129、写図30・53・87・95)

E地区南側農道入道洞線に潜り込むように、検出された隅丸方形の竪穴式住居址で、南北6.2m・東西5.5m以上で、掘り方は検出面で65cm・地表からは85cmの深い竪穴である。8cmほどの高低差で貼り床を持つ二重構造の住居址で、116図の南側は上面・北側は下面である。竈は西側壁に作り出した粘土製のもので、焚き口部は幅80cm・長さ90cmほどあって、西側屋外へ90cmほどのびる煙道が検出されている。水道管敷設の溝で壊されているのではっきりしないが、幅30cmほどの粘土製のものである。主軸方向はN64°Wである。主柱穴と思われるものはP1・2・3・4の4個で、深さは31・40・51・31cmである。南側にはP6・7・8・9の方形構成がある。この周辺には人頭大以上の平状石の集石があって、とくに焼土の堆積が著しい。溝状遺構もあるので、工房址的な所のように思われる。貼り床による二重構造ではあるが、ピットの重複はP5だけである。竈前のP13は65cmと深い穴で、西側のP12はさらに深く焼土が落ち込み、坏・小形甕形土器が中層から出土している。貯蔵穴かと思われる。厳密に言えば東側は用地外に一部残り、西側も道路下で完全に検出されていない。今回の調査範囲でも、昭和52年の立入り調査結果からも、この住居址が集落の北限に当たると考えられる。

128・129図の土器は完形・半完形のもので、1は口径16.5cm・底を欠くが残存部器高24.5cm・胴部最大幅23cmの甕形土器で、整形痕・ハケ目が残されている。胴部最大幅が中央のもの、やや胴長のものがある。7は須恵器^{はそう}甗で、口径12.5cm・器高14cm・口縁部高さ8cmあり、古い形式と思われる。129図1は口径24.5cm・器高28.5cm・底穴径11cmの大形甑形土器で、P13の周辺に破片が散らばっていた。2～4は口径9～10.5cmほどの小形甕形土器、5は口径19cm・器高11cmの鉢形土器で、半内黒である。6・7は碗形土器で7は半内黒である。8～17は碗形に近い坏形土器



第116図 68・123号住居址

で、暗文も多く、13・14・16・17・18は内黒のものである。19は口径12.5 c m・高さ5 c mの須恵器蓋坏の蓋部である。総体的には和泉式土器並行のものもあるが、鬼高式の古い時期のものが多い。この他に菰手石4・礫器1が出土し、縄文時代中期中葉の土器片が20点以上、石器も28点出土している。縄文時代中期中葉の土器片がとくに多いことは、この近くに中期中葉の住居址が存在する可能性が高いと思われる。

② 8 1号住居址 (図117)

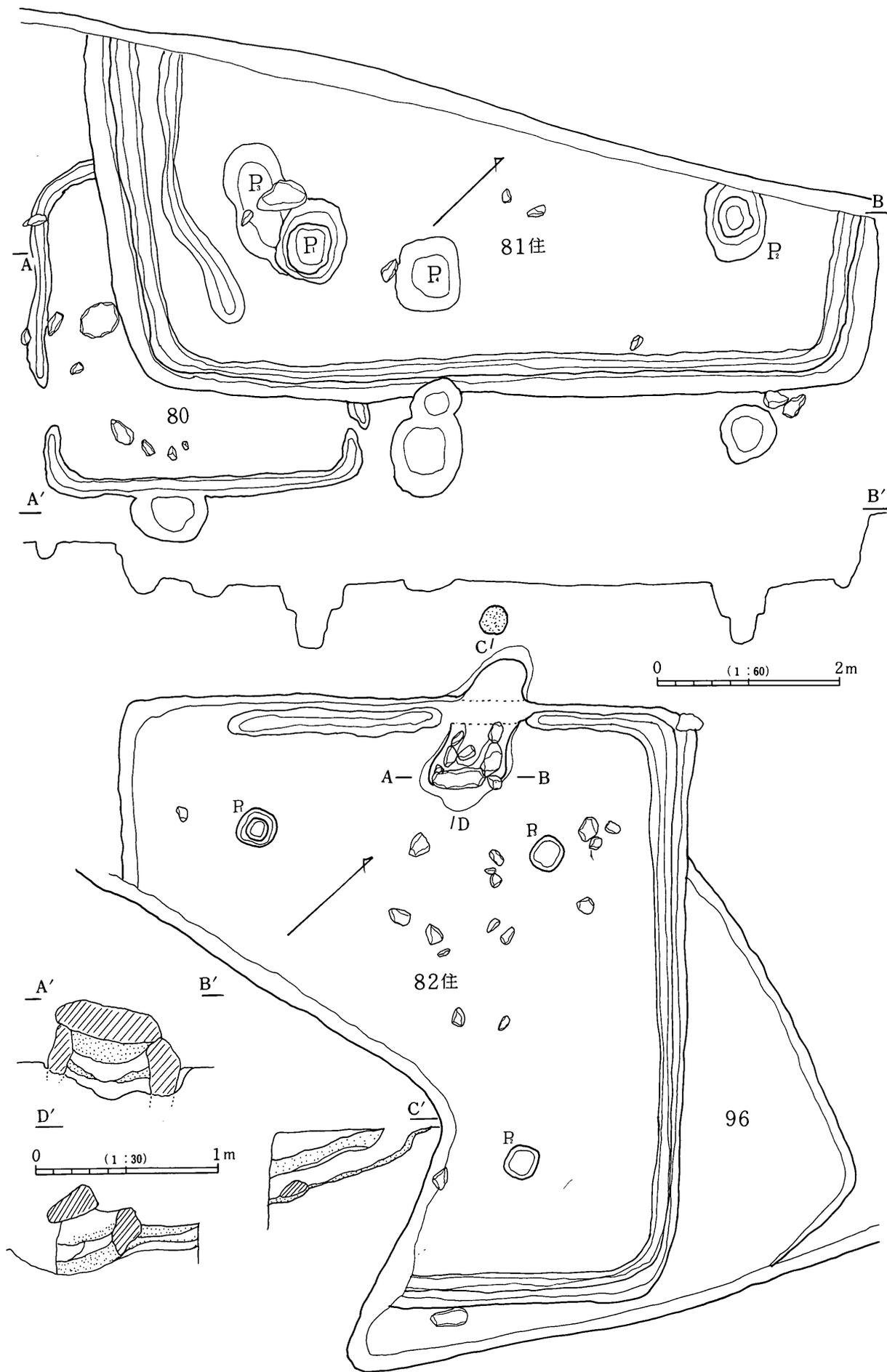
D 1 地区西側用地外に4分の3ほど隠れた竪穴式住居址で、囲溝址(80)・竪穴等と重複している。南北方向8.1 m・東西方向不詳の大形な竪穴で、今回の調査地の中では最大の規模である。竈等は検出されないが、竪穴方向から主軸方向はN47° Wと推定される。掘り方は検出面で80 c mほどの深い竪穴である。柱穴と思われる穴はP 1・2で、共に二重構造で上径90 c m・下径40~55 c m・深さ45・53 c mの大形な穴である。P 1の両側に深さ30 c mほどの窪みがある。周溝は幅20 c m・深さ20 c mほどのものが取り巻き、南西側には中側に蛇行する周溝がある。大きな住居址でありながら、完形土器の出土が少なく、近接の住居址もない。場合によると、集会所的なものかもしれない。

遺物は土師器・須恵器片は多いが器形を知るものはない。どنگりの炭化物と土玉が出ている。縄文時代前期・中期中葉の土器片が多く発見され、黒曜石の剥片が多く90点ほどある。縄文時代の遺構は発見されていないが、この竪穴の東側一帯には縄文時代前期の土器片を伴出する竪穴群があるので、この辺りに遺構があったのかもしれない。

③ 8 2号住居址 (図117・130、写図31・47)

D 1 地区の南側農道2号線に接し、南側は用地外にかかる竪穴式住居址で、南北方向6.0 m・東西方向6.5 mの隅丸長方形の竪穴で、掘り方は検出面で45 c m・表土からは80 c mほどある。竈は西側壁沿いにあり、中央より1 mほど北に片寄った位置に、構築されている石芯粘土製竈である。竪穴方向を基準にすると、主軸方向はN49° Wである。竈は焚き口と煙道境を畑灌水本管敷設の溝で切られているのははっきりしないところもあるが、左右3個以上の石が立てられ、正面には天井石が置かれている。117図の断面図によると、幅10~15 c m長さ30 c m以上の石を縦に埋め、長さ55 c m・厚さ18 c mの平状の石が置かれている。焚き口から屋外にかけての断面図で見られるように、支脚の石の奥から屋外まで煙道が検出され、屋外に焼土を持つピットがあり、そこまで通じている。柱穴は3個検出され、P 1~3で深さはそれぞれ44・50・53 c mある。4個目のピットは南側にあると思われ、主柱穴は4個であろう。周溝は竈西側から北・東側を取り巻いている。床面は平坦で、硬い床であった。貯蔵穴は検出されていない。

遺物は少なめで、130図1は口径12.5 c m・器高9.5 c m・底穴径2 c mの小形の甑形土器である。2は長胴形の小型甕形土器、3・5は高坏形土器で3の坏部は分からないが、脚台は有段のタイプと思われる。4は鉢形土器で崩れた暗文がみられる。6・7は碗状の坏形土器で、7は整った暗文がある。石製模造品剣形まがいの石が1個、石鏃3・石器が45点出土している。縄文時代中期中葉の土器片が出土しているが、96号住居址(弥生)を切り、その北側には98号住居址・竪穴群があるので紛れ込ん



第117图 81・82号住居址

だものも多いと思われる。

④ 84号住居址 (図5)

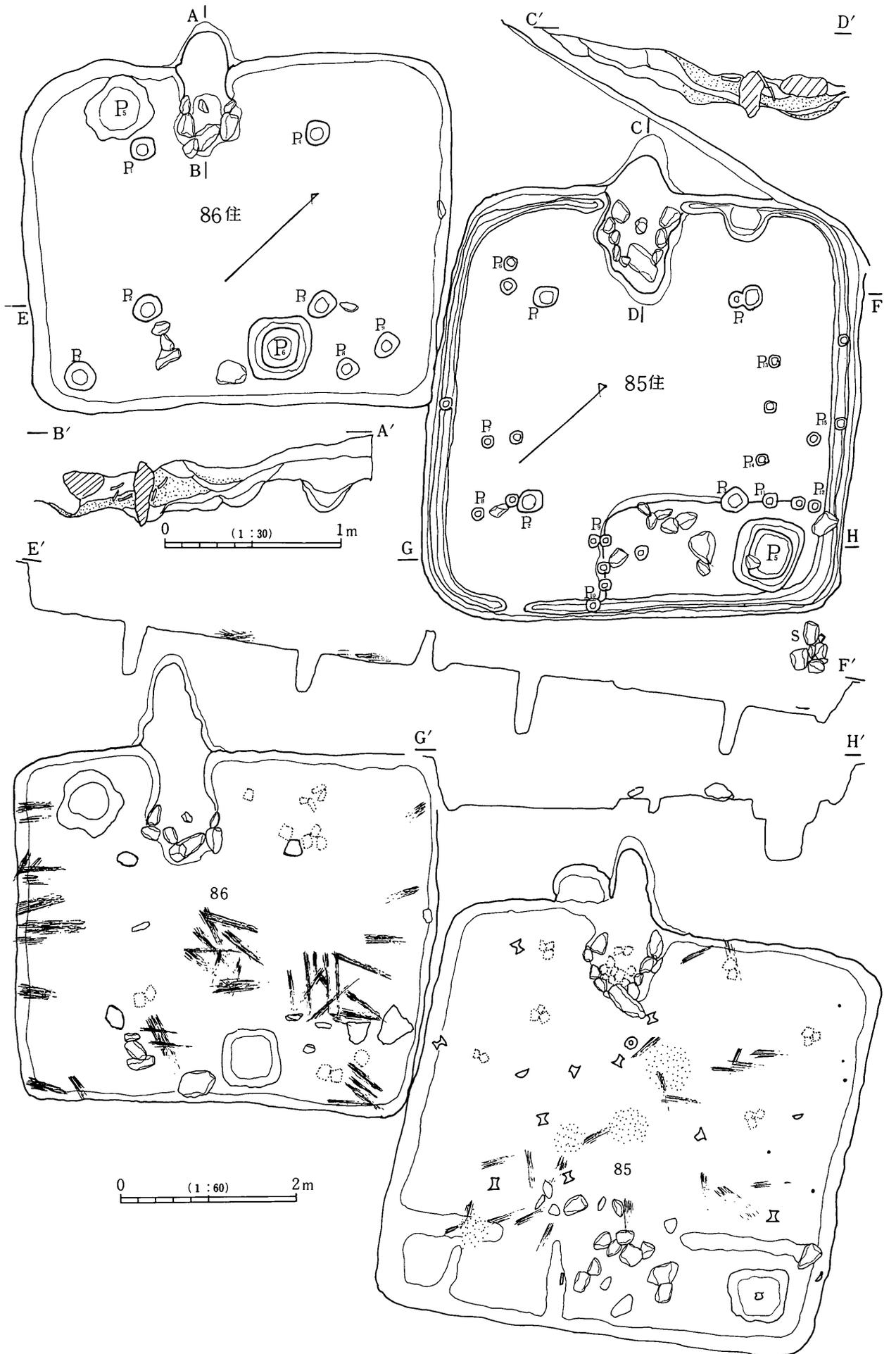
C地区南側、83号住居址を切っていて、大部分が南側用地外にかかる竪穴式住居址で、北側のコーナーが確認され、深さ40cmほどの掘り込みが確認されている。土師器・須恵器片が出土しているが、器形の分かる遺物は確認されていない。石器が9点出土している。この辺りから、農道三叉路にかけては、古墳時代の住居址が重複するところである。

⑤ 85号住居址 (図118・131、写図32・50・88)

C地区中央付近北側で北側用地外に接し、83・86・93号住居址に近接した位置にある隅丸方形の竪穴式住居址で、とくに86号住居址とは殆ど接触し、方向をほぼ同じくしながら並んでいる。両方向とも4.7mのやや不整形の正方形の竪穴式住居址で、竈は北西側のほぼ壁中央に構築された石芯粘土製竈である。竪穴の主軸方向はN49°Wである。竈は焚き口部は幅90cm・長さ1m、3～4個の石を両側に立てたもので、長さ25cmの支脚石を立て、煙道も40cmほど確認されている。柱穴と思われるものは小ピットを含めると28個検出されている。主柱穴はP1～4でそれぞれ径25cm、深さも50～65cmほどある。小ピットは径15cm・深さ15cmほどのもので、西側・東側の壁沿いに直線的に並ぶところがある。とくに東側壁沿いには壁に沿って幅1m・長さ2.4mほどのテラスがある。上層から床面近くまで集石が重なり、このテラスを小ピットが取り巻いている。南東隅に長径80cm・短径70cm・深さ75cmほどの二重構造の貯蔵穴があり、穴底近くから坏形土器完形品が出土している。このテラスからは高坏形土器等、特別の土器は発見されていないが、テラス西側の窪みから管玉(133図)が出土し、東側壁上から竪穴に落ち込むように、瓦器状の坏形土器が出土している。東隅上の屋外竪穴に近いところに10cmほどの窪みがあり、5個の集石があった。その周りには焼土や炭があり、土師器・須恵器片が10数点出土している。この竪穴にかかわるかどうか不詳であるが、高坏形土器の集中出土と合わせて、祭祀的なもので、注意したい遺構の一つである。壁沿いに全域を取り巻く周溝がある。床面は各所に焼土の広がるところがあり、炭化材も各所にあった。火災によるものか、或は別の目的によるものかは分からない。

遺物の出方にも特徴がある。高坏形土器は半完形を含めて12個体出土している。出土の場所は118図の下にあるように、テラスを除いてほぼ全域から出土している。坏形土器も同様である。131図21の須恵器鉢は、竈斜め南側の浅い穴の中から出土している。甕形土器が少なく、131図1の甑形土器の口縁部は竈の中から出土している。石製模造品白玉が北東側の壁際で5個(・印)確認され、篩いで発見した8個を合わせると13個出土している。高坏形土器の大量出土・管玉と白玉出土・テラス状遺構の存在等から、屋内祭祀も考えられる。

出土遺物は甑形土器1・小形甕形土器2・坏形土器7・高坏形土器12・須恵器鉢1・管玉1・白玉13の他石器が21点出土している。131図1は竈内から出土した、口径26.5cmの角把手のない甑形土器、2・3～13は高坏形土器で12個体ある。2は口径18cm・器高12cm・台部径14.5cm(坏部高さ5.5cm)で坏部に小さな段差がある。3は口径16.5cm・器高11cm・台部径12.5cm(坏部高さ5



第118图 85·86号住居址

c m) で坏部・台部に緩やかな段差がある。4・6は有段の坏部で口径18.5・17 c mある。5は有段の台部、7～13は高坏形土器台部で、9・10は裾開き有段の台部で、高さ8 c mある。17・20は口径10.5・12 c mの小形甕形土器、15・16・18・19・22・23は碗状坏形土器で、口径12～14.5 c mで整った暗文のつくものがある。23は貯蔵穴出土の坏形土器である。

高坏形土器の形態はいろいろあるが、坏部・台部の有段のタイプ、口縁・台縁の反り具合から、和泉式土器か鬼高式古期の様相があると思われる。133図1～13が白玉で、大きさは径6.5mm～4.5mm、厚さは3 mmほどある。19は管玉で長さ4 c m・径9mmの硬玉製のものである。

⑥ 86号住居址 (図118・132・133、写図33・47・88・91)

C地区中央西側85号住居址に接触し、87号住居址・土坑2・3・4と重複した竪穴式住居址で、長径4.7・短径3.9mの隅丸長方形の竪穴で、竈は北東側壁に接して、中央やや西に片寄って構築された石芯粘土製竈で、2～3個の石を立てて並べ、幅70 c m・長さ80 c mほどの焚き口で、1 mほどの煙道が屋外へ伸びている。したがって、この住居址は長軸を正面にしている、主軸方向はN48° Wである。竈構造で特徴があるのは支脚石が35 c mと長いことである。柱穴と思われるピットは7個検出され、主柱穴はP1～4で径30～35 c m、深さは43・55・47・45 c mある。東南壁側の3個は補助柱穴と思われる。竈の西南の窪みは30 c mほどで、この周辺が土坑等の重複により攪乱されたように思われる。貯蔵穴と思われるものはP6で、外径70 c m・内径40 c mの二重構造で、深さは69 c mある。隣の85号住居址の貯蔵穴とよく似ている。床面全体に炭が多く堆積し、図にあるように炭化材が残されている。周溝は見当たらず、東南隅に近い一帯には広い窪みがあり、甑形土器2個のほか、小形甕形土器・坏形土器が置かれている。完形土器の多くは、竈の東北側にも置かれていた。竈前から石製模造品の白玉1個が出土している。覆土の篩いをしてないので分からないが、85号住居址のように複数あったかも知れない。

遺物の出土は多く、完形品では甕形土器2・大形甑形土器2・小形甕形土器6・碗形土器1・坏形土器5で、白玉1・石鏃3・石器18点出土している。132図1は口径14.5 c m・器高13 c mの甕形土器、2は口径14.5 c mの甕形土器口縁部で、竈内から出土している。3・4は大形な甑形土器で、3は口径20.5 c m・器高23.5 c m・底穴径8 c m、4は口径28.5 c m・器高29 c m・底穴径6 c mあり、上向きの角形把手がついている。13は口径21.5 c mの甑形土器口縁部で、竈の中から出土している。5～10は口径9 c m～10.5 c m、器高7～10 c mの小形甕形土器で、半内黒はあるが内黒のものはなく、6は、はけ目・10はへら削り・7～9はへら調整痕がみられる。11・12、133図1～6は坏形土器で、11は口径18 c m・器高7 c m水ひき調整、12は口径19 c m・器高6 c mで、赤褐色胎土密で調整痕が目立つ。133図1～6まで含めて暗文系が多く、半内黒のものがある。4・5は上げ底である。甕形土器が少なく、高坏形土器が出土していないのではっきりしないが、和泉式土器か鬼高式古期のものが多いと思われる。

⑦ 88号住居址 (図119・133、写図34・51・89・93)

C地区の西側89・101号住居址と重複する、隅丸方形の竪穴式住居址で、南側3分の1は南側用地外

に隠れている。長径7.4m・短径7.0m大形の竪穴で、北西側壁際に幅1m・長さ1mほどの焚き口部と、2mほどの煙道を持つ石芯粘土製竈が構築されている。したがって、主軸方向はN44°Wである。竈は両側に3個ずつの石を立ち並べ、粘土で固めている。天井石は竈前に落ち込んでいた。焚き口部中央に、高坏形土器2個を逆位に重ねて支脚に用いられている。そこから屋外へ向けてやく1.5mほど続く煙道が検出されている。焚き口部からの長さは2m以上ある大きな竈で、昭和30年に検出された13号住居址に次ぐ雄大なかまどである。柱穴は3個検出されている。南側の用地外にもう1個あると思われるので、主柱穴は4個である。P1～3は口径30cmほど、深さは50・56・64cmほどある。竪穴の大きさに比べて主柱穴4本では建物を支え切れないので、屋外に支柱があったようにも思われる。周囲全体ではないが、北側から東側にかけてP6～P9が並んでいる。

この住居址も火災の形跡があり、屋内全体に炭や焼土が多く、とくに北東側の壁沿いに幅15～20cm・長さ1.5m以上に及ぶ炭化材が並列状に検出されている。炭化材の他に炭化物は発見されていない。古環境研究所による材質調査・年代測定が行われた炭化材である。床面の凹凸は多く所どころに浅い窪みがあり、その窪みの1か所から、石製模造品白玉が4個発見されている。篩いの作業は行われていない。周溝は周囲を全域取り囲んでいる。竈の左右に窪みがあるが、北東側の窪みは深さ30cmあって、小形甕形土器・坏形土器が発見されている。北西隅には、89号住居址の上に貼り床があったが、検出当初は見落としていた。

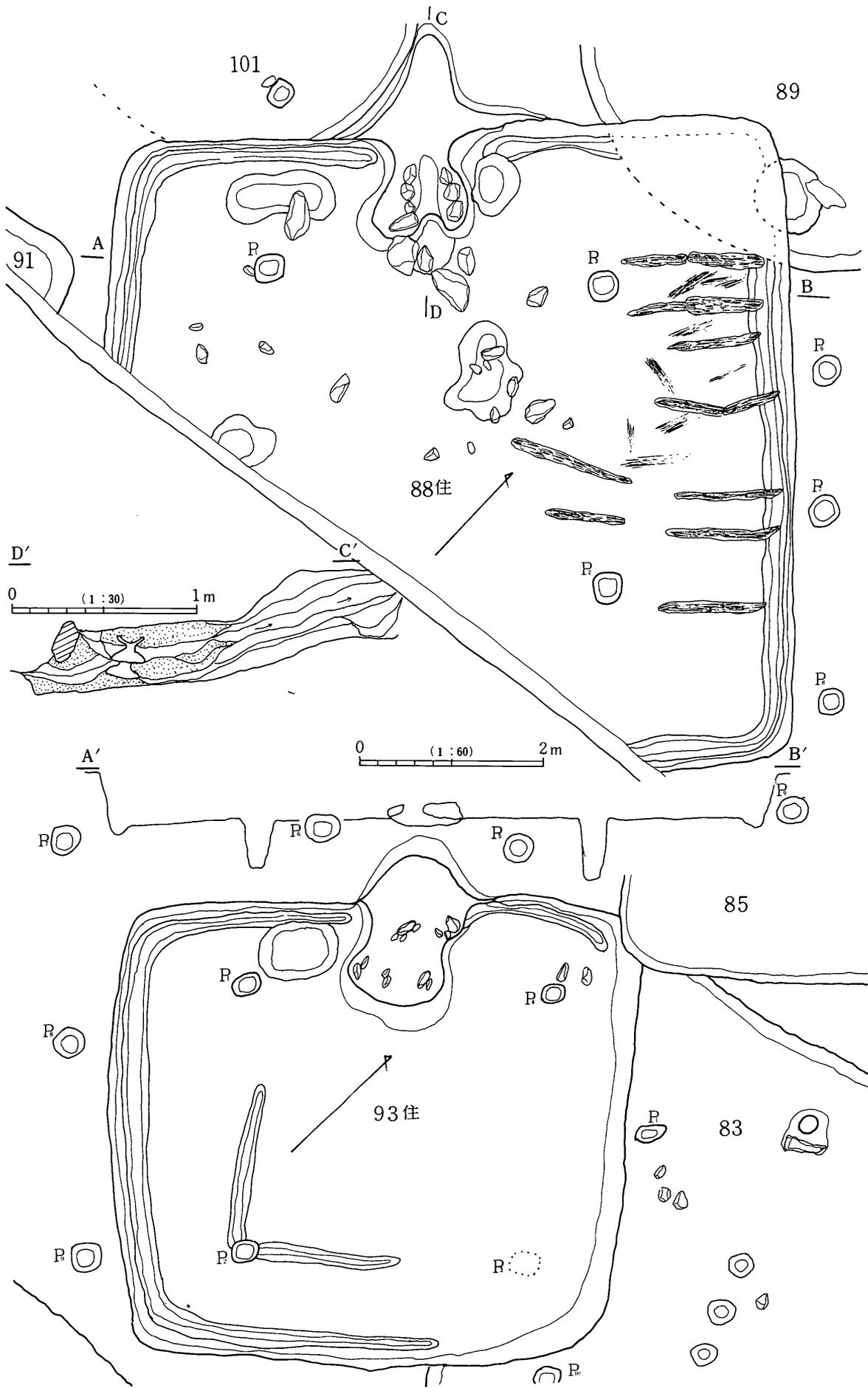
遺物は竪穴の大きさに比べると、竈内の高坏形土器2個の他は半完形のものが多く、火災の折に持ち出されたのかもしれない。出土の完形・半完形の土器は甕形土器1・小形甕形土器2・碗形土器1・坏形土器7・高坏形土器3で、白玉5・石匙3・石鏃8・石器40点が出土している。

133図7は、竈内から出土した甕形土器の口縁部で、口径23.5cmで胴部球体状、水引きはけ目のきれいな土器である。8は小形の甕形土器、9は口径22cm・器高15cmの小形甕形土器で、円形状である。10・20～22は高坏形土器で、10・20・21は竈内から出土し、10・20は支脚に使われていた。段のないタイプで85号住居址のものに似てはいるが、坏部の無段・台部裾の広がりには違いがある。11は口径12cm・器高7cmの小形甕形土器、12～19は坏形土器で口径12～14.5cm・器高4.5～5.5cmのもので、暗文系のものが多く半内黒・揚げ底のものがある。133図15～18は白玉である。

⑧ 90号住居址 (図120・134、写図35・89・90)

C地区西側、近世遺構と思われる溝状遺構に切られた、隅丸方形の竪穴住居址である。西側は溝址だけでなく耕作の攪拌もあり、北側は用地外に隠れているのはっきりしない竪穴であるが、長径4.25m・短径やく3.8mで、西側ほぼ中央に溝址で荒らされた竈がある。主軸方向はN55°Wである。東側の掘り方は深く55cm～60cmあるが、西側への地形傾斜があるので西側では30cm以下である。竈は焼土が確認されただけで、構造・形態は不詳である。柱穴は一応4個検出されている。P2・3は径30cm・深さは55・45cmある。P1・4は穴底だけ確認されているが、主柱穴4個と思われる。北側と東側に補助柱穴が検出されている。東北側では周溝が確認されているが、西側では確認されていない。西側は荒れてはいるが、東側の状況は良好で、小振りではあるが整った竪穴である。小形の住居址であるが、出土土器の多い典型的な例である。

遺物は住居址の大きさに比べて出土量が多く、完形・半完形の土器は甕形土器1・小形甕形土器



第119图 88·93号住居址

2・坏形土器 3・高坏形土器 6・須恵器蓋坏 2で、石器が6点出土している。134図1は口縁部を僅かに欠くが、口径やく17cm・器高やく15cmの球形胴の甕形土器で、2・3は小形甕形土器で、2は口径11.5cm・器高7cmの揚げ底である。4～8・11は高坏形土器で、4は口径20.5cm・器高は台部縁を欠くので不詳であるが、15cm以上ある。坏部も有段、台部も有段で、その接合部から外れている。5は口径24cm・器高15.5cm（坏部器高7cm）の大形な高坏形土器で、坏部・台部に大きな段を持つ。今回の調査区の中では、有段・裾開きの唯一の古期の高坏形土器である。6は高坏形土器の坏部で穿孔されている。7は小形で、器台のようにも思われる。9・10・12は坏形土器で口径14.5～15.5cm・器高5cmの坏形土器で暗文・半内黒がある。13・14は須恵器蓋坏で、口径10～11cm・器高4～4.5cmで、鏝の張り出しが大きなタイプである。調査区内の土器群の中では最も古期のタイプで、和泉式土器の土器群かと思われる。

⑨ 9 1号住居址 (図5)

C地区西南側88号住居址の南にあって、大部分が東側の用地外にかかる住居址である。掘り込みの他は遺構は確認されていない。縄文時代前期・古墳時代の土器片が出土している、掘り込みが方形にみられるので、古墳時代の住居址と登録されている。

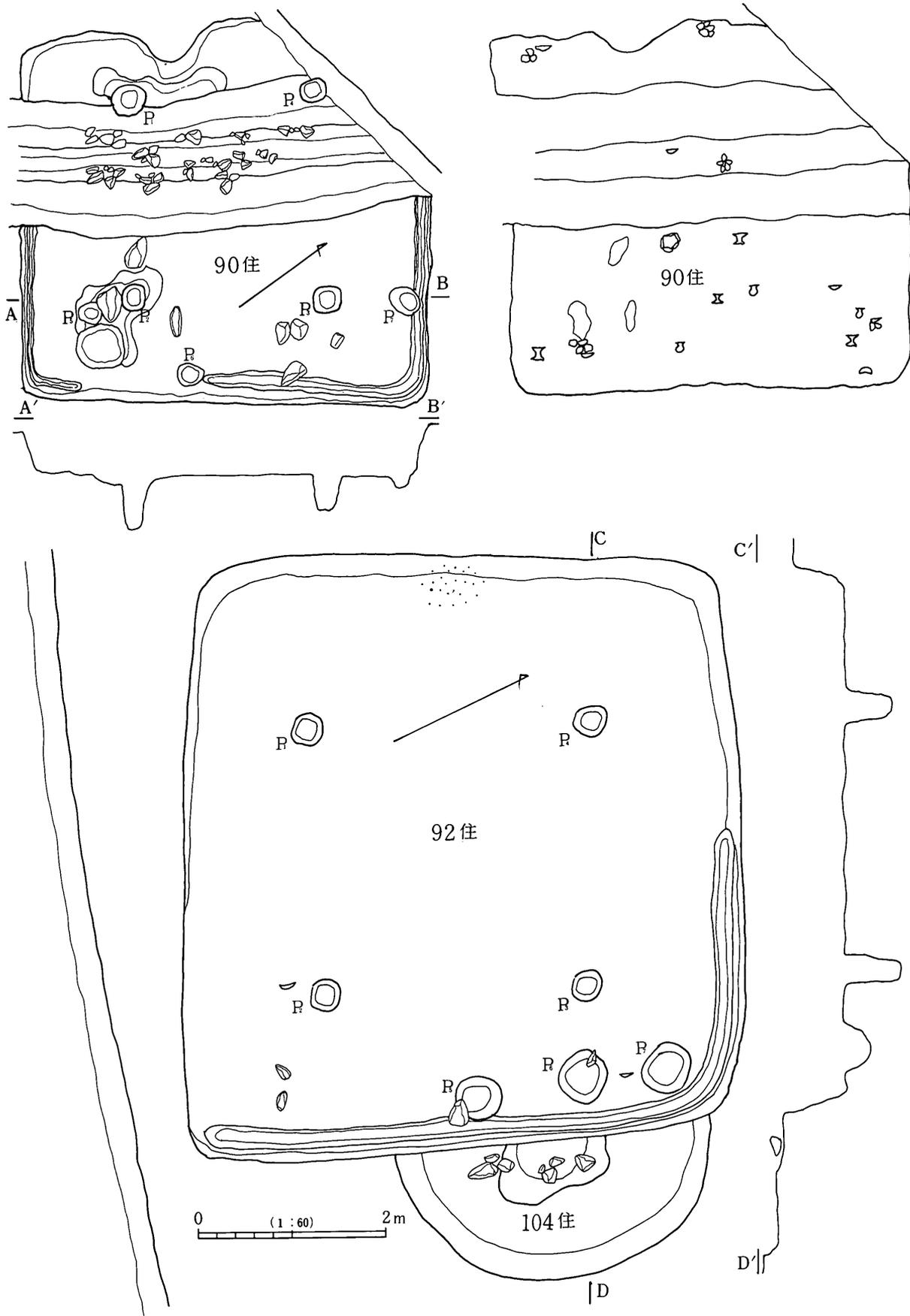
⑩ 9 2号住居址 (図120・134、写図36)

C地区西側、90号住居址の南側で104号住居址を切り、近世以降の溝状遺構に切られた、隅丸方形の竪穴式住居址である。この辺りは、農道3号線にかけて傾斜する地形で、南側は耕作の攪乱も進んでいるので、プランの確認は困難であった。南北方向5.8m・東西方向6mと6.4mの不整形な竪穴である。西側壁沿いに焼土の広がりがあったが竈は確認されていない。焼土を基準にして主軸方向はN64°Wとする。支柱穴はP1～4で、径35cm・深さ47・46・61・52cmで、東側壁沿いに3個の土坑状の窪みがある。P7は深さは63cmあるが、P5・6は30cmほどである。周溝は北側から東側にかけて検出されているが、西側・南側は不詳である。床面も東側は硬いが西側は軟弱で、遺物の出土も東側に多い。竪穴全体が検出された住居址の中で、竈が確認されない住居址は110号住居址とこれだけで、竪穴の大きさ等から、用途の違いがあるのかもしれない。

134図15は口径15cm・器高10cmの小形甕形土器、16は口径15.5cm・器高4.5cmの口辺外反する坏形土器で、内黒である。17は口径11cm・器高5.5cmの小鉢で、揚げ底である。この他に縄文時代前期の土器片が20点ほど出土している。104号住居址のものと思われる。

⑪ 9 3号住居址 (図119・130)

C地区中央南側で、83・85号住居址と重複している隅丸長方形の竪穴式住居址で、長径（東西方向）5.5m・短径（南北方向）4.9mの竪穴で、掘り方は40cmほどある。竈は北西の壁に作りつけられた粘土製のもので、小石を含む黄褐色砂質土の範囲は、幅1m・長さ1mほどある。断ち割り調査が行われていないので、構造・形態は不詳である。長軸を正面とする竪穴で、主軸方向はN47°Wである。



第120图 90・92号住居址

柱穴は4個検出され、P1～4で30cmほどの楕円形で、54・43・42cmあるが、P3は確認できていない。竈の南西側に径85cm・深さ70cmの貯蔵穴があり、底近くから甕形土器片数片が出土している。周溝は北側から南側にかけて検出されているが、北東側は83・85号住居址との重複で確かめられていない。P2の近くにL字形に、二重の周溝がある。83号住居址を切ることは分かるが、85号住居址との重複部分が少ないために、確かめられていない。

遺物の出土は少なく、130図8～11の高坏形土器坏部と脚部、碗形土器の半個体だけである。高坏形土器の器形からすると鬼高式の新期のものかと思われる。

⑫ 94号住居址 (図5)

94号住居址はC地区南側、88号住居址の東側で南側の用地外へ大部分隠れる住居址で、北側コーナーと思われる部分の落ち込みが検出されている。落ち込みだけでピット等の遺構は確認されていない。遺物も土師器片・須恵器片が出土しただけで、器形の分かるものは発見されていない。

C地区の南側一帯は、昭和28年の農道3号線の工事中に農道2号線の交差点辺りで6・7号住居址が、3号線の西へ下る辺りで3・4・5号住居址が確認された所である。昭和52年の畑灌水用パイプ敷設工事の立入り調査でも農道三叉路周辺からは、10数軒の住居址が確認されていて、古墳時代の中心的な集落の存在する一帯の一つにされている所である。

⑬ 95号住居址 (図5・130)

95号住居址はC地区の北側、89・102号住居址の北側で、1m足らずのコーナーが確認され、大部分は北側用地外に隠れる隅丸方形の竪穴式住居址である。ピットらしいものが1個検出された他は遺構の確認はなかった。僅かな範囲であるからはっきりしないが、炭が多く発見されている。土師器片のほか、130図10・11の碗形土器の破片、甕形土器の底部が出土している。

C地区の北側一帯では、用地外にかかる住居址は、西側から90・95・85・81号住居址で、90号住居址の東側にもう1軒ありそうに思われる。昭和52年の立入り調査の結果では、住居址の記録がほとんどない所であった。C地区の調査地でも記録されていた古墳時代の住居址は、3～4軒に過ぎなかったが、調査結果は11軒の古墳時代の住居址が確認されている。そのことから思うと、C地区の北側一帯にも住居址の存在が予想される。

⑭ 9号住居址 (図6・125・140)

9号住居址はD2地区B1辺りにある住居址で、昭和28年農道2号線の側溝工事中に道路の東側で確認された石芯粘土製竈で、掘り当てた作業の方の話によると、両側7～8個の石が並び、その中から大形の甕形土器の完形(140図19)が出土したと伝えられている。この土器の発見によって伊久間区の方々の関心が高まり、工事中の土器収集に献身的な協力を頂いた経過がある。今回石芯粘土製竈

の残りを目当てに調査をしてみたが、焼土の広がりには確認されたものの、焼石が2個転がっていたが竈の痕跡は全く見つからず、周りも大きく掘り返されて、住居址の床の一部が確認され西側の壁の一部が確認されている。主軸方向はN45° Wと推定される。建物址6の大きな穴が重複しているので、ピット等は見つかっていない。9号住居址の竈の辺りから東側に貼り床があり、105号住居址が重複していることは確認されている。

140図19は、以前に掘り出された甑形土器で、口径26.5 c m・器高27 c m・底穴径7.5 c mで、角形把手が胴部中央上方に付けられている。20も昭和28年に掘り出された小形甕形土器で、口径8.5 c m・器高7 c mの円形胴体の小形甕形土器である。18は今回出土した甕形土器で、口径12 c mである。

⑮ 105号住居址 (図6・125・135)

D2地区E1・2辺りで検出された隅丸方形の竪穴式住居址で、9号住居址に重複し、近世以降の溝状遺構に切られた竪穴で、南北方向6.2m、東西方向は、東側用地外へ半分くらいかかるので不詳である。西側壁際に僅かに焼土が残っていた。竈が構築されていたと思われるが、北西から南東に向かう幅1.3m・深さ20~30 c mほどの溝状遺構に切られ、溝の中と北側の縁から焼土塊だけが検出されている。竈の痕跡と思われる。したがって、主軸方向はN80° Wで、9号住居址とは35° 西に触れている。主柱穴と思われる穴は位置的に思わしくないが、P・2・3の3個が検出され、径50 c mほど、深さもそれぞれ65・43・39 c mほどある。P1が65 c mと深いのと、東南へ並ぶP4・5も68・57 c mと深いので、南側にある建物址群の深いピットと関係があるのかもしれない。周溝は見つかっていない。床面も凹凸が多く、とくに南側1.5mほどの範囲は、9号住居址の上に貼られた貼り床で、凹凸が激しかった。

遺物の出土は少なく、135図の1は口径16 c m・器高やく12 c mの深い碗形の土器で、刷毛目・調整痕があり、内黒の土器である。2は甕形土器の口縁・3は口径やく12.5 c mほどの甕形土器の口縁部で、胴長傾向のものである。4は高坏形土器の脚部、5は高坏形土器の坏部で、緩やかに外反するタイプである。6は浅めで口縁が外反する坏形土器で、はっきりした内黒の土器である。これだけの資料では判断が難しいが、鬼高式の新期のタイプのように思われる。

⑯ 106号住居址 (図6・125)

105号住居址と107号住居址の間であって、大部分が東側用地外にかかるもので、西側の落ち込みの一部が検出された住居址である。掘り込みの一部を調査したところ、縄文時代前期の遺物も出土し、この時期の住居址が重複していることが分かった。二つの住居址の重なり具合は不詳であるが、深さ60 c mほどのところから、石匙や縄文時代前期の土器片が出土している。古墳時代の遺物は器形を知ることのできるものは出土していないが、小形甕形土器半完形1個と土師器片が出土している。住居址の主軸方向ははっきりしないが、西側の落ち込みの様子から、N50° Wくらいかと思われる。

⑰ 107号住居址 (図121・135、写図36)

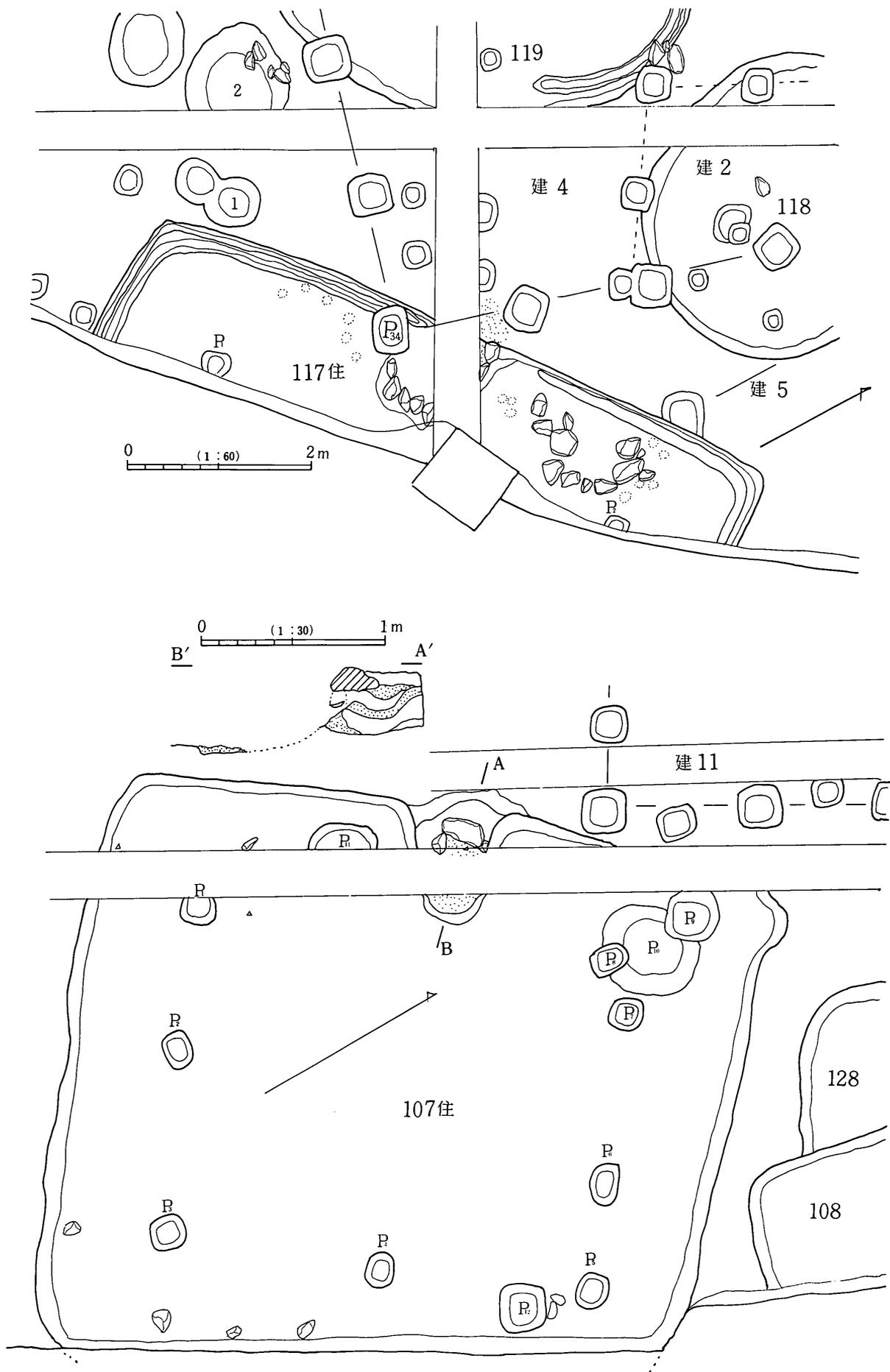
D2地区I1・2辺りで、重複する遺構はほとんどないが、東側用地外へ1mほどかかる隅丸方形の竪穴式住居址で、南北方向7.2m・東西方向推定6.5mほどの長方形の竪穴で、長径を正面にした住居址と思われる。西北側壁沿いほぼ中央に、2個の石を立て並べた石芯粘土製竈が構築されているが、水道管敷設の溝と畑灌水用本管とにより竈の口元と煙道が破壊されるので、はっきりした規模は分からないが、幅60cmほど、長さ80cm以上の竈かと思われる。主軸方向はN47°Wである。写図36でみられるように竈の天井石が原形を留めている。天井石は幅20cm・長さ55cm・厚さ12cmで住居址の大きさに比べると小振りな竈である。口元に小形甕形土器が出土している。柱穴と思われるピットは8個検出され、南側にP1・2・3、北側のP5・6・9が主体で、東側中央のP4を合わせて7本の配列が考えられる。P1～P9までのピットは、径35cm～40cm、深さはP1から48・12・66・11・46・10・44cmである。深いピットはP1・3・5・9で、その中間にあるP2・4・6・7は浅いものである。面積の広い住居址であるから、支柱穴と補助柱穴の交互の組み合わせがあるように思われる。竈南側のP11は深さ92cmあって貯蔵穴と思われる。P12・10は30cmほどの窪みである。周溝は検出されていない。床面は硬く全域に土器片の出土は多かったが、完形・半完形の土器は△印のところから出土しているが、大きな住居址の割りには完形品が少ない住居址である。

135図7は口径19.5cm・器高18cmの長胴形の甕形土器、8は口径13.5cm・器高17cmの長胴形の甕形土器で、口縁の外反の少ないタイプである。9は口径13cmで底部の欠けた甕形土器で、口縁の折れ方は緩やかで、長胴形の甕形土器のように思われる。10は口径13cm・器高9cmの小形甕形土器である。11は高坏形土器の坏部で、浅く外反するタイプである。甕形土器・高坏形土器からみると、鬼高式新期の土器群かと思われる。

⑱ 108号住居址 (図126・136、写図37・48・49・90)

D2地区L1辺りに125・127・129号住居址、建物址12等と重複し、東側用地外に半分以上かかる、隅丸方形の竪穴式住居址で、南北方向4.8m・東西方向不詳の竪穴で、西側壁のほぼ中央に両側2～3個の石を立て並べて、周りを粘土で固めた、石芯粘土製竈が構築されている。主軸方向はN63°Wの住居址である。竈は幅90cm・長さ1mほどの焚き口部と、1mほどの煙道が検出されている。焚き口の立石と天井石は壊されて竈前に散乱しているが、奥の立石と支脚石は残されている。特徴的なことは、支脚石の奥の粘土貼り付け部分と左右の壁は非常に硬く、図126の断面図でみられるように垂直に立ち上がる箱状に残されていた。その中を煙道が通り抜け、屋外に通じているが、屋外の形態を確かめることはできなかった。柱穴は8個検出されているが、P1・2が支柱穴で他は補助柱穴か単なる窪みかもしれない。P1・2は径35cmほど、深さはそれぞれ36・44cmあり、用地外にあると思われるもの2個と合わせて、4個の支柱穴と思われる。周溝は北側だけに確認されている。床面は総体的に硬いが、凹凸の多い床である。東隣の129号住居址は炭や焼土が多い竪穴であったが、この住居址には炭や焼土はあまりなかったので、129号住居址の方が新しいかもしれない。

遺物の出土は、竪穴の一部しか検出されない住居址としては出土量が多く、甕形土器は竈の南側、他の土器は竈の北側に固まっていた。完形・半完形の土器は甕形土器3・甑形土器1・鉢形土器1・



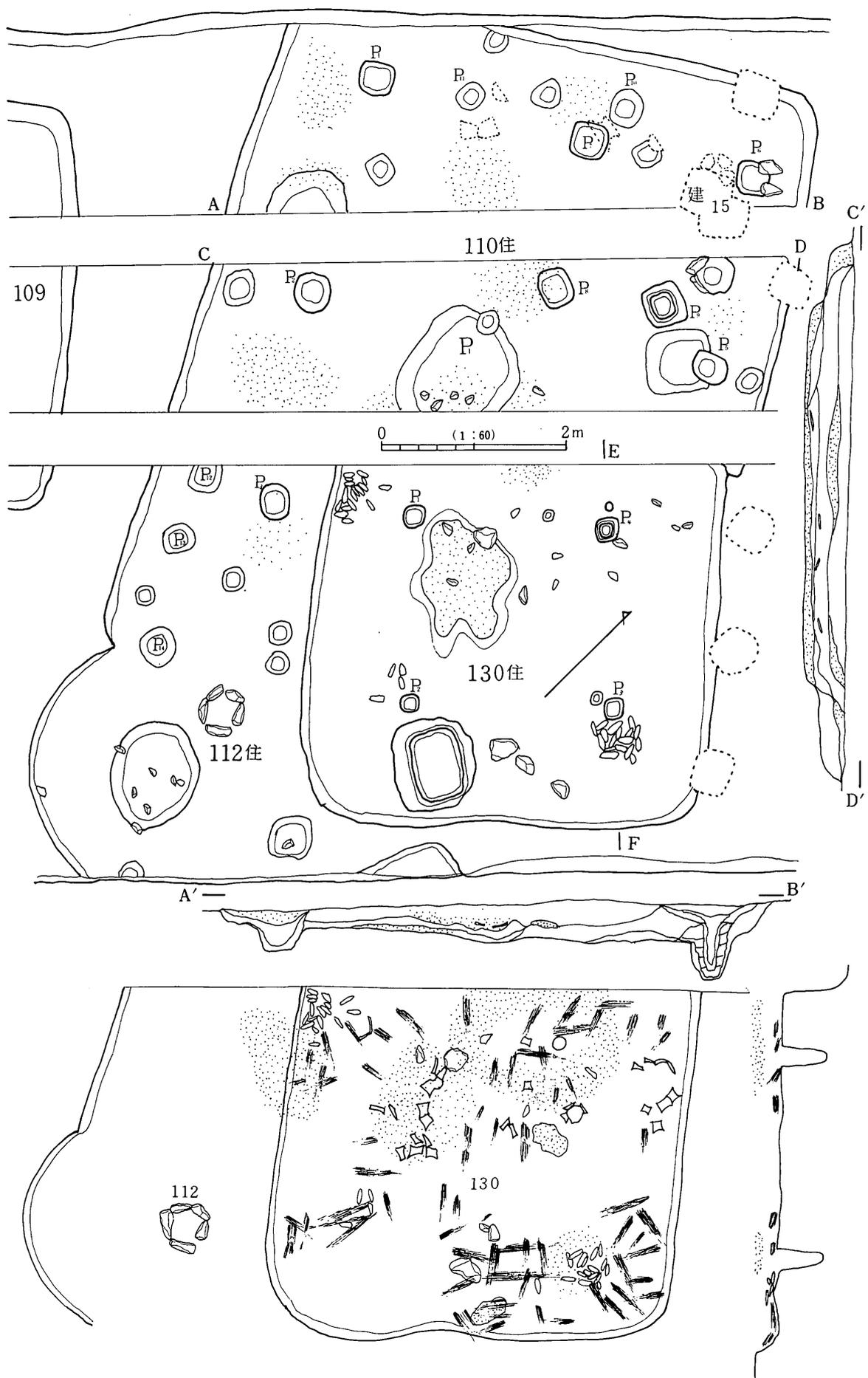
第121图 107·117号住居址

碗形土器1・坏形土器1・高坏形土器5で臼玉3・菰手石5点が出土している。136図1は口径16.5cm・底部を欠くので器高は不詳であるが、胴部最大幅が32cmほどで胴部中央にある。2は口径13cm・器高13.5cmの小形甕形土器で、球形胴である。3は甕形土器に近い鉢形土器で、口径12.5cm・器高15.5cmの平たい土器である。4は甕形土器底部で、1の土器の底部かと思われる。5～9は高坏形土器の坏部・台部で、口径16・17cmで緩やかな有段の坏部、台部の裾が上反または平状の特徴がある。9は碗状の坏部で口径17cm・坏部高さ9cmで、整った暗文がある。11～13は坏形土器で11は口径16cm・器高6.5cm、12は口径14cm・器高5.5cm、13は口径10cm・器高4.5cmある。甕形土器・高坏形土器の特徴からみると、和泉式土器か鬼高式の古期のものかと思われる。137図5～8は菰手石で、南側壁際に固まっていた。

⑩ 110号住居址 (図122・138、写図38)

D2地区北側、西側用地外に一部かかり、112・130号住居址、建物址15と重複した竪穴式住居址で、南北方向(長径)7.5m・東西方向(短径)6.1mの隅丸長方形の竪穴である。掘り方は浅めで、西側の検出面から20cm・東側検出面で30cmほどである。竪穴全体に焼土が堆積しているが、竈の形跡が見つからない住居址である。竪穴方向から推定すると、主軸方向はN28°Wとなる。柱穴状のピットの数が多く、112・130号住居址・建物址15等にかかわるものを除いて20個ほどある。穴の大きさ・位置・深さ等からP1・2・3・5・6・7を選び出すと、ともに径40cmほど、深さは20・42・26・25・28・22cmある。ほかに深いものはP13(43cm)P14(48cm)がある。130号住居址内には、4個の支柱穴の他にはピットの確認はできていないが、上層には110号住居址と同じような焼土が広がる場所があるので、130号住居址内に組み合わせられるピットがあると思われる。そうすると通常の4本または6本柱の構成ではなく、1辺3個・4個の構成があるように思われる。焼土の広がりを見ると数か所に焼土の固まりがあるように思われる。火災による焼土の広がりとも考えられるが、それぞれの場所で火を使用したことも考えてみたい。そうすると、通常の住居址ではなく、集団で利用する施設の一つかもしれない。遺物の出方も他の住居址とはやや異なり、土器は焼土塊の中かその上面から出土している。中央辺りに長径1.4m・短径1.1m・深さ30cmほどの窪みがあり、炭と焼土が検出されている。周りにも焼土が取り巻くようにあるので、ここで火が使われたのかもしれない。竪穴の特徴をあげると、他の住居址に比べると掘り方が浅いこと、最大とは言われないが竪穴が大きいこと、竈の形跡がないこと、焼土塊が竪穴全体に広がっていること、柱穴の在り方が違う等である。集会所的なものかとも思われる。

遺物の出土は少なく、完形品も少ない。138図1～4は甕形土器口縁・胴部で、4を除いて130号住居址の西側焼土塊の上面から出土している。1は口径16.5cm・胴部最大幅25.5cmある。2は口径16cmで、3と同様長胴形である。4は口径13.5cmで頸部のくびれが強いものである。5は口径10.5cm・器高7.5cmの揚げ底の小形甕形土器である。6は高坏形土器の坏部で口径18cmの平たい坏部で、摩滅の進んだものである。7・8は坏形土器で、8は口径16.3cm器高6cmの有段のもので、口縁外反で内黒の光沢のある坏である。9は口径6cmの碗状の高坏形土器の坏部である。甕形土器・高坏形土器・坏形土器の特徴から、鬼高式新期の土器群と思われる。



第122图 110·130号住居址

⑳ 111号住居址 (図6)

D2地区中央付近東側の129号住居址の北側で、床面の一部が確認され、小形甕形土器片・坏形土器土器片が出土している。耕作による攪乱が進んでいるので遺構等の確認はできなかったが、床土の塊が出土しているため、住居址として登録した。旧道路の側溝石積下に壁の一部が確認されているため、4分の1以上東側用地外へかかる住居址と思われる。

㉑ 113号住居址 (図6)

D2地区東側111号住居址の北側用地境にあって、コーナーらしい落ち込みが検出されている。大部分が東側用地外にかかるため、落ち込み以外は遺構は検出されていない。土師器片数点出土しているため、古墳時代の住居址として登録されている。

㉒ 115号住居址 (図6・123)

D3地区の南、114・121号住居址と重複して東側用地外へ大部分かかる隅丸方形の竪穴式住居址である。耕作の攪乱が進んでいるためピット等の遺構が確認されていないが、須恵器甕形土器の大きな破片が数点出土している。

㉓ 116号住居址 (図6)

D3地区東、115号住居址の北側にある竪穴で建物址9と重複している。大部分が東側用地外にかかる竪穴住居址で、30cmほどの竪穴の落ち込みだけであるからはっきりしないが、土師器が出土しているため、古墳時代の住居址と登録してある。111号住居址から116号住居址は、大部分が用地外にかかるものが並ぶ状態で、確認されている。以前の立入調査の記録によると、東側に集中的に住居址があるところである。

㉔ 117号住居址 (図125・140、写図39・94)

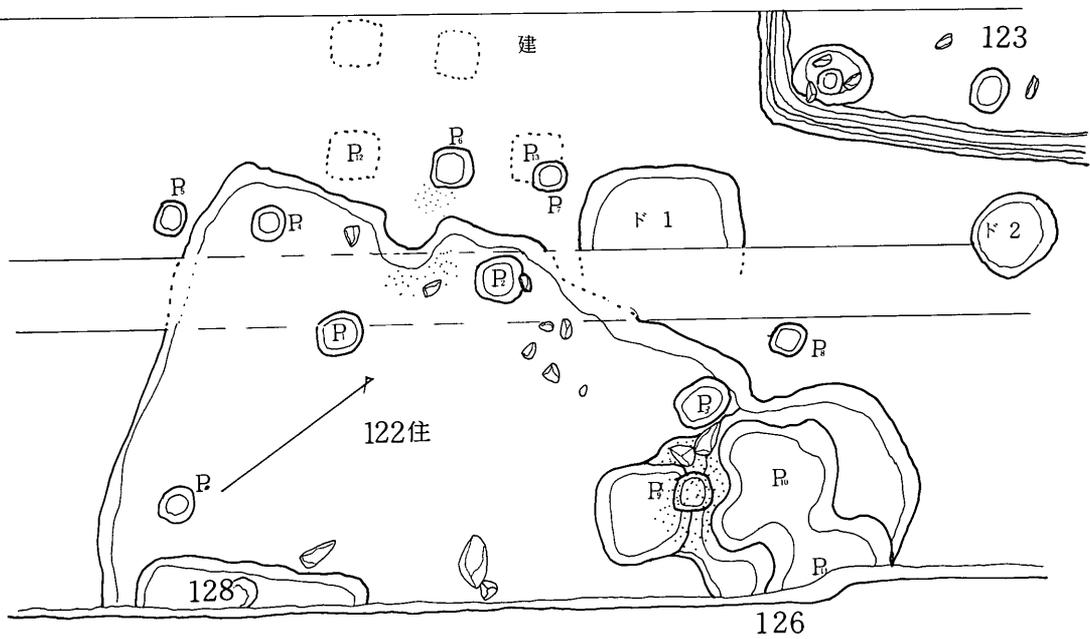
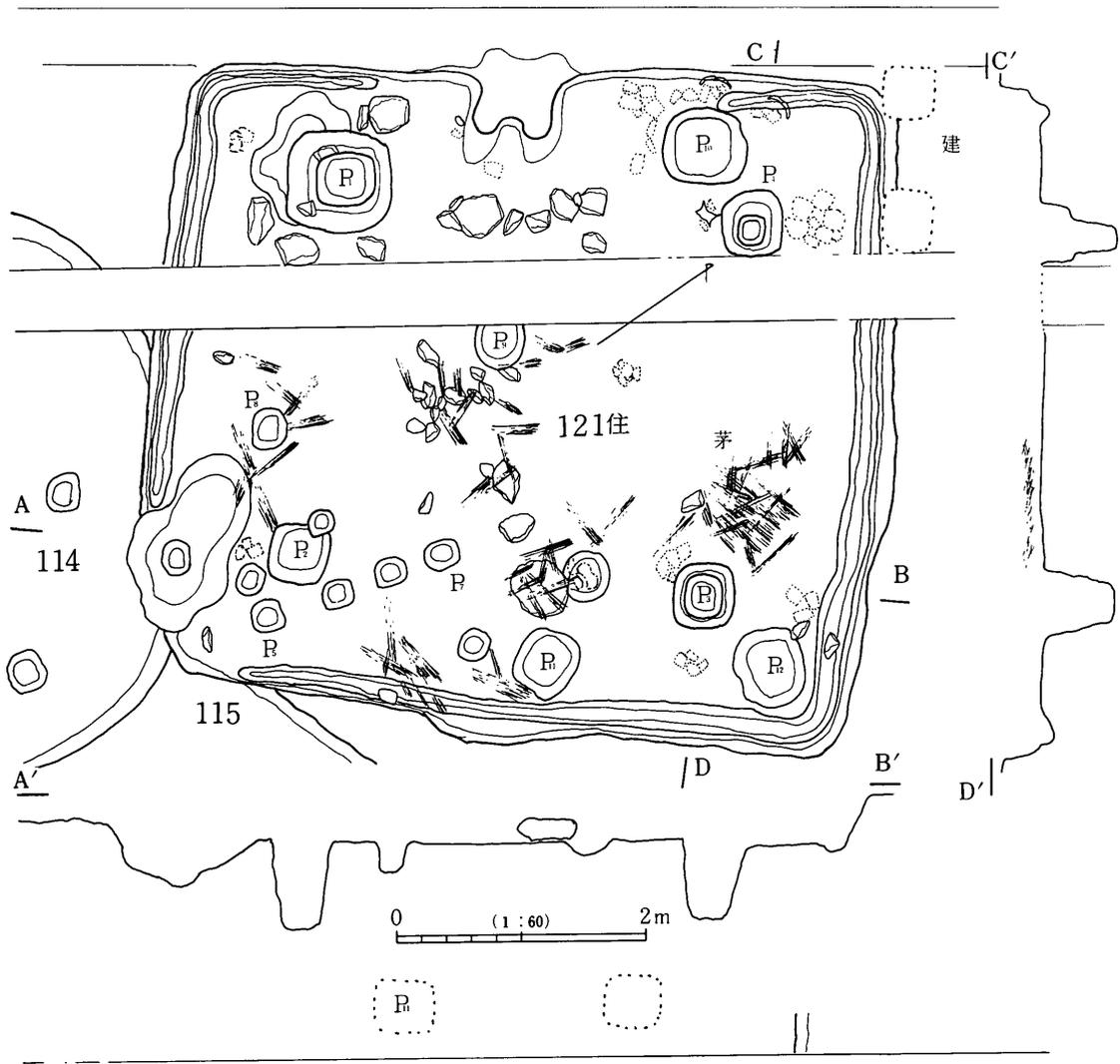
D2地区の南、東側用地外へ4分の3がかかる隅丸方形の竪穴式住居址で、東西方向の径7.3mの竪穴で、北西側壁のほぼ中央付近に、石並びの多い石芯粘土製竈が構築されていた。生憎畑灌水用本管の調整バブルのタンクと本管のパイプ敷設の工事で破壊されている。壁方向に並ぶ石列があるが、竈の石と集石の石が取り外され、工事の後で並べられたものと思われる。北側配管の溝縁に安定した焼土塊と2個の焼石が検出されている。竈の痕跡と思われる。1mほど西側に焼土が検出され、煙道の一部のように思われる。竈の南側壁沿いに、長径50cm・深さ50cmほどの建物址4のP34にも竈が壊されている。西側の壁の方向・竈の位置から主軸方向はN28°Wである。南側用地境に径35cm・深さ51cmのP1が検出されている。ほかにはピットが検出されていないため、柱穴構成は不詳である。南西部には竪穴を取り巻く周溝が検出されているが、北東部では検出されていない。北東部には

10数個の人頭大石の累石がある。石の間や石の周りから小形甕形土器等の完形品が9個出土している。完形品の集合は竈の南西側にもあって、7個の完形品が固まって出土している。これらの他に、石製円板未製品・縄文時代の土器片36点、石器20点ほど出土している。現道（農道2号線）南側は、耕作道のために掘れないのではっきりしないが、西南側には81号住居址までは15m以上の空間があり、掘立柱建物址があるように思われる。

140図1は口径13cm・器高12cm、2は口径13cm・器高13cmの小形甕形土器で、ともに球形状のものである。4・5はともにやや小振りな小形甕形土器で、4個とも口辺の折れ曲がり角が鋭いタイプである。3は碗形坏部の高坏形土器で、坏部口径12.5cm・器高も12.5cm、坏部高さ7.5cm・台部高さ4.5cm・台底径10.3cmの、へら削りの整った高坏形土器で、似通ったタイプのもは108号住居址から出土している。6は小形の甕形土器、7は口縁を欠く土師器の甕形土器で、頸部径5.5cm・胴部器高10.5cm・胴部最大幅14.8cmで黄白色・胎土細か・刷毛目調整の整った土器である。8～15は坏形土器で、8は口径14.5cm・器高5.5cmで、口辺外反のないもの、10は口径14.5cm・器高5cmで、口縁は内側に稜を持ちながら外反する。他の7個は8・10よりやや小さめのもので、口辺外反するもの、外反しないものがある。暗文系の調整痕が多いが、8・13・15は暗文がはっきり出ている。11・12・13・14は色の薄い内黒のものである。土器形式は和泉式土器か鬼高式古期のものと思われる。石製円板は径2.3cm・厚さ8mmで、安山岩系の石で、外周・両面をを擦り上げ片面に穿孔中の窪みがある。

㊦ 121号住居址（図123・141・91、写図40・53）

D2・3地区の境辺りの西側、114・115号住居址、建物址8と重複する、隅丸方形の竪穴式住居址で、南北方向（長径）5.9m・東西方向（短径）5.3と5.0mで、深さは検出面からやく40cmの竪穴である。竈が西北壁沿いのほぼ中央に構築されている。主軸方向はN58°Wである。竈は粘土製で幅60cm・長さ50cmほどの焼けた粘土塊の焚き口がある。西側の畑灌水本管の溝で壊されているので、煙道は確かめられていない。竈の前に人頭大ほどの石が7個並んでいた。焼けた石で或は竈の石で、壊されて置かれていたのかもしれない。柱穴等のピットは12個検出されているが、支柱穴はP1・2・3・4の4個で、P1は二重構造で、上径80cm・下径55cm、深さ65cm、P2は径45cm・深さ70cmの方形状、P3は二重構造で上径45cm・下径30cm、深さ60cmの方形状、P4は上径45cm・下径20cm、深さ56cmの方形状で、調査区全域の中では、最も大きく深い柱穴である。南側に南北方向に並ぶピット列（P5～7）があり、竈前2mほどのところにP9があるが、それぞれ20～30cmほどのものである。東側隅と東壁沿いに径60cm・深さ20cmほどの窪み（P11・12）がある。北側隅に近いP4の西側に、長径65cm・短径55cm、深さ81cmほどの方形の穴がある、貯蔵穴と思われ、P4とこの貯蔵穴の縁辺や周辺から、甕形土器・甗形土器が固まって出土しているが、P4周辺にとくに多い。周溝はほぼ全域を取り巻いているが、南隅は土坑状窪み・ピット等により確かめられていない。この住居址で特徴的なことは、床面に貼りつく焼土・炭が多いことで、各所に入り組んだ炭化材が横たわり、東側の床面の広い範囲に、貼りつくように茅の炭化したものが重なっていた。（図40参照）床面は焼けて硬く締まっている。所どころに浅い窪みがあり、その中から坏形土器が出土するところもある。



第123图 121・122号住居址

遺物の出土は多く、完形・半完形土器は、大形な甕形土器のほか、甕形土器3・甌形土器1・小形甕形土器2・坏形土器2・ミニチュア土器1・分銅形土製品1・土錘1等で、縄文時代前期土器片・茅材の炭化物である。141図1は、口縁を欠くので口径不詳であるが、残存器高33cm・胴部最大幅30cm・底部径9cmの大形な甕形土器で、太めの刷毛目・へら削り痕が目立ち、胴部最大幅は中央部やや下、揚げ底の土器である。2は口径12.5cm・器高16cm、やや長胴形で揚げ底、刷毛目調整の土器である。3は口径17cm・器高11.5cm・底穴径2.5cmで胴丸の小形の甌形土器、4は口径12.5cm・器高17cm・底径5.5cmの長胴形の甕形土器で、揚げ底である。5は口径12.5cm・器高4.5cmで半内黒・鉢形状の坏形土器である。6は口径6.5cm・器高4.2cm手捻り状の小形な鉢である。土器形式は鬼高式の古期のもと思われる。73図35は径4.5cm・厚さ1.5cmの土製円板で、中央に径6mmの穴が開く。紡錘車状のものか土錘である。91は径4cm・長さ3.8cmの太鼓状の土製品で、指頭圧痕・へら削りの整形痕が残り、胴部に片寄って2mmほどの穴が斜めに開いている。114号住居址と重複しているので、縄文時代前期の土器片も出土している。

② 122号住居址 (図123・141・142・143、写図41・87・92・96)

D3地区北側、東側用地外に半分くらいかかり、126・128号住居址、建物址・土坑と重複する変形した隅丸形状の住居址で、東側に竪穴に続く炭・焼土の入った径1.5mほどの窪みを持ち、この窪みの中から、10数点の完形・半完形の土器が出土している。はっきりしないが西側を122号住居址、東側用地境側を126号住居址と登録区別している。竈と思われるところは北側壁沿いの西に片寄って焼土を持ち、壁の貼り出し部分がある。屋外にも焼土があるので竈の名残りかと思われる。竪穴方向・竈の位置等から主軸方向はN32°Wと思われ、竪穴の径は4.5mか東側の窪みを含めると6mほどに広がる。柱穴と思われるピットは、建物址のピットを除いて10個ほど検出されている。屋内にある6個のピットは二つの構成が考えられる。北側の壁沿いにあるP2・3・4と南側のP0、別の構成は中側に並ぶP1・9で、東側の用地外に対称の2個があるとすれば、一般的な4本の支柱穴である。この2個は深さも47cm・64cmあるから、支柱穴4本と補助柱穴を伴う竪穴と思われる。周溝は検出されていない。床面も凹凸が多く、硬いところ・軟弱な所まちまちである。

出土土器は東側隅の窪み内とその周辺に集中し、126号住居址の範囲まで広げると甕形土器3・甌形土器3・碗形土器1・小形甕形土器2・坏形土器9・高坏形土器1・小鉢1・須恵器蓋坏2である。141図1は、口径29.3cm・器高は底部が欠けているので不詳、胴膨れで胴部最大幅33.5cmの深鉢形土器で、刷毛目調整のもので、頸部立ち上がり・口辺に段差のつく独特なタイプである。8は口径12.7cm・器高11.5cm・底径5.3cmの小形甕形土器、9は口径16.5cmの甕形土器口縁部で、頸部は立ち上り・口縁外反少ないタイプである。10は口径14cm・器高18.5cm・底径5.5cmのやや揚げ底・胴部球形状の甕形土器である。142図1は甕形土器底部、2は口径14cm・器高10cmの小形甌形土器、3は口径22.5cm・器高29.5cm・底穴径9.5cm、長胴形で胴部上方に角形把手のつく甌形土器で、表面はへら調整痕がよく残されている。4は口径20.5cm・器高29.5cm・底径9.5cmの長胴形で、胴部上方に角形把手のつく甌形土器で、へら削りが多い。3の甌形土器とよく似たタイプである。5は台径21.5cm・台高さ6.5cmの脚平開きの高坏形土器、6～7は碗形・平形の坏形土器である。143図1は、有段・口縁外反・内黒の高坏形土器の坏部で、2は口径15.2cm・器高4.5cmの

有段・口縁外反・内黒の坏形土器である。3は口径12cm・器高6cmの碗形土器で、先の坏形土器同様に、有段・口辺外反・内黒の土器である。5は口径15.5cm・器高5.5cmで内黒はないが有段・口辺外反の坏形土器で、伊久間原遺跡では数少ない、内黒で稜を持つ坏形のタイプで、鬼高式土器新期の土器群と思われる。現在のところ、伊久間原遺跡では、殆ど発見されていないものである。6・7は須恵器蓋坏で、6は口径14cm・器高4.7cmの蓋、7は口径12cm・頸部鏝径15.5cm・器高5.5cmの坏部で、6・7は一体のものと思われる。土器群をみると古期のものと新期のものが混在しているが、位置的にみると、先に分けた122号住居址の落ち込み、126号住居址と登録した窪みによって時期の異なる土器群があるように思われる。

②7 123号住居址 (図116・143、写図42・48・49)

D3地区最北西側、131号住居址、建物址10・14、D3土坑2に重複した、隅丸方形竪穴式住居址で、南北方向径4.5m・東西方向径4.3m・掘り方35cmほどの、ほぼ正方形に近い竪穴である。西側壁際中央付近に2～3個の立石を据え、長さ40cmほどの天井石を残し、煙道口に35cmほどの平状丸石の蓋を被せた石芯粘土製竈がある。主軸方向はN58°Wである。竈前は畑灌水本管の溝、東側は水道管の溝で切られているが、竈の石組み・柱穴がかろうじて残されている。柱穴状のピットは9個検出されているが、P1～P4はそれぞれ深さ32・35・50・37cmで、支柱穴と思われるが、やや南西に片寄っている。他のピットは30cm以下であるが、P5だけは74cmととくに深い。南西隅に長径60cm・短径50cm・深さ37cmの窪みがあり、中に小さなピットがあり、3個の石が置かれている。

周溝は北側隅を除いて周囲を取り巻いている。116図には余り図示されていないが、炭や焼土の堆積が多くとくに東側が多い。図示してあるように東側隅には焼土と炭が30cmほど重なり、炭化材が多く検出されている。この住居址も火災に遭っていると思われる。

遺物の出土は少なめで、竈前から坏形土器が、南側の壁沿いで甕形土器が1個体出土している。143図8は口径16.5cm・器高16.5cmの球形状の甕形土器、10は口径14.5cm・器高5cmの碗状の坏形土器、11は口径15cm・器高4.5cmの有段・口辺外反・内黒の坏形土器で、9も同様のものである。甕形土器と坏形土器でみると、鬼高式の古期と新期の土器が混在しているように思われる。縄文時代中期中葉の土器片・石器が出土している。これは、北西側の132号住居址のものが、落ち込んでいられると思われる。また、完形の土器が少ないのは、火災の折に持ち出されたと思われる。

②8 124号住居址 (図6・143)

D3地区北、西側のフルーツパーク駐車場に4分の3以上隠れる、隅丸方形形状の竪穴式住居址で、竪穴の径はやく4.8mで、掘り方は検出面で55cmほどの深めな竪穴である。壁の方向から主軸方向はN48°Wと推定される。ピットは3個検出されているが、位置・深さからみると南隅に近いものが深さ26cmほどあって、柱穴の一つかと思われる。ほかに対になるものは検出されていない。この住居址で特徴的なことは、同じ竪穴内に2枚の床があること、覆土の堆積がみられ中間に、厚い黄砂質土の堆積があることであるが、駐車場の表面は土が盛られているので、表土からの深さは1m以上に及ぶ。上層には黒色土が50cmほど堆積し、その下層には、黄土混じりの茶褐色土が2重に堆積してい

た。正体を確かめるまでの検出調査は進んでいない。

遺物の出土は少なく、完形品は出土していない。143図の12は口径16 c mの甕形土器の口縁部、13も口径15 c mの口縁部で、共に頸部の折れ方がきついタイプのものである。14は半内黒の鉢形土器の口縁部で、この他に坏形土器・高坏形土器の破片が出土している。

②⑨ 126号住居址 (図123・142)

C地区北側、122号住居址と重複して、東側用地外に多くかかる土坑状に落ち込む窪みから土器群が出土しているので、住居址として登録されたものである。小形甕形土器・坏形土器が4個ほど固まって出土している。遺構の様子・出土土器については122号住居址で取上げられているが、鬼高式古期・新期のものが混在することは、122号住居址で触れた通りある。確実な取上げではなかったが、内黒・外反の坏形土器は126号住居址出土と思っている。この新期の住居址が、東側の用地外にあるかもしれない。

③⑩ 128号住居址 (図6)

C地区の北、122号住居址の東側用地境に、ほんのわずかの落ち込みが検出されている。住居址かどうか確認されていないが、一応住居址と登録されたものである。

③⑪ 129号住居址 (図126・137)

D2地区中央付近、N1辺りで108・125号住居址と重複し、東側用地外へ4分の3以上かかる、隅丸方形の竪穴式住居址で、東西方向の径は3.5mほどの竪穴である。西側の壁際に4個の焼石が固まり、炭と焼土塊が検出されるので竈の痕跡と思われる。竪穴方向により主軸方向はN30°Wと推定される。1mほどの範囲なのでピット状の落ち込みがあるが、柱穴かどうか不詳である。北側に完形土器を置く窪みがあるがその正体も不明である。この1mほどの範囲には、炭や焼土が堆積していて、火災に遭ったものと思われる。1mほどの範囲にも炭や焼土が多く広がっていた。

竈の痕跡と思われる辺りに、甕形土器口縁部と小形甕形土器が、北東側の窪みの中に甕形土器2個体と碗形土器が出土している。137図9～11は甕形土器の口縁部で、それぞれの口径は20・19・18.5 c mで頸部が立ち上がり、外反の少ないタイプである。12は口径12.8 c m・器高10 c mの小形甕形土器、13は口径14.5 c m・器高5.5 c mの碗形土器で、甕形土器の口縁の様子は鬼高式土器の後半のように思われる。

③⑫ 130号住居址 (図122・138、写図43)

D2地区の北側R2辺りで、110号住居址の下層にあり、112・114号住居址、建物址15と重複した隅丸方形の竪穴住居址で、南北方向・東西方向とも4.35mほどの方形竪穴で、竈の有無については水道管の溝で破壊されているのではっきりしないが、西側に焼土の固まる場所があるので、竈は西側

にあったと推定される。主軸方向はN40°Wと思われる。柱穴はP1～4の4個が検出され、径20cmほどで、深さは60・63・48・47cmで整った位置にあり、深くて整った柱穴である。南側隅に近いところに長径1m・短径85cm、深さ70cmほどの深い穴がある。貯蔵穴である。この貯蔵穴も、深くて整った穴であり、周囲に土手状の盛り土がある。周溝は検出されていない。床面には全面炭が堆積し、所によっては3cmほどの厚さがある。122図のように竪穴全体に、炭化材が横たわっている。焼土は西側に多く堆積しているが、断面図にあるように床面に近いところに炭や炭化材がある。その上層に焼土があることから、この焼土は110号住居址のものかと思われる。出土遺物の位置も記録されているが、この中には130号住居址のもの、110号住居址のもの等が混在している。菰手石が46個出土しているが、集中するところは南西の隅と、北東側P3の周辺であった。

出土遺物は110号住居址と合わせると、甕形半完形5個、甕形土器1・小形甕形土器2・坏形土器3・高坏形土器2で、紡錘車1・菰手石46である。110号住居址の説明で触れたように、138図の甕形土器には口辺が立ち上がり・外反の緩やかなものと大きいものがある。坏形土器にも有段・外反・内黒のものと碗状のものがある。高坏形土器には坏形土器と同じような有段・外反・内黒のものがある。図には110・130号住居址出土と区別してあるが、有段・外反・内黒の土器は110号住居址、そうでないものは130号住居址と区別したい。したがって、130号住居址は鬼高式古期、110号住居址は鬼高式新期の土器を伴う住居址と扱っている。

③ 1号住居址 (図124、写図44・45)

調査地D3地区から東南70mほどのところで、昭和27年に発掘調査された、古墳時代の隅丸方形の竪穴式住居址である。調査の経過「伊久間原1号住居址の発掘調査」にあるように、田中豊春先生・今村によって発掘調査された、伊久間原遺跡で最初に発見された竪穴式住居址である。現在、結果的にみると、集落の東端に近い位置にあり、境の沢沿いの住居址の一つになる。

住居址のプランは南北方向(長径)5m・東西方向(短径)4.8mのほぼ正方形に近い竪穴で、北西側壁際に竈がある。主軸方向はN44°Wである。竈は幅80cm・長さ1mの石芯粘土製竈であるが、不慣れなために煙道に続く焼土を取り除いてしまったものである。焚き口部は2個の石を両側に据えて、長さ55cm・幅20cmほどの平石が天井石に使われていた。屋外に焼土を持つ小ピットが検出されている。柱穴はP1～4の支柱穴で、径やく25cmほど、深さはそれぞれ30cmほどである。小ピットの所在については、確かめる調査が行われていない。竈の南西側に長径55cm・短径40cm・深さ71cmの深い穴があり、穴底から小形甕形土器の完形品が出土している。この完形品を掘り出したのは、題字筆者の田中節山(田中裕昭)さんである。周溝の有無は確かめられていない。床面の硬さについてははっきりした記憶がないが、人頭大以下から拳大の石の散乱が多く、その間から土師器片・須恵器片が出土している。

当時の記録を辿ると甕形土器1・甕形土器1・同口縁部2・小形甕形土器1・坏形土器1が出土している。この住居址は喬木村文化財に指定され、現場は喬木村教育委員会によって公有地化され、標識が立てられている。